クォンタムデビルサーガ
アバタールチューナー
V
Quantum Devil Saga
Avatar Tuner
五代ゆう
早川書房

五代ゆう

1970年奈良県生まれ。1991年に『はじまりの骨の物語』で第4回ファンタジア長編小説大賞を受賞しデビュー。
『機械じかけの神々』『遥かなる波濤の呼び声 四獣伝説』『〈骨牌使い〉の鏡』『パラケルススの娘』など、本格ファンタジィ作品の書き手として知られる一方、近年ではホラー、SFなど活躍の場を広げている。
ホームページは「五代ゆうのなんとなく生存報告」
http://d.hatena.ne.jp/Yu_Godai/

カバーデザイン/Veia
カバーイラスト/前田浩孝

ハヤカワ文庫〈JA1048〉

クォンタムデビルサーガ

アバタールチューナーV

五代ゆう

早川書房

ハヤカワ文庫 JA

〈JA1048〉

クォンタムデビルサーガ

アバタールチューナーV

五代ゆう

早川書房

6928

目　次

クォンタムデビルサーガ
アバタールチューナーV

登場人物

トライブ〈エンブリオン〉のメンバー

サーフ……………………リーダー。銀の髪、銀の瞳。アートマは〈ヴァルナ〉。セラを奪還する際の戦闘により消滅

ヒート……………………攻撃手（アタッカー）。赤の髪、赤の瞳を持つ。アートマは〈アグニ〉、〈協会〉の改良により〈シヴァ〉となる

アルジラ…………………狙撃手（スナイパー）。ピンクの髪、ピンクの瞳。アートマは〈プリティヴィー〉

ゲイル……………………参謀（ビショップ）。碧の髪、碧の瞳。アートマは〈ヴァーユ〉

シエロ……………………歩兵（ノーマル）。青の髪、青い瞳。アートマは〈ディアウス〉

セラフィータ…………〈神〉と対話する少女。テクノシャーマン

ロアルド…………………地下抵抗組織〈ローカパーラ〉のリーダー

グレッグ………………〈協会〉から救出された囚人

フレッド………………〈ローカパーラ〉の少年

シン・ミナセ…………〈協会〉幹部。アートマは〈アルダー〉。サーフとの戦闘により消滅

マリー・マルゴ
=キュヴィエ………キュヴィエ症候群研究の第一人者にして〈協会〉の支配者

エンジェル……………マダム・キュヴィエに付き添う人物

Part-3
楽園（承前）
-NILVANA-

猫は観ている。その銀色の両眼で、すべてを。

第五章

1

宗教は人間が動物に対してもっているほんしつてきな区別に基づいている。したがって動物はなんらの宗教をももっていない。……象の宗教というようなものは、おとぎ話の世界のものである。最も偉大な動物学者の一人であるキュヴィエ（G.L.F.C.D.Cuvier, 1769-1832）は、自分自身の観察に基づいて、象を犬より少しでも精神段階が高いものとみていない。

フォイエルバッハ『キリスト教の本質』

「落ちつけ、静かにするんだ、あんた！」
後ろから抱きとめようとする手を振りはらって、セラは這うようにサーフのいた空間に突き進んだ。そこに残っていたのはもはや影ともいえない残骸、かすかに宙に舞っている雲母の破片のようなちらつきと、それすら呑みこもうとしている虚空のみだった。
言葉にならない声をあげながらセラは両手をあげて空をかきむしり、消えていくサーフだった破片を集めて胸に抱こうとした。しかしそれもむなしく、指が触れるより早く破片はすれて手をすり抜け、無の中へ消えていった。支えるものをなくしたセラはバランスを崩してその場に倒れこみ、それでも何かをつかもうとして、破壊された床のとがった瓦礫に爪をたてた。血があふれ、白い指先を紅く染めた。
「敵襲！」入り口のほうに気を配っていた〈ローカパーラ〉メンバーが叫んだ。「サービターどもと、それから人間の警備員だ。すごい数だぞ！」
「テクノシャーマンは奪取した。もはやここにいる必要はない」
泣き伏すセラのそばにかがみこんでいたロアルドがしぼり出すように言った。手をのばしてセラの肩をつかむ。
「来い。ここにいては危険だ。〈協会〉はあんたを見捨てた。あんたを救うために、サーフはここへ来たんだ。ここであんたを奴らに渡してしまったら、俺は、サーフの信頼を裏切ることになる」
「嫌あ！　サーフ、サーフ！」

血を流す指先で、セラはその場にしがみつこうとした。それまでセラのそばで片膝をついていたアルジラが動いた。首筋にごく軽く手を触れただけで、セラは気を失って倒れこんだ。細いからだが床にぶつかる前に、さっと手をのばして抱きとめる。
「ア、アルジラ……」
「黙りなさい、シエロ」アルジラの唇から食いしばった白い歯が見えていた。「ロアルドの言うとおりだわ。サーフはここに、セラを救い出すために来たの。この娘を助け出せなかったら、何もかもすべて無駄になってしまう。サーフが死んだことも」
　シエロが息を引く音が大きく響いた。サーフが死んだ、という事実を、あからさまに口にされたことに本能的な反感を覚えたのだろう、口を開きかけたが、反論は途中で言葉を見失って消えた。色を失った唇と頬をわななかせながら、セラを抱いたアルジラに続いて立ちあがり、中二階へ向かう螺旋階段を上がる。
「ゲイル！」階段の上からアルジラはふり返り、動かないままのゲイルに呼びかけた。「ぼうっとしてないで！　〈エンブリオン〉の参謀なんでしょう、こんな時に、あんたが動かなくてどうするの！」
　先ほどからぴくりともせず、石と化したかのごとくサーフのいた空間に目を注いでいたゲイルは、殴りつけられたように身体を揺らした。しかし、立ちあがることはせず、まだサーフの身体がそこにあるかのように、かざした両手をそのままに、無の空間と化した手のひら

の下を凝視している。
「来たぞ！」
入り口付近で応急のバリケードを築いていた〈ローカパーラ〉がふり返ってわめく。戸口付近に積みあげられたコンクリート塊や破壊された機械類が、不気味に揺らいだ。外部からのレーザー照射で、急拵えの防壁が赤く変色して溶けはじめる。
「早くしてくれ、あんまり長く保ちそうにない！」
「ゲイル！」もう一度アルジラが怒鳴った。
ゲイルは身体を硬直させ、関節の軋む音が聞こえるような仕草で、ぎこちなく階段の上を見上げた。そこに立つ、セラを抱いたアルジラと、その後ろに従うシエロとロアルドを見た。喪神したセラの白い顔、アルジラの目にたまる涙、シエロの魂の抜けたかに思える表情、ロアルドの青白くひきつった厳しい頬を見た。そこにいないもう一人を捜すかのように、碧色の瞳が周囲をさまよった。
そしてのろのろと自らの両手に目を落とした。その下にいたはずの者は、もはや完全に喪われていた。わずかな痕跡すら分解されて分子以下の粒子に還元され、その意識と人格は非存在の海に呑みこまれてしまった。取りもどす術はもはやない。
たとえ彼が世界最高レベルの能力を持つ参謀型（ビショップ）〈ASURA-AI〉、歩く人間型コンピュータであっても。
ややあって、ゆらりとゲイルは立ちあがった。さりげない動作の異様ななめらかさは、ま

るで人ではない、爬虫類のそれだった。
「……どけ」
「な、なんだ?」そばにいた男が蛇が口をきいたかのようにびくっとした。
「どけ!」
食いしばった唇から、はげしい叫びがほとばしった。怒鳴られた男は喉をならして身を引き、そばを通り抜けたゲイルの発する蒼白い燐光から顔をそむけた。
ゲイルは吠えた。まさに一陣の疾風となって部屋を駆け抜け、灼熱して崩れかかっているバリケードのそばに、瞬にして移動した。逃げる時間を稼ごうと反攻の準備をしていた〈ローカパーラ〉の男たちは、馳せよってきたものの姿を見るやいなや、根源的な恐怖にうたれて雪崩をうって逃げ散った。
それはどす黒い憤怒を発し、狂気を酸のように身にまとった、一匹の怪物だった。巨大な頭を振り立てて〈ヴァーユ〉は咆吼し、はためく翠緑の翅から細長い腕を伸ばした。積み上げたコンクリート片が崩れて溶け、バリケードに穴が開いた。坑のむこうにぎっしりと蝟集した白い戦闘用サービターが見えた。
突きだした砲口から真紅のレーザーが発射される。〈ヴァーユ〉は鼓膜を突き破るような叫びを間断なくほとばしらせながら狭い穴に向けて旋風をドリルのように突き立て、向こう側にいたサービターをなぎ払った。
灼けてもろくなっていたバリケードが耐えかねたように崩壊する。〈ローカパーラ〉たち

はすでに逃げだし、あたりには誰もいなかった。狂乱の叫びをあげながら、〈ヴァーユ〉は残ったサーピターの中央に飛びこみ、一陣の狂風となって回転した。

足先の爪に引き裂かれた機械がばらばらになって吹き飛び、つむじ風に巻かれた木の葉のように壁際に降りつもった。はげしい回転から起こる強風は風の刃となって空間を充たし、すでに破壊と死がぶあつく塗りこめられていた通路に、さらなる破壊の爪痕を刻みこんだ。押し寄せてくるはしからサービターは分解され、塵になるまで切り刻まれて風に渦を巻いた。真珠色の輝きが水煙のようにあたりに立ちこめた。寸断に寸断を繰り返され、砂のようになったサービターの白い装甲が、死灰めいた色で〈ヴァーユ〉の翠緑の翅にまつわりついた。亡霊の指にも似たそれもまた、狂乱の叫びとともに起こる乱気流によってどこかへ飛ばされていった。

『ヒート！　――〈シヴァ〉！　裏切り者！』ふたたび虚ろとなった通路に轟々と風音がとどろき、その中に、怒り狂った〈ヴァーユ〉の怒号がこだました。『出てこい、そして私と戦え！　逃げるのか、卑怯者め！　殺してやる、必ず殺してやる、貴様を殺す！　私が、この手で殺してやる！』

巨大な口を噛みならし、吠えたけっていた〈ヴァーユ〉が、いきなり体勢を崩して膝をついた。唸り声をあげて視線を後ろにむけた〈ヴァーユ〉の目の前に、指先に小さな重力球を浮かべたアルジラが立っていた。手先にだけ〈プリティヴィー〉を発現させ、針のような細い爪の先に惑星のようにいくつかの黒い球をまつわりつかせている。

「いいかげんにして、ゲイル」淡々とアルジラは言った。その下にうねる激情はゲイルと同じ性質を持っていたが、彼女はそれを隠していた。少なくとも、隠そうと努力していた。重力球をもてあそぶ指はかすかに震え、声には抑揚がなかったが、今しなければならないことを実行するために、彼女はあるだけの自制心と理性をかきあつめていた。

「ここでいくら機械相手に暴れても無駄よ。ヒートは出てきやしない。どうせいつかまた現れるわ、あたしたちを殺すために。聞いたでしょ。あいつはリーダーだけじゃなく、あたしたち全員を殺してやるって言ったのよ」

〈ヴァーユ〉は猛然と唸ると、桎梏から身をもぎ離そうとするかのように手足をよじった。続けて周囲に打ちこまれた小さな重力球が、風の神〈ヴァーユ〉の自由を奪っていた。再び言葉にならない叫び声を上げ、翠緑の翅を震わせる。四方から風の刃がアルジラに向かった。

彼女は哀しげに肩をすくめた。

「仕方ないわね」

〈プリティヴィー〉の指先がまとめて重力球をはじき飛ばした。極小の、だが巨大なエネルギーを持つ礫（つぶて）が、狂乱する〈ヴァーユ〉の腹部を連続して直撃した。

〈ヴァーユ〉は上体を跳ね上げ、背をそらし、あえぐように息をもらしたかと思うと、身を折るようにその場に崩れ落ちた。蒼白い光がひらめき、顔色を失ったゲイルの、苦痛にゆがんだ顔が現れた。

「彼を運んで。早く」おっかなびっくり出てきた〈ローカパーラ〉の男たちに、アルジラは

命令した。重力球が黒い塵となって散る。「いつまた新手がやってくるかわからないわ。一刻も早くここを引き上げなくちゃいけない。セラだけでも無事に〈ローカパーラ〉へ連れて帰らなきゃ、あたしたちは何のためにここまで来たの」
最後のひと言は自らに言い聞かせるかのようだった。目尻ににじんだ水滴を払い落とすと、アルジラは自ら進み出て、ゲイルの身体を担ぎ上げた。階段の中途で、セラを両側からささえたシエロとロアルドがそろって目を見開いている。
「急いで」そばを通り過ぎざま、叱るようにせき立てた。「リーダーは命がけでこの娘を救い出したのよ。それを無駄にしたいの？」
はっとしたように、二人が動き出した。シエロがセラを背に背負い、ロアルドが後に従った。部屋に散っていた〈ローカパーラ〉メンバーも集まってきて、しんがりを守りながら続く。
中二階の壁面に開けられた大穴と、そこから続く通風口をひろげた隧道に入りこむまで、誰も、ひと言も口をきかなかった。
全員が引き上げたのを確かめると、アルジラは再び〈プリティヴィー〉を発現させ、大きめの重力球を室内に投げつけた。黒い球がそばを通過した建材や機械が、紙のようにくしゃくしゃと潰れていった。溶接されていた金属が引きはがされ、留められていたカプセルベッドやモニタリング機材が、軋みながら黒い球に吸いこまれていく。
〈協会〉中枢の最深部は生き物のように身震いし、呻き、力尽きた。天井が落ちた。はげし

崩落音とともに、土煙が何もかもを覆いつくした。震動を避けて身を伏せていた一隊は、隧道の闇のむこうから轟く、崩壊と終末の音を聞いた。
「これで〈協会〉はテクノシャーマンを失った」陰気な声で誰かが言った。「だが、俺たちもまた……」
「しっ」別の誰かが鋭く制止した。
ロアルドが黙ってライトをつけた。ゲイルを担いだアルジラを先頭に立てて、一同は黙々と暗闇を進んだ。続くシエロの背には、か細い少女の姿をとった〈女神〉が、頬を濡らして眠っていた。そこにいない、永久に喪われてしまった銀髪の青年のことを、あえて口にするものはなかった。

2

ほとんど会話も交わさないまま、彼らは〈ローカパーラ〉の勢力圏に入った。
勢力圏といっても単にそれまで〈協会〉に発見されたことのない通路、というにすぎなかったが、少なくとも、〈協会〉中枢、ひいては〈ザ・シティ〉に与えた被害を考えると、すぐに追っ手がかかるほどあちらに余裕もないはずだった。
ロアルドたちはこの一帯に偽の〈ASURA-AI〉ビーコンを発するダミー体を多数走らせ、

さらに、〈ローカパーラ〉の中でも戦闘能力に秀でた者を選抜して、デコイ部隊を編制していた。〈協会〉の索敵を多数のダミーで混乱させた上に、いざとなれば、ほかのダミービーコンをすべて停止し、〈協会〉の防衛部隊をこちらに引きつける覚悟で、〈ザ・シティ〉周辺の地下を徘徊していたのだった。

そこに姿を現したのが、サーフによって〈ザ・シティ〉の人肉工場から救い出された囚人たちだった。途中で数名の脱落者を出したものの、どうにか〈ローカパーラ〉本隊と巡りあうことができた彼らは、驚くロアルドに自分たちがどこから来たか、誰に、どうやって助け出されたかを、詳しく話した。さらにその救い手が、現在〈協会〉の最深部に急行しつつあるに違いないことも告げた。

そして現在の〈協会〉内の状況を詳しく語り、通風口内をくぐり抜ける死と隣り合わせの強行軍のあいだに、壁越しに響く音や、あちこちにできた隙間からのぞき見た状況などをあわせて推測した内部事情もつけ加えた。非常に強力な力を持つ誰かが造反し、テクノシャーマンを殺そうとしているらしいこと、〈協会〉内部の荒廃と破壊、その『誰か』が、狂ったように哄笑しながら、手当たりしだいに破壊と殺戮を繰り広げていたこと。

その何者かのために、二人の囚人が死亡していた。一人は灼けた壁に手をついたために支えを失って墜落し、もう一人は、押し潰された隙間をすり抜けようとして、いきなり突きだした金属片に胸を切り裂かれたのだ。

呻き、血を流し、力尽きて落下する仲間を助ける余裕のあるものは誰もいなかった。仲間

が死んでいくのをなすすべなく見守るしかない彼らの頭上に、人のものではない『何か』のゆがんだ哄笑がとどろき渡った。その『モノ』は壁の向こうで狂笑を放ち、罵詈雑言を吐き散らしながら、また一人人間を殺したことにも気づかずに、逃げおくれた〈協会〉員やサービターの群れを、枯れ草を引きちぎるように無造作に、引き裂き、灼き、こなごなに砕いて踏みにじっていた。

報告を聞いたロアルドは、潜入している〈ASURA〉たちへの緊急回線を開いた。もはや、〈協会〉に感知されることなど気にしている場合ではなかった。破壊のかぎりをつくしている『何か』、テクノシャーマンを殺そうとしているそいつが、彼女を奪回するために侵入している〈ASURA〉たちとぶつかることは避けられない。ビーコンでおびき寄せることも、そのものの目標がテクノシャーマンであるのなら無意味だ。ロアルドたちにできるのは〈ASURA〉たちに警告すること、そして、いざというときに少しでも助けになるため、囚人たちのリーダーの案内に従って、テクノシャーマンのいる〈協会〉最深部へ、決死の侵攻を行うことのみだった。

緊急コールにはゲイルとアルジラ、そしてシエロが応えた。だがリーダーであるサーフだけは、通信の届かない領域に入ってしまったのか、それとも他の理由があったのか、応答がなかった。

そしてゲイルたちの伝えてきた内部状況から、〈協会〉が彼らの予想よりはるかに悪い事態に陥っていることが明らかになった。アートマ〈アルダー〉を移植されたシン・ミナセの

叛乱。誰も彼を止められる者はおらず、マダムとエンジェルの行方は知れない。〈協会〉内部のネットワークは破壊され、最後まで稼働するように仕組まれた自動防衛システムのみが生き残っている。システムに操られた戦闘用サービターは、Sクラス緊急事態の認識のもと、設けられた制御プログラムを無視して動き回り、動くものを見つければ〈協会〉員であろうと誰であろうと、敵と見なして殺戮する。

だがそれも〈アルダー〉を止めるには遠く及ばない。蟻のようにたかってくるサービターを哄笑とともに踏みつぶし灼き切り裂きながら、セラのいる〈協会〉最下層部の収容施設の直前まで侵攻してきたが、そこで足止めをくらっている。どうやらその周辺には、〈ASURA〉たちが現世に出現した直後に囚われた情報障壁を応用した、アートマを拒否する防壁が張りめぐらされているらしい。

防壁は同時に、外部からのあらゆる接触と介入をこばんでいる。もし、サーフの応答のない理由が、彼がすでに死亡しているか（これはまずあり得ないが）、応答もできないほど弱っているのでなければ、それは彼がこの防壁内、すなわちセラの収容されている施設にたどり着いていることを意味している。

だが、彼が相変わらず危機にさらされていることは疑う余地がなかった。〈ローカパーラ〉部隊は、強硬に同行を主張した囚人たちのリーダーを先頭に立て、テクノシャーマン収容施設に急行した。

途中で、別ルートをたどっていた〈ASURA〉たちも合流してきた。彼らは人間態をと

ってはいたが、一様に神経を逆立て、肌に刺さるようなぴりぴりとした雰囲気を発散していた。闇の中で瞳は完全な黄金に燃え上がり、今にも人間の殻を破って恐ろしいものが姿を現しそうな異常な緊張に、正体を知っているはずの〈ローカパーラ〉メンバーさえ、ひそかに背筋に冷たいものをおぼえた。

中でも、ゲイルの発散する異様な雰囲気は近くに寄ることすらためらわれるほどだった。彼らもまた〈協会〉本部突入後、互いのリンクを断たれており、リーダーの窮地を察知することができていなかった。

それを誰よりも責めているのが、他ならぬゲイルだった。ヒートのいない今、彼がサーフに次ぐ攻撃力を持つアートマ保持者であり、〈エンブリオン〉参謀(ビショップ)として、リーダーが危機に陥っているなら誰より先に察知し、駆けつけるのが当然だった。リンクを切断されていたのだから仕方がない、どうしようもなかったのだと仲間が説得しても無駄だった。彼は青白い顔をますます青くし、凍りついたような無表情をさらに固くして沈黙を守った。もし自分がリーダーに同行していれば、と甲斐のない考えを言葉少なに漏らした以外は、まばたきもせず視線をまっすぐ前方にむけたまま一団の前を進んだ。

個別行動はもともとゲイルの発案だった、それを許しがたい判断ミスだと考えていることは手にとるようにわかった。せめて自分だけでもサーフと同行すべきだった、そうすれば、サーフ一人が分断されることもなかったはずだという彼の心の内を読んで、個別行動はサーフの認めた作戦だったのよ、と見かねたアルジラが指摘しても、彼の態度は変わらなかった。

ことゲイルに関して、サーフの安全は彼自身の安全よりもはるかに優先されるべき最優先事項であり、そのためなら、彼自身の消滅もまた、作戦の一部として受け容れたはずだった。にもかかわらず、参謀(ビショップ)である彼はここにおり、リーダーに呼びかけることも安否を確認することも不可能のまま、五里霧中の闇を、人間に混じって駆けている。今この瞬間にもサーフは〈アルダー〉と対峙し、最初の戦いで見せつけられたあのすさまじいパワーとただ一人で相対しているかもしれない。人間を越えるパワーをもつ〈ASURA〉、その中でも最高の情報処理能力を誇る参謀型(ビショップ)として、リーダーを補佐し守護する副官として、あってはならぬミスだった。

合流してからのゲイルの行動はそれまでとは明らかに質を違えており、それはロアルドたち〈ローカパーラ〉のみならず、仲間であるアルジラやシエロまで困惑させた。冷静沈着、感情を持たない機械としての参謀(ビショップ)は、徐々ににじみ出てくる焦慮と混乱のうしろに呑みこまれていき、常ならば人間たちの行動に口出ししようとするはずの局面でも、口を一文字に引き締めたまま、苛立ちを隠さずに神経質に手を握りしめては開く動作をくり返しているだけだった。

そして〈協会〉最深部、セラの収容室に到着した彼らが見たものは、横たわるサーフとその背にかばわれるようにして倒れ伏すセラ、そして、その頭上にそびえるように立ち、今にも〈シヴァ〉の死の爪をふりおろそうとしている、ヒートの姿だった。

アルジラが息をのみ、シエロが何か叫ぼうとした。だがその前に、わき起こった旋風が全

員の口を封した、ひとつの黒い影となって、ゲイルが前に飛び出していた。彼には絶対にあり得なかった無謀さでゲイルは突進し、続けざまに竜巻と風刃の嵐をヒートにむかって投げつけた。
　間一髪でヒートは避け、サーフから離れて距離を取った。突入軍は混乱しながらも突進し、横たわるサーフとセラの周囲に人垣をつくって武器を構えた。囚人のリーダーが倒れたセラを抱き上げ、動揺した声をもらした。
「これがテクノシャーマン？　ただの娘じゃないか……」
　青ざめた顔でかすかに呻いているか細い少女は、彼らが『テクノシャーマン』という単語のイメージに反して、あまりに軽く小さく、小鳥の雛のように弱々しかった。彼女は身をよじり、苦しげに喉を鳴らすと、ふいに大きく目を見開いた。見上げた瞳のあまりに黒く、澄みきっているのに動揺して、男は顔をそむけた。
「サーフ？」かすれた声で少女は言った。「ここはどこ？　サーフ……サーフの声が聞こえたわ。サーフがいるの？　来てくれたの？　どこにいるの？　ほかのみんなは？　サーフ……」
　まだほとんど意識のはっきりしていない状態でセラはふらふらと起き上がり、バランスを崩して再び倒れこんだ。目が閉ざされ、きつく寄せられた眉のあいだに細い皺がよった。
「サーフ……サーフは……？」
　その耳にはあたりの叫喚も届いてはいないようだった。我を忘れて怒りに身を任せたゲイ

ル、〈ヴァーユ〉の咆哮があたりに轟いていた。

　ぐったりと横たわるサーフに対して、ヒートは「自分が殺した」と淡々と告げた。そして仲間たちに向かい、「おまえたちもいずれ殺してやる」とも。

　寡黙で好戦的ではあったが、けっして〈エンブリオン〉メンバーに牙をむいたことはなかったヒートの、はっきりとした殺意と叛意の表明に、アルジラとシエロはただ声を失っていた。以前、ニューヨークで〈シヴァ〉の襲撃を受けたアルジラでさえ、リーダーであるサーフ、ジャンクヤードでは誰より近くにあったはずのサーフに、ヒートが手を下したという事実を、すぐには呑みこむことができなかった。

　だが、ゲイルは完全に我(われ)を失っていた。怒りのままに〈ヴァーユ〉を発現させ、姿を消したヒートを追って、叩きつけるような怒号をあたりに響きわたらせた。

『裏切り者……リーダーに何をした！　出てこい、そして、私と戦え！』

　だが、仲間たちにかこまれ横たえられたサーフの状態のただならぬことが、彼をひきもどした。ボディの調整を行い、自己修復機能を促進させる行為は、ナノサイズの量子コンピュータの塊である〈ＡＳＵＲＡ〉の情報処理能力を完全に使いこなせる参謀型(ビショップ)のゲイルでなければできない作業だった。

　サーフのボディを構成する半生体素子は素子間の繋がりを切断され、まるで霧のように空中に蒸散しつつあった。いかにゲイルが高い能力をもつ参謀型(ビショップ)といえども、繋がりを失い、粒子となって散りつつあるサーフの肉体を引きとめる能力はなかった。

彼にできたのはサーフのいまだに形を保っている部分を保全するために全能力を傾けることだけだったが、やはり、細胞間の引力を断ち切られた〈ASURA〉ボディを修復することは不可能だった。傷を押さえるゲイルの指のあいだから、彼のリーダーの肉体は押し止めようもなく崩れ、淡く輝く煙となって、四方に散っていった。光を喪い、放心した目で、ゲイルは見守ることしかできなかった。それは彼の無力を、敗北と絶望を、そのまま表す光景だった。

「サーフ……どこにいるの？　何があったの？」

「見ちゃだめよ、セラ！」

ようやく意識を取りもどしたセラが、ふらふらとサーフに近づこうとしていた。アルジラが引き止めようとしたが、サーフの姿をひと目見た少女は悲鳴をのみこみ、制止の手を逃れて、崩れゆく身体のそばに倒れこむように膝をついた。

「誰がやったの。誰が、こんなひどいことを……！」

「ヒートだ」押し殺した声でゲイルが吐き捨てた。「ヒートがリーダーを殺した……彼が、自分でそう言った。『サーフを殺した』と。『いずれおまえたちもサーフのあとを追わせてやる』と」

「嘘！　そんなの嘘！　サーフ！」

残ったわずかな力で、サーフは唇を動かそうとしていた。キュヴィエ症候群の罹患者のように結晶化し、ほとんど全身が崩れ去っている状態で容易なことではなかったろうが、泣き

伏すセラにすがられ、必死に治療を試みるゲィルや仲間たちにむかって、何かを告げようとしていた。銀色の瞳が最後の力でまたたいた。唇がふるえた。
「――ヒー、……ト」
全員の動きが止まった。その一言を最後に、サーフの肉体は握った砂の一塊をまき散らすように四散し、わずかなきらめく塵をのこして、何もなくなった。
セラが悲鳴を上げ、後ろに倒れかかった。隣に這ってきて人垣に首をつっこんでいた囚人たちのリーダーが、あわてたようにその細い背中を支えた。
ヒート。その言葉が何をさしていたのか、誰もがそれぞれの意味を探した。最後に自らの殺害者を告発しようとしたのか、それとも、混濁する意識の中で、もっとも近くにあった副官の所行がいまだに信じられずに、彼に問いただそうとしたのか。
あらゆる問いは、もはや無意味だった。サーフは消えた。破壊不可能であるはずの〈ASURA〉ボディとともに、永遠に。

そしていま彼らは、〈ローカパーラ〉が中枢をおく地下コロニーに帰還していた。
排気ダクトのかすかな音が聞こえるだけの室内で、ロアルドとアルジラ、シエロの三人が、重苦しい空気の中じっと押しだまっていた。狭い室内にはベッドが運びこまれ、気を失ったセラが寝かされていた。

員によって警備は厳重にされていた。ところが、それは内部の人間を警護するためというより、暴徒と化してここになだれこんでくるコロニー住人に対する威嚇の姿勢を示していた。テクノシャーマンが〈協会〉から連れ出され、コロニーに連行されたという話は、すでに人々のあいだに広まっている。現在の境遇を自分たちに強いた悪の象徴として、〈協会〉とテクノシャーマンの名はコロニーの人々にとって悪魔以上の憎悪の対象だ。尋問などせず、手っとり早く私刑にかけて殺してしまえという声は、帰りついたときからすでにロアルドたちの耳に入っていた。「魔女は焼き殺せ！」と、松明を振りあげつつわめきちらす群衆に取り囲まれたのも一度や二度ではない。

彼らがその目的を果たし得なかったのは、ただ、パーフェクト・アスラであるアルジラとシエロ、ゲイルの存在があったからだった。暴徒に近づかれるたびに、アルジラは〈プリティヴィー〉の片鱗を出して威圧の視線を向け、セラを背負っているシエロは頭をひと振りして、それでも近づこうとする度胸のある者の足もとに稲妻を投げつけた。

「なんでそいつをかばう、その女こそ悪魔なんだぞ！」シエロの雷にひるんで後ずさりながら、暴徒と化した人々は怒鳴り散らした。「やっぱりあんたたちもただの悪魔だな。魔女の使い魔だから、その小娘を守るんだろう。いくらしおらしい姿をしたってだまされるもんか、魔女め、悪魔め！　地獄の火に焼かれやがれ！」

一同は歯を食いしばって人々の罵声の雨をくぐり抜けた。

ロアルドはセラをひとまず〈ローカパーラ〉に収容してから、人々の前に出て、黒い太陽

とキュヴィエ症候群への対処法を見いだすためには、彼女の〈神〉とのコンタクト能力が必要であり、彼女を手に入れることによって、コロニー側がどれだけの利益を得ることができるかを集まった人々に説いたが、ほとんど効果はなかった。辛い地下生活で積もり積もった不満と憎悪が、目の前に現れたテクノシャーマンという具体的なアイコンに向かって収斂していた。ロアルドは説得をあきらめ、セラをコロニーのさらに奥にある、あまり知られていない部屋に移すと同時に、〈ザ・シティ〉侵入作戦にも同行した信頼の置ける部下を選び、通路や部屋の前に配置した。アルジラとシエロはむろん、セラのそばを離れようとしなかった。

移された部屋は使用不能になったがらくたが押しこめられていた空間だった。壁際には壊れた旧世代コンピュータの筐体が山と積み上げられている。部品やケーブルをはみ出させ、基板をむき出しにしたそれらは、臓物を引きずった異様な動物の死骸のようだった。

セラの胸にかけられた薄いシーツがわずかに上下していた。ときおり、苦しげに顔をゆがめ、サーフの名を口にして手をのばそうとする。シエロが進み出て、ベッドのかたわらに膝をつき、その手をとって額に押しつけた。セラはすがりつくようにシエロの手を握りしめ、シエロも同様に強く握りかえした。したたり落ちる涙が重ねた手を濡らしてシーツに落ちた。

「なんでだよ」濡れた目をセラの手で隠しながら、絞りだすようにシエロは言った。「なんでアニキが、ヒートに殺されなきゃなんないんだよ。ヒートはなんで、あんなことしたんだよ。なんでオレたちを、殺すなんて言うんだよ。なあ、おっさん。なんでなんだよ」

答えを求めるための言葉ではなかった。ロアルドは疲れたようにかぶりを振り、杖を引き寄せて握りに頭を寄せかけた。アルジラは身を震わせて視線をそらし、壁に目を向けたまま、低く言った。
「ゲイルはどうしてるの。もう目は覚めてるはずでしょう」
「部屋から出てこない」ロアルドは投げだすように言った。「二時間ほど前に意識を取りもどしたが、ベッドに起き直ったまま、動かないんだ。ぴくりともしないよ。誰がなんといおうと反応しない。一種の自閉状態に入ってしまったようだ」
「あんた、参謀型(ビショップ)は特別なタイプのAIだって言ってたわね。確か、思考の根幹がリーダーユニットに依存するとか、なんとか」
「そうだ」言いにくいことを口にする時のくせで、ロアルドは尻を椅子の上でもぞもぞと動かした。「参謀型(ビショップ)AIは自己の思考基準と存在基盤をリーダーユニットに置く。そういうふうにセットされているんだ。ジャンクヤードでは、リーダーユニットが死亡すれば、そのまま残余兵とともに勝利トライブに吸収されることで、存在基盤の移行は可能だった。だが、ここでは事情が異なる」
「サーフ以外に、ゲイルの従うべきリーダーはいない」アルジラの声には抑揚がなかった。「それに、サーフが死んだからって、今のゲイルが別の指導者に乗り換えられるとは思えない」ふいに目を光らせてロアルドを見た。
「ゲイルはどうなるの。彼は。正気に戻る——いいえ、正気を保てるの。この先」

「なんとも言えん」もう一度ロアルドはかぶりを振った。「長い進化を重ね、その上アートマを獲得したことで、あんたたちは俺たちが設計した単純なAIからは、はるかにかけ離れた存在になった。独自の人格を獲得し、自律思考を保ち、感情を所有している。だが、その基盤になっているのは、やはり〈ASURA-AI〉なんだ。設計の根底にあるそれぞれの仕様にまで変化が及んでいるかは、俺にも予測がつかない。サーフの死が、精神的に深いダメージになっていることは、あんたたちも同じだろう。だが、参謀型（ビショップ）であるゲイルにとって、それがどんな意味を持つかは」

その先を告げるのをためらうかのように、ロアルドは指先を唇にあてた。アルジラはきつく目を閉じ、天井を仰いだ。ぼんやりとした発光パネルの光が、彼女のピンク色の髪を色あせさせていた。

「……シン・ミナセはどうなったのかしら。〈アルダー〉は」

「ゲイルがこちらの呼びかけに反応しない今、確かなことはわからないが、おそらくサーフと同様、〈シヴァ〉――ヒートに破壊されたのだろうな。パーフェクト・アスラを葬り去ることのできるアートマか。〈シヴァ〉。確かに、『破壊神』にふさわしい能力だ」苦いものを吐き出すようにロアルドは言った。「まったく、大したものだよ」

「アニキ。戻ってきてよ。ねえ」セラの手を握りしめたシエロの声は涙に震えていた。「ほら、セラはここにいるよ。アニキのこと、呼んでるんだよ。来て、起こしてあげてよ。オレたちみんなを、〈楽園〉に連れてってくれるって、言ってたじゃん。必ず、みんなで〈楽

園〉に行こうって、約束したじゃん。なのに、なんでいないの。そんなのってないよ。ねえ、アニキ。ねえってば」
低いすすり泣きが響いた。ロアルドもアルジラも、かける言葉をもたなかった。なにを言ったところで、意味があるはずもなかった。サーフは戻らない。どのような技術がそれを可能にしたかは不明なままだが、ヒート、〈シヴァ〉は宣言通り、原則的には破壊不能のはずのパーフェクト・アスラを、崩壊させ、消滅に追いこんだ。
「その〈シヴァ〉の能力がどんなものか、見当はつかないの。あいつは、あたしたちも殺すと宣言してる。あんたたちもきっと、ただじゃすまないわよ」
「そんなことくらい考えているよ。だが、どんな打つ手があるというんだ？」ロアルドは投げやりに手を上げ、力なく下ろした。「あんたたちが来る前は、〈協会〉の下っ端アートマ・体にさえ手も足も出なかった俺たちだ。パーフェクト・アスラさえ解体することのできるアートマに、俺たち人間風情が何をしようと太刀打ちなんぞできんよ。もしその理論がわかったところで、ここにはそれに対抗するための材料も、施設もない」
身震いしながらアルジラはうつむいた。金色に底光りするその瞳から、はじめて、涙がひと筋頬を伝い落ちた。
「どうすることもできないっていうの」彼女は呟いた。「あたしにはまだ信じられない。サーフが死んだことも、ヒートが裏切ったことも。セラを助け出したのに、どうしてサーフがいないのか、納得できないの。頭ではわかっていても。でも、本当なのよね。サーフがここ

にいないのは。あたしたちの目の前で、まるで、塵みたいになって空中に溶けていってしまった。どうして、あんな——」
「……ボディを構成する半生体素子の結びつきを破壊するのと同時に、基本人格のデータに働きかけて、情報の海に拡散させてしまったのよ」
シエロがはじかれたように顔をあげた。青い髪が貼りついた顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている。
「セラ！」あげた声はまだ半分泣き声のままだった。「目、覚めたのかよ！」
「ええ」セラは無表情のまま、大きく目を見開いて天井に視線をすえていた。「さっきから、みんなの話も聞こえてた。最初は遠くから聞こえてくるみたいで、意味もよくわからなかったけど、やっと目が覚めた」
「大丈夫？　気分はどう？」アルジラも急いで枕のそばに膝をついた。「〈協会〉になにかひどいことされてない？」
「わたしは——大丈夫」黒い瞳がゆっくりと空中をさまよう。見えない何かを探し求めるかのように。「大丈夫——ええ。〈協会〉で受けた処置は純粋に医学的なものばかりだった。せっかく回収したわたしに、害を与えるような危険な行為はできなかったから。覚醒処置がみんな失敗に終わったあとは、バイタルモニタにつながれたまま、あの隔離施設でずっと眠ってた。サーフが来るまで。サーフ」
大きな目が二度、三度とまばたき、ガラスのようだった目の奥から、徐々に記憶と恐怖が

わきあがってきた。
「サー、フ」
短い悲鳴を上げてセラは跳ね起きた。
「サーフ！」
覚醒の瞬間に見せた、超然とした〈女神〉の貌はもはやなかった。そこにいるのはひとりの、おびえ、悲しみにうちひしがれた少女の姿だった。飛びつくようにシエロにすがりつき、その肩に頭を載せて、声をあげて泣きじゃくった。
「シエロ、シエロ、サーフがいないの。いなくなっちゃったの。わたしを呼ぶ声が聞こえて、目を開けたらサーフがいたのに、塵になって消えてしまったの。サーフ。サーフがいない、わたし、どうすることもできなかった、サーフ――」
アルジラがそっと肩を抱こうとしたが、セラははげしく身をよじって払いのけた。慰められる資格など自分にはないのだというかのように、小さな背中はかたくなだった。つられたようにシエロがセラの背中に手を回し、こらえていた涙を爆発させた。二人の涙が混じりあい、温かい雨のようにたがいの頬を流れ落ちた。
「あんたがもっと早く目を覚ましていれば、何か手を打てたのかもしれんのだがな、女神様」
いくぶん冷たくロアルドが言った。セラはびくっとして泣きやみ、彼を見た。アルジラがきつい目で睨んだが、ロアルドは意に介さず、椅子にかけたまま不自由な足をのばして光る

目で〈女神〉だった少女を見つめていた。
「初めまして、と言うべきなんだろうな。たぶんあんたは、俺のことなど覚えちゃいないだろうし、そもそも知ったことさえないんだろうから」低い声には憎悪に近いものがこもっていた。「俺はロアルド・セス。もと〈EGG〉に所属していた人間で、今はこの地下抵抗組織〈ローカパーラ〉の頭目をつとめている。俺が前に知っていたあんたはほんの五歳ほどの子供の姿だったが、ジャンクヤードの中でとった姿に、現在は固定しているようだな。そのほうがこっちも話がしやすくて嬉しいよ。どうやら言葉も通じるようだしな。前のあんたはなにしろ、こちらの存在を認めてもらうことすら、苦労の、お高くとまった〈女神様〉だったんでな、テクノシャーマン・セラフィータ」
セラの肩が跳ねた。唇が震えて言葉を形作ろうとしたが、結局なにも言えずに、うつむいてシーツに目を落とした。膝の上におかれた手が、かたく握りこぶしを作った。
「あんたなら、サーフの崩壊を止められたかもしれない。全能の〈女神〉、神の愛し子にして情報の巫女だった、あんたなら。なのにあんたは、なにもしなかった。前回のように、今回も。キュヴィエ症候群のはびこる世界に俺たち人類を放り出したのと同様、今度は、自分を助けに来てくれた相手までも、見殺しにしたんだ」
「セラをいじめんな！」
シエロが飛びつくようにセラを腕の中にかばいこんだ。むきだした歯から〈ディアウス〉のたてる蛇のような歯擦音が漏れる。

セラは一度身震いすると、何かを振り切るかのように目を閉じ、しっかりと抱えこんでいるシエロの腕を、そっと押しのけた。

「セラ……？」

「いいの。シエロ」少女の声は今にも消え入りそうにかぼそく、震えていた。「彼の言うとおりだもの。もしかしたらわたしなら、サーフの人格が拡散してしまう前につかまえて、再構成することができたかもしれない。でも、それはあくまで『かもしれない』なの。今のわたしは、もう前の〈わたし〉と同じじゃないから」

「言い逃れか。見苦しいな」ロアルドの歯が鳴った。「テクノシャーマン・セラフィータ。神卵の〈女神〉、〈神〉と語る情報の巫女」

セラの肩が落ちた。白いうなじに、黒い髪がはらりとかかった。

「それは確かに、わたしよ。五年前までのわたしは〈神〉と、彼をめぐる情報の世界しか知らなかったし、見えなかった。物質世界を感知することすらできなかった。でも今のわたしは、ただの人間なの。ある程度の情報を操ることはできるし、今この瞬間も、〈神〉と繋がりをもっていることは認めるけれど、それにはもう、ほとんど意味がないわ。〈神〉は、……狂ってしまったから」

「狂ってしまった、だと？」

ロアルドは短い笑い声をあげた。だが、その笑いに、おかしみはまったくこもっていなかった。彼はこれまでの苦難を、人類そのものが負わされた呪いに対する憎悪をすべてこめた目で、少女をにらみつけていた。

「そんなことは今さら教えてもらうまでもないな、テクノシャーマン。こんな世界になっちまったんだ、神様が狂ってるなんてことは、こっちは先刻承知だよ。あんたに訊きたいのは、なぜ〈神〉はこんな世界をもたらしたのか、だ。なぜ〈神〉は地球に、俺たち人類に、こんな呪いを下した。なぜ〈神〉は狂った。あんたなら知ってるはずだ、テクノシャーマン。答えろ」

ロアルドは身を乗り出し、意外なほどの素早さでセラの肩を摑んだ。痛みに少女が声をたてたのにもかまわず、乱暴にベッドから半身を引きずり出す。

アルジラとシエロが同時に「やめろ！」「やめなさい！」と叫んだにもかかわらず、彼は恐れなかった。身を縮める少女の前に、彼はすり切れたズボンの裾をあげ、結晶化したくるぶしと臑をさらした。セラは恐怖に目を見開き、口に手を当てて悲鳴を殺した。

「これがあんたのやったことだ」吐き捨てるようにロアルドは言った。「そして今も、人類に対してやり続けていることだ。なぜやめさせない？〈神〉と繋がっているといったな。それなら今すぐ〈神〉に、この疫病を止めろと言え。石になって死んでいく人間たちを救う

方法を教えろと言うんだ。あんたにはその責任があるはずだ。
あんたは〈神〉と話すために生まれ、そのために育てられ、〈神〉とあんたの会話を理解するために、少なくとも五人の人間が命を落とした。実験材料に使われた培養細胞やクローン体を含めればもっとだろう。あんたが〈神〉との関係に閉じこもり、〈EGG〉と同時に自らを閉ざしたあと、キュヴィエ症候群の急激な進行で、一夜にして全滅した国は数知れない。みんな、あんたがやったことだ、テクノシャーマン。あんたはそれに対して、俺たちに説明する義務がある」
「セラをいじめんなって言ってんだろ、おっさん、これ以上この子に無理言うと——」
「シエロ」
はっきりした声で、セラはシエロを止めた。食いつかんばかりに目を金色にぎらつかせていたシエロは、軽く腕に手をかけられて非難するように振り向いた。
「でもセラ、こいつ、何もかもセラのせいにしてばっかり」
「そう言われても仕方がないことを、わたしはしてきたのよ」静かにセラは答えた。「わたしの生まれる前にも、たくさんの人が犠牲になってきた。そして、わたしが生まれたあとには、さらにたくさんの人が、もっとむごい死に方をした。わたしを作り出すために、失敗作として廃棄された兄弟姉妹たちも含めて、シエロ、わたしの足は死体の山を踏んでいるし、この両手は血に染まっているの」
握りしめていた両手を開いて、セラは手のひらを見つめた。柔らかい手に爪先が食いこみ、

血の滴る傷口を作っていた。

「セラ、あなた血が」アルジラが驚いたように手を取ろうとして、息をのんだ。血が筋を引いていた傷は一瞬のうちにあとかたもなく消えていた。血の流れたあとすらなかった。

「これが、わたしのできること」抑揚なくセラは言った。「マクロ的な量子存在……わたしは〈わたし〉の状態を自己観測することによって、任意の形をとることができる。以前のわたしが五歳で肉体年齢を止めていたように、今のわたしは、ジャンクヤードでのセラの姿で自分を固定してるの。大きな怪我をなくすことはできないけれど、これくらいの傷ならあっという間に消せるわ。『傷の存在しない』自分を選択することでね。

量子ジャンプも、短い距離ならできるでしょう。たとえば今見えている範囲のどこかに、移動するとかなら。でも、それ以上、知らない場所や見えない場所に移動することはできないし、物質的な攻撃を受ければ倒れる。以前のように、情報的なものだけがわたしに影響を与えられるわけでは、もうなくなってしまったから。

ジャンクヤードで身につけた、『〈エンブリオン〉のセラ』という自己認識、それが現在のわたしの存在の軸よ。ジャンクヤードのセラはみんなと同じように、傷つき、倒れ、血を流す存在。あなたたち〈ASURA〉が人間になったように、ジャンクヤードで、わたしも人間になったの。ほんの少し他人とは違う能力を持つだけの、ただの人間に——」

「だが、今もあんたは〈神〉と繋がりを持っている」噛みつくようにロアルドは言い、乱暴にセラを揺さぶった。「だったら、〈神〉がなにを考えているか、話すことくらいできるだ

ろう。あんたが人間になったのはむしろ好都合だ、ずっと扱いやすくなったし、何しろ、こうして人間の言葉で話ができるからな。あんたと〈神〉の交流を解読するために、いったい何人が死んだと思っているんだ」

セラはちらりとシエロに目をやり、口を押さえて視線をそらした。喉の奥から抑えきれない嗚咽がこぼれる。シエロがあわてたように、セラの顔を覗きこんだ。心配げな青い瞳から逃れるようにセラは身をよじり、「ごめんなさい」と涙でくぐもった声で呟いた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、シエロ。あの時のわたしはなにも知らなかった。あの時のあなたはここにいるあなた自身ではないけれど、でも、あなたを殺したのは、わたし。ほかのみんなを殺したのも。アナベラも、カズキも、あの時〈EGG〉にいたたくさんの人も、みんなわたしが殺した。わたしが何も知らなかったせいで。そして何も知らないまま、伝えられた人類の呪詛を、あの場にいたすべての人々の死と苦痛と恐怖を、考えもなく〈神〉に中継したせいで、事態はもっとひどくなってしまった……」

「五年前の事件か」押し殺した声でロアルドが詰問した。

弱々しくセラはうなずいた。

「カズキ・ホムラ。彼が、わたしを〈EGG〉から連れ出すために、あの夜計画を立てたの。でもそれは、前もってもぐりこんでいた別勢力のエージェントであるアナベラに横取りされた。けれどそれもまた、シン・ミナセ、陰からなにもかもを操っていた、彼の計算のうちだった。シンはカズキにわたしを連れて自分と脱出しようとさそったけれど、カズキは応じな

かった。口論しているうちに、殺されたと思っていたアナベラが、シンを炎の中へ突き落とした。残されたカズキは、すでに瀕死の状態だった。彼は、事態がそこに至ってもまだ、血まみれの苦界である物質界を知らずにいる〈女神〉のわたしに、わたしが何をしたのか、そして〈神〉が人類にどんな所行をしたのか、なにもかもを、ありったけの力をふりしぼってぶちまけた。そして、息絶えた」

小さく息を吸う音を立てて、一瞬セラは目を閉じた。

「その情報は、当時のわたしにはあまりにも異質で、大きく、そして、重いものだった。わたしの自己認識は圧力に耐えかねてばらばらに砕け散り、〈EGG〉の生体素子ネットワークの中に、情報のホログラム片として拡散した。〈EGG〉が自閉状態に入ったのは、〈EGG〉そのものと融合した、わたし自身が自閉していたからよ。

わたしは現在も〈神〉と接触を保ってはいるけれど、こちらから話しかけることは、もうできないわ。少なくとも、〈EGG〉本体を通して、〈神〉に直接アクセスしないかぎり。〈神〉の声を媒介することもできない。〈神〉の情報(ことば)は人間の持つキャパシティをはるかに越えたところにあるし、それを〈EGG〉の補助なしにリアルタイムであなたたちにわかるよう翻訳することは、この肉体の能力を超えてしまうから」

薄い胸に指を突き立てるようにしてセラは自分を指した。

ロアルドは歯ぎしりし、「じゃあ、いったい何のために、俺たちはあんたを連れてきたんだ」とはげしい口調で怒鳴った。「あんた自身のことなんかどうでもいい。この病気、キュ

ヴィエ症候群、それに黄色い太陽、なぜこんな世界になっちまったのか、そいつが知りたいんだ。〈神〉に呼びかけることもできないテクノシャーマン、それなら、〈神〉とはそもそもいったい何者なんだ。なにが目的で、生命を石化させるこんな病気を蔓延させたんだ。それくらいなら話せるだろう。俺たちはなぜ、こんな運命を背負いこまされなきゃならなかったんだ。太陽に怯え、〈協会〉に怯え、地下でモグラみたいな暮らしをするような、こんなな」

杖を握りしめるロアルドの拳がわなわなと震えていた。セラに身を寄せるアルジラとシエロの存在がなければ、その杖を振りあげて少女を打ち据えていただろうほどに、その顔には凶暴な怒りと憎悪が燃えていた。外で彼自身がなだめようとしていた群衆のうちに渦巻いていたもの、それがそのまま、彼の中にもあったのだった。

「……ええ」しばらく間を置いて、セラはぽつりと言った。また沈黙を置いて、小さく頭を振った。「やっぱり、話さなければいけないんでしょうね。でも、警告しておくけれど、聞かなければよかったと思うことをあなたは知るかもしれないわ、ロアルド・セス。

以前のわたしにとって、こんな話は、とどまることを知らない情報の奔流に転がる無意味な小石のひとつにすぎなかった。でも、その小石が実はどれだけ大きなものだったか知った今、それを口にするのは、とても怖い」

「話せ」威嚇的にロアルドは言った。杖をつかんで立て、足を投げだすようにして椅子に座り直す。ぼろぼろのズボンからのぞく結晶化した脚がわざとセラの目に入るように、調整し

た姿勢だった。
　無言の圧力をかけようとしているのに感づいて、アルジラが眉を逆立てて口を開こうとしたが、「待って」とセラに制止された。
「いいの。自分が何をしたのか、なにが起こっていたのか、見せられていたほうがいいの。それだけのことを、わたしはしたの。お願い、アルジラ、シエロ。二人とも座って、黙って聞いていて」
　二人は顔を見合わせると、不承不承、ベッドに身を起こしたセラの左右に腰を下ろした。アルジラはセラの背にそっと手を添え、シエロは、涙でべとべとの顔を乱暴にこすると、怒ったようにセラの手を取り、ぎゅっと握りしめた。何があっても自分は味方だと、無言で主張する仕草だった。
　セラは淡く微笑んだ。アルジラの肩にそっと頬をすり寄せ、シエロの手を強く握り返すと、抑揚のない声で、遠い時間の果ての、長い物語を語りはじめた。

〈彼〉は、はるかな高位次元の彼方からやってきた。
　来た、といっても、〈彼〉の意志ではなかった。あらゆる意味において彼に性別はなく、また人間が意志として認識できるような形での思惟も持ってはいなかったが、それでも彼は彼の種族なりの形で、個性を持ち、ある指向性をもって行動することができた。

鯨やイルカ類がたまたま浅瀬に入りこみ、それきり戻れなくなるように、ある時空の変動がいやおうなしに彼を仲間から引き離し、本来の居場所である次元から、はるか下の低位次元、三次元の物質世界へと、押し流してきたのであった。

彼の種族は情報の流れを食糧とし、それを欠かせない新陳代謝として必要とする生き物だった。生き物、というのは便宜的な言葉で、もちろん彼は人間的な意味での生命は持っていない。情報そのものが彼自身を形作り、そのたえまない演算と流れゆくさまざまなデータ処理こそが、彼の存在を構成する核だったのである。

そのような存在である彼が低位次元たる三次元に落ちこんだのは、まさに、岩の間にはまって動けなくなった大鯨のようなものだった。周囲でどんどん潮は引いてゆき、地上の重力が、彼の巨大な存在を圧する。彼にとって呼吸にもひとしい情報の流れは、ここではあまりに希薄で、単純にすぎ、空気ほどの濃さもなかった。ましてや低位次元にはまりこんでしまった自らを引きずり出すほどの濃度は、とうてい持っていなかった。

そこで彼は、ここから逃れ出るための情報的揚力を得るために、周囲の事象を操作し、自らの拡張演算素子たり得る存在を物質界に作りだそうとした。高性能であればあるほど、知能が高ければ高いほど、好都合だった。高位次元の高みへとふたたび舞い上がるには、この鈍重な世界からできるかぎり大量の情報をかき集め、それを糧にして、自らのまわりに濃密な情報空間を作りあげ、手がかりにするしかなかったからである。

はじめに彼はひとつの惑星を選びだした。目につけた恒星系で、ちょうど、新しい惑星の

いくつかがその第一歩を踏み出そうとしているところだった。彼は慎重に各惑星の位置を調整し、その中で生命発生にもっとも適した位置に、三番目の惑星を配置した。のちにそこに誕生する種族によって、『地球』と呼ばれることになる星だった。
　そのときまだ生まれて間もない地表には、さまざまな化学物質が煮えたぎるスープ状の海が荒れ狂っているばかりだった。マグマ活動はまだ活発で、地表は熱く、生命が存在できそうな場所は水中しかなかった。
　彼は慎重に、化学分子を組み上げることからはじめた。三次元においては彼の影響力は大幅に制限され、ことに、実体を持つ生命を誕生させるというような細かな作業は、針の先で芥子粒をつまんで絵を描こうとするような、難しく苛立たしい行為だった。
　何億年かが過ぎた。原初の惑星は徐々に冷えていった。辛抱強く作業をつづけた甲斐があって、彼はついに、単純な分子鎖からなる一連の化学物質に、有機的な属性を与えることに成功した。無機的な物質はこの世界では単純すぎて、いかに成長させようとも自分が望むほどの情報処理能力を得ることはないと、早期に彼は判断していた。
　いったん有機となった分子鎖は、彼の慎重な操作を受けながら、しだいに融合し、成長していった。そしてある瞬間、分子鎖は、自らを複製し、増殖する術を身につけるようになった。もっとも原始的な生命、バクテリアの誕生だった。動き回る生命の萌芽を（あくまで比喩的な意味で）見て、彼は満足した。だが、目指すものまでは、まだまだ遠い道を歩まねばならなかった。

[illegible]であるバクテリアに、彼が求める演算能力を持つほどのキャパシティはなかった。彼はその頃には数種類に増えていたバクテリアに働きかけ、いくつかの、相性のいい種類を組み合わせて、ひとつの合体生物として活動させることに成功した。お互いにくっつきあい、能力を組み合わせて行動する段階に進んだ数種のバクテリアは、しだいに個としての独立性を失い、全体を構成する一部として働くようになった。核を持つ細胞が誕生し、やがて原初の真核細胞生物が、濃密な生命のスープの中を泳ぎだした。

彼は急がなかった。ここまでにかかった十億年におよぶ時間でさえ、彼にとってはまたたきほどの時間でしかなかった。巨星である恒星が周囲に広げる重力と電磁波の波を門にして、彼は慎重に、生まれたばかりの生命を導いていった。

真核細胞はやがて多細胞生物に進化し、植物性のものと動物性のものに分かれた。生命の活気に満ちた原初の海を眺めて、彼は次のレベルへの、長い階段を昇らせる用意に取りかかった。

すでに煮えたぎる海も火山活動も終息を見せ、新たな世界、大地が、生命を迎え入れるのを待っていた。海の中でできる実験は限られている。どこにあるかわからない可能性をつかむためには、この惑星に播種した生命の、あらゆる可能性を試す必要があった。

最初に植物が上陸し、やがて、動物がそのあとを追った。魚類として水中を泳ぎ回る生活から、新たな生活圏を求めて地上に這い上がったひれ足を持つ肺魚は、何が自分をそうさせているのか、もちろん知ることはなかった。彼らを突き動かしているのは生命誕生の瞬間か

らあらゆるものの脳裏に刻まれた、ただひとつの命令だった。
『産め、増やせ、地に満ちよ。そして進化し、新たな可能性の果てを求めよ』
水辺の生命は、やがて完全に空気を呼吸できる肺と、水中よりも地上を歩くに適した四肢を発達させるに至り、徐々に、広大な大地全体に生活の場を拡げていった。
水中でまとっていた鱗は、やがて太陽光や敵の攻撃から身を守るための強靭な皮膚にかわっていった。浮力に支えられていた水中では必要のなかった、重力に抗して身体を支え、敏速な動きのできる骨格と筋肉が発達していった。さまざまな生物が、枝分かれし、また枝分かれして増えていった。地上でも、また水中でも、彼は精力的にあらゆる形態を試み、そこに秘められた可能性を考察した。
目も当てられない失敗に終わることは数えきれなかった。幾度もの大絶滅が地上の生命を襲い、それを生き延びたわずかな命の種が、また次の段階を模索するよう求められた。
一時地上を席巻し、のちに『恐竜』と呼ばれることになる爬虫類種族は多少期待が持てるかに見えたが、巨大化しすぎた身体と、それを支えるために生存本能に特化する形で発達した脳は、彼の求めるものとは違っていた。彼は失望し、隕石の雨を降らせて恐竜たちを地上から消し去った。ここで生き残るものに、また次の期待がかけられた。
隕石と、それに続く環境の激変を生き抜いたのは、巨大な恐竜たちとはまったく対照的な、毛の生えたちっぽけな生き物だった。哺乳類。恐竜たちの卵や排泄物を食べ、植物の葉や根っこをかじって生きていたそれらは、消え失せたかつての地上の王者に成り代わり、徐々に

進化の階段を昇りはじめた。

ふたたび、数億年の時間が経過した。

草原にも森林にも沼沢地にも、さまざまな姿と能力を持った哺乳類種族の群れが見られた。植物を食べて生きる草食獣もいれば、それらを捕らえて食うことによってエネルギーを取る肉食獣もいた。また、捕食者のうろつく草原を避けて森林の樹上生活を選び、器用な手足と尾を使って、高い木の上を自在に移動する種族もいた。

彼はこの樹上生活者に目をつけた。木をつかむことによって進化した器用な手先と、高い木の上で生活するためのバランス感覚を持ち、危険を察知する敏感な頭脳、ほとんどどんな食べ物からでもエネルギーを取り入れられる雑食性は、この先大きく進化を遂げるだけの、伸びしろを秘めているように思われた。

彼はこの樹上生活者に徐々に手を加え、地上に降りるように仕向けさせた。一部は樹上や森に残ったが、別の一部のものはそれとはわからない衝動に突き動かされ、またはそれまで住んでいた森を災害や捕食者に追われて、敵の多い草原に降り立った。

身を隠すところも食物も豊富にあった森とは違って、草原は危険な場所だった。敵は多く、逃れる場所は少ない。食糧を手に入れるにはどんなものでも利用し、接近する危険をいち早く察知できなければたちまち死が待っている。

樹木が恵んでくれていた涼しい木陰と水はなくなり、照りつける太陽の下、哺乳類たちは生きるために群れを作り、互いにコミュニケートし、協力しあうことを身につけねばならな

かった。道具の使用が生まれ、意志を伝えるためのきまった身振りや発声のパターンが、近接する群れに伝播していった。やがてそれは原始的な言語となり、単なる棒や石ころだった道具は、削られ、割られ、磨がれて、その機能を増した。

炎を利用することは、この新しい種族を大きく飛躍させた。それまで夜闇にひそんで接近してきた肉食獣から、炎の光と熱が身を守ってくれた。また、炎で食物を焼いたり煮炊きすることによって、新たな道具の文化も芽生えた。はじめ、樹上に残った同類たちと大差なかった彼らの脳は、こうした生活環境の変化とそれにともなう生活の変動により、しだいに活動の範囲を広げ、発達の度を増していった。

ここでもまた、多彩な進化と淘汰の実験が繰り返された。最終的にホモ・サピエンスと呼ばれることになる、爬虫類から受け継いだ大脳旧皮質を、大きく複雑な新皮質によって覆った一種族が、生存競争の勝者となった。道具を使い、会話し、部族を作って協力して食糧を集める生活を手に入れた彼らは、徐々にその知能を発達させながら、世界中に殖え拡がっていった。

集落が生まれ、成長し、やがて巨大な都市が各地に生まれた。いくつもの異なる文明が発達して、各地にそれぞれ独自の城を築いた。単なるコミュニケートと呪術的な手段だった言語や歌、手真似や絵画は、固有の文化となって花開いた。自分たちを作ったもの、この自然と実りを与えてくれるもの、われらが〈神〉に捧げる祈りが、歌が、芸術が、あらゆる場所できらめく翼を広げた。

だが、〈神〉と呼ばれることになった高位次元からの漂流者にとって、これらはまったく予想外だった。

彼が求めていたのは、自分の身を再び高位次元へ押し上げるための推力となる補助演算素子であって、自分に〈祈り〉などという奇妙な概念を押しつけてくるようなものではなかった。〈歌〉も〈詩〉も〈舞踏〉も、自分に捧げられたものとは判らず、たとえそうと理解したところで、それがなにを意味しているのかは彼の意識を超えていた。

この希薄な情報空間において、少しでも多く演算を行うためには対象となるデータが欠かせない。それなのに、このおそろしく数を増やしてしまった生体素子たちは、そのデータすら、いちいち奇妙なゆがみを付加し、しかも、同一のものに対してすら、相互矛盾した観測結果を返してくる。まるで各素子が違う処理アルゴリズムを持っているかのように、どれ一つとして同じ結果がかえってくることがない。

彼は混乱した。『混乱』という言葉が含むその万倍、億倍の高みにおいて、混乱した。

素子たちの、発達した大脳皮質の結果として、そこに『意識』というものが創発されていたことに、彼は気づいていなかった。意識、自我、感情、といったものは、純粋な高位情報集積体である彼にとって、あまりにも低次元で不安定なデータだった。

だが、地上に拡がった〈神〉の拡張素子、生ける増設メモリたちは、その自意識、高い知能と自我の獲得をこそ、自分たちを動物から分ける悟性の証拠とし、それが与えられた自分たちを、〈神〉の愛し子と確信した。〈神〉に捧げられる祈りはますます熱烈なものとなり、

〈神〉の名において、膨大な量の思索と祈りと歓喜が、血と恐怖と死が、意味不明なデータの海に溺れかけている彼のもとに、とぎれることなく注ぎこまれた。

さらに、時は流れた。自らを『人間（ヒューマン）』と呼び、すべての生き物の最高峰に立つものと考えた素子たちは、さらに精神活動を拡大していった。

暗黒の中世を抜け、輝けるルネサンスが、そして反動の大弾圧時代が、すぎていった。聖職者は祈り、物質文明に冒されていく人間を嘆いて、警告の書をしたためた。

機械が発達し、改良され、さらに改良を繰り返されて大きくなっていった。文明はますます成長した。科学者や文学者、哲学者たちは研究と思索を繰り返し、自分たちとこの世界が造られた意味を、事実と思想の両面から、割り出そうとした。その精神活動こそが、創造主をさらに苦しめることになるとはみじんも気づかずに。

戦争。そしてまた、戦争。繰り返される歴史は血の歴史でもあった。時代が先へ進むごとに、人間の精神生活は複雑化し、自我は強さを求め、その認識にかかる感情と自我のヴェールはますます分厚さを増した。それは〈神〉のもとへ送られる情報に、ますます夾雑物が増え、不正確さを増していくことを意味した。

もっと早期に気づいていれば、彼はこの重大な失敗作である『人間』を地上から一掃し、もっと簡素で、『意識』などというやっかいなバグを持たない拡張素子を、新た作り出していただろう。だが、もはやその時期は過ぎていた。『人間』は増えすぎ、その強力なパワーは〈神〉の新陳代謝であり、存在の核であり、生命そのものである、情報の演算処理にまで、

影響をおよぼし始めていた。
彼が狂いはじめたのがいつだったのか、誰にも正確な時期を言うことはできない。彼、〈神〉自身でさえ、自分の取りこむ情報に『感情』『自我』などという毒が混入されていることを知るすべがなかったのだ。
それは彼の属していた世界では概念としてさえ存在しないものであり、したがって、彼自身にも認識することはできなかった。それとは知らぬままに、彼は人の心という毒の混入された『情報』を受け取り、それを解析しようとあがいた。しかし、もとより『心』とは何かを識らない彼に、そんなことができようはずもなかった。
解析不能のデータは彼の情報的存在にまつわりつき、降りつもり、悪性の腫瘍のようにどこまでも増殖していった。外部素子の演算能力でこの次元を脱出するどころか、彼のかかえる情報の重さは、ますます彼を、この低次元世界の底へと落ちこませた。
巨大すぎるデータを入力されたコンピュータの動作が遅くなり、誤動作が増え、時にはフリーズを起こすように、彼は狂っていった。彼自身はけっしてそれと意識することはなかったが、地球にわきかえる生体素子、『人間』がたえまなく送りつづける意味不明なデータが、彼の動作をいっそう重くし、高みへ舞い上がるべき身体を、解析不能データの贅肉で縛りつけた。
人間が動脈硬化を起こすように、彼のデータ代謝にも、不穏な滞りが生じた。それまで太陽の重力ゲートの奥に身を潜めていた彼は、ついに我が身の重さに耐えきれなくなり、しだ

いに、物質世界のほうへと、落下をはじめた……。

キュヴィエ症候群。

それは、彼、〈神〉が物質世界すれすれにまで落下し、彼が今まで次元の薄板をへだてた場所から送っていた操作の手が、太陽の発する電磁波という形で漏れ出た結果だった。

〈神〉にも自己保存本能はある。それは生命的と言える存在において普遍の本能である。それに従って、彼は、失敗作である『人間』を、手当たりしだいに完全な情報素子へと変換しはじめたのだ。

それまでの、人間の脳を素子として利用するだけでは、とうてい追いつかなかった。生存本能に駆り立てられるまま、彼は、太陽からの電磁波を浴びたありとあらゆる有機物を、自らと同じ属性を持つ情報素子に変換していった。

ヒトはもちろんのこと、動物や植物、それまで彼が素子として使用していなかったものも、この変換を免れることはできなかった。ガラスか水晶のように透き通った、高度な情報処理能力を持つ拡張素子。これらは自我も意識も感情も、不要な夾雑物はなにひとつなく、ただデータのみを彼に送り返してくる。

人間の生体脳のみを利用していたときより効率のよい変換。その全身を情報素子化し、堆積した不明データ群を解消すること。彼の目的は、ただそれに尽きた。

しかし、これもまた、厄介な『感情』をかき立てるもととなることを、彼は予測しなかった。とつぜん現れた、生物が結晶化する奇病、キュヴィエ症候群の猖獗は、数十億人にふく

れあがっていた人間たちを、恐怖のどん底にたたきこんだ。
〈神〉にむかって、その祈りこそがいよいよ〈神〉を狂わせることも知らず、おびただしい祈りと呪いが、懇願が、つきつけられた。結晶化する肉体に恐怖し、狂気に追いこまれていく人間の精神が、ただでさえ弱った〈神〉を、酸のように灼いた。キュヴィエ症候群によって引き起こされた人間の新たなる精神活動、混乱と恐怖、策謀と戦争、狂気は、結晶化素子によって得られた処理能力をはるかに上回る勢いで、増大していった。
そしてついに、あの日が訪れた。五年前の夜、〈ＥＧＧ〉。テクノシャーマン・セラフィータ、そして、共感能力者・穂村一幾。
感情も、自我も持たず、情報世界と物質世界を気ままに行き来するテクノシャーマンは、そのまま彼、〈神〉が身を置く次元につながるパイプだった。だからこそ、人間たちには彼女が理解できず、彼女もまた人間たちを理解しなかった。天上の〈神〉の真正なる写し身、〈女神〉。テクノシャーマン。
だが、穂村一幾はそれを許さなかった。人類に下された過酷な運命の意味を問い、この苦悶、この苦痛、人間たちが呻吟するありとあらゆるどす黒い感情のすべてを、その持ちうる最大の共感能力をもって、ほとんど生のかたちで、〈神〉に叩きこんだ。テクノシャーマンという空の〈器〉、天へと開かれた導管を伝って。
その一撃は〈器〉であるテクノシャーマンをこなごなに打ち砕き、同時に、かろうじて残っていた〈神〉の自己コントロールを、破壊した。

その瞬間、〈神〉は狂った。
完全に。

狂気に陥った〈神〉の自己保存本能は、最大のパワーで暴走を開始した。落下する高位存在それ自体の圧力に、次元間をへだてる薄い膜は強烈に圧迫された。三次元世界を支配する物理法則が軋み、重力が悲鳴をあげた。光のスペクトルが変化を遂げ、青く輝いていた空は黄色くぎらつく毒々しい空間に変わり、太陽は光り輝く星から、呪わしげにどろりと開いた暗黒の穴に変わった。
一気に降りそそいだ大量の電磁波が、それを受ける位置にいたあらゆる有機体を瞬間的に情報素子に変換した。すなわち、それは太陽光を浴びたものすべての死を意味した。
ごく少数の人間を残して、ほとんどの人類がこの朝に死んでいった。だが、〈神〉の暴走は止まらなかった。長いあいだ身に受けつづけてきた『人間』の『感情』が、彼の認識機構自体をむしばんでいた。
狂気にかられて、彼は、比喩的な『手』の届く場所にある、すべてのものを結晶化し、やみくもに拡張素子を集めようとした。もはや、それが役に立つかどうかなど問題ではなかった。なんのためにそうするかという目的さえ、彼は忘れ去っていた。高位次元から転落してきた自らをも、そこへ還らねばならないという意志すらも、穂村一幾の生命をかけた呪詛の

一撃だ、暗黒の彼方へ追いやっていた。
そして生き残った少数の人類は、少なくなればなっただけ、さらに強烈な『自我』や『感情』を振りまいて、〈神〉の狂気に拍車をかけた。人間もまた生命体のひとつとして、自己保存本能に追いつめられた時、生命への執着とそれにともなう精神活動を強化する。地球に生命が満ちあふれていたときよりもはるかに複雑、かつ強烈な『感情』と『祈り』が〈神〉にふりかかった。狂える〈神〉は『苦痛』に身をよじり、その未知の感覚とデータによって、さらに狂気の淵へとじりじりと滑り落ちていった。
過重データは、もはや限界に近かった。膨れあがった〈神〉は、毒汁したたる腐った果実のようなものだった。いつ枝を離れ、地上に落ちて潰れるかわからない。
だがそれは、現実の腐った果実が地面に落ちて潰れるような、ささやかなものではない。三次元世界全体を、ひいては、それにつながる上位次元すべてを巻きこむカタストロフ、物質も情報もなにもかもを呑みこむ、宇宙的メルトダウンとなるはずだ。
逃げる場所などどこにもない。宇宙全体が、狂った〈神〉の墜落によって最後を迎えるのだ。人間の祈りに、愛に、呪いによって狂わされた〈神〉は、自らが還るべき世界までも破壊しつつ、どこまでも次元を突き抜けて、堕ちていくだろう……
高く低く、どこか古代の歌謡を謡うかのように続いた物語は、呟くような一言のあとに、

小さな息をついて終わった。紙のこすれるような吐息の音が、いつまでも静寂の中に漂っているように思われた。
「……嘘だ」口を開いたのはロアルドだった。
「そんな話は嘘に決まっている。俺たちが——人間が——〈神〉の失敗作だと？　俺たち自身の存在が、〈神〉を狂わせてきたというのか？　人類が築いてきた文化も、芸術も、文明も、そのすべてが、キュヴィエ症候群を引き起こす原因だったと、おまえは言うのか？」
「今さら嘘をついても始まらない。あなたもわかっているはずだわ」長い話を終えて、セラは疲れた目をあげた。「わたしが嘘を言う理由など、あるかしら。いえ、もしわたしの話が嘘だとしても、キュヴィエ症候群によって結晶化した細胞がきわめて高度な演算能力を持つことはどう説明するのかしら。それこそ、〈神〉が人類を、自らの拡張ユニットとして育成した証ではないの」
ロアルドは喉を絞められたような声をたてた。
「本来、人類は〈神〉の一部として取りこまれる予定だった」セラは続けて、「でも、発達したシナプスのどこかで『意識』がめざめたとき、人間は〈神〉と同一化する資格を失った。自我を持つものは、〈神〉の巨大なデータフローを受けることに耐えられない。それができるのはかつてのわたしのように、自我を持たない、からっぽの〈器〉だけ。
でも、わたしもまた、ジャンクヤードに下りて〈エンブリオン〉のみんなと出会うことで、自分を知り、感情を知り、自我にめざめてしまった。

器質的なものはいまでも変わっていないから、〈神〉の存在を感じ、かつて知っていたことを人間の言葉にして語ることはできる。でも、それだけ。ふたたび〈神〉にアクセスすることができても、彼はもう、わたしの語る言葉を理解しないでしょう。〈神〉は狂ってしまった。狂える〈神〉に、人間の言葉は通用しないわ。人間になってしまった、〈女神〉の言葉なんて―

「認められるものか！」

ロアルドは怒鳴り、立ちあがると、振りあげた杖を壁際に積みあげられたコンピュータの筐体に叩きつけた。派手な音が響き、むき出しのCPUやメモリモジュールがささったマザーボードが雪崩のように降ってきた。よろめきながら歩いていって、板状のメモリモジュールを引き抜くと、ロアルドは震える手でそれをセラの鼻先に突きつけた。

「認めない」囁くように彼は言った。「俺たちがこいつと同じだなどと。〈神〉のための増設メモリ、それが人類の作られた意味だなどと。しかも、俺たちの育てた意識が、この心が、『俺』という魂が、キュヴィエ症候群を引き起こすもとになっていたなどと――」

セラは顔をそむけた。ロアルドは腹の奥からすすり泣くような声をあげ、メモリモジュールを床に投げつけ、踏みにじった。

軽い音をたてて、薄板は割れた。泣きながら何度も踏みつけるロアルドの顔は、小児のようにゆがんでいた。アルジラとシエロはただ息をつめ、うなだれてぐったりと倒れかかるセラを支えて、しきりにその背を撫でていた。

遠慮がちなノックの音がした。ロアルドはまだ狂ったようにメモリを踏みつけていたが、冷水を浴びたようにびくっとし、動揺の収まらない声で言った。
「なんだ」
「リーダー。大変です」外からの声は混乱していた。「〈ザ・シティ〉が、消えました」
「消えた？」シエロとアルジラが声を揃えた。
ロアルドはいきなり腑抜けたようになってよろよろと後ずさり、椅子にぶつかってどすんと腰を落とした。
「消えたって、どういうこと？」代わりにアルジラがきつい声で問い返した。「あの大きな都市が、いきなり地上から消えたっていうの？」
「そ、そうです。その通りなんです」ドアの向こうの声が揺れた。「夜間哨戒班が、地上の偵察をしていたとき、〈ザ・シティ〉の方向に大きな光が広がるのを見たそうです。爆発やそういうものじゃなく、ただ、見ているだけで目が灼けそうな、眩しい白い光が広がるのを。それで、いったい何が起こったのか、調べようとしたら、あの―」
「ヒートだ」
新しい声がした。鋭く息を呑む音が聞こえ、あわてて逃げていく足音がバタバタと遠ざかっていった。
ドアが開き、そこに、碧の目を暗く翳らせ、そげた頬をいっそう青白くした長身の男が、いつになくだらしない姿勢で寄りかかっていた。トレードマークのフードは片側にずり落ち、

碧色の髪が乱れている。
「ゲイル！」驚いたシエロが立ちあがった。「もう、いいのかよ。ていうか、あんた、その顔――」
「ニューヨークのネット内の分身が、〈ザ・シティ〉からの通信の途絶を伝えてきた」声だけは淡々と、ゲイルは言った。「同時に、ニューヨーク側からの観測結果も傍受した。本日午前二時十三分、〈ザ・シティ〉は、内部に出現した超高温の熱源によって、約三十秒間であとかたもなく蒸発した」
「蒸発……？」しわがれた声でロアルドが言った。のろのろとゲイルに向けた目は、血走っていた。「それが、ヒートの……あんたたちの仲間のやったことだと？」
「あれはわれわれの仲間などではない！」
部屋がびりびりと振動した。セラは小さな悲鳴をあげて耳をふさぎ、アルジラが守るように両腕を少女の肩にまわした。セラを抱きしめながらゲイルに向けた目は、まるで、未知の人物を見るかのように疑念と警戒の色を浮かべていた。
「ゲイル、あんた……？」
「あれだけの熱量を発することができる者は、この地上に一人しかいない。『パーフェクト・アスラ』。〈シヴァ〉」
ふたたび平静な声にもどってゲイルは言った。だが、その下には、今にも切れそうな糸の上で綱渡りをしているあやうさがあった。

「私は奴を追う。あれはリーダーを殺した反逆者であり、〈エンブリオン〉の裏切り者だ。生かしておくことはできない。他の、何がどうなろうとも」
「ま、待て」しばし茫然としていたロアルドが、〈ローカパーラ〉の指導者としての立場を思い出したように立ちあがった。「〈シヴァ〉は――そいつは、今、どこにいる？　どこに向かっているんだ。感知しているのか？　追うといっても、当てがなければ」
「こちらに接近している。ニューヨーク市をめざしているようだ」あっさりとゲイルは答えた。「次はあそこを灼くつもりなのだろう。あの都市には〈EGG〉への遠隔ゲートがある。セラがこちらにいる今、〈EGG〉を利用して何かされることを防ぐには、あの都市ごと蒸発させるのがもっとも手っとり早い」
「だめ！」
セラが叫んで起き上がりかけ、バランスを崩してシーツに手をついた。シエロがあわてて支える。
「ちょ、セラ、急に動いちゃダメだってば」
「だめよ。そんなことをしちゃいけない」シエロの手から逃れようとするかのようにセラは身悶えた。「あそこに〈EGG〉へのゲートがあるのは本当よ。でも、それを壊すために、ニューヨーク全体を消すなんて、そんなことしちゃいけない。あそこにはたくさんの人がいるのよ、〈協会〉の支部があって、市民だって」
「あの男はすでに〈ザ・シティ〉を地上から消している。この地球上に残った最大の都市

を一冷厳にゲイルは言い捨てた。一その時点で、奴が人間の命など考慮に入れていないことはあきらかだ。自らの存在を誇示するために、都市ひとつを消滅させたのだ。セラがこちらにいる以上、われわれが〈EGG〉へのゲートの存在するニューヨークを目指すことを予測しているだろう。これは、われわれへの挑戦であると私は確信する。あの男は〈ザ・シティ〉の滅亡を挑戦状として叩きつけ、ニューヨークへセラとわれわれを集合させて、都市ごと蒸発させるという、自らの意図を誇示しているのだ」
耳をふさいでセラははげしくかぶりを振った。閉じた瞼から新たな涙が頬をぬらした。
「あんたはそういうけど、ゲイル」アルジラが口をはさんだ。眉が苦しげにひそめられ、唇が見えないほど細く引きしめられている。「本当にヒートがそう考えているとどうしてわかるの。あたしたちやセラが、ニューヨークに行かないことを選ぶ可能性だって」
「その場合、奴は同じことを続けるだろう。われわれが出ていくまで。あるいはこの地下コロニーへ、直接襲来することもありうる」
セラとシエロが同時に息をのんだ。アルジラの眉がいっそう辛そうに寄せられた。
「そんなことになったら……」ロアルドの額に脂汗が浮かぶ。「そんなことになったら、コロニーは終わりだ。〈アルダー〉と〈ヴァルナ〉の二体を撃破したパーフェクト・アスラが、敵となって侵入してきたら——パーフェクト・アスラ同士の戦闘がここで起こるだけでも、コロニーは二度と立ち上がれなくなる。〈ザ・シティ〉を灼いたように、〈シヴァ〉は地下もあとかたなく焼きつくすだろう。〈ASURA〉であるあんたたちはもしかしたら生き残

れるかもしれない、だが、われわれ人間は終わりだ」
「ヒートはニューヨークに向かっているのね」念を押すようにセラが言った。
ゲイルは無関心な視線をやり、そっけなくうなずいた。小さくうなずき返すと、セラはシエロとアルジラに向き直って、しゃんと背筋を伸ばした。
「アルジラ、シエロ。わたしを、ニューヨークに連れてって」
「セラ！」
「セラ、駄目だよ、まだ身体だってちゃんとしてないし、ヒートは——」
「だからこそ、行かなくちゃならないの。わたしは」すがるような調子でセラは続けた。
「わたしのためにたくさんの人の命が失われてきたわ。ジャンクヤードのみんながあんな死に方をさせられたのだって、もとはといえばわたしのせい。だからわたしは、これ以上、人が死なないようにしなくちゃいけない。わたしはみんなを助けたいの、その思いがこの〈わたし〉を作ったの。以前の〈女神〉じゃない、人間の〈セラフィータ〉を。
これ以上、人を死なせないためにも、わたしはニューヨークに行って、ヒートの前に出なきゃいけない。そして、訊きたいの——」
セラは声をとぎらせ、再びうつむいた。涙がシーツにしみを作り、両手がぎゅっと上掛けを握りしめた。
「どうして、サーフを殺したのか。どうして……みんなを殺そうとするのか。彼の心が、わたしには見えない。わたしの知ってる彼は、あんな人じゃない。こんなことをするには、絶

対になにか理由があるはず。それを訊きたいの。たとえ、殺されても――」
「セラを殺させるなんて、オレたちがさせるわけないだろ！」
「ありがとう、シエロ」叫んでしがみついたシエロの腕を撫でて、セラは泣き笑いのような表情を浮かべた。「みんなには、また危険なことをさせてしまうのね。わたしのために戦ってほしいなんて、願ったこともないのに。みんなを〈楽園〉に連れていく鍵だなんて、そう約束されていたはずなのにね、わたし」
「降りかかる火の粉は払いのけるだけよ、セラ。あなたが気にすることじゃない」アルジラが言い、すばやくまばたいて濡れた瞳を隠した。「わかったわ。ニューヨークに向かいましょう。ゲイル、確認しておくけれど、あんたの予測は正しいのよね？」
「ほぼ百パーセントに近い確率で」
「わかった、いいわ。ロアルド」まだ魂をぬかれたように座りこんでいるロアルドにむかってアルジラは首をめぐらせた。「あんたは念のために、地下コロニーの人たちにも防備を固めさせるようにして。もしかしてヒートが途中で気を変えて、手っ取り早くこっちへ向かってきたらどうしようもない。戦闘になったらできるかぎり距離はとるようにするけど、〈シヴァ〉と相対したら、ほかのことに気を配ってる余裕は、たぶんなくなる」
「奴がこっちへ来るっていうのか？」
「可能性の問題よ。対策は、しておいたほうがいいってだけ」
椅子から転げ落ちかけたロアルドに、アルジラは応じた。考えはすでにほかのことに移っ

ており、いくぶん上の空に見えた。
しばし人形のように手足を投げ出していたのち、ロアルドは、もがくようにして椅子を離れ、杖を引きよせてふらふらと立ち上がった。脚の下で砕けたメモリモジュールの破片がきしんだが、もはやそれにも関心はないようだった。よろめきがちに急いで部屋を出て行こうとするその背中を、ゲイルが呼び止めた。
「ロアルド・セス」
ロアルドはゲイルのそばを通り過ぎかけて足を止めた。翳に沈んだ碧の瞳に見据えられた瞬間、その顔に、原始的ともいえるほどのはげしい恐怖が走った。
「おまえたちが〈シヴァ〉に対して防備を固めるのは勝手だ。それに関して私は賛成も反対もしない。無駄であるかどうかの判断も下さない。私の関心はそこにはない。ただし──」
その場で麻痺したように立ちつくすロアルドを、〈ヴァーユ〉を宿した妖しく輝く双眸が貫いた。
「〈シヴァ〉は、私が殺す」低く、ゲイルは宣言した。〈ヴァーユ〉の怒りがこだまする声で。
「手出しは許さない。〈アルダー〉の時のような介入は無用だ。もしすれば、私は躊躇なく、おまえたちを障害物として排除する。おまえたち人間がどうなろうが、今の私には、まったく関心がない」
セラが口を押さえた。アルジラがぞっとしたように、

「ゲイル、何を」
「話はそれだけだ。あの男は私の獲物だ。誰にも渡さない。誰にも」
ゲイルはすべるように戸口から離れ、姿を消した。足音もなく、ただ気配だけが、砂の下をすべる毒蛇のように廊下を遠ざかっていった。
ロアルドはゲイルの一瞥に凍らされたかのようにその場で釘付けになっていた。アルジラも口を開いたまま愕然としており、シエロはセラを抱いたまま固まっている。
「セラ」押し殺した声でシエロが呟いた。「オレ、なんかゲイルが——あいつが、怖い」
セラは答えなかった。彼女は皺になった上掛けに目を落とし、見えない重荷に耐えるかのように、両肩をこわばらせ、握った拳と、白いうなじを細かく震わせていた。

第六章

きみはその右脚が左脚と違うほどにも私と異なるわけではないが、私たちを結び合わせるのは、**怪物を産み出す——理性の睡り**なのである。

バタイユ『宗教の理論』

1

「セラ?」
着替えを終えて、カーテンの陰からセラが出てきたとき、アルジラは驚いたように目を瞠った。
「あなた、どうしたの、その服。〈エンブリオン〉のスーツは、ジャンクヤードといっしょ

「〈女神〉の力は、今でもちょっとだけなら使えるのよ、わたし」
　ほほえんで、セラは戦闘スーツの袖をひっぱった。細い身体には重たげに見えるプロテクター付きのカーキのジャケット、両肩のオレンジのマーキング、スリット入りのスカートとスパッツにブーツ。それは、ジャンクヤードでセラが身につけていた〈エンブリオン〉構成員そのままのスタイルだった。
「記憶データから物品を再生するくらいは簡単にできるの。わたしは今でも〈エンブリオン〉のセラ、生まれたばかりのわたしを、みんながそう呼んでくれたから。だからわたしも、この服を着るの。いけないかしら」
「とんでもない、嬉しいわ。いいえ、喜んじゃいけないのかしら」セラを抱き寄せたアルジラの瞳は、喜びと悲哀の入りまじった複雑な色に翳っていた。「あなたがその服を身につけるってことは、またあなたを、戦いに巻きこんでしまうっていうことだものね。……ねえセラ、本当にニューヨークへ行くつもりなの？　ヒートはきっと、あそこであたしたちを一網打尽にするつもりよ。たぶん、あなたも」
「そうよ。だから、会いに行くの。さっきも言ったように」心配そうなアルジラの頬を撫でて、セラは力づけるようにうなずいてみせた。「わたしには、ヒートがサーフを、〈エンブリオン〉を裏切るなんて、どうしても思えない。もしそうしたのなら、きっと深い理由があるはずよ。わたしはそれを訊きたいの、そして、もし解決することができるなら、そうして

あげたい。たとえそれが、わたしを殺すことであっても」
「何を言うの、セラ!」
「わたしはたくさんの人の生命を踏みつけにして生まれてきたのよ、アルジラ」
セラは笑ったが、その笑みは無理に浮かべたもののようだった。薄いガラスのように笑みは砕け、泣き笑いのような表情に変わった。
「だからわたしが今ここにいるのは、その償いをするためだと思うの。サーフはわたしを救い出すために死んでしまった。それだけでも、わたしがみんなに償うには、十分すぎる理由だわ。いいえ、待って」口を開きかけたアルジラを手振りで止める。「何を言いたいのかはわかるわ。『そんなことをしてもサーフは喜ばない』って。たぶんわたしも、そうだと思う。でも、サーフを犠牲にした上にわたしの今の命があるのなら、できるだけ有効に使わなくてはいけないわ。ゲイルならきっとそう言うでしょう。サーフには、いつかもし会えたらうんと謝る。だからお願い、今は、わたしの思い通りにさせて」
ひたむきな目で見上げる少女に視線を合わせて、アルジラはしばらくまばたきもせずにいた。
「わかったわ」やがて、ふっと息をついて、小さく肩をすくめた。「でも、あなたを全力で守るくらいはさせてね。あなたがいやだと言っても、守るわよ。忘れないで、サーフはあたしたちのリーダーだったの。そして彼が最後に出した命令が、あなたを救い出して、守ることと。たとえいなくなったって、あたしたちのリーダーはサーフだけ。リーダー命令を無視し

え、なんてことには、まさかなったと言わないでしょう？　立派な〈エンブリオン〉の構成員なら、そうあるはずよ。了解？」
「……了解」泣き笑いの顔をくしゃりとゆがめて、セラは小さく敬礼した。
アルジラは笑い返して同じく敬礼し、セラの肩を軽く二度叩いて、抱くようにしながらドアを開けた。外で待っていたシエロが飛び上がるように立って、〈エンブリオン〉のスーツに身を固めたセラの姿に目を丸くした。
「うわっ！　なにそれセラ、どこから持ってきたのさ？　そのスーツ、もうオレたちの着てるのしか残ってないと思ってた」
「だって、シエロが見立ててくれた服だもの」明るく笑って、つま先でセラはくるりと回ってみせた。「どう？　わたしまだ、似合ってる？」
「似合ってる、すんげえ似合ってるよ！」両手で握りこぶしを作ってシエロは力説した。
「ありがとう」
セラは笑い、シエロは不意に居心地が悪くなったように、頬を染めて視線をそらし、口の中でもごもごと何か呟いた。アルジラは口を押さえて笑いを隠し、ふと気づいたように、頭を上げて周囲を見回した。
「ところで、ゲイルとロアルドは？　ニューヨーク行きに関して、また何か作戦会議でもしてるの？」
「さあ、オレ知らないけど。ゲイルとは昨日のあれきり会ってないし、ロアルドのおっさん

は〈ローカパーラ〉の指揮をとるのに忙しいみたいだし……あれ、なんの騒ぎだ」
ようやく気づいたというように、シエロはけげんな顔をして首をのばした。複雑に入り組んだ地下コロニーの上のほうから、かすかにいくつもの人声がこだましてくる。口調は荒く、かなり口汚い言葉も聞き取れた。……二層分は離れているはずのここまで届いてくるということは、かなりの騒ぎになっているはずだ。三人は顔を見合わせた。
「何かあったのかしら」
「待ってて。オレ、ちょっと見てくる」
シエロが敏捷に走り出そうとしたとき、「そこにいたのか！」と上の方から声がした。
通路の行く手にあった狭い階段を、杖を鳴らしながらロアルドが慌ただしく下りてくるところだった。三人が走り寄ると、ロアルドは手すりにつかまって身を支え、杖を床に突き立てるようにしてぜいぜいと喉を鳴らした。
「なんなの、あの騒ぎ。なんだか不穏な感じね」
「〈ザ・シティ〉の消滅の件で、コロニー住民がパニックに陥ってる」
ようやく声が出せるようになって、吐き出すようにロアルドは言った。
「でも、〈ザ・シティ〉は〈協会〉の中央都市だったんだから、ここの人たちからしたら、こう言っちゃなんだけど安心するほうなんじゃ」
「違うんだ」ロアルドは手すりを摑んで呼吸を整え、まっすぐにセラを見つめた。「皆は、あんたがあれをやったと思ってるんだ」

アルジラとシエロが同時に憤慨と否定の声をあげた。セラは一瞬にして蒼白になり、ぎゅっとジケットの胸元をつかんだ。
「わたしが……？」
「あんたは〈ザ・シティ〉からここへ連れてこられた」早口にロアルドは言った。「皆はあんたが用済みになった〈ザ・シティ〉をさっさと地上から消去しちまったもんだと思ってるんだ。気の毒だが、今もあんたは、ここの住人のほとんどにとって〈協会〉の悪徳の象徴で、恐ろしい〈魔女〉なんだよ」
「なんであんたが止めないのよ。ここのリーダーなんでしょ」
「止めようとしたさ！」ロアルドは怒鳴り返した。「テクノシャーマンは皆が考えているような魔女じゃない、落ちついて話を聞いてくれってな。だが、パニックに陥った群衆は怪物と同じなんだ。話なんか通じない。説得したってあおり立ててるだけだ。ますますいきり立って、テクノシャーマンをこっちに引き渡せとわめいてる」
「通常のルートを使ってここを出るのは危険だ」
音もなく物陰から出現したゲイルに、アルジラがぎょっとした顔で身を引く。
「あんた、いたの、ゲイル」
ゲイルは無視してセラに視線を向け、
「ロアルドの言うとおりだ。コロニー住民は完全にセラを敵と見なしている。感情的になった人間に接触するのは危険だ。ロアルド、できるだけ一般人と接触せずに外へ出られるルー

トの指示を求める。セラを発見されるのは、セラに対してだけではなく、彼ら自身にとっても生命の危険がある」
「つまり……殺すってこと」シエロがおそるおそる口をはさんだ。
「障害物を除去するだけだ」
ゲイルは奇妙に透明な目でシエロを一瞥した。シエロは喉を鳴らして縮こまった。
「現在のわれわれの最優先の目的はニューヨークへ行き、〈シヴァ〉を撃破することだ。それ以外のことはすべて余計な事項でしかない。セラが攻撃されれば、おまえたちもたとえ相手が非戦闘員だとしても、戦わざるを得ないだろう。いらぬ時間と労力を、ここで割く理由はないと言っているのだ」
「今、部下にいつもは使ってない通路を見回らせて、うっかり誰かが入ってこないように入り口をバリケードで塞がせている」ロアルドがあわてて言った。「俺たちも住民とあんたたちが争いになるのは避けたい。テクノシャーマンを失うわけにはいかないしな。経路の確保が完了したら知らせるから、すまないが、それまで待機していてくれ」
「いいえ、待って。ロアルド」
セラは胸元からゆっくり手を放すと、まっすぐにロアルドを見た。血の気の失せた顔の中で、黒い瞳が強い輝きを放っていた。
「わたしが出て、みんなに話すわ。表へ連れていって。みんなの、集まっている前へ」
「だめよ、セラ！」

危険だと言っているのだが」ほとんど関心がなさそうにゲイルが言った。
セラはゲイルを振り向き、小さくうなずいて、わかってる、と呟いた。
「でも、みんなが言ってることは、確かに当たってるんだもの。キュヴィエ症候群自体はわたしの引き起こしたことじゃないけど、それをこんな風にひどくしたのは、やっぱりわたしのせいでもあるの。だから、わたしはそのことをみんなに謝らなきゃいけないわ。そして、みんながもう一度太陽の下で暮らせるように、なんとか頑張るって、だから待っててって、言うつもり」
「あんたは人間ってものを甘く見すぎてる、テクノシャーマン」
「わたしは誰よりも人間というものの実例を多く見てきてるのよ、〈ローカパーラ〉のロアルド。テクノシャーマンとして」
穏やかに少女に言い返され、ロアルドは言葉につまった。〈エンブリオン〉の戦闘スーツに身を包んだ小柄な少女はまっすぐに立ち、蒼白な顔色以外は動揺した気配も見せず、杖にすがって息を切らせている男の手を、安心させるように握りしめた。
「前は理解できなかったことが、今ならわかる。わたしには、彼らに会って話さなきゃならない義務があるの。お願い、ロアルド。彼らのところへ連れていって」
「……護衛は、つけさせてもらえるんだろうな」疲れたようにロアルドは言った。
セラは小さくうなずいて、任せます、と答えた。
「もちろん、あたしたちもいっしょに出るわよ」きっぱりとアルジラが言った。「セラを一

人で、そんな危険な場所に立たせるわけにはいかないわ」
「ええ。わかってる。でもね、わたしが本当に危ないと思ったとき以外、動かないでね、アルジラ。シエロも―
「えっ、なんで?」すでにやる気満々で両手に稲妻を走らせていたシエロは、たちまちふくれっ面になった。「騒いでる奴らの前に出て、セラの力を見せてやって、そんで、これ以上騒ぐようだったらオレたちが相手をするぜって、やってやるつもりだったのに―
「シエロの気持ちはうれしいわ。でも、そんなことをしたら、またあなたたちが悪魔扱いされてしまうでしょう」セラは電光の走るシエロの両手に触れて、火花を消した。「だから、できるだけわたしの後ろにいて、姿は見せないで。命にかかわるようなことが起こったときだけ、そっと守ってくれればいいから、それ以外の時は、なにが起こっても黙って見ていてね。アルジラも、お願い。今はわたしのいうことを聞いて―
「……反対しても、無駄なんでしょうね」すがるような目を向けられて、アルジラは頭を振り、ため息をついた。「賛成はしないわよ。でも、セラがどうしてもって言うなら、止めないわ。そのかわり、本当にあなたが危なくなったら、遠慮なく攻撃させてもらうからそのつもりでいてね。ロアルド、あんたもよ」
するどい視線を投げられて、ロアルドはあわてて頷いた。
「もちろんだ。できるかぎりテクノシャーマンに危険が及ばないように、俺たちがまず努力する。住民は、あんたたち〈ASURA〉についてはようやく警戒を解いたばかりなんだ。

これで関係が悪化するようなことがあれば、また話がややこしくなる」

「大丈夫よ、みんな。そんなに心配しないで」

元気づけるような笑みを見せて、セラは先に立ち、堂々と階段を昇っていった。ロアルドが腰につけた無線機に向かって何か早口にしゃべりながらあとを追う。話にほとんど加わらなかったゲイルが、すぐそばを影のようについていった。アルジラとシエロは顔を見合わせてたがいの目の中に心配の色を見て取り、競うように駆けだしていった。

〈ローカパーラ〉の現在の中枢を収めているのは、かつてはメトロの連絡駅に使用されていた施設だった。数段高くなった上層構造がコンクリートの柱で支えられ、奥が中枢部につながる通路になっている。その正面、以前は広場に面した商店の並ぶ、地下プロムナードだった場所は、今は手すりとゆがんだ骨組み少々を残して、ただのタイルと建材の棚のようになっている。

セラはそこへ出ていった。群衆が一瞬静まり、すぐに、それまでに倍する勢いで、どっと罵声を放ちはじめた。物理的な力に殴られたようにセラは上体を揺らしたが、すぐに立ちなおり、背筋をのばして手すりに手をかけた。

「魔女め！　よくものこのこと！」

松明が振り回され、火の粉が薄闇に散った。出てきたセラのほっそりした姿があまりにも

堂々としていたためか、気圧されたように口を閉ざすものも少数いたが、それもすぐに周囲の熱狂に押され、また足を踏み鳴らしてわめきはじめた。

「〈協会〉の魔女！　テクノシャーマン！　よくも俺たちを、こんなところに追いやりやがったな！　悪魔なんぞを操って、人間を狩りたてて――」

セラは片手をあげ、ゆっくりと、口を開いた。

「少しだけ、わたしの話を聞いてください。みなさん」

さして大きな声ではなく、拡声器なども使ってはいなかった。だがその声は不思議なほど澄んではっきりと、煮えたぎる群衆の熱を瞬時に冷ました。今にも建物に火を放たんばかりに松明を振り回し、ナイフをひらめかしていた男たちは、急に動きを止め、ぽかんと口を開けて壇上の少女の小さな姿を見つめた。

「わたしは、テクノシャーマン・セラフィータ。みなさんが言う、〈協会〉によって産み出された、〈神〉の巫子です」セラは続けた。「そのことに関して、否定する気はありません。わたしは〈協会〉の手によって作り出され、超コンピュータ〈ＥＧＧ〉の対人インタフェースとしてこの世に生を受けました。わたしの生まれたこと、そして、五年前に引き起こした事件のために、太陽が黒く変わり、人間が陽光の下で生きられなくなったこと――それらもすべて、事実です」

ふたたび波のように、非難の声が力を取りもどした。「魔女！」「悪魔の娘め！　〈協会〉の手先！」という罵声が交錯し、音を立てて何かが飛んだ。松明がセラの足もとに落ち

てはじけ、火の粉と熾火をまき散らした。
石がいくつも飛んできて、床といわず壁といわず雨のような音を立てた。数個の石がセラに当たり、そのうちひとつが、頬に命中した。セラは小さくあっと声をあげ、頬に手をあててよろめいたが、すぐに立ちなおり、昂然と背筋をのばした。後ろで控えていたアルジラやシエロがたまりかねて走り寄ろうとするのを、目顔でとどめる。
「おい、やめろ！　やめないか！」ロアルドの指揮する〈ローカパーラ〉の兵士たちが、懸命になって人々を押し返そうとしている。「あの娘がいれば、〈EGG〉を利用して〈協会〉に対抗できるかもしれないんだぞ。殺してしまってどうするんだ、その武器をしまえ！」
「そんなことは知るか。俺たちはあの魔女になにもかも奪われたんだ。家族も、家も、これまでの生活も。おまえこそ、あの〈協会〉の悪魔の味方をするつもりなのか？」
あちこちでもみ合いが起こり、周囲を巻きこんで拡大していった。ロアルドがよろめきながら人波の中に割って入り、「やめろ！　落ちつくんだ！」と声をからして怒鳴っている。最初は兵士に周囲を囲まれていたが、しだいに剝がされるように一人になり、人に押されて転んだ。大波のように揺れる群衆がその上にのしかかろうとする間一髪、駆けつけた兵士がリーダーを引っ張り出す。眼鏡がずり落ち、びっしょりと汗をかいたロアルドは、それでも「静かにしろ！　話を聞くんだ！」と叫んでいた。
「キュヴィエ症候群は彼女のせいじゃない。俺たちは〈神〉による失敗作にすぎない――単

なる不良品の、バグだらけの増設メモリにすぎないんだ！　だから、やめろ！　今さら彼女を責めたって、なにが変わるわけでもない……」

叫びながら、ロアルドは泣いていた。『人間であること』の価値、『人間であること』の意味を、完膚無きまでに否定された衝撃に、泣いていた。

これまで人間は〈神〉の愛し子であった。すべてのものは最高の被造物である人間のために〈神〉が創造したのだと考えられていた。

だが、現実は人間の存在そのものが〈神〉を狂わせる毒であり、〈神〉の意図とはまったく違った方向に進化させてしまった『感情』や『自我』を、それこそ自分たちが〈神〉にとって特別であり、万物の霊長たるべき証拠として、思い上がってきたのだ。

群衆から引き離されたロアルドは苦しげに座りこみ、顔を覆ってむせび泣いた。杖はどこかで失っていた。ズボンが引き裂かれ、結晶化した脚が膝のあたりまでむき出しになっている。それは不良品の証、狂える〈神〉が、期待に応えられなかった被造物をなんとか思う形に作り変えようとしている過程なのだ。その結晶化した脚こそが、本来人間のつとめるはずの、正しい役割と姿だったのだ。

「お願い、みんな、話を聞いて」

騒ぎは全体に拡大し、セラの方を見ているものさえほとんどいなくなっていた。お互いに争うことに夢中になって、本来の目的すら忘れかけている。〈ザ・シティ〉消滅の報が、彼らの思考力を完全に奪っていた。まるで今にも、〈ザ・シティ〉と同じように、この場所に

と消滅の運命が降りかかってくるのではないかという恐怖が、理性に霧をかけ、目前の相手にやみくもに掴みかかっていかせるのだった。セラはどうすることもできず、手すりにしがみつくようにして、必死になって声をしぼった。
「お願い、わたしのことならいくら責めてもいい、だけど、どうか――」
「これ以上は危険だわ」物陰で見ていたアルジラが囁く。「セラには悪いけど、あの子を連れてここは退きましょう。これじゃ、何を話したって、耳に入るわけないわ」
シエロも頷いた。ゲイルは何の反応もしなかったが、先に立ってセラの方へ向かいはじめた。気づいたセラが振り向き、首をはげしく横に振って、拒絶の意志を表した。
「駄目、駄目よ、わたしはちゃんと話をしなきゃいけないの。この人たちに謝らなきゃ、謝って、ちゃんと世界をもとに戻してみせるって、約束しなきゃ――」
ゲイルは意に介さず、無表情に手をのばしてセラを引き寄せようとした。セラは身をよじって、「いや！　いや！」と叫び、メッキの剝げた手すりに爪をたてて、その場から動くまいとした。
一発の銃声がこだました。
「静かにしねえか、てめえら！」
かん高い、幼い声が響いた。
全員が動きを止めた。広場全体でもみ合っていた大人たち、セラを抱き寄せようとしていた三人の〈ＡＳＵＲＡ〉、それに、セラ自身も。

「セ、セラ、あなた、撃たれてない？　怪我は？」
「い——いいえ。なんともないわ。音だけ。でも、誰が——あ」
　アルジラに抱かれて腰を落としたセラは、一人の痩せた少年が、動きを止めた群衆を押し分けるようにして、裸足で大股に広場を横切ってくるのを目に留めた。
　その手には、細い腕には無骨にすぎるほどの、ごつごつした拳銃が握られている。かすかな硝煙が、銃口からまだ薄く筋を引いていた。
「あの子、誰……？」
　群衆の最前列に出てくると、少年はくるりと向きを変えて仲間たちに向かって立った。垢じみたシャツと汚れきったズボンから、疥癬だらけの臑がむき出しになっている。骨と皮ばかりの姿はここに集まった群衆のほとんどと変わるところはなかったが、痩せた顔にひときわ大きな目は、強い輝きを放っていた。
「まったく、ぎゃあぎゃあぴいぴいうるせえんだよ。いい大人どもがさ」
　拳銃をだぶだぶのズボンの腰につっこむと、少年はぼさぼさの前髪を振り上げ、背伸びするようにして言い放った。
「話聞けってこの姉ちゃんが言ってんだろ？　ちったあ落ちついて話聞くくらいできねえのかよ、情けねえ。〈協会〉の兵隊が来たときは悲鳴あげて逃げ回るしかできなかったくせに、こんな細っこい女の子相手だったら、暴れまくってわめいて石投げんのかよ。あんたらそれでも大人かよ。男かよ、ええ？」

その子供の言うとおりだ」
　別の声、今度は落ちついた男の声がした。〈ローカパーラ〉の戦闘服を着た、がっしりした男が斜路を上がってきて、後ろ手に引きずってきたものを放り出した。怯えて縮みあがった顔の、破れたジャケットとぼろぼろのブーツをひきずった、若い男だった。
「あっちの柱の陰から、こいつであの娘を狙い撃ちしようとしてた」
　戦闘服をつけた男は親指で広場の一隅にある太いコンクリート柱を指すと、肩にかけていた古びたカービン銃を下ろす。錆の浮いた銃身と虫の食ったスリングに触れ、不快そうに唇を曲げた。
「占い上に手入れがなってないから当たるかどうかはわからないし、そもそも発射できるのかもあやしいが、それでも彼女を殺そうとしていたのに違いはない。しかも自分は物陰に隠れて、遠くから」
「そ、その娘は魔女だぞ！」逃げ腰になりながらも、虚勢を張るように若い男は声をあげた。「魔女を殺してなにが悪い？　〈協会〉はそいつを使って、キュヴィエ症候群や悪魔の兵隊で俺たちを殺しまわってたんだぞ！」
「それはおまえの知ってる事実なのか、それとも『みんながそう言ってるから、そうなんだ』という理屈なのか、どっちだ。みんな、聞いてくれ」しんとしている群衆に向きなおって、戦闘服の男はよく響く声を高めた。「俺は、〈ザ・シティ〉の人肉工場で飼われていた。ついた昨日までのことだ。あんたたちも知ってるように、〈協会〉の兵隊は人間を食う。奴ら

は、さらっていった人間を家畜小屋に入れて太らせてから、加工して食糧にする。俺はそこで飼われながら、解体されて肉になるのを待っていたんだ」
どよめきがあがった。恐怖と同情の、他人事ではない境遇への共感がまじった、それまでにはない響きだった。自分の言葉が与えた効果をじっくりと確かめてから、男はふたたび口を開いた。
「そこから脱出できたのは、ある男のおかげだ。あんたたちも知ってるだろう、〈ASURA〉のリーダー、サーフという男だ。そいつは〈ザ・シティ〉に侵入したとき俺たちを見つけて、脱出の道を切り開いてくれた。あいつに俺は、少なくとも命一つ分の借りがある」
「それとそこの魔女と、どういう関係があるんだよ」
後ろのほうから野次がとんだが、続くものはなかった。野次の主も誰も自分に追随しないことに意気をくじかれたのか、それきり黙った。戦闘服の男はすがめた目でしばらくじっと野次の飛んできた方向を注視すると、調子を変えずに先を続けた。
「その〈ASURA〉、サーフは、ここにいるテクノシャーマンを救出するために、〈ザ・シティ〉に乗りこんで命を落とした。俺は命の借りを返す機会を失った。だからこの娘を守ることで、せめて代わりにさせてもらう。俺がここにいるかぎり、この娘に手は出させない」男は顔を険しくし、自分の、手入れの行き届いた自動拳銃を引き抜いてかかげてみせた。
「文句のあるやつは前へ出てこい。一対一で戦ってやる。サーフはあの〈アルダー〉と、一対一でやりあった。この娘のためにだ。人間相手に同じことのできないやつが、この娘に向

かって指一本上げる資格はない」
再び、群衆はざわついた。熱に浮かされた怒りが、恥ずかしさと困惑に変わっていくのが肌に感じられるようだった。それでもあえて、あおり立てるように罵声をあげるものもいるにはいたが、数はずっと減っていたし、声も小さかった。
戦闘服の男と少年は、胸をそらして油断なく仲間たちを見据えていた。汚れてくたびれた服装にもかかわらず、その姿にはおかしがたい威厳が漂っていた。引きずってこられた若い男が足もとから這って逃げていくのを、男はじろりと見たが、放っておいた。
「あ、あの、わたし」
なおもざわついている人の塊の中から、女がひとり思いきったように立ちあがった。腕に、毛布に包んだ幼い子供を抱いている。
「わたし、わたしは、その女の子が魔女かどうかは知らないわ……ただ、みんながそう言っていたから……でも、みんな、思い出して。このあいだ、〈協会〉の兵隊たちが襲ってきたとき、撃退してくれたのはあそこにいる〈ASURA〉たちだったでしょう」
必死のおももちで振り向いて、女は子供を高くかかげてみせた。子供は毛布の内側で、不思議そうな顔をして親指をしゃぶっている。
「わたしと子供は〈協会〉のアートマ兵に掠われた」かすれた声を、女はけんめいに張りあげた。「この子はアートマ兵におもちゃにされて、もう少しで食べられるところだったのよ。でも、そこへ〈ASURA〉たちがやってきて、助けてくれた。わたしも、子供も。ねえ、

あの時、〈協会〉兵を押し返して、あたしたちみんなに逃げるように言ってくれたのは、〈ＡＳＵＲＡ〉たちだったわよね。そうして、その〈ＡＳＵＲＡ〉が、命をかけて救い出してきたのが、この女の子なのよね」

もつれた髪を左右に振って、女は頭上のセラを見上げた。落ちくぼんだ目に疑念が浮かんでいなかったわけではない。だが、そこには信じようとする光があった。かよわげな少女の姿に対する、本能的な同情の色もあった。

「あたしも、テクノシャーマンは悪い魔女だと思ってた」低い声で、ほとんど恥じるように女は言った。「でも、今目の前にいるこの子が、そんな娘だなんて信じられない。ほんの……痩せた小さい女の子じゃないの。それが、こんな危険な場所に出てきて、いっしょうけんめい話をしようとしてる。あたしたち、ちゃんとこの子の話を聞くべきよ。騒いだりせずに。恥ずかしいことをしたわ……人間として、とても恥ずかしいこと」

「そいつらも悪魔なんだぞ。〈ＡＳＵＲＡ〉は、〈協会〉が作ったんだ。奴らも同類だ」

「じゃあその同類が、どうしてあたしたちをかばってくれたの」振り向いて、声の飛んできた方向にむかって女は反論した。「同類って言うけど、じゃあその悪魔(アスラ)が〈協会〉兵と戦ってくれてるとき、あんたはどこにいたの。戦おうともせずに逃げまわって、穴ぐらに隠れてただけじゃないの。彼らは命がけであたしたちを守ってくれたのに」

反論はなかった。静まりかえってしまった人々の中で、少年と、戦闘服の男、子供を抱いた女の三人だけが、まっすぐに頭を上げて立ち、セラを見上げていた。

わたし……あの……わたし──」
セラは手すりに両手をつかえて立っていた。黒い瞳は大きく見開かれて、静まりかえった群衆と、前に立つ三人の姿を映していた。
「ありがとう……わたし、まさか、こんな」
「あんたのすべき話をしろ、テクノシャーマン」戦闘服の男が太い声で言った。「あんたはサーフの命を代償にして、今ここに立っている。だから、その命を無駄にするな。あんたは、あんたのなすべきことをするんだ」
セラの指が、つかの間ぎゅっと手すりを握りしめた。
しばし、力を溜めるようにうつむいていたあと、ひとつ頭を振り、再びセラはまっすぐ背筋を伸ばした。もはや怯えの色はなかった。堂々と人々を見回すしぐさは、まさしく若い〈女神〉だった。
「みなさんにお話ししなければならないことがあります。そして、謝罪しなければならないことも」落ちついた声でセラは言った。「みなさんにとってはショッキングな話になると思います。でも、これがテクノシャーマンとして、わたしの知り得た真実です。わたしは〈神〉の言葉を人に伝えるために生まれました。ですからやはり、このことはみなさんにお話ししておくのがわたしの使命だと思います。そして、みなさんの思いを、〈神〉に届けることも」

セラはロアルドに語ったのとほぼ同じ話を、人々にも語った。〈神〉によって創られた人類の本来の目的、キュヴィエ症候群の原因の真実、間近に迫った崩壊の危機。そして、最後につけ加えた。

「でも、どうか希望を捨てないでください。わたしはテクノシャーマンとして、最後まで努力します。狂える〈神〉を正気に立ち返らせ、キュヴィエ症候群をなくす手立てを、どうあっても手に入れます。もとより、わたしはそのために生まれたのですから。

わたしは、人類を守るためにここにいます。ここにいるみなさんも、もちろん、都市で〈協会〉に何も知らされずに囲われている人々も。わたしは、みんなを救いたいのです、だれ一人手からこぼすことなく。

どんなふうに造られようと、どんなふうに生まれようと、わたしたちはここにいます。生きています。それを否定することは、誰にもさせません。

わたしは一度、自分が何も知らなかったがために、恐ろしいあやまちを犯しました。いま、わたしがここに生かされているのは、その償いをするためだと思っています。

どうかみなさん、わたしを信じてください。いえ、信じられなくとも、まだ希望を捨てないでください。みなさんの中にもまだ、希望を持ってこうして立つ人がいます。どうか自暴自棄にならず、傷つけ合うことで目の前のことから顔をそむけずに、これから起こることに対して自分が何を、どうすればいいのか、考えてください」

小柄な少女が口を閉ざした時、広場はピン一本の落ちる音さえ聞こえるほどに静まりかえっていた。張りつめたその沈黙の中を、肩を落とし、松明の燃えさしを引きずった人影が、悄然と離れていった。

ひとり、またひとりと、人が散って暗がりに消えていく。十分ほどの間に、人間が満ちていた広間は、セラとロアルドたち数名を残してからっぽになっていた。空間にこもっていた熱がさめたあと、広場は奇妙に空虚に感じられた。最後のひとりが足を引きずりながら瓦礫のあいだに姿を消してしまうと、セラの身体がふらりと揺らぎ、倒れかかった。

「あぶない！」

叫んで、シエロが飛びだしてくるより早く、そばに立って油断なくあたりに目をくばっていた戦闘服の男が、人形を受けとめるように少女を抱きかかえた。壊れ物を扱うようにそっと地面に座らせる。飛ぶように駆けつけてきたシエロは、地面にぺったりと座ったセラのそばに膝をつき、せわしなく肩を揺さぶった。

「セラ、セラ、なあ、大丈夫か？　ケガ、してないか？　気分は？」

「怪我はない。たぶん疲れたのだろう。無理もない。あの状況で、あれだけの群衆相手に、長々と話し続けたんだからな」戦闘服の男が太い声で言った。

シエロはきつい目で相手を見返すと、ふたたび心配そうにセラの手をとって両手で包みこんだ。

「まったく、ムチャするよな、この姉ちゃんも」腰につっこんだ拳銃をぶらぶらさせながら、

少年が口をとがらせた。「その辺の男でも尻に帆かけて逃げ出すようなありさまなのにさ。ま、あの銀色の兄ちゃんが命がけで救ったたって娘だ。そんくらいの根性は持っててくれなきゃ、兄ちゃんだって浮かばれねえよな」

「あんた、サーフを知ってるの？」

急いでやってきたアルジラが、少年の言葉を耳にはさんで驚いた顔をした。少年はむっとしたように口をとがらせ、ちょっと話をしたことがあるだけだよ、と答えた。

「けど、兄ちゃんは俺に言ったんだ。『大切なのは過去ではなく、今だ』って。亡くしたものがあるなら、そのことを悔やむんじゃなくて、そのために何ができるか、何をすべきか考えろって、人に訊くんじゃなくて、自分の頭で、って」

「それを、サーフがあなたに？」

「そうだよ。なんだよ、おかしいかよ」怒ったように少年は下唇を突き出した。「そんときの俺は、ここに集まってた大人たちとおんなじように、テクノシャーマンは悪い魔女で、〈協会〉の手先で、俺たちの悪いことは、ぜんぶテクノシャーマンがやってるんだって思ってた。

でも、あれからいろいろ考えたんだ。それで、この姉ちゃんがコロニーへ来て、銀色の兄ちゃんが死んだって聞いたときに、もう一回ちゃんと、本物のテクノシャーマンを見てみようって、そう思った。兄ちゃんが命をかけて救ったのが、どんな相手なのか、確かめよう、それから、自分で考えて何かしようって。兄ちゃんが言ってたみたいに」

泣くのを堪えるかのように、少年は唇をねじ曲げた。子供を抱いた女が、励ますように肩を抱いた。毛布の中で幼児がもぞもぞと動き、泡のようなあくびをした。少年は一、二度まばたきして涙を押しこめ、セラの顔を見上げた。

「俺、自分で見て、そんで考えた。今はとにかく、あんたのこと信用しようって。それで俺にできること、せいいっぱいやろうって。二度と後悔しないように」視線を落として、小さくつけ加えた。「もう、二度とあの夢は見ない。たぶん。そんな気がする」

「夢?」

「この子の姉さんは、アートマ兵にさらわれて帰ってこなかったんですよ」少年の肩を撫でながら、小さな声で女が言った。

少年は口を開きかけたが、なにも言うことができず、顔をくしゃくしゃにしてくるりと後ろを向いてしまった。

セラはしばらくためらっていたが、思いきったように手をのばし、少年を引きよせて抱きしめた。よせ、やめろ、ガキ扱いすんなと少年は暴れたが、すぐにおとなしくなり、じっと抱かれるままになった。少女の戦闘スーツの肩に押しつけた頭が、しゃくりあげる声をもらした。セラにしがみつき、声を押し殺して、少年は涙を流した。

「さあ。あまり時間がない。俺たちがニューヨークの下まで送っていこう」少年のすすり泣きが収まるのを待って、戦闘服の男が口を開いた。「あんたたちには護衛は不要かもしれんが、どうか送らせてくれ。この坊主と同じく、俺たちも自分のできることをして、最後まで

あがいていたい。生きている以上は、どこまでもな。失敗作であろうがなんだろうが知ったことか――ああ、ロアルド」

ロアルドがふらつきながらこちらへ近づいてくる。男は相手の破れたズボンと、ようやく探し出してきたらしい杖の折れた握りを眉をひそめて見た。

「衛兵を何人か集めてくれ。〈ザ・シティ〉に突入したときのメンバーと、あと数名で足りるだろう。俺が先頭に立つ。あんたはどうする」

「行ってどうなる?」くぼんだ頬に、ロアルドは自嘲の欠片らしきすてばちな笑みを走らせた。「人類が築いてきたものは何もかも無駄だった。創造主の意図を裏切った失敗作、それが俺たちだ。もともと〈ASURA〉に対して、俺たちがどうこう言える筋合いなんてなかったんだ。俺たち自身が何者かに作られた道具、しかも、増えれば増えるほど主人を狂わせる、壊れた道具だったというんだからな」

「これだから、インテリってのはめんどくせえや。なんでそう難しいこと考えんのかね」涙を収めた少年が、勢いよく鼻をすすりあげてぐいと袖でこすった。「いいかい、あんた、失敗作だろうがなんだろうが、俺たちは生きてんだよ。生きてる以上、だれが何を考えて作ったかなんて知ったこっちゃねえ。俺たちは俺たちで、できるかぎりのことを、せいいっぱいやっていくだけさ。そうだろ、姉ちゃん」

少年は汚れた顔をセラに向けた。垢と泥が涙でくずれてぐちゃぐちゃになった顔に、ひときわ大きな瞳が強く輝いていた。それは失われた本当の太陽の光を彷彿とさせる、明るく熱

い生命の輝きだった。
「なあ、あの兄ちゃん――ほんとに死んじまったの？」
「ええ」
「そっか」ぽつりと呟いて、少年はもう一度鼻をすすりあげた。「ごめんな。あんたたちだってつらいよな。仲間をなくしちまったんだもの。大事な仲間を」
セラは少年の肩に手を載せ、まじまじとその顔を見つめた。そして青銅の兵隊のようにじっと立っている、戦闘服の男の無精髭に覆われた顔を見た。子供を抱いて立っている、女の傷だらけの荒れた手に目を向けた。
「あなたたちの名前を教えてもらえるかしら。もし、よければだけど」
「俺、フレッド」
「グレゴリイ・ヴォイツェクだ。グレッグと呼ばれている」
「アネットよ。この子は――」と言いかけて、女は小首をかしげてセラを見た。
アルジラの後ろから、背伸びして様子を見ていたシエロが、視線を浴びてぎょっとしたように後ずさりした。
「あなた、あの時この子を助けてくれた〈ASURA〉ね。名前はなんていうの」
「シ、シエロ」
「シエロ。そう」微笑んで、彼女は子供の細い髪の毛をかき上げてやった。「じゃあ、この子は今日からシエロと呼ぶことにするわ。子供はアートマ兵に連れて行かれることが多いか

ら、ある程度大きくなるまで名前をつけないの。愛着がわいて、奪われたときにより悲しくなってしまうから。でも、この子はあなたに助けられて、あなたの翼で飛んだんだもの、きっと大丈夫。優しくて強くて、勇気のある子に育つわ。あなたみたいに」

優しい笑みを向けられて、シエロは困ったように目をそらし、顔を赤くして両手を所在なげに握りあわせた。たった今、同じ名前を持つことになった子供が、毛布の包みの中からおもちゃのように小さな手を出してきょとんとこちらを眺めているのを見て、ますます真っ赤になった。

「ありがとう、フレッド、グレゴリイ、それにアネット」三人の汚れた手を、セラは順番にしっかりと握りしめた。「無事にすんだのはあなたたちのおかげよ。みんなを説得してくれてありがとう――言葉ではとうてい言いあらわせないくらい、感謝してる。わたしを信じるって言ってくれたことも。ありがとう。本当に、ありがとう」

「さあ、行こう」グレッグと名乗った戦闘服の男が、大きな手で包むようにしてセラを立たせた。「こうしている間にも〈シヴァ〉はニューヨークへ向かっている。あんたたちがあいつを迎撃するつもりなら、ぐずぐずしている暇はない」

物陰からゲイルが音もなく現れ、待ちかねたというように戸口に立った。ロアルドは力を使い果たしたといったふうだったが、それでも〈ローカパーラ〉の指導者という意識が働いたのか、よろめきながらも杖をついて、セラの隣に並んだ。はらはらしながら様子を見ていたアルジラが駆け寄ってきてそばにつき、熱いほっぺたをこすりながらシエロが走ってきた。

そっと振りかえると、アネットが小さなシエロの手を取って振らせている。シエロは小さく息を吸いこみ、思いきったように手を振り返す。
「なあ、死ぬなよ！　死ぬんじゃねえぞ、あんたたち！」フレッド少年が両手を口に当てて叫んでいた。「俺たちは生きる。だから、あんたも生きろ。約束だからな、姉ちゃん、それに〈ASURA〉のあんたらも」
建物に入っても、その高い声は反響しながら廊下の中まで追いかけてきた。
「あの銀色の兄ちゃんだって、きっと、そう思ってるよ！」
「あ、ちょ、おい。どうしたんだよ、セラ」
アネットとその腕の中の小さなシエロも、そろって手を振っていた。グレッグに先導され、建物の中に入る。フレッドの声が薄れ、聞こえなくなったとたん、セラは急に崩れるように膝をついて、口を押さえた。その両目から、とめどなく涙が溢れて頬を伝った。シエロがあわてて抱きとめようとする。
「緊張が解けたんだろう。無理もない」グレッグが同情するように首を振った。「大の男でも耐えられるかどうかの、ぎりぎりの瀬戸際だった。あんたはよく頑張ったよ」
「違うの。わたし、嬉しい——嬉しいの」
セラは頭を振り、目頭を押さえた。戦闘スーツの袖が涙を吸って色を濃くした。
「サーフは、消えてしまってなんかいないって。ただ、見えなくなっただけで、今もちゃんと、わたしのことを守っていてくれるんだって、わかった。サーフの残した言葉や、想いや、

したことが、今もこうして、わたしを守ってくれてる――形あるものを抱きしめるかのように、セラは自分の肩を抱いた。――サーフはちゃんとここにいるわ。わたしの中に。みんなの中に――

しばらく、だれも口を開くものはなかった。やがて動いたのは、驚いたことにロアルドだった。杖を鳴らしながら近づくと、腰をかがめて、そっとセラの腕に触れた。

「行こう。彼が――サーフがしようとしていたことを、われわれも続けよう。〈ローカパーラ〉と〈エンブリオン〉の共闘はまだ続いている。そうだろう、グレッグ」

「ああ」静かに言って、グレッグは肩にかけていた錆びたカービン銃をずり上げ、虫食いのスリングを指で撫でた。「こいつだって、手入れすれば多少の役には立つかもしれない。メンバーの選定は俺がやっていいか、ロアルド」

「頼む。リストができたら俺と、こっちのゲイルにも見せてくれ。彼は参謀型〈ASURA〉だ。データのハンドリングに関しては誰よりも長けている」

ゲイルはあくまで無表情に立ち続けていた。その目は周囲を見てはいたが、何が起こっているのかは映していなかった。彼が見ているのはひたすらに、手の下で消えていく自らのリーダーの肉体、彼が最後に告げた名、その名が指し示す相手のことだけだった。

「ヒート」と誰の耳にも届かないほど小さく、彼は呟いた。「ヒート――〈アグニ〉――〈シヴァ〉。殺す」

ふいに翠色の瞳が金色に染まった。一瞬のことだったので誰も気づかなかったが、〈ヴァ

ーユ〉の獣じみた狂気と憤怒が、噴出する溶岩のように薄闇を焦がして消えた。
「あの男は殺す。私の手で。誰にも渡さない。あれは、私の獲物だ」
セラを支えた一団が動き出す。ゲイルはすべるように続いた。その裡に暴風のように荒れ狂う〈ヴァーユ〉の激情を抱えたままで。

2

『観ているね？　君は。そう、観ているはずだよ』
それは沈黙の中の沈黙がささやく声だった。静寂と暗黒、もしその世界に属さぬものが見たならば、あまりの無と理解を超える広大さにたちまち正気を失うような完全な虚無の空間に、その声は音でない音として、波のようにどこまでも拡がっていく。
通常の音のように弱まることも、また消えることもなく、他の音と混じりあうこともなかった。ひとつひとつの音が〈情報（ことば）〉として確立し、カットされた宝石のように鋭いエッジを持っている。それらは糸につながれたきらめく瓔珞のように、明瞭さと輝きを失うことなく、その広大な無の領域のあらゆる瞬間に同時に到達する。
『仏教（ブッディスム）には大きく分けて小乗と大乗の二つの流れがある。今の君は、いわば小乗仏教における聖者の領域にいる。個人の悟りを目指し、修行者ひとりが解脱を果たして、涅槃に到達

することでよしとする。しかし大乗仏教では悟りの領域をおのれひとりのものとせず、凡俗のひとびともまたともに涅槃に到達するよう、導くことを目的とする。君はできるだけ多くの仲間を〈楽園(ニルヴァーナ)〉に連れていくことを誓った。君はまだ、たどるべき道の途上にいる。

観えているのだろう、君には？　仲間たちの姿が。それだけではない、世界で起こっているすべてのことが、観えているはずだ。ここでは、君に見えないものも感じられないものも存在しないのだから。君の肉身(ボディ)は分子以下の最小単位にまで解体されることで、その本来の量子的属性を完全に取りもどした。君はあらゆる場所、あらゆる時、あらゆる可能性の世界に同時に存在し、観測することができる。だが、物質世界のマクロな物理法則はそのような存在を許容しない。君はこの虚数空間でただよい、ただ、万象を眺める観察者としてのみ存在を続けている』

無の空間でかすかな動きがあった。動き、と見るものがいたからこそそれは『動いた』のだったが、まだその反応は、眠りの中にいる者が寝返りをうつような、無意識の領域に属するものだった。

非存在のうちにまどろむ者の前に展開されるのは、現実世界で起こりつつあるあらゆる事象のなりゆきだった。疲れはてた少女が仲間たちにいたわられながら、つかの間の休息をとるために粗末なベッドに寝かしつけられるのを観た。無精髭の男と壊れかけた眼鏡をかけた男が額をつきあわせて話し、作成したリストを、黙して座りつづける碧の目をした男に差しだすのを観た。暗い地下コロニーの掘っ立て小屋で、痩せた少年が膝を抱えてひっそりと涙

を流すのを観た。若い母親が新しい名前を得たばかりの子供に、愛しげにその名でもって呼びかけるのを観た。
そしてまた、荒れた地面に突然生まれた巨大なクレーターも観た。そこはかつて〈ザ・シティ〉と呼ばれ、多くの人々が贅沢な暮らしを営んでいた場所だった。現在のそこは溶けた珪酸物質と合成建材、金属の混じりあった被膜で覆われ、黒い太陽の光のもと、異様な凹面鏡のように、ゆがんだ光を天へ向けて送り返していた。生きている者はひとりもなく、生命の痕跡すらなかった。
時間を超越するその者の視線は、都市の消滅の瞬間を、何が起こっているのかもわからぬまま、膨らむ超高熱に呑みこまれて蒸発する人々を観ることもできた。彼らの肉体は石や金属と同様蒸気と化し、冷えて、凹んだ地面に貼りつく膜の一部となった。物質的存在を失ってなお、何が起こったか理解できないままさまよい歩く思考の断片が、熱された陽炎の中にいくつもまぎれていた。いつ肉体を失ったのかも気づかず、消滅の瞬間に固着したままの思考が、むなしく堂々巡りを繰り返しながら意味のない言葉をこぼしている。
荒野の中をひとり進んでいく真紅の髪の男も観た。彼は確信に満ちた足取りで一歩一歩を刻み、目的地を目指していた。その意志は死そのもののように動かしがたく、その歩みを止めることはだれにも不可能だった。
空の眩しい黄色い反射の中に、小石をばらまいたように戦闘機の編隊が近づいていた。また周囲には、同じく炎を操るアートマ兵たち、〈ブラックドッグ〉、〈ウィルオウィスプ〉、

〈ヘルハウンド〉などがおびただしく集まってきていた。〈シヴァ〉の圧倒的な火力に対して、微力ながらも数を集めればなんとかなるのではないかという人間たちのあがきだった。

　彼はそれらを見もしなかった。足も止めず、黙々と前に進みながら、忍び寄ってくるアートマ兵と頭上の戦闘機をそのままにしていた。ミサイルが発射され、鋼鉄の霰のように彼の上に降りそそいだ。そしてまた、アートマ兵たちがいっせいに放った炎の大波が、轟音とともに彼を包みこんだ。

　一帯が白い光に包まれた。数秒間膨らみつづけ、ふいにそれが消失したとき、あたりにはそれまでを上回る強烈な熱気と、地面に深く穿たれたクレーターしか残っていなかった。赤毛の男はその中心に立ち、退屈げに視線を落として腰に軽く手を添えていた。戦闘機の編隊も、アートマ兵の群れも、何も残っていなかった。発射されたミサイルは目標に届く前に爆発して消え、戦闘機自体もあとを追った。アートマ兵たちは悲鳴を上げる間もなく一握りの灰と化し、それすらも消滅した。

　爆発した戦闘機の破片が溶けて、金属の小さな丸い塊になってぽつぽつと砂に落ちてきた。男はちらりと空を見上げると、何ごともなかったようにクレーターを越え、歩みを再開した。まだ固まりきらないクレーターの溶けた表面が、男のブーツに飴のようにまつわりついた。

　そしてまた別の場所で、ひとりの人物が顔色を失って席を立つのを観た。彼／彼女（ヒー・シー）は、ほんの一昨日（あるいは、それ以前か以後に——ここでは時間は並列しており、なんの意味ももたない）、逃れてきたばかりの場所、その都市が、磨かれた鍋の底のようなつるりとした

巨大な凹面鏡に変わっているのを知った。性別を持たないその胸の奥の動揺が、懐に入った虫のようにむずがゆく感じられた。その驚愕のたてる罅の入った鐘に似た音が、感覚をさわがせた。

ふたたび動きがあり、それは以前よりもわずかに意識の領域へ近づいていたが、十分ではなかった。なめらかな水面に風が吹いてさざ波立つようなものだった。水はただ穏やかに凪いでいること、永劫の岸辺に打ち寄せる沈黙に身を任せることだけを欲しており、それ以外のいかなることも求めてはいなかった。起こること、観えること、聴こえることはすべて、大海に流れこむ川が海自身にとっては興味の対象でないように、遠く、かかわりのないこととしてかたづけられていた。

『ああ、君はまだ、この岸辺から去りたくないのだね』

吐息する者がいた。確定されたものなど何一つ存在しない、形あるものなどあり得ない広大なその次元に、何物かがゆっくりと形をとりはじめていた。

最初に現れたのは、星のようにきらめく銀色の二つの目だった。続いて、周囲の薄闇よりもなお黒い毛皮におおわれた、小柄な、しなやかな体軀、左右に振られる長い尾、ひくつく長い髭と三角形にぴんと立った耳が、にじみ出るように姿を現した。ぼんやりとにじんだその輪郭がようやくはっきりと確定したとき、ちりんと音がして、なめらかな黒い毛に覆われた喉もとに、銀色をした小さな鈴——ふたつの口を開いた形をした、珍しい造りのもの——が、さがった。

『その気持ちは理解しよう。ここはあらゆる精神が希求してやまない永遠の休息の場だ。存在にまつわるすべての苦しみは、ここにはない。存在自体がここにはないからだ。君は戦いの鬼として生まれ、血まみれの闘争をくぐり抜け、自らに課せられた運命の重さに呻吟してきた。ようやく得たこの安息から、離れたくないと感じるのも無理はない』

猫——黒い猫、銀色の双眸を持ち、そろえた手足に長い尾をくるりと巻きつけて座っている。口は動いていない。それでも、喋っているのは間違いなくこの猫だった。上もなく下もなく、天もなく地もないこの〈場〉で、猫は平然と耳をひくつかせ、きらめく銀の瞳をまたたきもせずに開いている。

『ここには存在がない。だから〈我〉と〈汝〉の区別もない。しかし、対話を成立させるには最低限それらが必要だ。自問自答するときであっても、精神は一方の意見を主張する〈我〉と、それに相対するためのもう一方の仮想の〈汝〉を自らの裡に作りだす。この空間はいわば一個の巨大な〈我〉であるとも言える。君はその中につかの間浮かぶ泡の一粒だ。そのような君という〈我〉に対して、私は〈汝〉であることを主張しよう。それもまた、うつろな仮の言葉にすぎないが、対話をはじめる前段階としては必要なステップだ』

——おまえは、誰だ。

『ああ、ようやくその問いを発することができたか』

猫は尻尾を左右に振り、満足げに鼻をうごめかせた。鈴が涼しい音をたてて鳴った。

『〈汝〉が誰であるかと問うことは、すなわち〈我〉は何者かという問いと同義だ。私とは、

君に対しての〈汝〉であり、〈対話者〉であり、ある意味において、君という存在と同義でもある。君の発した問いが〈自分とは何か〉をも同時に指すように。しかし、今のところこれでは対話を進めるのに不便ではあるから、私はひとまず自分に、〈シュレディンガー〉という名を冠することにしようか』

「マム！」
エンジェルはドアが開くのを待ちかねたように入り口を押し通った。デスクを前に、落ちついた様子でハードコピーをめくっていたマダム・キュヴィエは、顔を引きつらせて入ってきた養い子に、不作法をとがめるように眉をひそめてみせた。
「どうしたの、わたくしのエンジェル。しばらくは邪魔をしないでほしいとお願いしていたはずだけれど」
「〈ザ・シティ〉が、消滅しました」
エンジェルの声は震えていた。巨大なデスクに両手をつき、椅子に深く身をあずけた養母にむかって身を乗りだす。
そこはマダムとその養い子以外、少数の者しか知らない隠し施設であり、表向きの〈協会〉中枢部である〈ザ・シティ〉の華麗な塔頭は、この施設の隠れ蓑に使われているにすぎなかった。本当に意味のある決定は、他ならぬここから下されていた。

〈ザ・シティ〉の広大な執務室と同じしつらえの部屋がここでも再現されていたが、天井に投影されているのは黄色い空と黒い太陽ではなく、一個の、水晶でできた巨大な蕾の映像だった。自閉した〈EGG〉。かつて〈女神〉をその裡に抱き、今は〈神〉の地上における唯一の顕現といえる存在は、背景を暗くした処理映像の中で、優雅なアンティークランプのように、ぼんやりと青白い光を放っている。

それが発する致命的な影響からは逃れるように慎重に距離がとられていたが、現在、この世界で〈EGG〉にもっとも近く位置する人工物、それが、この〈協会〉の隠し施設であり、真の〈協会〉中枢部だった。

「〈ザ・シティ〉が。ええ。知っていますよ」

さらりと言って、マダムは卓上の端末を操作した。先ほどエンジェルが見ていたのと同じ映像が映し出された。アングルが次々と切りかわり、上空からの映像、接近して、クレーターの縁部各所から撮られた映像、さらに寄ってクレーター表面の接写画像と、採取されたサンプルの分析結果が、目まぐるしく端末の液晶画面を流れていった。

「アートマの仕業には違いないけれど、〈アルダー〉ではないわね、これは。あのアートマにはこんな強力な熱量を発する能力はない。考えられるとすればあの子だわね。〈シヴァ〉。熱（ヒート）、とはよく言ったものだわ。現在の地上における最大の都市を、ほんの数十秒間で住民ごとあとかたもなく蒸発させるなんて、さすがは強化されたパーフェクト・アスラだけのことはあるわ」

ださせ、こんなに落ちつくしておられるのです」エンジェルの両手は、握りつぶさんばかりに机の端を握りしめていた。「あそこには〈協会〉員の上層部と、何よりも、選民の中でもっともハイクラスな市民が集められていたのです。それが、全部失われてしまった。たったひとりのアートマのために。テクノシャーマンを失った上に、この打撃を目にして、あなたはなにも感じないとおっしゃるのですか？」
「ああ、もちろん、悲しいことですよ。人の命が失われるのはいつだってとても悲しい、残念なことです。ことにそれが、わたくしたちの同志であり、次代に残されるべき選ばれた種子たちであった場合には――」
マダムはするりと立ちあがって、エンジェルに背を向けた。両手を腰の後ろで組み、ほんのりと輝く〈ＥＧＧ〉の映像を見上げる。目をおおった遮光グラスの黒いレンズに、ほの白い水晶の蕾がふたつ、映った。
「でも、だからといってわたくしたちは歩みを止めるわけにはいかないのですよ、わたくしのエンジェル。〈ザ・シティ〉の消滅は、確かに大きな損失です。しかし、とりかえしがつかないというものではありません。ほかの都市には、まだ市民たちと〈協会〉の同志たちが残っています。再建はいつでもできますよ。
それより問題は、〈シヴァ〉が〈ザ・シティ〉を出て、ニューヨーク方面に向かっていることでしょうね。おそらくニューヨークも壊滅させるつもりでしょう。それは困ります。とりあえず、残存している〈協会〉軍とアートマ兵たちに総攻撃させているのだけれど、どう

なのかしら。ほとんど成果はあがっていないみたいなのよ、心配だわ」
頬に手を当て、かわいらしく吐息をついた老いた養母に、エンジェルは今まで見たことのないものを見るような目を向けた。
養母がその穏やかな外見に反して、非常に苛烈な性格と剛毅そのものの精神をもっていることは、彼/彼女（ヒー・シー）も承知していた。目的とするものに対してけっしてあきらめることなく、強固な意志を持って進みつづける指導者であり学者。だが、これだけの被害、これだけの損失を目前にして、くつろいだ様子で書類に目を通し続けている老女は、何か世界から隔絶した不気味さがあった。
「言うべきことはそれだけなのですか、マム」声を殺してエンジェルは責めた。「われわれのうちでもっとも重要なメンバー、都市、施設、そしてあなたの言う、選ばれた人類の種子が消滅したのですよ。彼らに関して、なにかもっと言うことは」
「言ったところで、起こったことがもとに戻るわけではないわ。ああ、ほかの都市から選択しなおして、また新しい一級市民グループを作らなくては。いえ、それより先に、〈シヴァ〉を止めるほうが先だわね、彼はニューヨークを殲滅したあと、きっとほかの都市も破壊するつもりでしょうから。ああ、こんな時に〈EGG〉が使えればねえ。でも結局、テクノシャーマンは生きのびたのかしら？　〈アルダー〉のビーコンは、もう消滅しているのよね。それに〈ASURA-01〉も」
「〈ザ・シティ〉と同様に」苛立った口調でエンジェルは言った。「しかし——」

彼らがテクノシャーマンを救出した可能性もある。彼らはどこにいるかしら？〈ローカパーラ〉に帰還しているの」

「……ビーコンは〈ASURA-03〉による攪乱によっていまだに隠蔽されていますが、前後の状況から考えて、その可能性が高いでしょう」

「ますます結構」読んでいた書類をきちんと揃え、とんとんと叩いてマダムは脇に置いた。「テクノシャーマンがまだ生きているとしたら、それは朗報だわ。この状況では、彼女もわたくしたちに協力せざるを得ないでしょう。パーフェクト・アスラを押さえこむための〈アルダー〉が失われた今、彼らを凌駕する力を揮えるのは、〈ＥＧＧ〉と接続したテクノシャーマンしかいない」

エンジェルの肩がわずかに揺れた。後ろを振り返っていたマダム・キュヴィエはそれに気づかなかった。彼女はほの白く輝く〈神の卵〉を見上げていた。憧れでも、畏怖でもなく、ただ冷徹な実験結果の集積を見つめる科学者の目で。

「〈ローカパーラ〉との連絡はつけられるかしら、わたくしのエンジェル。彼らも〈ザ・シティ〉消滅についてはすでに耳にしているはず。〈シヴァ〉はどうやら、人類を無差別にこの地上から一掃しようとしているようよ。そんなことは看過できません。テクノシャーマンが、ジャンクヤードで培った人格を今も保持しているのだとしたら、無関係な人間の大量死を黙って見過ごすとは思えないわ。彼女をここへ連れてきて、もう一度〈ＥＧＧ〉との接続

をはからせましょう。たとえパーフェクト・アスラといえども、〈神〉の力を中継する、〈女神〉のパワーにはあらがえない――」
銃声が鳴った。
奇妙に軽い音だった。マダム・キュヴィエはくるりと半回転し、椅子につかまりかけて手を滑らせ、背後の壁にぶつかって、寄りかかるように立った。椅子がバランスを失って倒れ、たてかけてあった杖がもつれるようにその上に落ちた。黒い遮光グラスの奥の目の色は読めなかった。ほとんど無表情のまま、彼女は目前の養い子を見つめた。
動揺を表しているのは、むしろエンジェルのほうだった。ポケットから取り出した小口径の拳銃が、こまかく震えていた。硝煙の臭いが漂った。養母の、痩せた肩から垂れ下がった白い長衣に、うっすらと赤いものがにじみはじめたのを見て、動揺の色はいっそう深くなった。
「撃ちましたね、エンジェル。わたくしを」
ひと言ずつ、ゆっくりと発音して、マダム・キュヴィエは言った。
エンジェルの頬が引きつり、短い悲鳴を上げてもう一度撃った。さらにもう一度。
連続した銃弾は老女の胸と腹を貫通し、そのたびに彼女をよろめかせた。しかし、倒れなかった。老いたる指導者は〈神卵(EGG)〉の輝く映像を背後に、聖者の彫像のように、超然として養い子を見つめていた。
「いったいそれはなぜかしら。わたくしが〈ザ・シティ〉の消滅を顧みようとしなかったか

ろう？　大量の同志が失われたというのに、涙の一滴も見せなかったから？　多くの罪のない市民が、一瞬のうちに蒸発してしまったというのに、なんの痛みもあらわさなかったから？　過ぎたことは過ぎたこととして、次の計画ばかりに目を向ける、わたくしの冷酷さにあきれ果てたから？　それとも」

皺の寄った唇に、あざけるような笑みが浮かんだ。

「――わたくしが、再びテクノシャーマンを〈神〉のもとに送ると口にしたから？」

エンジェルは叫んだ。叫びながら撃った。

狙いもつけずに発射された銃弾はたいていマダムの身体のどこかに命中したが、数発は、背後のパネルに食いこんだ。〈神卵〉の映像が欠け、不完全なパズルのような断片的な像がまたたきながら残った。着弾のたびにマダムはマリオネットのように身体を跳ねさせていたが、やがて、壁によりかかった姿勢のまま滑って、床に腰を落とした。ブラックアウトしたパネルに鮮血がべっとりと筋を引いた。

「少々読み違えていたようだ。わたしとしたことが」

マダムの口調が変わっていた。唇に貼りついた嘲りの微笑は消えなかった。むしろ深まり、年齢のわりにはよくそろった白い歯をずらりとのぞかせて、鮫のような笑みを養い子にむけた。そこには、一片の情すら含まれていなかった。嘲笑と、ある種の、哀れみに似ているがもっととげとげしく、毒を含んだなにか以外には。

「君は、女となることによって天界を追放された。〈神〉と自由に交感できる『娘』、

『女』とならぬ処女ゆえに永遠の〈女神〉として生まれた、『我が娘』に対する君の気持ちに、もっと注意を払っておくべきだったな。天界を逐われた天使が、再びほかの誰かが〈神〉の御許にはべると聞いて、心穏やかでいられるはずがない。はは」

マダムは笑い、咳きこみ、少量の血を吐いた。ところ構わず浴びせられた銃弾が服を引き裂き、あちこちに真紅の染みをじわじわと広げている。

「君は、嫉妬しているのだな、エンジェル。〈神〉に愛されしテクノシャーマン、セラフィータに。〈ザ・シティ〉の消滅？　キュヴィエ症候群？　人類の存亡？　は、は、君がそんな話に興味を持っていないことなど、とうの昔から気づいていたよ。君が唯一心から希求し、愛し、望んでいるのは、もう一度〈神〉のもとへ帰り、そのお気に入りの〈天使〉として情報の天界を飛び回ること、それしかない。そうとも。だからこそわたしは君に枷をはめたのだ。わたしの養い子として、人間として、人間のために奉仕するという枷を。だが君の嫉妬はどうやら、わたしの思惑よりも強かったらしいな。残念だよ」

「わたし――」乾ききった唇をなめて、エンジェルは言葉を発しようとした。「わたし――わたしは、あの娘を」

「憎んでいた。妬んでいた。知っていたとも」血の混じった唾を飛ばして、マダムは破裂するように嗤った。「わからないとでも思っていたかね、君がテクノシャーマンを見ていたあの目つき、表情、仕草……見方を知っていれば、人の内面を読み取るのは実に簡単なのだよ。あの娘、テクノシャーマンが〈女神〉として、完全に人間とは隔絶された存在であればまだ

我慢もできた。あれは人間ではないのだからと、自分に言い聞かせることも。だが今テクノシャーマンは受肉し、君と同じく人間になったというのに、ふたたび〈神〉のもとへ昇ろうとしている。そんなことは許せない。違うかね？」
「あなたを信じていたんだ！」身を揉むようにしてエンジェルは叫んだ。自らを説得しようとする、必死の響きがそこにあった。「何もかもなくしたわたしに、あなたは新しい人生をくれた！　人としての生を！　人類に奉仕するための、あなたの養い子にして右腕としての、わたしの場所、わたしの居場所……」
マダムはまた無慈悲な笑い声をあげた。
「そんなものを君が本当に信じていたかどうか疑わしいな、え？　言葉を飾るのはやめたまえ、君は一度だってそんなものを本当に信じてはいなかったし、わたしだって、君がそんなものを信じているなどとは思っていなかったよ。君がかつて体験していたものは、この地上のどんなものよりすばらしい世界だった。薄汚い人間の世界を守るために、それを忘れてしまえといわれて素直に忘れられるものなどどこにいるものか、だが！」
朽ち木が傾くようにマダムは前へ身を乗りだした。頭から血が滴り、白髪はべっとりと血に濡れている。顔中に汗のように伝い流れた血のすだれの下に、異様な光をたたえた目が見開かれていた。色こそ違え、それは、現在天空にある黒い太陽に似た呪われた吸引力で、いやおうなしにエンジェルの目を吸い寄せた。
「それでもわたしはやらねばならなかった。なぜか？　人類を守ることがわたしの責務だっ

たからだ。破滅に瀕した人類を保護し、次のステップに進ませることこそが、医師であり、研究者であるわたしの意義だったからだ。キュヴィエ症候群。わたしはあれとの戦いに生涯をささげた。〈天使〉としての君の存在が失われ、〈神〉への道がひとたび閉ざされたあとも、わたしは戦いつづけた。人類を守るために。そうだ、多少の犠牲など、なんだというのだ？　これは戦いだ、戦争なのだよ、君。〈神〉と、われわれ人類との、休戦もなければ講和もあり得ない、血みどろの闘争なのだ―

水色の目がしだいに血の色に染まり、たまった鮮血が、顎を伝って滴った。

「君は〈神〉のもとから転落してきた捕虜であり、本意ならぬ脱落兵だった。君はわたしにとって、有能な右腕であると同時に、いつ〈神〉に惹かれるかもわからぬ敵性を内包する存在だった。

だからわたしは常に君を身近におき、養い子としていつくしみ、言いきかせ、人類に奉仕することを教えこんだ、たとえ人間がどれほど穢れており、愚かで、天上の存在に比すればどれだけ卑小であっても。ああ、長年〈神〉との交信の場に立ち続けたわたしが知らないとでも思うかね。資金と施設を引き出すために、くだらない国家の、くだらない指導者どもと会談するたびに、そのことに気づかなかったと思うかね？

違う、違う、だからこそわたしは秘密裏に〈カルマ協会〉を設立し、育て、愚かさから脱した新たな人類の種を導くために、手を尽くしたのだ。〈ＥＧＧ〉の暴走はその計画を早めただけだった。おかげで不要な大衆を選別する手間がだいぶ省けた」

—あなたは」ぞっとしたようにエンジェルは身を引いた。「世界に対して戦争を仕掛けるつもりだったのか。殺戮を。かつてのナチスのように、人類という種を浄化するという言葉のもとに、大虐殺を世界中で行うつもりだったのか」

「君が納得しやすいなら、そう、それでいい」湿った音をたててマダムは喉を鳴らした。「だが、民族浄化などという小さな目的であったことは一度もない。わたしが目指していたのは、人類そのものの浄化だ。劣った、不要な遺伝子の持ち主を取りのぞき、選ばれたよき次代への種子を選別して、より高い進化の階梯を昇らせること。

進化！　人類は先へ進まねばならない、なにがあっても進まねばならない。それは知的な動物として、進化の頂点に立った瞬間から、人類という種に背負わされた責務なのだ。科学者として、わたしはなんとしてもそれを守らなくてはならない。

わたしは己を指導者であると考えたことはない。なりたいと思ったことすらない。わたしは進化の奴隷であり、下僕であり、その車を曳くための駑馬の一頭にすぎない。すべての人間は、進化という偉大な山車（ジャガンナータ）を担いでその下で死んでゆく、汗まみれの一個の動物だ。人類は先へ進む、進まなければならないのだ、遠くへ、もっと遠くへ、〈天使〉も、〈女神〉も、そう、〈神〉すらはるかに越えた、超越者へと」

「黙れ！」エンジェルは叫んだ。「黙れ、黙れ、黙れ！」

さらに数発の銃弾がマダムを貫いた。衣服を濡らした血がしだいに床まで流れてきて、あたりを赤く染めはじめた。

「哀れなエンジェル、地上に堕ちた天使」
しだいに死相が現れてきた顔にも、マダムはまだはっきりと嘲りの色を浮かべていた。死が近づくほどその色はむしろ濃くなり、いまや彼女は目の前の養い子をあからさまに見下し、その想いもなにもかもが無駄だったのだと、思い知らせようとしていた。
「たとえわたしを殺したところで、君はけっして〈天使〉には戻れない。その不完全な肉体を脱ぎ捨てることはできない。可哀想なリュシフェール、〈神〉に恋した哀れな堕天使！はじめから〈神〉の一族として生まれたあの娘と違って、君は結局〈神〉に見捨てられ、地を這いずる虫けらの一匹でいるしかないのだから――」
長い叫びがエンジェルの喉からほとばしった。絶叫しながら引き金を引き、弾倉を換えて撃ちまくった。ぼろ雑巾のように穴だらけにされても、マダムの唇に浮かんだ嘲笑は動かなかった。自分も、養い子も、世界も、人類も、生も、死も。彼女はさまざまなことを行い、そのほとんどを冷徹にやり抜いてきた。だがここで糸は断ち切られ、彼女は死ぬ。天使と呼んだ養い子に撃たれて。堕ちたる天使の手にかかって。
「わたしは……」銃弾に身体を揺さぶられながら、ほとんど出ない声で彼女は呟いた。「わたしは……もう、疲れた……なにも――か、も……」
空になった弾倉が落ちた。カチカチと引き金を鳴らしながら、新しい弾倉を求めてエンジェルはポケットを手探りした。なかった。
もともと護身用に携帯していたにすぎない拳銃だ。予備の弾倉を携帯していたということ

が、すでにこの事態を予期していたのかもしれなかった。目の前では、針で突かれた水風船のように萎んだ養母が、血まみれの白い長衣の中でくしゃくしゃになっていた。全身ところ構わず銃弾を浴びせられたために、肉片の混じった血しぶきがあたりに飛び散り、顔面を貫いた銃弾が遮光グラスを壊していた。

片方のフレームが折れたグラスが、血の糸を引きながらゆっくりと転がり落ちた。水色の両眼は、終わりのない嘲笑を貼りつけたまま、生きているもののようにかっとむき出されていた。半開きの唇から歯が白く光って、なおもすべてを嘲笑っていた。

「マダム！　エンジェル？　どうなさったのですか？　今の銃声は？」

通路から人声が近づいてくる。ここへ立ち入ることを許されている、〈協会〉の中でもエリート中のエリート、マダムの子飼いとも言うべき人間たちだ。

エンジェルはだらりと垂らした手に拳銃を握りしめたまま、養母の死体を見つめていた。〈カルマ協会〉の指導者であり心臓、最高のカリスマたる女性を、自らの私情により射殺したのだ。いかに彼／彼女（ヒー・シー）がマダム・キュヴィエの養子であるとはいえ、この現場を押さえられれば、粛清は免れ得ないだろう。

幽鬼のような足取りでエンジェルは一歩を踏み出した。嘲笑を浮かべたままの養母の死体から距離をとってデスクの下に手をのばし、ある隠れた場所に手を触れて、一連の複雑なパスワードを入力する。

かすかなカチリという音がして、手の中に何かが落ちてきた。小さな、プラスティックで

できたケース。黒い台座の上に、宝石のように虹色に輝くチップが納まっている。移り変わるそのきらめきは、エンジェルの黒い瞳を人ならぬ多色に照り映えさせた。
（では、人間であるあなたは、生きる意味を理解しているのか）
あの碧色の目をした悪魔(ASURA)の声が耳元で囁いた。
（あるいは、『生命』が、『生きる』ということがどういうことか理解しているのか）
「生きる……」魅せられたようにチップに目を据えてエンジェルは呟いた。
足音が慌ただしく入り乱れて、数人の男が部屋に飛びこんできた。壁際で血まみれになっている指導者と、その前に立ちつくしているすらりとした人物に驚きの声をあげる。
「エンジェル、これはいったい……」
彼(ヒー)／彼女(シー)は糸で引かれるかのように振り向いた。拳銃が手から離れ、小さな音をたてて絨毯に落ちた。頬を冷え切った何かが伝うのを感じた――血だった。養母を殺したときの返り血。
男たちが叫んでいる。何をそんなに騒いでいるのかわからない。自分はなすべきことをしたまでだ。あの悪魔はわたしに生きることの意味を問うた。わたしは答えることができなかった。だが、今なら言える。わたしの、生きる意味を。
「生きる……わたしは……」
「動くな！」銃口がこちらを狙っていた。大きく開かれた口また口。うるさく騒ぎたてる人間たち。地上を歩き回る大きな、愚鈍な動物ども。「エンジェル、マダム・キュヴィエに対

する殺害容疑で、あなたを逮捕します！　手をあげてこちらへ……」
「生きる」
エンジェルはくり返した。惚けたような顔に、徐々に表情がもどってきた。迷い続けたすえについに回答を見いだした者の、それは微笑みだった。
拳銃を落とした手を、エンジェルはもう一方の手のほうに持ち上げた。そこに乗っている小函の蓋を、カチリと音をたてて外した。プラスチックの蓋が落ちた。カバーを外され、むき出しの光を浴びたチップはさらに燦然と、誘いの声をあげるかのように輝いた。
「動くなと言っている！　待て、何をするつもりだ！　止まれ！」
「わたしは、生きる」
恍惚とエンジェルは呟いた。
そして台座から取り外したチップを、人間たちが止める間もなく、自らのうなじに突き刺した。

3

『……ああ、またひとつ、選択がなされた』
銀色の瞳を、猫はつかのま閉じた。何かを悼むような調子が、落ちついたその声に忍びこ

なじみ深いものを感じていたかもしれなかったが、彼（そう、彼だった、それは確かに）は
いまだその領域には達していなかった。
『ひとつの生命が体験する時間はほんの瞬きの間にすぎない。だが、その間に無数というの
も無意味なほどの大量の選択がなされ、その度に、世界は少しずつ書きかわってゆく。良き
につけ、悪しきにつけ。もちろん、ほとんど他に影響をおよぼさない選択もあれば、世界そ
のものをゆるがす重要な選択もある。だが選択すること自体を避けることはできない。君は
どうするね、わが対話者よ？』
　銀色の瞳がふたたび開いてこちらを見る。こちらという概念が生まれたことに、いまだ形
をなさない未生の精神はわずかに振動する。通常であれば「驚き」と呼ばれるはずのそれを、
そうと認識するだけの感覚を、彼はまだ持たない。
『君の愛する仲間たちもまた、すでに選択した。生きること、存在し続けようとあがくこと
を。その他の存在たちもまたその火を消すことのないように、巨大な障害と危険が前方に横
たわっているのを知りながら、行動しようとしている』
　打ち寄せる波がなめらかな貝殻か、尖った砂粒のように、さまざまな感触のする光景を拡
散した意識に運んでくる……武装を整え、整列した戦闘服の男たちの前に、緊張したおもも
ちで立つほっそりした少女の姿。ピンクの髪と瞳のきりりとした女、ブルーの髪を三つ編み
にした明るい目の少年、昏く翳った碧の瞳をフードの下にかくした男。がっちりした体つき

の男が張りのある声で号令を発し、杖をついて眼鏡をかけた、やせぎすな男が、まぶしげな顔でそれを見ている。
「〈シヴァ〉はすでに、ニューヨークまで十五キロの位置まで到達している」指揮官らしきがっしりした男が呼ばわる。「いいか。この際、遺恨は捨てろ。もちろん攻撃されたら反撃する、だが、あそこに囲われている奴らもまた、〈協会〉に騙された被害者だということを思い出せ。あれもまた、われわれと同じく人間だということを思い出せ。攻撃の意志のない者、武器を持たない者に、無用の暴力や攻撃を加えることは厳禁だ。わかったか。わかったら、声をあげて応えてみせろ」
津波のように声が返ってきた。てんでに腕を突きあげ、足を踏み鳴らす男たちは、幾度も声を張りあげ、銃床を打ち鳴らして前に立つ者に応えた。指導者の男だけではなく、その後ろに立つ、片手で包んでしまえそうな小柄な少女にむかって、歓声をあげているのだった。少女はかつて人ならぬ〈女神〉だった。だが、ここで彼女は新たな人なる〈女神〉となっていた。戦いに赴く男たちが胸にその幻影を抱き、死ぬときはその幻に微笑みかけて死ぬことができる、母であり妻、姉であり妹、すべてを抱く唯一の娘。永遠に汚れなく、無限の愛と慈しみをもってともにある、生命と希望の象徴。少女は涙をこらえ、指導者の男の隣に、二人の〈ASURA〉に支えられながら立っていた。
「ありがとう……みんな、ありがとう」涙にかすれる声を必死に張って少女は言った。「でも、どうか死なないで。そして、できれば殺さないで。だれかが死ぬのはもうたくさんです。

だれも死なずに、そして殺さずに、みんな無事で、ここへ戻ってきてください。わたしもできるかぎり、みなさんのために働きます」
もう一度、大津波のような歓声が彼女を包んだ。感極まって両手で顔を包んだ彼女を、そばにいたピンクの髪の女性がそっと抱きかかえた。
「さあ、あたしたちも行きましょ」と彼女は囁いた。「みんなが外から侵入して目を惹きつけていてくれるわ。ゲイルの分身（エィリァス）が手伝ってくれるはず。〈ザ・シティ〉の崩壊は各都市に届いているはずだもの。安全を確保して混乱を収められるのは、あなたしかいない」
少女は小さくうなずいた。そして、もう一度手をあげ、群衆に向かって小さく振ると、ピンクの髪の女性とブルーの髪の少年にはさまれ、建物の中に姿を消した。あとからフードをつけた長身の男が、影のような動きでついていった。指導者の男は軽く肩越しに見送ったあと、兵たちに向きなおり、再び号令をかけた。広場は熱気に沸きかえった……。
一場の幻のように情景が溶け去る。荒野を見下ろす崩壊したハイウェイの高架上に、ひとりの男が黙して立っている。視線の先に、泡のようにきらめく都市のドーム群がある。ニューヨーク。風が男の鮮血の色をした髪を乱す。オレンジのマーキングが大きく描かれたグレーのマントが翻る。髪と同じ血の色をした瞳を地平線上の都市に据え、彼は、マントをなびかせながら、一気に二十メートル近い高さを跳躍する……
そしてまた、男の視線に導かれるように、都市の内部へと情景は切り替わる。かつて（かつて？　かつてとはいつのことだ？）見た都市の平穏と繁栄はあとかたもない。パニックに

陥った人々が叫びながら右往左往し、音楽と笑い声がこだましていた街路は引き裂かれた布や折れた樹木、ゴミや汚物、破壊されたサービターの残骸が散乱する場所となりはてている。明るく照らされていた店舗は見る影もなく、表のドアは破られ、ガラスは砕かれて路上に散乱している。商品や備品は投げ散らかされ、奪い去られてほとんど残っていない。かすかな悲鳴と泣き声が、照明が切れて薄暗い死んだ街のどこかから、かぼそく聞こえてくる。

彼は知る——現在の、あらゆる場所と時に遍在する視点である彼は、因と果のその関係を時間にとらわれることなく観る。この荒廃の前に起こった混乱を。

〈ザ・シティ〉の消滅は、その中央ネットワークに接続していた〈協会〉のドーム都市ほとんどの機能停止を意味した。それまで享受していた快楽と安逸をとつぜん取り上げられた市民たちは怯え、憤慨し、庇護者たる〈協会〉に対して説明を要求した。

だが、その〈協会〉員たちは、市民を上回る恐慌にみまわれていた。中央都市であり、〈協会〉体制の心臓部である〈ザ・シティ〉の突然の消滅、テクノシャーマンと指導者たるマダム・キュヴィエ、エンジェルの失踪、そして、〈ザ・シティ〉のシステムに依存していた都市機能の停止。

続いて、〈ザ・シティ〉消滅の原因と、その〈原因〉が、次の目標をニューヨークに定めたらしいことを知って、彼らは完全に統制を失った。都市防衛のために備えられていた戦闘機が次々と出され、あるだけのミサイルが発射され、配置されていたアートマ兵たちが全員繰り出されて〈原因〉の前進をはばもうとした。

それらがすべて無駄に終わったことを目の当たりにしたとき、これまで都市の管理官としての任を担ってきた者たちは、完全にその任務を放棄した。
ある者は自分だけ逃げだそうと外部への脱出をはかり、同じ考えを抱いた者同士の日光に対する防護服の奪い合いで、血みどろの争いが繰り広げられた。このために、ただでさえ人数分は備えられていなかった防護服の半数は使い物にならなくなり、外へ逃れ出た人間も、仲間に背後から攻撃され、あるいは破損した部分から侵入した陽光に晒されて、悲鳴をあげながら都市のすぐ外で結晶化した死体となっていった。
この様子は外部モニタを見ていた市民たちにも流れ、彼らもついに、これまで住んでいた心地よい箱庭に何か恐ろしい変事が起こっていることを知った。争乱が起こり、拡大した。事態の詳細を求めて、おとなしく飼育されていたはずの市民たちは忘れていた攻撃性を発揮し、ガラスを割り、公園の椅子を投げつけ、店の商品や備品を略奪した。制止するべきサービターは、〈協会〉施設に配備されたものと違って、基本的に市民への攻撃を許されていない。『市内での逸脱行為は認められていません。落ちついて、職員の指示に従ってください』と、調子ばかりは落ちついた電子音声を発しながら、次々と押し倒され、踏みつけられて、スクラップの山になっていった。
その上に、自暴自棄になり、せめて自分たちだけでも都市にこもって生き残ろうと考えた〈協会〉員の一団がなだれこんだ。彼らは武器を持たない市民たちの上に立ち、混乱する彼らを武力で制圧しようとした。

ほとんどの市民は震え上がってそれに従ったが、それでも、中には気の強い人間、怒りと恐怖にかられるまま団結して反抗を試みる者がいた。小さな火種は、パニックと群集心理にあおられてあっという間に大きくなった。

〈協会〉員の持つ最新式の火器や攻撃型サービターに対して、彼らには、数という強みがあった。怒鳴り叫び、銃器を乱射する〈協会〉員の周囲から忍び寄り、数を頼んで襲いかかった。十数人がたちまち肉片に、あるいは黒焦げになって倒れたが、狂気に駆られた群衆はもはや止めることなどできない。

凄惨な殺し合いが繰り広げられた。戦いとも呼ぶことのできない、単なる狂気の所行だった。武器を奪い取ったくしゃくしゃのスーツの男は高笑いしながら〈協会〉員の頭部を後ろから銃で吹き飛ばし、次の瞬間、別の人間が放ったレーザーに胸を貫かれてその場に倒れた。身体に手榴弾と拳銃を山のようにぶら下げた〈協会〉員は泣きわめきながら手当たりしだいにあたりの人間を射殺していた。組みついてきた市民を殴り倒し、勝ち誇った顔で立ち上がったが、もみ合うはずみに懐の手榴弾のピンが一本引き抜かれていたことに気づかなかった。彼はその場で爆発して、あたりの何人かをまきこんだ血肉の霧と化した。

汗まみれの顔に目ばかりぎょろつかせた〈協会〉員が髪をつかまれて引きずられていき、昔ながらの方法で、街灯につるし上げられた。首を絞められ、紫色の舌を吐き出したその顔と、尿をしたたらせながら空を蹴る脚に、周囲を囲む群衆は手を叩いて湧いた。

店の奥に隠れていた女が、数人の男たちに引きずり出されてきた。ドレスも破れ、髪も崩

れたその女性は怯えきって身を縮め、やめて！　何をするの！　と叫び続けていたが、だれ一人、その哀願を耳に入れはしなかった。

うすら笑いを浮かべて周囲を囲む男たちは、ほんの昨日まで、紳士として、正しき市民として礼節を守る、選ばれた人々のはずだった。その人々が、今や獣性をむきだしにし、涙と恐怖にゆがんだ女の顔に愉悦の視線さえ向けて、卑猥な言葉で口汚く罵りながら、自分の衣服の前をまさぐっている。

女のドレスが引き裂かれ、胸があらわになった。歓声を上げてその上に覆いかぶさろうとした男の頭部が握りつぶしたリンゴのようにはじけ飛んだ。飛び散った脳漿と血のシャワーを浴びて女は絶叫し、その場から這って逃げた。ほかの男たちは振り返り、そのままの姿勢でバラバラ死体となって、四肢を街路に散乱させた。

隠されていたゲートが開き、これまでは地下の〈協会〉施設の警備にのみ使用されていた真珠色の攻撃用サービターが、続々と現れてきた。先頭の数機のマニピュレータはすでに血にまみれ、開放された銃口は赤く熱していた。

彼らは人間を攻撃することを禁じられていない。争乱者であれば誰であろうと、排除する。それが〈協会〉員であろうと、一般市民であろうと、区別はない。

戦闘用サービターと〈協会〉員、そして武器を奪って身につけた市民による、もはや誰が敵とも味方とも不明の乱戦が、荒廃したドーム都市をさらに荒れ果てさせていった。戦うことのできない女や子供はただ逃げまどい、いきなり襲ったこの異変を理解できずに、救いを

求めて〈神〉に祈るしかなかった。
おお〈神〉よ、〈協会〉の奉じるわれらが〈神〉よ、われわれは選ばれた民ではなかったのですか？ 次の段階に進化するために多くの中からより分けられ、大切に保存されるべき、新たな人類の種子ではなかったのですか？
だが〈神〉は応えず、救いはこなかった。女は隠れ場所から引きずり出され、子供は泣き叫びながら暴力の餌食になった。一度解き放たれた人々の凶暴性はとどまるところを知らなかった。戦闘用サービターでさえ、彼らの狂気の前には、しだいに押されはじめていた。叫喚、悲鳴、罵声、野蛮な哄笑とそれに重なる号泣、銃声と爆発音。少しずつ拡がっていく煙と炎は、閉鎖されたドームの空気を徐々に濁らせ、強烈な陽光の熱とあいまって、内部の気温を上昇させつつあった。
『……同じようなことがほかの都市でも起こっている』
告げられなくとも〈彼〉には観えていた。〈協会〉が抱えるいくつものドーム都市、そのほとんどで、この悪夢の情景が繰り広げられていた。いつまで経っても〈協会〉の指導者、偉大なるカリスマであるマダム・キュヴィエが姿を現さず、連絡もつかず、その所在すらつかめないことが、混乱に拍車をかけていた。彼女が、〈協会〉員でさえほとんど存在を知らないある場所で、養い子である天使(エンジェル)によって殺害されていることを知る方法など、誰にもなかった。〈彼〉以外には。
かっと目を見開き、永遠の嘲笑を顔に貼りつけたまま壁にもたれているマダムの死体を、

〈彼〉は観た。その前に放心したように立ちつくすエンジェル、その拳銃から立ちのぼる硝煙の臭いすら感じられた。その背後で叫び交わす〈協会〉中枢員に向かって、彼／彼女（ヒー・シー）がゆっくりと振り向くのも観た。その手に光る、小さな虹色のチップも。

『どこもかしこも混乱と闘争、そして血と死』

静かに声は言った。猫。銀色の目を静かに閉じ、もの思うようにうなだれる。首の鈴がふたたび、小さくチリンと鳴った。

『そう、ジャンクヤードでさえ、これほどの混乱を生んだことはなかった。少なくとも君たちがアートマを得、人間としての自我を目覚めさせるまでは。

獣性とは人間にのみ宿るものだと思うかね？　少なくともインパラを襲うライオンは、それを罪だとも、悪だとも感じないだろう。彼らは喰うためにのみ他者を殺す。ただ殺すために殺すのは人間だけだ。おのれの欲望、不満、怒りのはけ口、または信条、人種、利害、その他さまざまな理由のもと、彼らは自分と同じ種族を嬉々として殺戮する。人間にはそれを悪と認識し、罪であると感じる部分も備わっているというのに。

もっとも、それであるからこそ、彼らはそうした昏い部分に獣の名をつけ、狂気とし、暗黒の者として隔離したがるのかもしれないね。見たくないものは自分と切り離して、ないものとしてしまうのがいちばんだから。悪魔！　人喰いの、人殺しの悪魔！　彼らがそう呼ぶのを、いつか君は聞いた。だがその彼らが今、悪魔である君たちすらやらなかったことを、堂々とやっている』

〈彼〉は宙匝のあらゆる場所で繰り広げられる殺戮と死を観た。ここと今ばかりでなく、過去、そしてすべての可能性における場所で流される血と惨苦の大海が、酸のように触れるのを感じた。
それは言語を超越したおぞましい愚行の羅列であり、そここそが、地獄であった。この永遠のやすらぎの大海にあっては、あまりに遠い場所に感じられる出来事でもあった。いったん凝集しかけた〈彼〉の存在は、深い疲れを覚えた。そしてまた、少しずつ散り、非存在という悠久の無の中に、もどっていこうとした。
『……だが、人間というおのが悟性を保ち、善たろうとすること、人として、過去や信条はどうあれ、同族として救いの手をさしのべようとする者も、やはりいるのだよ』
再度拡散していこうとする意識を、鈴の音とおだやかな声がふたたび呼び戻す。
『ごらん。仲間がいる。君の、仲間たちだ』
混乱の巷と化したニューヨークの街路に、とつぜん光が灯る。
薄暗がりの中で狂気の所行を働いていた者たちは、いきなり明るい光の下に引きだされ、血に染まった自らの手を目の当たりにして、愕然とする。あわてて頭をあげると、そこには、同じく目を血走らせ、肩で息をし、返り血やすすで汚れた顔が、殴りつけられたようにこちらを見つめている。
そこにあるものとそっくりな表情をまた、自分も浮かべていることに唐突に気づいて、彼は、膝の崩れるような衝撃を覚える。頭を抱えてすすり泣いていた犠牲者がふいに攻撃がや

んだことに気づき、腫れあがった目をあげて、小さく声をもらす。つられたように視線をあげた彼らも、同時に驚きの声をあげる。

——……ますか。聞こえますか、ニューヨークのみなさん。

——わたしは、セラフィータ。テクノシャーマン・セラフィータです。

半壊した広告用モニタが生き返り、ひとりの少女の顔を映し出している。黒い髪を短く切り、カーキにオレンジの差し色をつけたジャケット姿の彼女は、真剣な顔をカメラに向け、突き通すような強い瞳で見つめていた。

——どうか、安心してください。武器から手を離してください。

——わたしは、あなたがたを助けに来ました。市民のみなさん、どうか落ちついて、わたしの言葉を聞いてください。

「テクノシャーマン……」

誰かがぽつりともらしたつぶやきは、しだいに大きくなり、波となり、割れんばかりの歓声となって、都市全体に拡がっていった。

「テクノシャーマン！　テクノシャーマン！　テクノシャーマン！」

——今、わたしの仲間が、一時的に都市のネットワークを掌握しました。

言葉とともに、まだ動いていた戦闘用サービターが、次々とその場で活動を停止した。今にも首を刈られそうになっていた男が、急にゆるんだ捕獲肢からあわてて抜け出す。傾いたサービターはそのまま、おもちゃのように横倒しになった。

少女の顔はあらゆる場所にあった。街路に面したモニタはもちろん、商店のショウウィンドウの投影式ガラスモニタにも、壊れたサービター上面のタッチパネル式モニタにも、サンセット・タイムに使用されていたドーム内壁の大型モニタにも、市民の持つデータパッド上にも、一般家庭のレクリエーション・モニタにも、破壊されて放置された車輛の小さなナビゲーション用モニタにまで。

—サービターを機能させていた防衛システムは停止しています。現在、ドーム内にこもった有毒ガスと熱を排出中。発電機能を復帰させています。また、鎮火活動も始まっています。市民のみなさんは動かずに、その場で待機していてください。危険はありません。どうかみなさん、落ちついて、わたしの話を聞いてください。

薄汚れてはいるが、統制のとれた動きの一団が機敏に人々のあいだに入りこみ、引き分け、力の抜けた手から武器を取り上げた。傷ついて立ち上がれない者には手を貸し、大声で仲間を呼び寄せて手当のために運び去らせた。垢と髭におおわれ、厳しい顔つきをした男たちは、少女の声が流れる中きびきびと動いて、茫然と立ちつくす群衆をほどき、幼児の手からマッチを取り上げるように、武装解除を行った。

——彼らは地下コロニーの義勇兵、〈ローカパーラ〉の人々です。

わずかに抵抗しようとした者の頭上に、少女の言葉がなだめるように響いた。

——彼らはあなたがたに危害を加えません。今、あなたがたがここで争っても、何の意味もありません。〈ザ・シティ〉を消滅させた者が、こちらに接近しています。争っている時

間はありません、みなさんの避難が先なのです。どうぞ時間を無駄にしないでください。その人たちが、みなさんを安全な場所に誘導します。
――怪我をしている人は、声を上げるか、近くの人に助けを求めてください。治療班が待機しています。繰り返します、どうか落ちついて、指示に従ってください。危険はありません。わたしはテクノシャーマン・セラフィータ、みなさんを助けに来ました……。
白日のもとにさらされた自分たちの暴虐の跡に、市民たちは魂を抜かれたようになっていた。曲線を描く街路にはいくつもの奇妙な果実が――縊られた死体がぶら下がり、赤紫に膨れあがった舌をはみ出させて揺れている。見慣れた美しい街は見る影もなく、石畳は剥がされ、花や木は燃やされて、焦げた木ぎれがあたりに散乱している。血のついた石くれを握りしめていることに気づいた男が手に目を落とし、ぎょっとしたように放り捨てて、手のひらについた血をズボンにこすりつけて拭こうとした。だがそのズボンも、上着も血をたっぷりと吸っており、手はいっそう赤く染まった。もがくように何度もこすりつけるうちに、男は地面に横倒しになり、全身にこびりついた汚れをこそげ落とそうとするかのように、頭を抱えて叫びながらのたうち始めた。
〈ローカパーラ〉の兵たちがすばやく寄ってきて、狂乱する男を抱え上げて連れていく。虚空に据えられた男の目は何も見ていなかった。紫色に変わった唇が震えて、「僕じゃない」と呟いた。「僕じゃない……僕じゃない……僕は……僕はこんな……」
連鎖反応のように、あちこちで嘔吐する者が出た。誰もが自分自身の行ったこと、その正

体を、目の前に突きつけられていた。善良な市民、〈神〉と〈協会〉に選ばれし選良であるはずの自分たちがやってのけた、人間そのものの、狂気と残虐の嵐の跡を。武器をそっと取り上げられながら、路上にくずおれて祈る者もいた。頭を抱えて丸くなり、小児のように泣きじゃくる者も。

また逆に立ち上がり、虐待者に駆け寄って拳を振り上げる者もいた。目のまわりを青黒く腫らし、引き裂かれたドレスをかろうじて肩から引っかけた女が、手近にいた男にわめきながら殴りかかろうとした。

「畜生！　畜生！」〈ローカパーラ〉の者に引き留められても、女は唾を飛ばし、顔をゆがめて、茫然と座りこむ相手を蹴ろうとしていた。「離してよ！　あいつらが、あたしにしたことを見て！　殺してやる、こんな奴ら、何が市民よ、みんなみんな、あたしを殴って、好き勝手なこと――」

女の乳房はむき出しになり、胸といわず腹といわず、擦過傷や痣で覆われていた。流れたマスカラが頬に黒い筋を作り、怒りにひきつった顔をまるで人間のものではなくしていた。白い両股を血と精液が流れ落ち、破れたストッキングは紐にされ、足首に紫色の痣を作るほど、かたく巻きつけられていた。むせび泣きながら女は連れ出され、待機していた医療班の手に託された。

略奪した品物をポケットいっぱいに詰めこみ、〈協会〉員から奪い取った拳銃やナイフを腰にずらりと吊していた男が、叫び声を上げて無我夢中で駆けだそうとした。〈ローカパー

ラ〉の男たちが追いかけたが、手が届くより早く、男は、拳銃の一丁を耳に当て、自らの脳味噌を吹き飛ばした。紳士然とした恰幅のいい、上品なスーツ姿の身体が、他人の血の上に自らの血をまとってガラスの破片の上に倒れた。死の痙攣が太い指を引きつらせ、血の飛び散ったガラスに新たな血文字を書いた。

「あんたたち……本当に、地下コロニーの人間なのか」

戦闘服の男が跪いた青年を立たせると、彼は夢の中のものを見るような目を向けた。信じられないもの、というより、存在していることすら知らなかったものを目の当たりにした、そんな怯えと不信の入りまじった視線だった。

「コロニーの人間なら、どうしてテクノシャーマンがあんたたちといっしょにいる。どうして、僕たちを助けるんだ。〈協会〉はどうなった。〈ザ・シティ〉は。いったい、何が起こっているんだ」

「いずれ、あんたたちも知ることになるだろう。だが、ここで話すことではない」

褐色のそげた頬を無精髭に覆われたその男は、慣れた手つきで青年の身体検査をし、武器の有無を確かめてから、そばにいた部下に押しやった。

「俺たちは、彼女の名のもとにあんたたちを助ける。彼女と、彼女のために命を捧げた者の名のもとに。セラ、そして〈エンブリオン〉のサーフ。彼女は人間すべてを、破滅から救おうとしている。俺たちも、あんたたちも。〈協会〉のように、あれとこれとを区別することなく、人類みなを、平等に」

―サーフ？　〈エンブリオン〉？」もつれた巻き毛を汗で額に貼りつかせた青年は、面食らったように目をしばたたかせた。「それはいったい何なんだ？　あの少女はテクノシャーマンなんだろう？　〈エンブリオン〉というのは何のことだ。サーフとは……」
だが男はすでに青年から離れて歩き出しており、混乱と疑問を抱えたまま、青年は〈ローカパーラ〉兵に導かれて、徐々にまとまりだした人々の中へ連れこまれていった。
「俺はロアルド・セス。〈ローカパーラ〉の指導者で、以前は〈EGG〉の職員として働いていた」
地下に集められた人々の前に現れたのは、杖をつき、足を引きずりながら、それでも毅然とした態度をくずさない男だった。疲れた顔をしていたが、痩せた肩には奇妙な威厳がマントのようにまつわっていた。壊れた眼鏡の奥から、身を寄せあう市民たちを見回して、彼は声を張った。
「〈ザ・シティ〉を消滅させたのは、〈協会〉から離反した、ある非常に強力なアートマだ。その対処にはテクノシャーマンと、彼女の仲間たちが当たる。だが、戦いになれば都市にどんな影響が出るかわからない。あんたたちにはひとまず、危険が及ばない場所まで避難していてもらう。彼女たちが心おきなく戦うためにも、それが必要なんだ」
「モグラどもの頭目が、何を言ってるんだ」後ろのほうから元気のない、だが苦々しげな言葉が聞こえた。「そんな口実を使って俺たちを追い出して、ニューヨークを乗っ取ろうとしているんじゃないのか？」

ロアルドの後ろから若い兵士が飛びだし、止める間もなく言葉の上を押し倒した。喉元に銃口を押しつけられ、喉を鳴らした男はたちまち顔色を失って縮こまった。

「調子に乗るなよ、豚どもが」押し殺した声で若い兵士は言った。「おまえたちのせいで、これまでどれだけの仲間が死んだと思ってる。おまえたちの飼ってる悪魔のエサのために、どれだけの女や子供が――」

「やめろ、ジャン」すぐに集まってきた兵士たちに、若者は引き離された。市民の男はむせながら起き上がる。ロアルドが杖をつきながらやってきて、怒りに震える若い兵士の腕に軽く手を置いた。「おまえの気持ちはわかる。ほかにも、おまえと同じ気持ちの者はたくさんいるだろう。だが、今は耐えろ。許すことはできなくとも、ひとまずその気持ちは胸におさめておけ。彼女たちが戦おうとしている。われわれの任務を思い出せ」

「――セラ……」顔をゆがめながら若い兵士は呟いた。

「そうだ、セラだ」とロアルドは語気を強め、もう一度若者の腕をゆさぶった。「それからサーフ。彼らのことを考えろ。彼らは区別なく人間を救おうとした。そして今も。だから、俺たちはその邪魔をしてはいけない。耐えろ、そして考えるんだ。自分が今、何をすべきかを。サーフと、セラたちのために」

『サーフとは何だ？　何者だ？　誰のことだ？』

静かな水面に投げられた石のように、その質問は永遠の平穏を揺らめかせ、波を立て、見えない波紋を虚空に広げていった。〈彼〉はどこか深いところ、非常に遠いが、同時にきわめて重要な部分を、糸で引かれるように感じた。非存在の深淵は震えわななき、おののく〈彼〉の、未生の存在もともに揺れ動いた。その奇妙な、だがきわめて強い印象をもつ音の連なりは、あらがいがたい力で〈彼〉を引きつけた。

——サーフ……。

『そう、サーフ。それが誰か、君は知っているはずだ。誰よりも詳しく、近しい存在として』銀色の目の猫は優雅な仕草で足を組み替えた。『ああ、だが、その名で規定された存在に戻ることには、大きな苦痛と代償が必要だろう。この永遠のやすらぎの岸辺から引き離されることは言うにおよばず。だが、一方で君にはまた見えるはずだ。さまざまに広がる未来の可能性、それが、君の選択によって、いくつかのごく少ないパターンに分かれていくのを。仲間たちの生死は言うにおよばない。〈シヴァ〉は強力だ。直接対峙しても、おそらく彼らは勝てない。だが、彼らは最後まで戦うだろう。君の仲間たち。〈エンブリオン〉のメンバー。アルジラ、ゲイル、シエロ、そして、セラ』

——セラ……。

その名前は彼の視線をひとつの情景に引き寄せた。〈ローカパーラ〉の兵たちが市民を避難させている一方で、一団の男女が、都市の奥深くの閉鎖された一室に集まり、緊張した空気の中で作業を進めていた。

灰色の機器類に囲まれ、おびただしいモニタリング機材とジャングルの蔦のように垂れ下がるさまざまな色のケーブル類の真ん中に、体圧分散型の可変カウチが据えられている。椅子につく者の体型に合わせて形を変えるそれは、現在、ひとりのきゃしゃな少女を内部に包みこんでいた。ヴァイザ型モニタがおろされ、スモークカラーの内側でちかちかと光がまたたいている。

肘掛けにおかれた手がときおりぴくりと引きつる以外、少女はほとんど動かなかった。ピンクの髪の女、ブルーの髪をした少年が心細げな顔をしてそばにつき、碧の髪をした男が王女に仕える持者のように、カウチの前に跪いている。だが、男の顔は、うやうやしさや従順さとはほど遠い。刺すような視線にはいたわりなどかけらもなく、ただ行われていることを無感情に見守っているばかりだ。

カウチから伸びた二本のケーブルが彼の耳の後ろに繋がれ、わずかな照明に揺れている。少女が小さく手を動かすたび、ケーブルが生き物のようにひくつき、同時に、男の顔にもかすかな痙攣が走る。だが、それだけだ。少女のあえぐような呼吸音と、時折のかすかな衣擦れ以外、部屋の静寂を乱すものはない。この部屋の唯一の主、部屋の真正面の壁面に大きく口を開けたそれ、虹色の光がくるめく、異世界の扉を思わせる空間の、ほとんど聞こえないほどの低い唸り以外には。

『〈EGG〉へのゲートだ』と猫が言った。『彼女は苦しんでいる——だが、やめようとはしない。現在の彼女の能力では、〈EGG〉と同調することは苦痛以外の何物でもないだろ

らに。かつて地下を埋めていたスーパーコンピュータ群の代わりに、参謀型パーフェクト・アスラがバックアップについている。彼は能力の一部を都市ネットワークの再構築に振り分け、放った分身を走らせながら、残ったほとんどの能力を、〈EGG〉の再起動とそのインタフェースの接続に傾けている』

彼女が何をしているのかは〈彼〉にも明らかだった。遍在する視点である〈彼〉の認識をまぬがれるものは何もない。超コンピュータ〈神卵〉インタフェースとして、彼女は目前のゲート——〈EGG〉本体につながるアクセスゲートを通して、〈EGG〉に、ひいては〈神〉に接続し、その演算能力を引きだして操っているのだ。

だが、〈神〉は狂気に陥り、地上の中継所である〈EGG〉もまたその影響をまともに受けている。彼女がしているのは、あえて言うならば、耳を聾する雑音の巨大なもつれに混じった、壊れた音をひとつひとつ拾い上げ、楽譜通りに並べ替えて、ゆがめられた音を調律し、まともな音楽として作り直すことに似ている。

むろん、これは正しい比喩ではなく、少しでも共通した作業をきわめて低いレベルでいいあらわしたにすぎない。荒れ狂う〈神〉の情報の激流をつかんで制御し、多少なりとも情報機械として正常なはたらきをさせることは、暴れ狂う馬に鞍もなにもなしで乗り、はみも手綱も使わず、ただたてがみ一本をつまんで乗り回す以上の技術と集中力、人間を越えた高度な情報処理能力が必要だった。

彼女はそれをやり遂げていた。都市のネットワークに自らの映像と談話を流すかたわら、

接近する〈シヴァ〉の探知と対応に全力を注いでいた。バックアップについている二人の〈ASURA〉たちは、数百台のスーパーコンピュータをはるかに上回る演算能力をその身に有していたが、彼らが支えていてさえ、少女の細い身体と神経系統にかかる負担は、破綻に陥る手前ぎりぎりのところだった。

肉体的な苦痛は言うまでもない。カウチの肘掛けで少女の指が引きつり、ねじれ、上張りの皮革を引き裂かんばかりに爪をたてるのを、ピンクの髪の女が気がかりそうに見つめている。彼女の頬も引きつり、その瞳は爛々と金色に輝いている。ブルーの髪の少年は少女の足もとに座りこみ、その手を取ってうつむきながら、小さな声で励ましらしきものを呟いている。だがそれも途切れがちで、青い髪の垂れかかった肩が苦痛にこわばるのを、隠すことまではできていなかった。少女の手が空中を掻くのを、探りとってぎゅっと握りしめる。額に押し当て、譫言のように何事か囁くあいだにも、閉じたまぶたの下からは、ピンクの髪の女と同じ、金色に燃える瞳の光が、抑えようもなく漏れ出ていた。

溢れ出す大量のデータフローにつられて、〈彼〉の視点はまた別のものを映した。赤い髪の男が近づいてくる。着実な足取りで、ゆっくりと、荒野に点々と死と破壊の跡を残しながら、接近してくる。

赤いその瞳はむしろ穏やかに透明で、指呼の間にせまるニューヨーク市のドーム群、泡のように虹色に輝く都市の群れを無感動に映していた。もはや抵抗する人間もいないのか、都市からの攻撃はない。彼は退屈げにまばたいただけで、静かに両手をかかげた。手のひらの

間に灼けつく白熱の球が生まれ、急速に巨大化していった。人間の頭部の大きさを超え、小型の恒星めいたまばゆさをあたりに広げながら、ドームを白い光の中に包みこもうとしたとき――

唐突に、光は消滅した。赤毛の男はわずかに眉をひそめ、あげた両手を下ろして、手のひらを見た。そしてもう一度、白熱する死の光球を作り出そうとした。できなかった。ちかりと小さな光がまたたいただけで、何も起こらない。

『ヒート。そこにいるのね』

さして慌てるでもなく、両手を見比べていた彼の上に、凛とした少女の声が響いた。彼は手から目を上げ、そびえるドーム群に視線を移した。透明な、何も映していないかに見える赤い瞳が、何かを探すように都市の間をさまよった。

『聞こえているでしょう、わたしよ。セラ。今、わたしはこのニューヨークにいて、ここのゲートを通じて〈EGG〉と接続しています。みんなもいっしょよ。ゲイル、アルジラ、シエロ。〈エンブリオン〉のみんなが、ここにいるわ』

男はもう一度まばたいた。鎮まっていた赤い瞳に、初めて、わずかな動きがあらわれた。それがいかなるものであるかは、男自身にしか理解できなかった。彼は両手を垂らし、ぎらつく黄色い空と、黒い太陽を見あげた。どっと吹きあげた風が、真紅の髪と長いマントを激しくはためかせた。

『今、あなたの〈シヴァ〉の能力は、わたしが〈EGG〉を通じた〈神〉の力で抑えていま

す。〈ザ・シティ〉でやったようなことを、ここであなたにさせるわけにはいかない。関係のない市民たちを巻きこむのはやめて。お願い、わたしたちは、あなたと話がしたいの。なぜ〈協会〉に属したのか、なぜ〈アグニ〉を捨てて〈シヴァ〉を受け入れたのか、なぜ、サーフを――殺したのか……』
男の赤い眉がかすかにぴくりとしたが、それ以外、彼は無表情を保った。
『話を聞かせて、お願いよ。それでももし、どうしても戦うというなら、直接、わたしたちのところに来て。どこにいるかは、あなたにもわかるはずよ。〈ザ・シティ〉のように、市民ごと灼かせるようなことは何があってもさせない、でも、直接あなたがわたしたちのところに来るというなら、そして、戦いに他人を巻きこまずにおくというのなら、わたしは、あなたに殺されてもかまわない』
――セラ！　なにを言うの！
ピンクの髪の女が声にならない声をあげる。バックアップとして参謀型(ビショップ)AIにボディの能力を援用され、増設ユニットとして本人に扱える以上の情報処理を行っていても、彼女にとって大切な少女が、殺意を抱いているとわかっている敵に自ら身を投げだすのを見過ごすことはできないのだった。
『本当よ』少女は女の制止を無視して続けた。『あなたと話がしたい。ここへ来て、ヒート。でなければあなたの目的は、理由がなんであれ、絶対に達成されない』
男はしばらく彫像のように動かなかった。黒い太陽の光が、空の毒々しい反射光が、彼の

影を人の形をしたクレーターのように黒々と大地に刻んだ。それが永遠に消えなくなったかと思われるほどの時間が経ったあと、やにわに彼は姿を消した。巻き上げられた塵埃と砂埃が渦を巻き、そこにいた何物かの存在をかろうじて示唆していた。

これらを見つめる〈彼〉の視点は動揺し、静寂は音も存在もない波に揺られて悶えた。赤毛の男が何者なのか、黒髪の少女が、ピンクの髪の女が、ブルーの髪の少年が、碧の眼を伏せた男が何者なのか、問いかける明確な動きが、その希薄な存在の中に生まれた。

自問自答するには少なくとも問いかける『我』と応答する『汝』の二人が必要だ。永遠に一なるもの、永遠に遍在する非存在に同化していた、〈彼〉の希薄な存在はいやおうなしに凝集し、いまだ明確ではないが、問いかける『我』のぼんやりした記憶が、非存在の海に結晶しはじめた。

——あれは誰だ？　あれらの存在は、なぜこれほど動揺を与えるのか？

——これ——自分——俺は、何者だ……？

『近づいてきたようだね』

猫の鈴が鳴る。黒い猫はまたたきもしない銀色の眼で、非存在の薄明の奥で懊悩する未生の精神を正しく見据えていた。

『そう、君は誰だ？　何者だ？　もちろん、その問いを忘れ、もう一度感覚を閉じて、存在しない可能性の海に戻っていくこともできる。それを止めることはできない、それもまた君の選択の一つだから。だが、君はもう、彼らの姿を見てしまったね。彼らが自分にとってど

んな存在だったかも、思い出そうとしているはずだ。
それ以上進むともとに戻れなくなるよ、警告しておくが。君はいま、非存在と存在の境界の危険な波打ち際にいる。そのままそこにとどまっていれば、いずれ打ち寄せる暗黒の波が君を疑問ごと引きさらっていってくれるだろう。だが、それを望まないならば、君はいかなる苦痛を耐えしのぼうとも、そこから這い上がり、もう一度存在することを選ばなくてはならない。現実世界に干渉することは、物質的であれ非物質的であれ、一個の〈存在〉に戻ることが必要だ。君はそれを望むか？　この永劫のやすらぎの岸辺を去り、もう一度、あの戦いと苦痛のはびこる世界に戻る気が、君にはあるか？』
〈彼〉はほとんど猫の言葉を聞いてはいなかった。〈彼〉の、あらゆる場所に散らばっていた視点はただ一点に収束されていた。赤毛の男がニューヨークのきらめくドームを蠟細工のように溶かし去り、無人の荒れた街を見回して眼を細めるさまを。足もとに転がった死骸を無造作に踏みにじり、首を回して何かを探すように鼻をひくつかせるさまを。ひとつのモニタがぱっと点灯し、そこに黒髪の少女の顔が映し出されるさまを。
『施設を不必要に壊すことはしないで。市民たちはいずれここへ戻ってくる。わたしがナビゲートするから、それに従って、ヒート。大丈夫。逃げ隠れはしないわ』
モニタは消え、かわりに、路傍に転がっていた戦闘用サービターの一機が軋みながら起動する。折れた作業肢をもつらせながらなんとか起き直ったサービターは、軋りながら向きを変え、赤毛の男の前へ来て止まった。

真珠色の外装はすっかり煤け、瑕だらけになっていたが、多少の機能はまだ残っていた。サービターはいくつかの電子音を鳴らし、くるりと一回転すると、赤毛の男の先に立って、破壊された街路をがたつきながら進み始めた。しばらく立ちつくして見送っていた男は、やがてゆっくりと大股に、サービターのあとを追った。

『どうするね？』

猫の声はどんなことを勧めてもいなかった。それだけに、少しずつ濃密さを増していく〈彼〉の存在にとっては、惑乱と懊悩を誘った。〈ヒート〉と口にされたその名が、混乱をいっそう深めた。彼について告げなければならないこと、誤解を解かなければならないことがあるという考えが、掘削ドリルのように侵入してきた。

それはあまりに大きく、抜きがたく、苦痛にも似た強烈な衝動だったので、〈彼〉は身震いし、呻き、そうすることによって非存在の波打ち際から、また少し我が身を引きずり上げた。サービターに先導されて黙々と都市を進む赤毛の男の姿は、〈彼〉自身の、霧の中に失われた記憶を刺激した。〈自分〉もあれと同じように、あの機械に先導されて、あの都市を歩いたことがある……。

『彼の意志は強固だよ。赤毛の彼の心はね。何があっても、どんなことをしようと、少女と仲間たちを消滅させると決意している』猫はどこか哀しげだった。『それが何故なのか、観えるかい？　観えるだろう、今の君なら。本当は自分が手を下したわけでもないのに、君を殺したと仲間に告げた理由も、わかるはずだ。彼の心。彼が何を考え、何を決意して、今の

道を選択したのかも』
そう、観えていた、〈彼〉には観えていた。あの赤い髪の男の心のうちが。その無口な、無表情な顔のうしろで、どんな想いが渦巻いているのか、〈彼〉にはようやくわかった。それはほとんど物質的な衝撃として〈彼〉の全存在を揺り動かした。
止めなければ、という意志が、大地に立つオベリスクの強固さと巨大さで〈彼〉のうちに屹立した。彼らを止めなければ。彼らが戦うのをやめさせなければ。戦う理由など何もないのだ。ないはずなのだ、彼らには――彼、には。あの赤毛の男、〈ヒート〉という奇妙に心騒がせる音を響かせる男に、これ以上、重荷を背負わせることはできない――たとえ彼が、望んでそうしているのだとしても、とても、放ってはおけない。
その強烈な意志がついに、〈彼〉を非存在の海から完全に引きずり出した。虚無の暗黒に、銀色の髪と瞳がにじむように現れた。中性的な細面のととのった顔立ち、グレイのトライブスーツの胸にひと筋刷かれたオレンジカラー、白い頬に刻まれたウォータークラウン。〈ヴァルナ〉。水の王の力の徴。それはわずかに発光し、無の薄闇を、ほのかな蒼白い光で照らしだした。
『ああ、ようやくまた会えたな、眞。――螢。いや、違うな。君はそのどちらでもない』
別の声がした。猫の、性別を感じさせないものではない、はっきりとした若い男の声。
〈彼〉は振り向き、振り向くという動作をまったく新しい感覚で感じとった。そうと意図しなければ、ここでは何事も起こらない。肉体のパーツのひとつひとつ、自らを構成するあら

ゆる要素が、自分自身の意志のもとに動くという感覚、物質世界で身にまとっていた存在の幻をふたたびまとうのは、きわめて奇妙な驚きだった。
　背後に、白衣のポケットに手を入れ、かすかな笑みを浮かべている男がいた。長身で体格がよく、髪は赤みを帯びた銅色で、わずかに光って見える。穏やかなその瞳で見つめられたとき、形をとったばかりの〈彼〉の心臓は、大きく跳ねた。
　――まさか。いや、違う、髪の色も、目も、あの男のものではない。しかし……
『君にとっての眞、あるいは螢、にあたる存在と名乗ればいいのだろうな』男はゆっくりと言った。『ここでは名前は意味を持たない。だが、習慣というのは忘れられないものらしいな。自己紹介しよう。俺は一幾という。穂村一幾。君の知る〈ヒート〉の姿の原型(オリジナル)となった、人間だ』

4

〈シヴァ〉の圧倒的な気配が接近してくるのは、誰の肌にも感じられた。それは見えない焼きごてを当てられているような、圧倒的な力と破壊の意志の感覚だった。セラは身震いし、アルジラとシエロはしっかりと彼女の肩と手をつかんでいたが、〈EGG〉本体へのアクセスを示すゲートの輝きは、いくぶん弱まっていた。

ニューヨークに侵入してから、ヒートはひとまず〈シヴァ〉の発動を自発的に控えているようだ。おかげで、セラは〈シヴァ〉を抑制するのにパワーを振り向けなくてもよくなっていた。〈シヴァ〉の自己抑制がどういう意図のもとにあるのか、セラの説得に応じたからか、それとも単に、総力戦になるであろうかつての『仲間』たちとの殺し合いにそなえて、力を溜めているだけなのかはわからなかったが。

「市民たちの避難は完了した？」

小さな声でセラは尋ねた。声はかすれ、疲弊しきっていたが、奥に宿った意志はいささかも揺らいでいなかった。

「現在、ロアルドとグレッグ隊が、ドーム中心部から約五キロ離れた防空壕へ誘導中」そっけなくゲイルが応じた。「〈シヴァ〉のフルパワーによる超高熱がどの程度まで拡大するかは不明だが、熱放射が球状に拡がることから、放射の中心点から距離をとり、さらに下方に潜れば、直接被害を受けることは防げると推定する」

「そう。よかった」セラはこわばった指を動かし、深呼吸した。「これで、ここで何かがあっても、市民とコロニーの人たちには影響は及ばないわね――ニューヨーク以外の他の都市はどうなっているかわかる、ゲイル？」

「……混乱による暴動が、そのまま続いているようだ」短い沈黙を置いて、ゲイルは答えた。「衛星回線が切断されているため、ニューヨークに流したテクノシャーマンの映像は他都市に配信できなかった。〈ローカパーラ〉による市民の鎮静と誘導も、ニューヨークしか手が

回らない。おそらく他都市は誰かが率先して統制を取りもどさないかぎり、争いと、ガスと陽光、および、それによる温度上昇とキュヴィエ症候群により、しだいに死滅していくことだろう。われわれに打てる手はない」
「そう……」
おそらく、セラの中でももう答えは出ていたのだろう。それでも、尋ねずにはいられなかったのだ。少女はか細い、絞りだすような吐息をつき、ぐったりとカウチにもたれかかった。力なく投げだされた手をシエロが強く握り、「気にすんなよ、セラ」とおずおずと囁いた。
「セラはできるだけのことをやったんだ。もしかしたら、できる以上のことを。ニューヨークひとつを鎮めるのだって、こんなに苦しんでるのに。この上まだ、〈シヴァ〉と話して、もしかしたら殺されるかもしれないっていうのに、そこまで」
「セラを殺させなんかしないわ」強い口調でアルジラが否定した。「〈シヴァ〉だろうとなんだろうと、あたしたちがついてるかぎりこの娘には指一本触れさせない。命に代えても、セラを殺すなんて絶対にさせない」
「でも、まだ信じられないんだ、オレ」うつむいたままシエロは呟いた。「なあ、ホントに、アニキを殺したのはヒートなのかな。結局、〈アルダー〉が死んだところを、オレらは見てないわけじゃん。で、あいつが暴れ回ってる中で、アニキはセラを探しに行ってて、で、〈アルダー〉の奴もセラを殺しに行ってて、それで、セラんとこでお互いぶつかっててもおかしかないと思うんだ、オレ。アニキが〈アルダー〉と戦って、倒したはいいけどそれで大

ケガしたところへ、ヒートが……」
「何がどうあろうと、奴がリーダーに反抗したこと、明らかにリーダーに手を下そうとしていたこと、われわれに対する殺意を口にしたこと、これらはすべて事実だ」
切りつけるようにゲイルは言った。激した口調ではなかったが、その声の、これまでにない異様な冷酷さに、シエロは口を閉ざして身を縮めた。
「あれは裏切り者であり、反抗者だ。〈ザ・シティ〉に起こったことを見るがいい。〈シヴァ〉の名通りの殺戮者であり、破壊の化身に、あれは成り果てた。その点について、議論の余地はない。あれは排除せねばならない、どのようなことがあっても。絶対に」
平坦に語るゲイルに、反論の声はあがらなかった。シエロは怯えたようにセラの手を握りしめ、アルジラは、反論を探すように唇を開きかけたが、なにも言うことができずに視線を落とした。
セラもまた、無言だった。サーフの名が出たときに、その身体は鞭打たれたように震えたが、〈ザ・シティ〉壊滅の実行者が〈シヴァ〉、ヒートであることが明らかであり、同様にニューヨークまで灼こうとしたことを目の前で見せつけられた以上、彼を止めなければならない理由は、否定できないほどにあった。
通路の向こうから、重い足音が近づいてきた。金属を引きずる不規則な音を伴っている。
扉が開いた。赤い髪が入り口でひらめいた。
とたん、ゲイルが咆吼した。彼はセラと接続していたケーブルを引きちぎるように外し、

それが生き物のように体内に引きこまれるより先に、立ちつくす真紅の髪の男に向かって、猛然たる蹴りを放った。
　蒼白く光る〈ヴァーユ〉の脚が、〈シヴァ〉の六本爪の腕に受け止められていた。ナイフのような爪を備えた〈ヴァーユ〉の足先が、相手の喉笛をねらって震えている。片方の腕をあげた姿勢のヒートは、むしろ退屈げな目を、カウチにいるセラに向けた。
「俺と話をしたいということだと思ったが。違うのか」
「そう、話をしたいのよ。ゲイル、やめて。落ちついて、今は下がって」
　ゲイルは首だけをねじってセラを見、シューッと息を吹いた。碧の瞳は見たものの目を灼き焦がすほどの強烈な黄金色に燃え上がっていた。むき出した歯は人間のものというよりサメか爬虫類のそれに近く、細くとがった形に変形し、〈ヴァーユ〉が今にも抑制を解かれて暴れだそうとしているのは明らかだった。
「ゲイル」
　もう一度、きっぱりとセラが呼ぶと、瞳の黄金色がかすかに薄れた。とがった歯が溶けるように人間のそれに戻り、ゲイルは身を翻して、セラのそばに戻った。〈ヴァーユ〉の脚は消えていたが、巻き起こされた旋風が怒りの破片のように無意識の風刃を作り、壁や床に傷をつけ、ヒートのマントの裾を切り裂いていた。
　その頬にもうっすらと切り傷が走り、血が流れていた。見る間に傷はふさがったが、流れた血は唇の端まで達した。ヒートは手に引きずっていたサービターの残骸を床に放り出すと、

流れ落ちた血を無造作に舐めとった。
「どうしてサービターを壊したの？　ついてくれれば、ちゃんとここまで間違いなく案内してくれたはずよ」
「自分以外のだれかに作られたものが信用できるか。それに、こんなものに頼らなくとも、おまえたちの存在なら〈シヴァ〉で探知できる」
ヒートはその場に並んだかつての仲間たちを、ひとりひとりじっくりと眺めていった。警戒と不安の表情を浮かべているアルジラ。氷の仮面の下に〈ヴァーユ〉の獰猛な怒りをたぎらせているゲイル。今にも泣き出しそうな顔をしながら、どうすることもできないままに、しっかりとセラを背にかばっているシエロ。
セラはカウチを回し、首から上を覆っていたモニタを上げた。現れた少女の素顔は憔悴しきって、この数時間のうちに十も老いたように見えた。つややかな肌は張りを失ってくすみ、ふっくらした頬はこけて、目の下にはくっきりと隈が浮いている。瞳だけが奇妙に熱っぽく見開かれ、まるで、白い粘土の中に埋めこまれた黒い金剛石を思わせた。
二人の目が合った。かつて無から有を創造する〈女神〉だった少女と、以前の炎の王であり、いまは〈破壊神〉となった男。先に目をそらしたのは、破壊神のほうだった。
「訊きたいの」静かにセラは言った。「どうしてあなたは〈協会〉に協力する気になったのか。〈アグニ〉ではなく、〈シヴァ〉を選んだのか。どうして〈エンブリオン〉のみんなを殺そうとするのか。どうして、サーフを――」

「そんなことを訊いてどうする」ヒートはセラの言葉を遮って言った。「いずれにせよ、お前たちは俺が殺す。全員。サーフはその手始めだったというにすぎない。死んでいく奴に、理由など話してなんになる」

「ならどうして、あなたは何もせずにここまでやってきたの？」セラは反問した。「ドームに入ってから〈シヴァ〉を発動して、そのままわたしたちを灼きつくすこともできたのに、あなたはしなかった。あなたは外でわたしの呼びかけを聞いてからここへ来るまで、一度も〈シヴァ〉を発動していない。さっきのゲイルの攻撃を受け止めた以外は」

ヒートは答えなかった。

「ヒート、お願い」セラはカウチから身を乗り出した。膝が震え、座面から滑り落ちそうになったが、なんとか持ちこたえてしがみついた。「あなたはいったい何を知っているの？あなたが本当にわたしたちを――サーフを、殺すほど憎むとは、どうしても思えないの。わけがあるのなら聞かせて、ヒート。あなたは理由もなく仲間を殺すようなひとじゃない。もし、あなたの憎悪が正当で、それが、わたしの生命をとることですむのなら、それでもかまわない」

「セラ！」シエロが小声で叫び、力を失ってだらりと垂れたセラの脚を引き留めるようにしがみついた。「ダメだ、そんなこと、言っちゃダメだよ！」

「でも、理由も言わずに、みんなや関係のない人たちを傷つけるのはやめて」構わずにセラは続けた。「〈ザ・シティ〉を灼いたのはどうして？〈アルダー〉――シン・ミナセや、

マダム・キュヴィエ、エンジェルを殺そうとしたから？　でも、あなたなら、あそこに誰がいて誰がいないかくらい、わかるはずよね。あそこにわたしたちがいないのだって、わかっていたはずよ。そもそも、〈協会〉にも反逆するつもりでいたなら、どうして〈シヴァ〉を身体に入れることを許したの――」
やはり、ヒートは答えなかった。真紅の目を壁に向けたまま、彼はどこか遠い視線で、別の場所を見つめているようだった。
「あなたは誰よりも誇り高くて、孤高であることを守り続けていた。ジャンクヤードのころから、ずっと――」必死にセラは言った。「〈エンブリオン〉の中でさえ、あなたが認めていたのは、リーダーのサーフだけだった。なのに、〈協会〉に身体をいじらせることを許してまで、サーフや、取るに足りないわたしたちを殺そうとするのは、なぜなの――」
「このような問答をいくら重ねても無駄だと判断する」
なおも口を開いて問いを重ねようとするセラを後ろに押しやって、ゲイルが前に出た。
一足歩くと、蒼白い変身光が足跡になった。
「ゲイル！」セラがなおも必死のおももちで制止しようとする。
ゲイルはあの異様になめらかな蛇の動きで振り向いた。光輪に包まれた中からセラを見た彼は、すでに人間の目をしていなかった。それは〈ヴァーユ〉であり、暴風と嵐を司る怒り狂う風の支配者だった。
「どのような理由があれ、サーフを殺したこと、それだけで私にとっては十分だ。〈ザ・シ

ティ〉も、ニューヨークも、人間のことなどどうでもいい。お前たちも死にたくなければ、手を出すな。あれは——私の獲物だ」
「ゲイル、いけない！」
ゲイルはすべるように前へ進んだ。変身光の輪の中から、巨大な口を備えた頭がぬっと姿を現した。脅すように牙が嚙み鳴らされ、金属の罠のようにガチンと音をたてた。翠緑の翅が大きくひるがえり、燃える蒼白い光のしずくを一滴、払い落とした。
「駄目よ、ゲイル、やめて、これ以上仲間同士が戦うなんて——」
「珍しく意見が一致したようだな。ゲイル」ヒートもはじめてうすい笑みを浮かべていた。
「いいだろう。戦りあおうじゃないか。おまえはいつもサーフの後ろにいた。サーフの次は、おまえだ」
一歩前に進み、マントを払って前腕を突き出す。セラとシエロ、アルジラの、動けずにカウチに固まっていた三人は、そろって息を呑んだ。
そこに刻まれていたヒートのアートマ、〈アグニ〉のファイアボールの徴は、前腕のほとんどを覆う不規則に絡みあった黒い線条によって、完全に隠されていた。見つめていると魂を吸われ、暗黒に溶かし去ってしまうような禍々しい雰囲気を、それは湛えていた。まるで地獄から伸びた黒い蔦植物が、ヒートの腕をがんじがらめに縛りつけているかのようだった。
「〈シヴァ〉のシンボル……そんなものが」セラはしぼり出すように呟いた。「それは……あってはいけないもの、〈アルダー〉と同じように、人が身につけるべきものではないわ、

ヒート。あなたには、そんなアートマは似合わない――」
「似合う似合わないは関係ない。俺は〈シヴァ〉を差しだされ、選んだ。それだけのことだ」ヒートはさらに前に出た。〈シヴァ〉の悪夢めいた徴に、じわじわと赤い光がにじみ始めた。「いくら話しても無駄だというのをもっと早くわかっているべきだったな。ここまで来れば、〈シヴァ〉でおまえたちをまとめて消せる。心配するな。死んだことに気づく暇もない。〈シヴァ〉の炎はあとすら残さない。この部屋ごと、おまえたちを蒸発させてやる。一瞬で」
〈ヴァーユ〉が咆哮した。猛烈な旋風がわき起こり、ヒートに集中した。かかげたヒートの腕が輝いた。蒼白い色ではなく、血色の閃光に。
光はたちまちヒートの全身を包みこみ、襲いかかった〈ヴァーユ〉の風刃をはじきとばした。光が薄れ、〈シヴァ〉の、紫色を帯びた頭部がゆらりと出てきた。
巨大な肩をゆすり、まつわりつく風の名残をふるい落とす。三対六本の腕が、奇妙な花のようにゆったりと両肩の上で広がった。それぞれの先には炎がゆらめき、燃える三十六の火焰の花弁が、円を描くようにまわっていた。
あざやかな真紅から、不気味な赤紫色に変わったその巨体はますます巨大さを増し、室内の空間をその大きさと存在感で充たした。輝く金色だった甲殻は沈んだ真鍮色になり、拡がって、肩や腰だけではなく、首筋や胸元まで覆い、首の後ろに棘のように突き出して、双頭の頭部を守るように被さっていた。破壊神は六本の腕のひとつを動かし、見せつけるように、

六本の爪をゆらめかせて炎の熱と光を突き出した。
〈ヴァーユ〉が跳躍した。吠える手間さえかけずに、〈シヴァ〉に強烈な蹴りを繰り出した。天井、壁、そして床と複雑な軌跡を眼にも留まらぬスピードで移動し、背後から〈シヴァ〉に強烈な蹴りを繰り出した。
延髄を断ち、脳を砕くはずのその一撃は、後ろに回された六本腕のひとつにあっさりつかみ止められた。力任せに放り出された〈ヴァーユ〉は、壁に激突する寸前に身を翻し、両足でしっかりと壁面を踏まえると、そのままの勢いで、強靭な脚をバネに、弾丸のように再度〈シヴァ〉に突進した。とどろいた旋風が室内のものを巻き上げ、カウチごと床からもぎとられそうになったセラは、必死に肘掛けにすがりついてかすれた悲鳴をあげた。シエロとアルジラがあわててしがみついて引き戻す。
「ゲイル、やめなさい！　セラが危険だわ！」アルジラが怒鳴る。
『警告したはずだ。今、私の目的はあの男を殺すことだ。ほかにはない』唸りをあげる暴風のむこうから、〈ヴァーユ〉と化したゲイルの抑揚のない声が応じた。『ほかの問題については、いっさいこれを思考しない。ヒートを殺す。これが私の至上命題だ』
「ゲイル……！」
跳躍と風の勢いに乗った〈ヴァーユ〉は、まっすぐに〈シヴァ〉の腹部に激突した。さすがに衝撃によろめいた〈シヴァ〉に、鋭いナイフ状の爪をもつ四肢を次々と繰り出し、装甲の隙間にこじ入れて内臓を引き裂こうとする。〈シヴァ〉の皮膚にいくつかの裂傷が走り、紫色の血がほとばしった。〈シヴァ〉はふたつの口で唸ると、六本腕で〈ヴァーユ〉を引き

はがし、燃える爪を翠緑の翅に突き立てようとした。

複雑に身をくねらせて〈ヴァーユ〉は逃れ、床に両手をついて一回転すると、そのままの姿勢で、回転するナイフの円盤となって〈シヴァ〉にぶつかっていった。反撃の熱球を膨らませかけていた〈シヴァ〉は、自分よりはるかに素早い〈ヴァーユ〉の動きに対応できず、まともにその攻撃を受けた。鋭い爪に連続して胸や腹をえぐられ、〈シヴァ〉の口から押し殺した苦痛の唸り声がもれた。

白熱する六本の爪を斜めに叩きつけ、へばりつく〈ヴァーユ〉を壁際まではじき飛ばす。今度は〈ヴァーユ〉も受け身をとることはできなかった。背中からまともに壁面に叩きつけられ、怒りと苦痛に吠える。翠緑の翅には焦げ穴が空き、破片が火の粉になってあたりに漂った。

〈ヴァーユ〉を振り払った〈シヴァ〉は一瞬背を丸め、三対の腕をかかげると、ふたたび力を集中し始めた。六つの手の描く円の中心に、白熱する超高熱の球が現れ、急速にふくらみかける――と、突然それは消失した。驚いたように上を見上げ、〈シヴァ〉は、鋭く舌を鳴らしてカウチのセラを見た。

『テクノシャーマン。〈女神〉の力か。ゲイルのサポートもなしに、よくやるものだ』

床からはぎ取られかけ、傾いたカウチにしがみつきながら、セラは強烈な苦痛とふりしぼった力に身をよじり、声のない悲鳴をあげていた。背後で〈EGG〉に繋がるゲートが、目まぐるしく色を変え、またたき、まばゆいばかりの光を放っている。

〈プリティヴィー〉と〈ディアウス〉に変じたアルジラとシエロが、戦闘の余波が彼女に及ばないように力の網を張っている。だが、参謀型（ビショップ）ではない彼らにセラのバックアップはできない。ゲイルという接続役がいてこそ、彼らも自らの演算能力を提供できたが、彼が抜けたあと、いま二人にできるのは戦闘の被害から少女を守ることだけだ。セラはまったくの独力で〈EGG〉に接続し、溶岩のように身を焦がす情報の奔流に生身をひたして、〈シヴァ〉の力の全発動を抑制していた。

『どこを見ている！』

〈ヴァーユ〉の怒声が烈風とともに吹きつけた。渦巻く気流の中を翠緑の箭（や）のように猛追してきた〈ヴァーユ〉は、熱球の消失に気をとられた〈シヴァ〉の隙を突いて、大口で一息に相手の喉首を食いちぎろうとした。ガツンと罠の閉じるような音がした。

からくも跳びすさった〈シヴァ〉は、小型の熱球を四方八方にまき散らした。上方に飛んだ数発が大爆発を起こし、上と構造材をどっと降らせた。

『セラ！』と焦った声が聞こえ、〈プリティヴィー〉の姿のアルジラが、降りかかる土砂から必死に少女を守っているのが混乱の隙間に見え隠れした。〈ディアウス〉はさかんに唸り、放電を繰り返して、落下してくる大きな岩や溶解した金属塊を遠くへはじき飛ばしている。

周囲で行われているこれらのことに、セラはまったく気づいていないように見えた。彼女は〈シヴァ〉のすさまじいパワーを抑制することに精神と肉体のすべてを奪われ、鷲に摑まれた小鳥のように、ゲートからあふれ出す〈神〉のパワーに金縛りになっていた。白い喉は

のけぞり、洞穴のように開いたままの口からは声のない絶叫がとぎれなくあふれ続けた。引きつる手足はカウチに収まりきれずにあちこちへ飛び、苦痛のあまりかきむしった爪先で、可塑性を失ったカウチのフォームをずたずたに引き裂いていた。

砂埃と落下物の雨が収まると、カウチとゲートとその関係機器に囲まれていた部屋は、ゲート周辺の狭い一角を残して、ぽっかりあいた不規則な形の穴の底になっていた。四方の壁はほとんど吹き飛ばされ、天井は完全になくなっている。はるか遠くに、都市のドームの弧を描く天蓋がのぞけた。ドーム自体も破損し、そこここのパネルが剝がれ落ちて、致命的な日光が太く細く、スポットライトのように差しこんでいる。

そのきらめく筋が交差する中に、〈ヴァーユ〉と〈シヴァ〉の対峙する姿があった。轟々と風の唸る音が人のいなくなったドームに反響した。翠緑の翅が燃え、火の粉になって散る。〈シヴァ〉は巨軀に見合わぬ身軽さでドームの高所を飛び移っては、次々と白く燃える超高熱の熱球を生み出して投げつけた。当たればたちまち骨も残さず蒸発させられる球を間一髪でかわし、あるいは集中した気流をハンマーのように使って四散させながら、〈ヴァーユ〉はひたすらに〈シヴァ〉にむかって突き進んだ。

無謀とも言える戦い方だった。〈ヴァーユ〉はもともと接近戦には向いておらず、ことに〈シヴァ〉のように火力と膂力の両方を兼ね備えた敵に対しては、自らの高い機動性と滑空能力を生かし、遠方から風刃を使って攻撃するのがセオリーであると、ふだんのゲイルならば素直に結論したはずだった。

だが、現在のゲイルに、そのような冷静さは完全に失われていた。参謀型ＡＩ特有の冷徹な論理性も無感動も、忿怒と憎悪のどす黒い炎で灼きつくされていた。獲物の血と死を希求する、彼は一匹の獣、まさに悪鬼と化していた。

『逃げるのか、裏切り者！』

間一髪で相手をのがした〈ヴァーユ〉はさらに牙を噛みならし、跳躍した〈シヴァ〉の巨大な姿に罵声を発した。

『なかなか立派な口がきけるようになったな、ゲイル』

〈シヴァ〉の三対の腕のうち一対が、不気味な音をたてて変形しはじめていた。骨が外れ、折れて移動し、伸びて修復され、新しい形になってつながった。たくましい筋肉はそのまま、皮膚が薄く伸び、赤黒い血管が透けて見える膜状になって、長く伸びた指の間をつないだ。

盛り上がった肩から拡がる、一対の巨大な膜翅。ジャンクヤードで〈カマソッツ〉が有していたそれ、あの黒い蝙蝠の翼よりもさらに大きくまがまがしい古血の色をした翼で、〈シヴァ〉は羽ばたき、気流を踏んで立つ〈ヴァーユ〉の頭上を遊弋した。

『どうした、ゲイル。俺を喰いたいのか』

『貴様の肉など、一片たりとも喰らってやるものか』ゲイルは吠えた。地の底からとどろくような忿怒と憎悪の声は、もはやあの沈着冷静な参謀型のものではなかった。『血の一滴、骨の一片たりとも、私は貴様を受け入れない。私はあらゆる力をもって貴様を引き裂く、そして、貴様の破片を風に放って、永久に地上をさまよわせてやる。喰われず、顧みられもせ

ず、風の中で腐り果てるがいい。貴様がリーダーにしたことの償いは、どんなことをしても、けっして果てることはない』

『……いい感じだ』短く〈シヴァ〉は笑い声をたてた。どこか満足げでさえあった。『実に、いい感じだ。おまえが好きになってきたようだ、ゲイル。少し遅すぎたがな』

『黙れ！』

完全に修復を終えた翠緑の翅が大きくはためいた。風の刃、いや、それをはるかに超える風の剣と槍の群れが、豪雨のように〈シヴァ〉に降りそそいだ。〈シヴァ〉は身を丸め、旋回し、翻って攻撃を避けたが、膜翅の一方が大きく切り裂かれ、身体が傾いた。肩と横腹に複数の深い切り傷が口を開け、紫色の血がしぶく。

だが〈シヴァ〉が身震いして咆吼を放つと、すべての傷は逆回しの映像のようにみるみる治癒していった。完全にもとに戻った翼を一打ちし、大きく回転して〈シヴァ〉は急降下してきた。大気圏に突入する隕石のように、その全身が白くなり、激しい熱を放ちはじめる。翼の推進力を加えた、巨大な重量による体当たり。熱気で周囲の大気がゆらめく跡をひく。

〈ヴァーユ〉は避けなかった。白く燃えながら突っこんでくる〈シヴァ〉をまともに見据えて、受け止めるかのように両手を広げた。その手の先が、一瞬かすんだ。とたん、〈シヴァ〉の放つ白い光輝にもまさる純白の光の壁が、あたり一帯を押し包んだ。

『情報障壁か』光の壁のむこうからくぐもった声がした。少しばかり感嘆しているようでもあった。『そうか、おまえは参謀型（ビショップ）だったな。以前にも閉じこめられた。だが、これが長く

保たないこともわかっているな?』

その言葉が終わらないうちに、光の壁がゆらめき、崩れ、六角形の破片と化して散りはじめた。〈ヴァーユ〉は後退し、二度、三度と障壁を構築し直したが、そのたびに、壁はひび割れて崩れた。

ぼろぼろと崩れる障壁の隙間に、六本の鉤爪ががっちりとかかった。まるで卵の殻を破るように、破片を振りこぼしながら、〈シヴァ〉の巨大な頭が、そして肩が、障壁をこじ開けて乗り出してきた。〈ヴァーユ〉は叫び、足踏みをし、さらに障壁を重ねようとしたが、無駄だった。完全に障壁から這い出した〈シヴァ〉は、肩を振るってまつわりつく破片を払い落とすと、再び巨大な翼を広げて、後退した〈ヴァーユ〉を追った。

唸り声とともに、再び風の槍衾が〈シヴァ〉を襲う。〈シヴァ〉はまともに受け止めた。双頭のひとつが熟れた果物のように弾け飛んだ。左肩が吹き飛ばされ、そちら側の片翼が半分粉砕された。腹に深い切り傷が開き、紫の血の尾を引いた。だがどれだけ傷を負っても勢いは弱まることなく、まっしぐらに〈ヴァーユ〉の前へ飛来した。風を巻いて逃れようとした〈ヴァーユ〉を、四本の腕ががっちりと捉える。がちがちと開閉を繰り返す巨大な顎に、なかば潰れた円形の頭部が近々と寄せられた。

『俺を殺したいか、ゲイル』〈シヴァ〉は囁いた。

潰れた双頭の一方は再生を開始していたが、残ったもう一方も、紫の血にまみれ、深い切り傷を数多く負って、まるで切り刻まれた肉塊の様相を呈していた。

声はひどくかすれ、ダメージを負った喉から無理に絞りだされてきたが、それは奇妙なほど穏やかなものだった。〈ヴァーユ〉を抑える腕は敵を捕らえるというより、友人を支えるように親しげだった。自らの血の流れこむ口を動かして、〈シヴァ〉は〈ヴァーユ〉に低く囁いた。

『だが、俺を殺しても、サーフは戻ってはこないぞ』

〈ヴァーユ〉の動きが、一瞬凍りついたように止まった。

だが次の瞬間、以前に倍する凄まじさで吠え猛り、自分自身を傷つけるのも構わず、暴風を呼び起こして周囲をなぎ払い始めた。双方の血が混じりあって飛び、濁った霧の竜巻を起こした。その中心で、胴体をがっちり絞めつけられながら、身を弓なりに反らして〈ヴァーユ〉は哭いた。大きく開いた口から放たれる絶叫はとめどなく、怒りと、悲しみと、そして言いようのない絶望に彩られていた。

『次はおまえだ、ゲイル』語調を変えずに〈シヴァ〉は言った。破壊神を名乗るものにはふさわしくないほど静かな、遠い声だった。『おまえのリーダーのもとへ行くがいい。すぐにみんな追いつくと、あいつに伝えてくれ。安心しろ、俺はいかない――俺は、そう、〈裏切り者〉だからな』

もし人間の姿をとっていれば、その時、〈シヴァ〉はにがく微笑していたかもしれない。

それきり口を閉じると、〈ヴァーユ〉の胴に回した腕に筋肉が膨れあがった。

背骨をへし折るほどの強力で絞めつけられた〈ヴァーユ〉が苦悶と怒りに暴れもがき、闇

雲に振り回す爪が再生したばかりの傷をえぐる。〈シヴァ〉は頓着せず、さらに力を込めた。両腕が白く光を帯び、やがて全身が白く燃え上がる。

〈ヴァーユ〉が叫び、さらに激しく暴れた。翠緑の翅が端から燃えあがり、灰になって散った。密着した身体の面から煙があがり、腕の下から炭化した〈ヴァーユ〉の身体が落ちて炎のかけらにまぎれた。のけぞる〈ヴァーユ〉が白い光に呑まれてゆき、二つ折りになったその姿が、丸く膨らむ高熱の球体に薄れて消えていく――。

だが、重なり合った二つの影が完全に消える前に、吹き消されるように光は消失した。

〈シヴァ〉は頭を殴られたようによろめき、腕を放して〈ヴァーユ〉を落とした。身体のほぼ全面を黒焦げにされ、なかば炭化した背骨で半身がつながっているのみの姿で、〈ヴァーユ〉は落下した。途中で弱々しい蒼白い光が揺れ、ゲイルが現れた。地面に叩きつけられる前に下から飛んできた〈ディアウス〉がさらいとり、無事に抱え下ろす。

『セラか――』

〈シヴァ〉は小さく舌打ちし、〈ヴァーユ〉を追って急降下した。

地面から電撃と、黒い重力球が嵐のように飛んでくる。カウチに横たわり、もはや動く力もなくあえいでいるセラのそばで、〈プリティヴィー〉と〈ディアウス〉が、必死の防戦を行っていた。脚もとにはゲイルが横たわり、身震いしながらなおも起き上がろうとあがいている。だが、さすがのパーフェクト・アスラ体でも、この大ダメージから回復するのは容易ではなかった。脛にきざまれたアートマシンボルも、かすかに明滅するばかりで〈ヴァー

ユ〉は現れない。
『お願い、やめて、もうやめて！』〈プリティヴィー〉が叫んでいる。『なにがあったのか話したくないならそれでいい、あたしたちを殺したいならそれでもいい、でも、セラをこれ以上苦しめないで！　この娘はもう十二分に償いをしたわ、これ以上は見ていられない！このままじゃ本当に、この娘は死んでしまうわ！』
『頼むからやめろよ、ヒート。こんなのもうイヤだよ、オレ』
必死に雷電を投げながら、〈ディアウス〉の声は涙声だった。航空機のようなアートマの面の後ろで、シエロの顔が泣き出しそうにゆがんでいるのが見えるようだった。
『アニキが死んで、セラも死んじゃったら、オレ、もうこんなところにいたくないよ。オレのことなんかどうでもいいけど、でも、セラだけには手を出さないでおくれよ。だって、セラは幸せになんなきゃいけないんだ。みんなを助けて、幸せにするのがセラの望みなんだ、だから、セラだけは殺さないでやってくれよ。頼む。なあ、頼むよ』
「み……ん……な、やめ、て。お願……い、だから―」
ほとんど死人のようにカウチに横たわりながら、紫色になったセラの唇がかすかに震えた。両目と鼻孔から血が流れ、目は地面に開いた穴のように暗く翳っていた。頰骨の線がくっきりと浮かび上がったその顔は、すでに骸骨のようだった。
「わ、たし、たち、〈エンブリオン〉……仲間、いつも、いっしょ、だった……サーフ、も……戦わ、ないで、どうか……やめて……ヒー、ト――」

しばし〈シヴァ〉は動かずその場に滞空していた。ちぎり取られた翼も肉体も再生を完了し、地上で半死にあえいでいる少女と碧の髪の〈ASURA〉に比べれば、それはあまりにも強大な姿だった。

双頭がうつむけられて地上を見た。そこに身を寄せあい、口々に、自分は殺されてもよいからセラには手を出すなと叫んでいる二人を見た。いまだに憎悪に身をわななかせ、ままならぬ指で地を掻いている者を見た。そして引き裂かれたカウチの上で、すでに死んだ者のようにぐったりと横たわる少女を見た――そのような限界を超えた苦しみの中にあっても、いまだに彼女は狂える〈神〉との接続をやめず、その媒介となるゲートは、いっこうに止まる気配もなく、いよいよはげしく虹色の光をあふれさせているのだった。

巨大な膜翅が大きく羽ばたいた。一度だけ。

そしてきつく身体にまきつけるように畳むと、〈シヴァ〉はまっしぐらに降下していった。地上にあいた深い穴の底にいる、かつての仲間たちのもとへ。

〈ディアウス〉と〈プリティヴィー〉は口々に制止の言葉を叫び、重力球と雷電がそれまで以上にはげしく降りそそいだが、もうほとんどなんの影響ももたらさなかった。〈シヴァ〉が舞い降りたのは、目くるめく輝きを放つ〈EGG〉へのゲートの前だった。まばゆい輝きを背にして、〈シヴァ〉の異形の姿が真っ黒く聳え立った。

『ヒート、何を――』

『このゲートだな』呟くように〈シヴァ〉は言った。『このゲートが、おまえたちに悪あが

きをさせているんだ』

「やめて、ヒート、それは――いけない……」

セラがかすれた喉を絞って叫び、起き上がろうとカウチを掻いた。力の抜けた指が肘掛けをすべり、だらりと横に垂れた。

『簡単なことだったんだ』〈シヴァ〉は言った。『最初からこうしていればよかった。ここを塞げばおまえたちはどうすることもできない。〈女神〉はただの、無力な娘に戻る。もう苦しむこともない。おまえたちも』

「ヒート……！」

きらめく門の前に立つ〈シヴァ〉の背が伸びた。横幅も。畳まれていた巨大な翼が一気に広がり、ゲートからあふれる光を隠した。残り四本の腕を大きく広げ、翼が後ろに向かって高々とかかげられた。

「駄目！」

最後の力を振りしぼってセラは叫び、ついに力尽きてカウチからずり落ちた。〈ディアウス〉がすかさず受けとめ、倒れて頭を打ちそうになった少女を抱きかかえる。ゲイルがひときわ高く呻いた。〈プリティヴィー〉は攻撃すら忘れて、目前で起こっていることをただ見つめていた。

『なに……これ……』

後ろにかかげられた〈シヴァ〉の翼はゲートを包みこむように曲がり、パキパキと音をた

に、巨臣のものを呑みこんでいった。翼だけではない、その肉体は膨らみ、変形し、巨大な一個の肉の壁となりつつあった。

やがて、〈ＥＧＧ〉のゲートは完全にその壁に覆われた。脈打つ血管の青黒い筋を縦横に走らせた肉瘤がすべるような早さで床を、壁を、天井を走り、かつて翼や手足、胴体や胸だったものは、すべてどくどくと拍動する、内臓の内側を思わせる濡れた肉壁に変じた。双頭の名残の二つの巨大な口だけが、のっぺりとした肉壁の表面に残された。

『これでその娘はもう苦しまない。そうだろう』

口の一つが動いて、言った。ただ事実を告げるだけの、平坦な口調だった。

『そして、おまえたちももう苦しむ必要はない。〈神〉のパワーは、いまや俺のものだ。そのすべてを使って、おまえたちを消し飛ばしてやる。苦痛すら感じることはない』

「やめて……、駄……目」

〈ディアウス〉に抱かれながら、セラが力を振りしぼって手をのばした。ぼろぼろになった指先が、哀願するように〈シヴァ〉に伸ばされる。

「いけない……殺しちゃ……ヒート、あなたが……殺しては……」

もはや〈シヴァ〉は答えなかった。脈打つ肉の壁はあまりに圧倒的で、〈ディアウス〉も〈プリティヴィー〉も、ただ立ちつくしていることしかできなかった。残された二つの口がかっと開き、白く燃える光球が膨らみはじめた。自分たちをこの場から永遠に消滅させるであろう地獄の火の果実に、〈エンブリオン〉たちは、縛りつけられたようにただ、見入った。

――やめろ！

叫ぶものがいた。戦いが行われているのとはまったく別でいながら、同じでもある、ある特別な場所で。

ようやく肉体を再発見したばかりの〈彼〉は、いまだに世界にむかって開かれている感覚により、起こっていることすべてを見聞きし、感じていた。カウチの上で悶える少女の、人間が耐えられる限界をはるかに超える苦痛も、地上で少女を守る仲間たちの焦りと恐怖と悲しみも、狂気のように相手にぶつかっていった風のEの怒りと絶望も、そして、破壊の神と名乗るものが抱えた苦悩と決心も。彼はすべて知っていた。

知っていたからこそ、その認識は灼けた針を幾万となく突き立てられるような苦痛を彼に与えた。精神が存在であり、存在が精神であるこの場所において、心に感じる苦痛は肉体的なものと等価だった。実体というもののないこの場所で、肉体が実際に傷を負うわけではなかったが、それだけに、精神‐存在が感じる苦痛は、千倍も強かった。

『止めたいんだな。あれを』

青年が静かに言った。穏やかな目をした、銅色の髪の青年。その姿は現在〈シヴァ〉と呼ばれている者の人間態をそのまま写している。いや、あの赤毛の男のほうが、この青年の姿を写しとっているのか。いずれにせよ、〈彼〉にとって、〈シヴァ〉と呼ばれているものが

行おうとしている行為は、とうてい見過ごせるものではなかった。時空の壁を叩き、体当たりして、くりかえし〈彼〉は叫んだ。彼らの名を呼んだ。ことに〈シヴァ〉となっているものの名を。以前も、そしていまも、唯一無二の友であり、もっとも近しい相手であるものの、名を。

『止める方法は、ある。そして、戻る方法も』

猫が言った。チリン、と鈴が、澄んだ音をたてて鳴り響いた。

『だが、心しておくことだ。あそこへ戻れば、君はふたたび因果の理に縛られる身になる。果にはすべて因がからみつき、因が起これはその果が結ばれる。これらがあらゆる苦しみのもととなる。君はこの永遠のやすらぎの岸辺を捨て、あの流血の巷に帰還する勇気があるか？　いったんは解き放たれた現世の苦悩の鎖に、ふたたびわが身を繋ぐ決意が？

あそこで君を待っているのはふたたびの、終わることのない苦痛と苦悩だ。君自身が真実の道を歩き通し、約束された終末にたどり着くまで、けっして絶えることのない苦痛。君は帰還の代償として、ある大きなものを喪わなくてはならないだろう。それでも行くかね？

水の上に咲く蓮花は美しい、だが、泥水の中に伸びたその茎と根は、水底で腐れた生き物の死骸に根を張り、なお美しく咲き誇っているのだ』

『問いかけは無用だよ。彼はすでに答えを出している』

銅色の髪の青年が言った。彼はゆっくりと進み出て、〈彼〉の頬を手で包むようにした。硬い指先が、左頬に刻まれた烙印の線をたどった。

『ウォータークラウン』囁くように彼は言った。髪と同じ暖かな銅色の瞳に、なつかしむような色が宿った。『そうだ、彼らも——彼も、彼女も、この徴を持たされて生まれてきた。あれが彼らにかけられた呪いだった。彼らが君たちにアートマという呪いをかけたとき、君にこの徴が現れたことも不思議ではない。これもおそらく、因果の織りなす模様の一部だったのだろう。俺が眞と出会い、螢を愛したことも。セラフィータに出会ったことも。幻を追いかけ、恐ろしいあやまちを犯したことも、すべて』

——何を言っている。おまえは……誰だ？

『知らなくていい。少なくとも「この」君は』白い額にかかる〈彼〉の銀髪をかきあげ、またたかない銀色の瞳を間近にのぞきこんで、青年は笑った。『俺がこの場に喚ばれたこと自体が、君の選択の結果だ。役目を果たせば、俺はまた、俺の求めるものを探しに行く。螢、それから眞。二人とは、もう一度しっかりと話をしなくてはならない。そして、謝罪しなければならない。俺には見えていなかった、いろいろなことについて。彼らが俺に対して、本当に求めていたことを叶えるために、もう一度』

〈彼〉は口を開こうとし、青年の指先で止められた。その触れ方には何か特別なもの、大切な思い出のこもった宝物に触れるようなうやうやしさがあった。唇から頬、そして顎への線をたどって青年は手を下ろし、身をかがめて『手を』と囁いた。

強い手で手首をつかまれ、ぐいと引かれた。不意をつかれて〈彼〉はよろめき、青年の胸にぶつかりそうになったが、予想した衝撃はなかった。つかまれた手は、青年が導くままに

その胸の内側に突き通り、中に潜って見えなくなった。青年は苦痛の色も見せず、どこか寂しげに微笑していた。

『君の行くべきところへ行け。——仲間たちに、よろしくな』

その言葉を最後に、吸いこまれるように、手に続いて全身が闇に呑みこまれた。

胸に手を差しこまれたとき、確かに温かい血の通った心臓に触れた、と思った。

その瞬間、胸を殴りつけられるような衝撃があった。『肉体』が急激に存在を主張し、精神を新たな物質の殻で包み始めていた。出現したばかりの心臓の鼓動は激しく、胸の中でハンマーが乱打されているようだった。呼吸は重く肺にねばつき、肉と物質の重みが、無の自由さに解き放たれていた自らをふたたびがんじがらめにする。狭い場所を通り、押しつけられ、〈存在すること〉のどうしようもない鈍重さと不自由さ、清浄の極みから汚濁の水底へ落下することを知った〈彼〉は、声を限りに泣き叫んだ。永劫の安らぎの場所がうすれて遠ざかる。澄みきった静寂のかわりに、耳を聾する物質世界の騒音がなだれこんできて、正気を押し流す。

肉体は糧を必要とし、この肉体は人を喰らう。腹の底に火がつき、燃え広がるのを感じる。やがて炎は全身にひろがり、一片の正気を完全に灼きつくす。肉。〈餓え〉。生命のために背負わねばならぬ業(カルマ)。喰らう。なにかを。再構成されたばかりのこの肉体を支えるために、新しい血と、肉を……

叫びながら流星のように落下していく彼を、猫の銀色の瞳と、青年の銅色の瞳が、静かに

見送っていた。

5

膨らみきった死の果実が二つに割れた。
そこにいて、まだ意識を保っていたもの全員が瞬時の消滅を覚悟して目を閉じた——光球を生み出したものが保証したように。
だが、かわりに聞こえてきたのは轟くような苦鳴と、何かが泡立つようなごほごぼという音だった。〈ディアウス〉がそむけていた顔をそろそろと戻し、『あっ』と小さく声を上げた。変身光がわき上がり、蒼白い光が消えると、そこには青い髪のシエロが紙より白い顔をして膝をついていた。
『シエロ——?』
シエロは口を開けたまま、震える指先で〈EGG〉へのゲートを指した。脈動する肉の壁でふさがれた〈神〉への門。
そこから二本の腕が不格好に突き出し、何かをかきむしるような仕草をしていた。死の光球はどこにもなかった。壁に開いた二つの口が盛り上がり、〈シヴァ〉の双頭となって、ふたたび吠えた。咆吼とともに、粘つく紫色の血が大量に牙の間からあふれ出した。

〈ブリティヴィー〉は息を呑んだ。自然に変身が解け、ピンクの髪のアルジラが姿を現す。蒼白い光に照らされて、セラがうっすらと目を開け、ぎくりとして起き直ろうとした。身を支えきれずに倒れるところを、アルジラが危うく抱きとめる。
「な、なに、あれ。何が起こってるの」
アルジラは口走った。苦鳴はいよいよ大きくなり、壁をおおった〈シヴァ〉の肉体は徐々に縮みはじめた。まるで動物の内臓のような見かけを呈していた室内がもとの姿を取りもどしていく。ゲイルがわずかに身じろぎし、まばたき、苦痛にもだえる〈シヴァ〉に霞のかかった目を向けた。色のない唇がわずかに動く。
「あれは……？」
必死に身体をかきむしる〈シヴァ〉の腕、双頭が突きだしたわずかに下の位置に、縦に裂けた長い傷口が開いていた。これまでどんな傷も瞬時に回復した〈シヴァ〉が、その傷だけは塞ぐことができないようだった。傷は内側からうごめき、血と透明な漿液を噴きだして、あたかも中から何かが這い出してこようとしているようだった。
〈シヴァ〉が双頭を打ち振って吠えた。傷が弾け、どっと漿液と血が空中に噴きあげた。中から白い、しなやかな腕が一本突きだして、宙を掻いた。人間の腕。白い肌をした、若い男の腕だった。
声もなく見守る一同の前で、さらに二本目の腕が傷を破って突きだした。めりめりと肉の裂ける音がし、床にこぼれ落ちる血混じりの液体が床のくぼんだ部分にたまってしぶきをあ

げた。傷がさらに大きく口を開き、さらなる血と苦痛とともに、頭が、肩が、胸が、そして胴が現れた。傷口の両側に突いた手で自らを引きずり出したそれは、全身を引き抜くと、力尽きたようにずるりと床の漿液のたまった上に滑り落ちた。

よろめくように身を起こす。息を吸おうとし、むせて吐き出した液体が、細い顎から糸を引いて落ちた。膝をついたそれが全身で息をし、喉を鳴らして空気を呑みこむ音が大きく響く。一糸まとわぬ裸身に、〈シヴァ〉の血の紫とべとつく漿液がまじりあい、網のような模様を作っていたが、うなだれたその頭の、まだ濡れたままの髪の色——わずかな光を受けて白くきらめく、銀色ははっきりと見てとれた。

「そんな——まさか……」

「アニ、キ……？」

シエロが呟いた。セラがぎゅっとシエロの手を握った。ゲイルはもがき、まだ声の出ない舌を動かし、咳きこんだ。リーダー、とその唇が動いた。リーダー。

完全にもとの大きさに戻った〈シヴァ〉が、壁面からはがれるようにずるりと落ちた。

腹部の傷はいまだにふさがらず、指の間からはどくどくと紫の血が溢れている。彼もまた、惚けたように目前の青年を見た。たった今、自分の腹部を引き裂いて出てきたそれ——べとつく漿液にまみれて喘いでいるそのものの姿を、むさぼるように見つめた。赤い輝きが〈シヴァ〉を包み、腹部を押さえた赤毛の男が、両足を前に投げだしたままの姿勢で現れた。真紅の瞳が大きく見開かれて、濡れた銀髪を映した。

は……。はは」

漏れたのは、笑い声だった。血を流す傷口を手で押さえながら、彼は朗らかに、喜ばしげに、目を輝かせて笑っていた。その無邪気さは、なくしたと思っていた宝物を思いがけなく見つけた、子供の喜びに満ちていた。痛みに呻き、よろめきながら、肩をゆすって立ちあがりつつ彼はなお笑った。

「そうか。はは。そうだな。おまえが俺以外の奴に殺されるなんてあるわけがなかった。おまえを殺すのは俺だ。俺だけがおまえを殺せる。はは。なんでそんなことに気づかなかったんだろうな。はは。は、は、はは」

漿液の中にうずくまった銀髪の者はぶるっと頭を振った。べとついた液が払いのけられ、あたりの壁に雨のようにふりかかった。それは目を上げて口を開いた。おそるおそる声をかけようとしたシエロが、ひっと喉を鳴らして身を引いた。

見開かれたその目は、銀でもなければただの金色でもなかった。白目と瞳孔の区別さえない、それは、ただ一色の煮えたぎる黄金の溶鉱炉だった。人間のものではない極限の餓えが火焰となってそこを充たしていた。開いた口から、遠吠えがのぼってきた。反響しながら大きくなったそれは、やがて、餌を求める獣の凶暴な遠吠えとなってとどろいた。裸身に光がひらめき、全身を覆っていた粘液が瞬時に流れ落ちた。グレーの戦闘スーツとオレンジのトライブカラーがほんの瞬間だけ浮かび上がり、爆発するような変身光がそれを吹き飛ばした。

アルジラとシエロは思わず目をかばった。正視できないほどのまばゆさのなかで、それは

起き上がり、弓なりに身を反らして高々と吠えた。開いた両腕が音をたてて裂け、畳まれていた骨刃があいついで長く反り返った。

おそろしく長いように思えた時間のあと、変身光が吹き消されるように薄れる。〈ヴァルナ〉。天則を保持する水の王、冷静なリーダーのはずの彼が、牙を剝きだし、餓えと渇きを全身から波のように溢れさせて、肉食獣の遠吠えを上げた。

「いいぞ――そうだ。とてもいい」

ヒートは息をはずませていた。腹部を押さえていた手を放し、したたる血を床に叩きつけてから、そのまま血まみれの手を自らの首に持っていった。

「おまえとは一度、一対一でやり合ってみたかった。手加減なしでな。すばらしい。だからもう、こんなものは無用だ――サーフ！」

指が首筋の皮膚を突き破った。ためらいもなくヒートは自らの首に指を突き立て、引き裂き、ちぎり取った。透明な木の根に似た血管や筋がずるずると引き出されて、空中でのたうった。なおもしがみつこうとする触手めいたそれらを払いのけるとともに、前腕を覆っていた黒い線条のからみ合いが、同じく引き抜かれるかのように消え失せていった。

噴き出した血はしばらく紫色にしたたったが、すぐに、髪と同じく真紅の色に変わった。むしりとった肉塊を握りしめ、笑みを浮かべたままヒートはそれを握りつぶした。ガラスの砕けるような音がして、紫の血を流す肉塊は、虹色の破片となって宙に飛散した。

高々と笑い声をあげるヒートを、蒼白い炎が包んだ。〈シヴァ〉のまがまがしい赤い光と

は違う、蒼い光が、線条の消えた前腕で、くっきりと浮き出たアートマシンボルが赫々と輝いていた。ファイアーボール。〈アグニ〉の徴。

真紅の〈アグニ〉の双頭がゆらりと現れた。三本の爪にゆらゆらと炎をまつわらせ、筋肉の盛りあがった巨軀は紫などの混じらない、純粋な炎の真紅だ。

むきだした牙を嚙み鳴らしながら、〈ヴァルナ〉が頭を回した。〈アグニ〉の姿をその視界が捉える。その力が、存在が、〈餓え〉に衝き動かされる脳髄を支配する。敵。獲物。パワーと〈餓え〉。

獲物。

〈ヴァルナ〉はふたたび長い遠吠えを放つと、全開にしたブレードをかかげて跳躍した。壁から壁へ、天井へと高速で移動し、〈アグニ〉の頭上からブレードを揃えて斬りかかる。短い笑い声をあげ、〈アグニ〉は身をひねって〈ヴァルナ〉のブレードを受けとめると、片手で払いのけざま腹部に強烈な蹴りをたたきこんだ。炎をまとった強烈なキックに〈ヴァルナ〉は吹き飛び、まだ赤く熱している溶けた壁面にめりこむ。肉の焦げる臭いがただよい、〈ヴァルナ〉は怒り狂って激しい冷気を放射した。たちまち周囲が白く凍りつき、息のつまるほどの高温だった室内は、たちまち零下にまで急降下した。

「やめて！　二人とも、やめなさい！」

アルジラが叫んでいた。なぜサーフが生きているのか、あのような不可解な出現の仕方をしたのはなぜか、理解できないことは多すぎた。だが、このまま二人を戦わせておくことが、

よい結果を招くはずもないことは、だれが見てもあきらかだった。
「サーフ、ここにはセラもいるのよ――とても弱ってる、彼女が危険なのよ！　この娘を巻きこんでもいいっていうの！」
〈ヴァルナ〉は聞こえた様子もなかった。聞こえていても、理解できなかっただろう。再構成されたばかりの肉体は、物質的存在を保つためになによりも糧を、食糧を、欲していた。その最上のものがいま目の前におり、誘うように炎の爪を揺らしている。意識を占めているのは〈餓え〉、そして、眼前の敵の存在、それだけだった。
〈ヴァルナ〉は吠えたけり、凍りついた壁から身をもぎ放しざま、どっと四方に氷の槍と刃を噴出した。〈アグニ〉はとぎれることなく高笑いを発しながら、続けざまに撃ち出す火球で押し寄せる攻撃をうち消していく。だが、防御をすり抜けた何発かが胸をえぐり、腕を切り裂き、腹を貫く。攻撃が当たるたび、〈アグニ〉の巨体はわずかに揺れた。腹部の、〈シヴァ〉の時に開いた傷はこのときになってもまだ治癒しておらず、じくじくと血を滲ませていた。しかし〈アグニ〉は気にとめた様子もなく、攻撃を食らうごとに、ますます喜ばしげに頭を振りたて、ほがらかな笑いを響かせた。
『その調子だ！　その調子！』はやし立てるように〈アグニ〉は言った。『以前のおまえなら、絶対にこんな戦いはできなかったな。いつでも、おまえは甘すぎた。さあ、もっとかかってこい、もっとやってみろ！』
相手が弱った様子を見せないのを感じとり、〈ヴァルナ〉は氷の破片を散らしながら起き

上がると、ふたたび跳躍して高い位置をとろうと試みた。〈アグニ〉もすかさずあとを追う。〈シヴァ〉と〈ヴァーユ〉によって空けられた竪穴を、互いに交差し、激突し、火花と氷片をまき散らしながら蒼白の王と真紅の巨神が駆けのぼっていく。

それは二筋の竜巻、氷と炎、冷気と熱気、蒼白と真紅の大螺旋であり、氷の槍には炎の剣が、水の刃には熱した刃が、獣じみた咆吼には豪快な哄笑が応えた。相反するものでありながら、その動きはほとんど鏡に映したようにひとつであり、微妙な対称性で空中を舞った。地上にいる者は戦いの余波から身を守りながら、ただ茫然として見守るしかなかった。その戦いが彼らの、彼らだけのものであり、誰にも手の出せない種類の舞踏であることを、眼前で繰り広げられる光景はこの上なくはっきりと示していた。

いまや〈ヴァルナ〉と〈アグニ〉は正対し、両腕ではげしく打ち合っていた。繰り出される斬撃を真紅の腕が受け止め、なぎ払う炎の爪を蒼白の装甲がはじき返す。周囲には雹の弾丸と氷片の刃が、渦巻く火花と爆発する炎球と交錯して、巨人たちと同じく目まぐるしい戦いを繰りひろげていた。薄暗いドームは戦いの光で赤々と照らし出され、拳を交える〈ヴァルナ〉と〈アグニ〉の拡大された影が、湾曲した壁に影絵芝居のようにゆらゆらと踊った。攻撃を一つ身に受けるたび、腹の底から〈アグニ〉は笑った。なんの陰りもない、純粋な歓喜に満ちた、すみきった笑い声だった。

〈ヴァルナ〉のブレードが高々と上げられ、振り下ろされる。哄笑しながら受け止めた〈アグニ〉は、ブレードを払いのけたそのままの勢いで、鉤爪を下からなぎ払うように〈ヴァル

ナ〉の首へ叩きつけようとした。
だが、斬撃そのものがフェイントだった。〈ヴァルナ〉は後ろに引いていたもう一方の手で拳を作り、轟くような勝利の叫び声をあげつつ、敵の分厚い真紅の胸の中心に叩きつけた。
鈍い音がした。影絵芝居の動きが止まった。一方は拳を突きだし、もう一方は大きくのけぞった姿勢で静止した。ふたつの影は重なり合い、ひとつのもののように見えた。
とつぜん雹と火花が消え失せ、息詰まるような沈黙が落ちた。荒い呼吸音が響いていたが、どちらのものかは判然としなかった。
『そうだ……やはり……こうでなくては』喘ぎながら、満足げに〈アグニ〉は言った。大きな手を上げ、〈ヴァルナ〉の腕をがっしりと掴む。まるでそこから奪われることを恐れているかのように。『こうでなくてはおまえらしくない……俺は、おまえだけは俺と同じ場所に立つ権利があると、ずっと思ってきた……それは証明された……サーフ』
〈アグニ〉の胸からどっと血が噴き出し、〈ヴァルナ〉の顔を赤く染めた。
徐々に、〈サーフ〉の意識が〈ヴァルナ〉の底から浮かび上がってきた。顔面にかかった温かな血を感じ、それが口に流れこみ、皮膚から吸収されていくのを、湯に浸されるように心地よく感じていた。
だが、理性はべつだった。紅い〈餓え〉の靄が徐々に意識から遠ざかり、現実の風景が目に入ってきた。暗いドーム。静まりかえった空間。足の下の破壊された竪穴。そして目前にいる、敵——いや。

蒼白い光輪が燃え、二神はそれぞれ人間の姿を取りもどした。すぐ近く、息をすれば触れるほどの距離に、赤い髪をした、見慣れた顔があった。
男らしい顔にある、険のない、満足げな笑みは、何かが不釣り合いだった。腕が熱いなにかに埋もれている――サーフはまばたき、まだ意識に残る霞を払おうとあがきつつ、それが何かを見きわめようと身を引きかけた。
ヒートの笑みが深くなり、よせと言うように腕を強く引かれた。身体が傾き、肩が胸にぶつかった。近々と寄せた唇で、ヒートは囁いた。
「おまえの勝ちだ……サーフ。よく――戻ってきた」
そしてサーフはついに見た。自分の腕が、ヒートの胸を貫き、拳を背中側まで突き抜いているさまを。
苦痛の色も見せず、ヒートはやはり微笑んでいた。その微笑んだ唇の端から、ゆっくりと、太い血の筋が流れはじめていた。
サーフはのけぞり、舌の上に友人の血の味を感じながら、長い長い絶叫を放った。

6

かつて〈神〉へのゲートが設置されていた小部屋の跡地に、横たわるひとりの男を取り囲

んだ小集団が、頭をうなだれてすすり泣いていた。セラはアルジラに抱かれてしゃくり上げ、アルジラも歯を食いしばって涙が流れるままになっていた。シエロは身も世もなく泣いている。ゲイルはまだ自由にならない身体を壁にもたせかけながら、うつろな目を人の輪の中心に向け、そしてサーフは、死に瀕した友人、自らの手で死に至らしめられようとしている友の頭を膝に載せて、言葉にならない涙にくれていた。

「胸を張れ、サーフ」

静かだが、有無を言わさぬ口調でヒートは言った。彼の普段の傲岸な態度が、その奥に響いていた。唇の端にはいまだに微笑の影があり、こびりついた血のかけらが、石榴石（ガーネット）のこぼれるように剝がれて落ちた。

「おまえは勝った。この俺と全力で相対し、そして勝利した。満足だよ、サーフ。俺の見る目が間違っていなかったことがわかってな」

「なんで、こんなこと」涙声でアルジラが言った。「なんで、こんなこと、したのよ、ヒート。サーフを殺したのはあんたじゃなかった。なんで、殺したなんて嘘をついたの？　どうして、あたしたちにまで嘘を？　〈協会〉に従うふりをしてまで、なんで――」

「嘘はついていない。俺は嘘はつかない」ヒートは言った。「本当に、おまえたちを殺すつもりだった。サーフも。もしあの時、ゲイルが来ていなければ、俺はサーフにとどめを刺していた」

名前を耳にして、ゲイルがぴくりと肩を揺らした。ヒートはまた笑い、咳きこんだ。

—本当におまえたちときたら阿呆ぞろいで　お人好しで——馬鹿丸出しだ」くく、と喉を鳴らす。「俺がサーフを殺したと言ったのは、嘘をつきたかったんじゃない、ただの見栄だ——未練、と言うべきかな。〈アルダー〉などというくだらん相手に、サーフを殺されたくなかった。こいつを殺していいのは俺だけだと思っていた。だから、俺が殺した、と言った。おまえたちを全員殺そうと考えていたのは、確かだしな」

「でもどうして、あたしたちを殺そうとなんて」

「俺たちは、人間じゃなかった」呟くようにヒートは言った。穏やかに凪いでいた赤い瞳に、ちらりと以前の怒りの炎が揺れた。「人間の都合で作り出された、〈ASURA-AI〉とやらだった。俺たちがいたジャンクヤードも、あそこで起こったことも、みな奴ら、〈協会〉と人間たちにとっては、箱庭の中のお遊びにすぎなかった。

俺にはそれが許せなかった。誰であろうが、俺の頭上に立つことは許さない。ことにそれが、俺を作り出したなどというくだらない存在ならば、よけいに俺はそんなものを認めない。俺は奴らを全員始末しようと思った。俺を作った人間、俺を作った世界、それからこの俺自身も、なにもかも消してしまうつもりでいた。だが、おまえたちがいた……」

ヒートの視線は順々に〈エンブリオン〉の仲間たちの上をたどり、最後に、サーフの上でとまって、長い間たゆたった。

「おまえたちは馬鹿だ。甘ちゃんだ。どうせ真実を知っても、奴らを殺そうなどとは考えないだろう。たとえ人喰いの悪魔と言われても、人間たちを助けずにはいられないだろう。そ

なお苦しむだろう。だから――」

ういう奴らだ。俺が人間と世界を破壊しようとすれば、必ず止めようとし、止めようとして

「殺そうとしたのね。わたしたちを、苦しませないために」アルジラの胸に顔を埋めたまま、セラが呟いた。潰れた声が、涙のためにさらにざらついていた。「あなたは知っていた――サーフたちが、たとえどんな扱いを受けても、無力な人間たちを放ってはおけないことを。人喰いの悪魔としてつまはじきにされても、弱いものの味方をするのをやめられないことを。

かといって、〈協会〉に抱きこまれて、甘やかされた兵器として飼育されるのも、許せなかった。だから、殺そうとした。人間と世界を灼きつくす前に、わたしたちを眠らせてしまおうとした――わたしたちがその光景を見て、苦しむことのないように。なにもかも、自分ひとりの身に背負うつもりで」

「おまえたちは何も知らなくていい」虚空を見つめながら、独り言のようにヒートは言った。

「悪魔になるのはひとりだけでいい……人喰いの悪魔……違う、おまえたちはただの、間抜けな犠牲者だ。人間として俺に殺される、間抜けで哀れな犠牲者だ。だから、おまえたちは悪魔に殺される。おまえたちが、人間だから。ジャンクヤードでそう信じたように、おまえたちは、人間だ。けっして、作られた悪魔などではない……」

「あんた、馬鹿よ。大馬鹿よ」

耐えかねたように、アルジラが吐き出した。唇をゆがめてヒートは苦笑し、疲れたように目をとじて仰向いた。

サーフに貫かれた胸の傷は深く、ふさがる気配はいっこうになかった。〈シヴァ〉でいた時に受けた腹の傷、そして、自らの手で引き裂いた首の傷も、治癒の兆候すらみせていない。本来なら〈ASURA〉ボディにはあり得ない現象だった。

みなに支えられながら彼の状態を診たゲイルは、力のない声で、体内のエネルギー供給経路(チャネル)が完全に破壊されていると告げた。これだけの破損となると自力での修復は難しく、その上、主な駆動力であるダークエネルギーの供給が停止していては、たとえ自己イメージを明確に保っている状態でも、復帰は不可能に近い。

ゲイルもまだダメージが重く、自分自身のボディを保持するのが精いっぱいで、もともと物質次元から切り離された場所にあるダークエネルギーの供給路をさぐり当てて修復するのは、荷が重すぎた。

加えて、ヒート自身、もはや自分の生命になんの関心も払っていないように見えた。胸に空いた穴から流れ出している血を他人事のように眺め、不思議に静かな目で遠くを見つめているばかりだった。

壁面の〈神〉へのゲートだったスクリーンは縦に大きく裂け、内側から何者かがむりやりこじ開けたあとのように見えた。たえまなく踊っていた光は完全に消え、割れたガラスとプラスティックの破片に、切れた血管のようにコードが絡みついていた。〈神〉への門が閉ざされたいま、ここにあるのは静寂と、そして死の気配だけだった。

「なあ。俺を喰えよ、サーフ」

血に濡れた手をあげて、ヒートはサーフの頬に触れた。淡く光を放つアートマシンボルの上に、紅い筋が引かれた。サーフはびくっとし、唇をわななかせながら何度もかぶりを振った。銀色の目の縁からあふれた涙が、血と混じりあって膝にしたたった。
「結局、何もかも背負わせちまうんだ。力くらいやらないと、筋が通らない」
またサーフはかぶりを振った。右腕は肘まで血にまみれ、足もとにはヒートの流した血があった。あの静寂の岸辺をあとにする際に囁かれた声が、幽かなこだまのように聞こえた。
『君は帰還の代償として、ある大きなものを喪わなくてはならないだろう』
だが、こんなことだとは思っていなかった。こんなことになるとは思ってもいなかった。誰よりも救いたかった、近くにいてほしかった相手を、自らの手で屠ることだったとは。これが代償となると知っていたならば、決して——。
いや、そうだろうか。知っていたら、自分は復活を拒否したのだろうか。考えても意味はなかった。因は生まれ、果は結ばれた。すでにはるか以前から、こうなることは定まっていたのかもしれない。膝の上のヒートの生命が、刻々と燃えつきていくのを、サーフはわが身のことのように感じた。
「サーフ」なだめるようにヒートは囁いた。
「受け取れよ。——〈喰いたい〉んだろう？」
鞭打たれたようにサーフは身をこわばらせた。それははるか以前、ジャンクヤードで初めて〈喰らう〉ことを知ったあと、ヒートに言われた言葉だった。あの時もヒートは静かな目

をし、選択に怯える自分に向かって、決然と血の滴る肉を——『生命』を、差し出してみせたのだ。
あの時自分は、それを差し出すヒート、そして欲する自分に恐怖し、その場を逃げ出した。だが、今差し出されているのはヒート自身の生命と血と肉であり、サーフは確かにそれを欲していた。復活したばかりの肉体はまだ充たされるにはほど遠く、戦いの中で口にした少量の血では、とうてい追いつくはずもなかった。
血を、もっと肉を、と体内で〈ヴァルナ〉が吠えている。喰らえ、生きるために、喰らえ。この肉体を維持するにはしょせん、他者の生命を奪い、喰らい続けることが必要なのだ。
『水の上に咲く蓮花は美しい、だが、泥水の中に伸びたその茎と根は、水底で腐れた生き物の死骸に根を張り、なお美しく咲き誇っている』
その通りだ。生命という花は、幾百幾千の命を奪い、喰らってきたその上に、花開いている。泥土の底で腐り果てた死骸を抱いて、より美しく、鮮烈に。
「……アルジラ」ヒートの髪を無意識に撫でながら、サーフは初めて言葉を発した。
「リーダー？」
「シエロといっしょに、セラとゲイルを連れて〈ローカパーラ〉と合流しろ。……俺は、あとから行く」
「リーダー、でも」
「命令だ」

わずかに目を上げて、サーフはアルジラを見た。瞳には銀に混じって、わずかな金色の光が踊っていた。一瞥を受けたアルジラは短く息を吸い、きつく唇を引き締めると、うなずいた。

「了解、——リーダー」

シエロは迷うようにサーフを見ていたが、やがて視線を落とし、うつむいたまま立ち上がって、セラを支えた。セラは抵抗しようとしたが、それだけの体力は残されていなかった。シエロに抱えられるようにしてセラが連れ出されると、ゲイルが、アルジラに背負われて運び出された。彼もまた抵抗しようとしたが、ヒートの頭を膝に載せて身じろぎもしないサーフの丸めた背中を見ると、その身体から力が抜けた。リーダー、と声にならない言葉を残して、アルジラとともに、ゲイルもその場を離れていった。

サーフとヒートの二人だけが残った。ヒートの荒い呼吸音だけが唯一の音だった。サーフは放心したように座りつづけ、友人の赤い髪に指を通していた。ヒートは喘ぐように喉を鳴らしながら、最後の力をふりしぼって手を上げ、相棒の手を捉えた。サーフは動きを止め、見下ろし、ヒートの晴れやかな微笑をそこに見た。

サーフの口からはげしいすすり泣きがあふれ、そして、暗黒が訪れた。

「サーフ！」

しばしのち、地下で不安にかられながらも待ち続けていた〈ローカパーラ〉隊は、通路の向こうから蹌踉と近づいてくる人影を見つけ、駆け寄りかけて、ぎくりと足を止めた。
「サーフ……？」
サーフは黙っていた。頭から血のシャワーを浴びたように全身どろどろで、頭からはまだ粘った滴が、筋をひいてねっとりと滴っていた。髪の銀色はほとんど見えず、肌も、スーツも、飛び散った鮮血で真っ赤に汚れている。
あまりにも凄惨な姿に、飛び出してきたシエロも、アルジラも、ぎくりと足を止めた。何が起こったのかを察するがゆえに、それ以上、近づくことができなかった。かける言葉すらなく、彼らは立ちすくんだ。
「──アニキ……え、あ、セラ」
勇をふるって呼びかけたシエロの横をすり抜けて、セラが前へ出てきた。救護隊の手当を受け、いささかの回復はみせていたが、まだ顔色は透き通りそうに青白い。
おぼつかない足を踏みしめて、セラは、血まみれのサーフに歩み寄った。立ち止まり、濃い血臭をまとったその姿を見上げる。澄んだ黒い双眸に、恐れはなかった。彼女は手をのばしてサーフの腕をとり、唇をつけて、流れ落ちる血をすすった。
サーフはようやく意識を取りもどしたように身を震わせ、まばたいてセラを見た。
「セラ……？」
「わたしも、ヒートを食べたわ」セラは言った。色のない唇を、血が紅く染めていた。「あ

なたの罪をわたしにも背負わせて、サーフ。すべての原因を作り出したのは〈神〉、そして、わたし、テクノシャーマンだから。この血はあなたとわたしのための血、そして、みんなのための血よ。思い出して、サーフ。あなたは、ひとりじゃない——

サーフの唇が震えた。セラの黒い瞳が、強い力で彼を捉えていた。全身をおおう血の膜が薄れ、体内に吸いこまれるように消えていった。

サーフは両手を見つめ、セラの唇を汚す血の滴を見た。

唇が開き、何かを言おうとした。形にならなかった。

骨を抜かれたように身体がその場に崩れた。セラの手が頭に触れた。震える腕が上がって、少女の細い身体にすがるように回される。

喉の奥から、溶岩のような塊が衝きあげてきた。全身を灼きつくしそうなそれはあっという間にサーフを包みこんだ。セラの膝に頭を押しつけて、サーフは身を揉んだ。自分の喉から発している獣じみた声が、身を二つに裂かんばかりの慟哭であると知るまで。

第七章

黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れててしまった。

『イザヤ書』一四章一二節

1

「兄ちゃん!?」
サーフやゲイル、セラの最低限の回復を待ったのち、〈ローカパーラ〉は地下の居留地に帰り着いた。兵をいったん解散させ、セラと〈ASURA〉たちを含めた指導者連が、負傷

者の治療の手配や、避難所にかくまったニューヨーク市民の処遇に関して討議していると、非戦闘員の居住区のほうから誰かが息せき切って駆けてきた。
自分たちのヒトタンパク補給について意見を述べかけていたサーフは気づいて話をやめ、そちらを向こうとした。受け止めようとするより先に、小さい身体が弾丸のように突っこんできて、思いきり首にとびついた。
「あんた、生きてたのかよ、兄ちゃん！　みんなあんたのこと死んだって言って、俺」
「ごめんなさい、フレッド、サーフはまだ疲れてるの」
横からやさしくセラが言った。彼女自身もまだ憔悴の色が濃く、立っていることができずに持ち出されてきたオイル缶に腰を下ろしていたが、サーフを見る視線には心配の色があった。
「フレッド？」
サーフは混乱していた。そうだ、確かこの少年は〈ザ・シティ〉に出立する前に岩棚で言葉を交わした、あの少年だ。しかし、名前は——
「あ、そっか。まだあんたは俺の名前知らないんだっけ」
ぐいぐいと汚れた頭をこすりつけてきていた少年は後ずさり、少し赤くなって、ぐいと背をそらして親指で自分の胸を指した。「俺、フレッド。〈ローカパーラ〉の一員だ。よろしくな」
「こら、いつから一員になった。このいたずら坊主が」そばで見ていたグレッグが苦笑し、

猫の子をつまみ上げるようにフレッドの襟首をつかんでサーフから引き離した。
「離せよ！」フレッドは憤慨して手足をじたばたさせる。「兄ちゃん、無事なら無事って、なんで言ってくんなかったんだよ！　みんなすっげー悲しがってたんだぜ、あんたの仲間も、それからセラも……」
そのまま文句を続けようとして、はたと口を閉ざした。その場に集まった大人たちの間にただよった、沈痛な雰囲気に気がついたらしかった。
「……なあ、なんかあったのか？　ニューヨークで。〈ザ・シティ〉を消したアートマとかってのは止められたのかい？　あんたたちが無事ってことは、ちゃんと相手を撃退して、手出しできないようにさせてきたんだろうけど、でも」
「フレッド」
杖を鳴らして出てきたロアルドが、重い声で言った。フレッドは背伸びしてなおも言いつのろうとしていたが、びくっとして身を縮め、サーフから手を離した。
「すまんが、ニューヨークの件の後始末で、まだいろいろすることがあるんだ。彼らは全員疲れてるし、怪我もしてる。話はいずれ、できるときになったらしてやるから、今は彼らを休ませてやってくれんか」
「そうだよ。あと、オレのアニキに勝手にくっつくなっての」割りこんできたシエロが怒ったようにフレッドの肩を突く。「それに、おまえは知らないだろうけど、アニキは、アニキはなあ――」

「シエロ」
サーフの短い制止で、シエロは喉を詰まらせるような音を立てて黙った。だって、と小さく呟き、しがみつくようにしてサーフの肩に頭を押しつける。
青い編み下げを力づけるように撫でてやって、サーフはフレッドの方を向いた。
「そうだった。約束していたな」わずかに微笑んだ。「おまえが死んだら、喰わせてくれる約束だったたな」
「そ、そうだよ。忘れちゃいねえよな」フレッドはあわてて胸を張り、ぴんと背筋を伸ばして立った。「今でも約束は約束だぜ、オレのことはあんたが喰らうの。そうだよ、約束破っちゃ、男じゃねえよ。ちゃんと守ってくれるよな?」
「ああ、約束するとも。——フレッド」片方にシエロを抱えたまま、もう一方の手でフレッドのもつれた髪をくしゃりとかき回した。「もう、夢は見ないか?」
フレッドの幼い顔が一気に明るくなった。
「うん!」
「それはよかった。さあ、もうしばらくあっちへ行っていろ。後始末にはまだしばらく時間がかかる。ニューヨーク市民を今後どうするか考えなければならないしな」
「了解!」
骨の浮き出た肘をみせてさっと敬礼し、フレッドはまた居留地の方へ駆け戻っていった。ズボンの後ろにつっこんだ拳銃が不格好に揺れている。

「ちぇっ、なーにが了解だっての、ガキのくせに。オレのアニキに勝手にさわんじゃねえよ」シエロがぶつぶつ言っている。「なんにも知らねえくせして――」
「あの子には関係のないことだ、シエロ。これは、俺たちの問題だ」口調を少し厳しくしてサーフは言い、シエロを離してセラの隣に座らせた。「知らなくていいこと、知らせなくていいことは世の中にたくさんある。これもその一つだ。ロアルド、グレッグ、市民たちの収容状況は？」
「あ――ああ」ロアルドが壊れた眼鏡をかけ直し、声を上げて部下を呼んだ。報告を聞き、渡されたハードコピーを確かめて、「とりあえず、水と衛生施設の設置は完了してる。ただ、食糧に関してはコロニーの生産体制ではキャパシティを越えるので、いずれはドームの方に戻ってもらうことになると思うが」
「ドームの修理や清掃はどうなってる」
「今、やらせてるところだ」グレッグが応じた。「ネットワークを部分的に再起動できたので、環境維持システムに大ざっぱな片付けや危険な破損部分の修理を急がせている。あんたのところの参謀型が完全に復帰したら、もっとスピードを上げられると思う。彼は大丈夫なのか？」
「私はもう動ける、リーダー」
毛布に包まれて寝かされていたゲイルが、ふらつきながら起き上がってきた。〈シヴァ〉に刻まれた重度の熱傷はどうやら消え、もとのトライブスーツ姿を取りもどしているが、セ

ラと同様、その顔には死の一歩手前まで行ったものの根深い疲労が貼りついている。一度喪ったはずのリーダーを見つめる目には、懇願にも近い必死の色があった。「機能のほぼ八十パーセントは回復している。分身のコントロールには支障のない回復具合だ。新た分身をいくつか走らせ、ニューヨークのネットワークの作業効率を上げるくらいはできるはずだ」
「それは駄目だ、ゲイル」半身を起こしたゲイルのそばに膝をつき、軽く肩を押して毛布に押し戻す。「俺が求めているのは百パーセントの回復だ、それ以外はない。みなは十分に無理をしすぎた、セラも、おまえも、アルジラもシエロも。だから、完全に回復するまで、おまえたちを前面に立たせる気はない」
「しかし、リーダー」
「おとなしく言うこと聞きなさい、ゲイル。リーダー命令よ」アルジラが厳しく言い、それから、思い出したように泣き笑いに顔をしかめた。「まったく……あんたに対して、こんなことを言う羽目になるなんてね」
サーフはまだ何か言いたげなゲイルを断固として毛布に押しこみ、しばらく身じろぎもせずに、その碧色の目を覗きこんだ。そこに刻まれた絶望と悔恨の傷跡、そして現在、目の前にいる者に対する敬慕の情と、再び彼を喪うことへの狂気じみた恐れを読み取った。
「ゲイル」まっすぐに相手の瞳の奥を見つめながら、サーフは囁いた。「つらい思いをさせたな。……すまなかった。よく正気を保って、ここまで生き抜いてきてくれた――ありがとう。おまえまで喪うことになっていたら、俺は、けっして自分を許せなかった」

ゲノルの唇が、声もなく、リーダー、という言葉を形作った。腕で目を覆って、彼は顔をそむけた。その腕の下から涙がひと筋、白く光って頬を伝うのを、皆は見た。
「……今は、こんなところか」咳払いして、ロアルドが杖を突いて立ち上がった。
「ニューヨーク市民は数日間ならここにとどめておけるだろうが、食糧や水、それに、精神的ストレスの問題からしても、早めにもとのドームに戻ってもらうほうがいいだろう。もちろん、こちらの監視下に置かせてもらうことになるし、武装解除は徹底させるが。
もう、人間同士で仲間割れしている状況じゃない。衛星回線は完全に死んでるし、マダムとエンジェルは行方不明だ。生死もわからない。いずれにせよ、〈カルマ協会〉はおしまいだろう。他の都市との連絡も、完全に遮断されてる。もしかしたら今、この地下コロニーにいる人間が、地球上で最後に残った人類になるかもしれないんだ」
背筋の冷たくなるような沈黙が落ちた。ロアルドが口にした戦慄の事実に、だれもがすくみ上がったようなこわごわとした視線をかわした。
「だが、俺たちはあきらめない。ここには〈ASURA〉がいる。そして〈女神〉が」
朗々とした声でグレッグが宣言した。
「そして俺たちは、生きる意志を捨てない。自分の生命は自分でけりをつける。人類が誰かに作られたものであろうと、失敗作であろうと、そんなことは関係ない。生きる意志を持つ以上、俺たちはここに生きる、そうだろう、サーフ」
「ああ、そうだ、……そうだな。グレッグ」サーフは髭におおわれた浅黒い顔に笑顔を向け

た。「あんたを見ていると、以前知っていたある男を思い出すよ。俺にとっては大切な先達であり、戦友だった。こうして因果は巡るのかもしれないな……データであろうと、物質であろうと、その本質に変わりはない。因果の転輪は回りつづける」
「なんだって？　どういう意味だ、サーフ」
「中へ入ろう」サーフはすでに背を向けていた。「俺がどうやって物質世界に『帰還』したか、その前にはどこにいたか、そこで知り得たのは何か。話すことがたくさんある」

「『虚無の岸辺』？」
けげんそうに、ロアルドが問い返した。
「なんだそれは。いわゆる——その、『死後の世界』みたいなものか」
「いや、違う。死とはなんの関係もない。むしろ、生も死も存在しないからこその『虚無』なんだ。俺は」
サーフはウレタンのはみ出た椅子に腰掛け、足を組んだ。ふたたび、〈ローカパーラ〉司令室。ロアルドとグレッグ、アルジラとシエロが卓を囲んで思い思いの場所に座り、別室で休むように勧められたセラとゲイルは、制止を押し切り、毛布にくるまり長椅子に半身をのばした姿勢で、座に加わっていた。
「俺は、〈アルダー〉のアートマ分解能力でボディを分解された。〈ASURA〉ボディが

ナノサイズの半有機量子コンピュータ集合体であることは知っていると思うが、〈アルダー〉の能力は、そのコンピュータ同士を集合させている力を断ち切ることにある。それは本質的には破壊不能な〈ASURA〉ボディを、もっとも小さいサイズの断片に——分子サイズ以下の粒子にまで分解して、存在そのものを喪失させる能力だったんだ」

「えっと、よくわかんないんだけど」サーフの隣に座ったシエロがもぞもぞする。「つまり、それがオレたちの見た、アニキの身体が霧みたいになって消えてくところだったってこと？　それじゃあの時、アニキ自身っていうか、アニキの意識みたいなものはどうなってたのさ。それも分解とかされてたの？」

「〈ASURA〉ボディは、インストールされたAIの自己認識によって存在を規定する」とサーフは答えた。「〈アルダー〉の能力には、ボディを分解すると同時に、ボディの可変性を制御し、自己修復や形態をコントロールする主観意識、〈ASURA-AI〉をも分解する機能が含まれていた。分解というより、分散、というべきかな。

粒子サイズにまで分解された肉体を、人間的意識は『自分』であるとは認識できない。逆に言えば、粒子サイズに分解された〈ASURA〉ボディの構成要素は、その本来の量子的性質を取りもどし、あらゆる場所、あらゆる次元、あらゆる可能性にわたって拡散する。それにともなって自意識も拡散し、人格的な統一を保てなくなる。ごく簡単に言えば、人格もボディも、少なくともこの物質界からは消滅する、ということだな」

毛布をかき合わせて真剣な顔をしているセラにちらりと目を向けて、

「おそらく、セラが自閉した〈EGG〉内部に拡散していたのも、これと似たような状態だったんだろう。『俺』、サーフ、という〝人格は、拡散した〈ASURA〉ボディの粒子に、寸断されたホログラムの一片のように希薄な影としてあり、それでも全体像は維持していた。しかし各断片は人格として意志を持ったり行動したりできるほどの明晰な輪郭を保っていない。ただすべてを眺め、あらゆる可能性を観るが、自我を持たないために自発的な行動をすることはない、時空に遍在する純粋な一個の『観察者』――」

言葉を切ってサーフはセラを見た。彼女は下唇を見えないほど噛みしめ、両肩に毛布を引きよせていた。両者の間に一種の理解めいたものが走った。かつてセラがいた〈女神〉の世界、全知にして全能だが、自我を持たない存在の世界に、サーフもいたのだ。セラはうつむいて視線をそらした。

「――俺が消滅したあと、皆がやっていることはみな観えていた」サーフは続けた。「セラの場合は殻にはばまれて〈EGG〉内で拡散が止まっていたが、俺はそれよりもっと広範囲に、次元を越えて拡大していた。量子的存在にとって、三次元はきわめて狭く限られた、低位の次元でしかない。あるいは次元という概念すら越えた、まったく未知の空間だったのかもしれない。

俺にも、よくはわからない――というより、説明する言葉がない。セラが〈神〉との交流の中身を大ざっぱな形でしか口にすることができないのと同じで、三次元の物理的肉体に存在が収斂した今は、三次元の言葉と概念しか扱うことができない。それ以上のことは、この

物質界の物理法則に合わせたハードウェアの能力を超える」
「でも、観ててくれたんだ」シエロがぽつりと言った。「オレらはアニキが消えちゃったと思ってたけど、ちゃんと、オレらのやってること、観ててくれたんだ」
「おまえは頑張ってたよ、シエロ。みんなもな」
身をすり寄せてくるシエロの頭を叩いてやって、サーフは一同の顔を見回した。
「最終的に俺を呼び戻したのは、ヒートが——皆を、殺そうとした時だった。それ以前から、徐々に呼び起こされようとはしていたが、あいつが俺を殺したのではないこと、あいつが俺たちを殺そうとしていた本当の理由を、皆に知らせずにおくことはどうしてもできなかった。その想いが、俺の新しい〈核〉になって、拡散していた断片を再収斂させた。帰還するにあたっては、奇妙なものに助けられたが」
「猫。『シュレディンガー』」体力の回復を待つうちに、簡単な話を聞かされていたアルジラが確認するように言った。「銀色の目をした猫……ねえ、それって、ジャンクヤードにもいたあの〈猫〉と同じなのかしら。それが口をきいて、自分はシュレディンガーだ、って言ったの？」
「そのあたりは複雑で、よく覚えていない。実を言えばあの世界でのことは、時間が経てば経つほど記憶が薄れていくように思う」
サーフは頭を振った。あの絶対的な安らぎの世界、静寂と安逸の岸辺はもはや遠く、地上と肉体にまつわる些事が、一秒ごとに記憶を蚕食していく。猫の銀色のまなざしと、首の鈴

の涼しい音は奇妙なくらい鮮やかなのに、それらが語ったさまざまな言葉は、水のようにとらえどころなく指の間から流れ落ちていってしまう。

「ただ、その猫が俺を呼び起こしたこと、それから、全方向に向かって拡散していた〈俺〉の自我を、この〈サーフ〉へと束ね直したことは確かだ。そうだ、それからもう一人、ヒート——いや、ヒートの原型（オリジナル）だと名乗った男がいた。ヒートにそっくりだが、髪と目の色だけが違っている」

「カズキ・ホムラか」ロアルドが驚きの声を上げて身を乗り出した。「あんたが、あの男に出会ったと？」

「彼は、自分が喚（よ）ばれたことは俺の選択の結果だ、と言った。俺が物質界への帰還を望んだために、この世界と、おまえたちにつながる因果を強く持った存在が、あの場に引きよせられたのだと思う。その男——カズキ、は俺の手を摑んで、自分の胸につっこませた。そのまま俺は身体ごと呑みこまれて——」

「ヒートのボディのエネルギー供給経路（チャネル）が破壊されていたのは、あるいはそのためかもしれない」ゲイルが口をはさんだ。

「あのチャネルはボディの中でも物理次元から遊離した位置に、高位次元に向かって開かれている。リーダーはそれまで存在した高位次元から降下する際、そこをゲートとして使用したのだろう。あの時、ヒートは〈EGG〉への接続ゲートを体内に取りこんでおり、より高位次元と繋がりやすい状態にあった。ヒートの体内からリーダーが出現したように見えたこ

とも、この推測を裏づけている」
「ゲイル」
叱るようにアルジラが語気を強めた。ゲイルは胸をつかれたような表情をし、混乱した顔をサーフに向けた。
「リーダー、すまない。私は」
「謝ることはない、ゲイル」途方に暮れたように肩を落としたゲイルに、サーフはいたわりの声をかけた。「おまえがどんなに傷ついていたか、狂気の淵で絶望していたかも、俺は知っている。だから顔を上げろ、ゲイル。おまえは〈エンブリオン〉の参謀型として、俺の仇をとろうとしてくれていたんだろう。それほど傷ついてまで」
「私は……」
なおも続けようとしたが、言葉を見つけることができないのか、ゲイルは瞼を伏せてうなだれた。声をかけることもできず、気がかりそうに見つめるサーフに、グレッグが「それで」と先をうながした。
「あんたはさっき『すべての時間と可能性にわたって拡散する』とかなんとか言っていたな。それじゃ、もしかして、過去も観えたのか？　未来も？　これから先に来るかもしれない、可能性の未来の道を？」
「……それもまた、口にできないことのひとつだ」苦しげにサーフは答えた。
「この〈俺〉は、この次元、この時間線の現時点に降り立った瞬間に、この時空の物理的法

則に拘束される。未来を観ることはできないし、観たところで表現することはできないだろう。しかし、いくつか知り得たことはある」
「それはなんだ」ロアルドとグレッグが色めき立った。
「〈神〉の狂気と、それによる宇宙的メルトダウンを防ぐ方法」
ゆっくりとサーフは言った。
一同ははっとして顔を見合わせ、いきなり、堰を切ったようにしゃべり始めた。シエロとアルジラはもちろん、ロアルドとグレッグはテーブルを踏み越えんばかりに興奮し、ゲイルとセラは、相次いで毛布を剝いでできる限り身を乗り出した。
「それほんと、アニキ!? どうやんの? ほんとにそれで、みんな助かんの!?」
「でも、セラでさえ今の〈神〉と完全にシンクロはできないのよ、どうやって……」
「ニューヨークのゲートは破壊されてしまったし……」
「マダムとエンジェルも行方不明だ……彼女たちを探し出せば、なんとか……」
「マダムを探しても無駄だ。彼女はすでに死亡している」
きっぱりとしたサーフの言葉に、一瞬全員が黙った。ロアルドがおそるおそる、
「マダムが死んでいると、なぜわかる？ あんたの話では、〈アルダー〉がやってくる直前にエンジェルといっしょに隠し通路を使って〈ザ・シティ〉を脱出したということだったが、それも、『虚無の岸辺』とやらで観たことなのか」
「ああ」

その場面はサーフの薄れがちな記憶の中でもひときわ鮮明だった。〈ザ・シティ〉消滅の報に青ざめるエンジェル。彼／彼女とマダムのやりとり。マダムの惘笑、そして、嘲り笑い。エンジェルの絶叫と、連射される拳銃。血まみれの死体となって転がるマダム……サーフは目を閉じた。

「マダム・キュヴィエは逃亡先で、エンジェルの手によって射殺された。その後、エンジェルがどうしたかは意識の収斂が起こり始めていたので観ることはできなかったが、指導者を殺したとあっては、たとえ組織のナンバー2でもただではすまないだろう」

「すると〈協会〉は頼りにならない……では、どうやって〈神〉を癒やすというんだ？」

サーフはいちど目を閉じ、開いた目を天井に向けた。その向こうには、黒変した太陽と、過重データに耐えきれず、次元の層を突き抜けていまにも落下の縁にある狂気の〈神〉の本体がある。

「〈神〉を狂わせているのは、彼にとっては解析不可能なデータの塊である、人間、特にその感情、だ」ひと言ずつ区切って、サーフはできるかぎり正確な言葉を探した。

「長年の間に積み重なったその処理できないデータが、〈神〉を狂わせ、メルトダウンを引き起こそうとしている。処理できないデータなら、処理できるようにしてやればいい。データ交換や暗号化、情報フォーマットと同じことだ。〈神〉は人間というメモリに含まれる『感情』をデータ処理するための言語を持っていない。ならば」

「――〈神〉にそのための言葉を与えてやればいい」

誰かが小さな声で言った。視線が集中した。セラが毛布をはねのけ、黒い瞳を輝かせて、背筋を伸ばしていた。
「――人間の感情がわからない〈神〉。彼はそれを処理するためのフォーマットを持っていない。それなら、そのための新たな言語(プロトコル)を入力してやればいい。人間を理解するためのフォーマットを。『心』という名の、新しいプロトコルを」
声はしだいに大きくなり、託宣のように大きく全員の上に響きわたった。ロアルドは茫然と口を半開きにし、グレッグは厳しい表情でセラを見つめている。アルジラとシエロはなにを言われているのかまだ理解できない様子で、顔を見合わせていた。ゲイルは「不可能だ――」と言いさしてやめ、サーフの口もとをじっと見つめている。
「不可能でもなんでも、それ以外に方法はない」
サーフの声が、セラの声とあわさって力強く響いた。
「俺はあの岸辺から〈神〉の姿を観た。過重データに取り巻かれ、自らを構成する情報自体に溺れかかっている〈神〉を。人格を保った状態では、誰も〈神〉のいる次元には到達できない。だが、地上から、〈神〉の端末を通して新しいデータをインプットすることならできる」
「〈EGG〉か」呻くようにロアルドが言った。眼鏡の下の目ががぜん輝きだした。
「なるほど、そうか。〈EGG〉はもともと、〈神〉と交信し、そのデータを操るために作られた施設だ。あれを使えば、〈神〉に、こちらから任意の情報を送ることは不可能ではな

いかもしれん」
「以前、言っていたな。カズキ・ホムラという共感能力者が、あんたを通して強烈な悪意と苦痛を〈神〉に叩きこんだために、〈神〉は完璧に狂い、〈EGG〉は自閉したと」グレッグはセラの顔をのぞきこんだ。「つまり、今度はそれと逆のことをやる、そういうことか？しかし、ゲートが破壊されている以上、〈EGG〉は――」
「もちろん、直接接続することが必要になるわ。ゲートを通した接続は、あくまで便宜的なものだから」強い口調でセラは断言した。「〈EGG〉本体の所在は、〈協会〉に残っているデータを調べれば、何か痕跡が残っているかもしれない。もしわからなければ、〈ザ・シティ〉から伸びている隠し通路の先を調べれば、見つかるかも。マダム・キュヴィエとエンジェルにとって、〈EGG〉はある意味、〈神〉そのもの。近くに重要な隠し施設を置いていても当然だと思うわ」
「ニューヨークの生き残りの〈協会〉員にも、知ってる奴がいるかもしれないしな」勢いをつけてグレッグは立ち上がった。「ちょっと行って調べてこよう。ゲイル、もう少し回復したら、〈協会〉のデータバンクを解析するのを手伝ってくれ。ロアルドと俺でやるより、あんたがやったほうが早いし、正確だろう」
「了解した」ちらりとサーフに視線を走らせ、頷くのを確かめて、ゲイルは答えた。「了解した、グレッグ。ロアルド」
「でもそれ、危なくねえの？〈EGG〉って」シエロが気がかりそうにセラの手を取った。

「だってセラ、あのゲートを使って〈ＥＧＧ〉とかいうの使ってただけでもすげえ苦しそうだったのに、そんな、直接接続とかしたら――」
「昔はあたりまえのようにやってたことよ。心配しないで、シエロ」
セラは微笑んでシエロに身を寄せ、兄弟にするように軽く頬に唇を当てた。ひゃっと声をあげたシエロが耳まで真っ赤になって縮こまる。アルジラはあきれたように首を振り、でもね、セラ、と言葉を継いだ。
「人間を救うことは大切よ、セラ。でも、あなた自身も、あたしたちにとってはとても大事なの。それを忘れないでね。あなたは〈エンブリオン〉の一員で、かけがえのないあたしたちの仲間。もうこれ以上、誰も失いたくないの、あたしたちのためにも、それに、サーフのためにも。どうか、無茶はやめてね。お願いだから」
「わかってるわ、アルジラ。ありがとう、みんな」心配そうに身をかがめたアルジラの額にも、セラは接吻した。アルジラは苦笑して、少女の頬と額に接吻し返した。
「わがままさん」髪に唇をあてて、アルジラは囁いた。「シン――〈アヴァター〉が言ってたとおりだわ。わがままな、ちっちゃな女神様。あたしたちがどんなに心配したって、どうせ、やめるつもりなんてないんでしょう。ほんとに、困った子」
「ごめんなさい」
柔らかな胸に抱き寄せられながら、くぐもった声でセラは呟いた。伏せた顔の表情は隠れて見えない。剝がれた爪に包帯を巻いた指先が、アルジラの腕をすがるように摑む。

「だけど、これはわたしの仕事。わたしがしなきゃいけないことなの。だから、やらせて。ごめんね、アルジラ。ごめんなさい」

日が沈んだ。ロアルドたち〈ローカパーラ〉は、崩壊したニューヨークの外部に散乱した死骸や瓦礫を回収するために散っていった。

約一万人いたニューヨーク市民のうち、無傷でいたのは千人にも満たなかった。救出されたのも全体の六割ほどで、そのほとんどが身体か精神のいずれか、もしくは両方に、重大な被害を負っていた。

負傷したものはそれぞれベッドを与えられて手当てを受け、精神に傷を負ったものには、都市から持ち出されてきた精神安定剤やその他の薬が用いられた。都市の生産機能がどれほど回復するのか、回復するにしてもどれだけ時間がかかるのかはいまだに不明で、残った食糧や薬品類は、残量に気をつけて使用せねばならなかった。

激変した環境と立場に、無傷の市民たちも魂を抜かれたようになっていた。〈協会〉に守られ、安全な生活と快適な環境を当たり前のものとして享受していた彼らが、争乱に巻きこまれ、その当事者になり、パニックと群集心理にあおられるまま、〈神〉の選民としては考えられない蛮行をはたらいたのである。

その上、これまではニュースで見かけるだけの存在だった地下コロニーの民に包囲され、

〈協会〉の守り神のはずのテクノシャーマンは彼らにつき、〈協会〉自体も瓦解して、彼らにはもはやすがるべきものは何もなかった。
急遽土を掘り広げて作られた地下の防空壕では、うつろな目で座りこみ、宙を見上げる市民の姿が多く見られた。抵抗しようとするものもないではなかったが、なかば錯乱状態で暴れ回るだけでは、取り囲んで押さえつけるのも簡単だった。
何人かが抵抗を試みて拘束されると、試すものもいなくなった。膝を抱え、あるいは家族や友人同士しっかりと身を寄せ合いながら、ただただ、おびえた目で〈ローカパーラ〉兵たちを見上げるだけとなった。
ロアルドとグレッグにより、市民に対して無用の暴力をふるうことは固く禁じられていたが、それでも、親しい人間をこれまで〈協会〉兵によって奪われてきたものは多い。市民を見る兵士の目に、少なからぬ恨みがこもるのは当然だった。なぜ自分たちが恨まれるのか、刺すような目つきで睨まれるのかも理解できずに、羊のように飼い慣らされた市民たちは羊そのままに、急拵えの囲いの中で、震え続けていた。
サーフたち〈ASURA〉は作業から外されていたが、休む気にはなれなかった。与えられた部屋でしばらく横になっていたあと、サーフは起き上がり、上層に向かった。
行きあった〈ローカパーラ〉兵たちがあわてたように敬礼してくる。微笑して敬礼を返しながら、サーフは、ジャンクヤードでも同じように、夜間の見回りに歩くトライブ構成員たちに答礼したことを、なつかしく思い返した。

—セラはどこにいるかな。部屋にはいなかったんだが—

「彼女でしたら、先ほどドームから運び出した荷物といっしょに地下に降りてこられました。コンテナルームのどれかにいらっしゃると思います。ご案内しましょうか—

「いや、いい。たぶんわかる。ありがとう」

そのまま通路を歩き続ける。しばらく行くと、以前、初めて地下に連れてこられたときに出たのとよく似た、広いコンクリート舗装の広場に出た。ところどころが赤く錆びたコンテナが積み上げられ、そのうち一つから、明かりと音楽が流れていた。

「セラ?」

呼びかけられても、セラはじっとこちらに背を向けたままでいた。鉄がむき出しのコンテナの床にぺたりと座り、小首をかしげるようにしてじっと音楽に聴き入っている。コンテナに積まれているのはデータチップの山で、セラはそれを小さなスピーカー付きの再生機に入れ、じっと聴き入っているのだった。

男性の無伴奏合唱が、古いラテン語の歌詞を澄んだ声で歌い上げている。

恐るべき威光に満てる王よ
救うにあたいする者を見返りなく救われる御方
私をお救いください、哀れみの泉よ!

「休んでいなくていいのか、セラ。これは……歌か？」
「聖歌よ。グレゴリオ聖歌。再生チップのセットを見つけたの」
それだけ言って、セラは黙った。サーフはしばらく無言で耳を傾けていてから、足音を立てないように入っていって、セラの隣にそっと腰を下ろした。セラはちらりと視線を走らせたが拒むことはせず、わずかに腰を動かして、サーフの座る場所を空けた。
ちょうど尻の当たる場所に、潰れたクッションが綿をはみ出させたまま置いてある。サーフはその端に座りこみ、立てた膝に肘をついて、聖歌に耳を傾けた。初めて聴く音楽だったが、その天空へと舞い上がっていくようなきらめく高音の連なりは、もはや記憶の向こうに薄れかけているあの場所、虚無の岸辺で聞いた永劫の波の音を思わせた。

呪われし者どもが見捨てられ
燃えさかる炎に投げこまれる時
祝福されし者たちと共にいるように
私を呼び出してください
私はひれ伏してあなたに祈り求め
その心は灰のように打ち砕かれています
最期の時に、どうぞ私をお助けください！

「きれいな、歌ね」ぽつりとセラが言った。
「ああ」
「これ、みんな、人間が作ったのよね。〈神〉のために」
「そうだな」
「だけど、〈神〉にはわからないのね。これがどんなにきれいかも。なにを思って、この歌が作られたのかも。この歌を歌う人たちの心も、どんな祈りが乗せられていたのかも、〈神〉にはわからないのよね」
　答えを求めるような質問ではなかった。サーフは沈黙を守った。セラもそれ以上口は開かず、音楽に耳を傾けた。

　この日、この怒りの日には
　この世は灼きつくされるだろう
　ダビデと巫女（シビラ）の予言のままに
　なんという恐れとおののきが下されることか
　審判者が降りきたり
　すべての物事が厳しく天秤にかけられる時には！

　データは占いものらしく、ところどころ雑音が入ったり、音が割れたりする部分もあった。

それでもなお、天上の神とその栄光を希求する歌声は、翼を持って飛翔する鳥のように、どこまでも澄んで高く昇っていった。
セラが疲れたようにサーフの肩に頭を載せ、立てた膝を抱えた。サーフは自分もその上に重ねるように頭を寄りかからせ、肩を寄せた。二人は小さな子供がするように身を寄せ合い、〈神〉に捧げられた音楽に身をゆだねた。

彼らの上に永遠の光を照らしてください、主よ
あなたの聖徒たちと共に、とこしえに
あなたは恵みと慈しみのあるじであられるのですから
彼らに終わりなき安息をお与えください、主よ
そして彼らが永遠の光に照らされますように

「わたしも昔は、わからなかった」セラは呟いた。「歌も、絵も、人間も。生も、死も、みんな同じだった。まわりで誰が死んでも、誰が傷ついても、わたしにはわからなかった。〈神〉のもとで、何も知らずに遊んでいた〈女神〉のわたし。自分の足の下には山のような死体が積み上げられていたのに、それも知らずに、踏みつけてただ踊っていた。彼に、痛みを教えられるまで。カズキに、本当の人間の叫びをつきつけられるまで」
サーフは少女の黒い髪に頬をすり寄せた。あえて考えないようにしていた記憶が、水底か

ら姿を見せる大魚のようにゆっくりと意識の表面にのぼってきた。ヒート。
その血の味はいまだにきつく舌の上で燃え、腹の底に肉の感触が疼いていた。ヒート自身と同じく、その血は熱く、肉は強く、そして温かかった。
哭きさけぶ〈ヴァルナ〉の牙に肉を裂かれながら、ヒートはなおも微笑んでいた。ボディから意識と生命が完全に去れば、人格の存在によって個性を保つ〈ASURA〉ボディは無名の単なる細胞の塊に戻る。ヒートはそれを防ぐために、あえて最後の最後まで意識を保ち、生きながらサーフに喰われることを選んだ。
喉の奥から熱い塊がせき上げてきた。ヒートの感じた苦痛は想像を絶するものだったろう。猛り狂うアートマに生きながら肉を引きちぎられ、血をすすられる痛みはどんなものだったろう。それでも彼は呻き声ひとつたてず、サーフが苦悩に追いつめられ、もうこれ以上はできない、と首を横に振りかけた時でさえ、血の泡を吐きながらなおも決然と、続けることをうながしたのだ。肺も、喉も食い破られて声も出せない状態だったにもかかわらず、強く輝く紅い瞳と、厳しい視線の一瞥で。
もう出ないと思っていた涙がゆっくりとにじんできて、セラの髪を濡らした。ヒート、と声に出さずにサーフは囁いた。おまえの命を踏み台にして俺はこの世に戻った。自分たちがこれまでしてきたことの、本当の意味を知った。喰い、喰われるものの逃れられない苦痛。生きていくことにまつわる原罪の痛み。おまえは俺にそれを教えてくれた。俺たちを人間のまま死なせるために、自ら悪魔になる道を選んだおまえが。

「シエロの原型(オリジナル)だった男の子もね。わたしが殺したの」セラは続けた。
「〈神〉との交感を共有する実験……守ろうと思えば守ってあげられたのに、わたしはしなかった。その子がそこにいたこと、死んでしまったことにさえ気づかなかった。わたしはなんでも見えていたのに、なにも見ていなかった。なんでも知っていたのに、なにも知らなかった。〈神〉と同じに。カズキが教えてくれるまで、わたしは、わたしの罪を自覚することさえできなかったの」

この涙の日
灰の中から
罪あるものが裁きのためよみがえるとき
主よ、私を哀れんでください
柔和な主イエスよ
彼らに安らぎを与えてください

ひたひたと上げる満ち潮のように歌声は盛り上がり、やわらかな羽毛のような余韻をひいて、静かに沈黙へと戻っていった。再生が終わったあともセラは動かず、じっとサーフの肩に頭を寄せていた。手に温かいものが落ち、はじめて、サーフはセラが泣いていることに気づいた。

―打ち砕かれて、バラバラになって、〈EGG〉の中で長い間漂っていた。そうして、ジュンクヤードに降りて、わたしははじめて人間になった。人間であることのすばらしさを、生きることの光を、それから罪を、知ったの。サーフ」
頭をあげて、セラはサーフを見つめた。黒い瞳はまだ涙に濡れている。
「わたしたちが〈神〉に、人間の感情を理解するためのプロトコルを与えるということは、結局、カズキがわたしに、人間の苦痛と怒りを叩きつけたのと同じことになるわ。少なくとも〈神〉は、これまで積み重ねられてきた数千年分の人類の怒りを、悲しみを、祈りとともに理解することになる。そのとき、〈神〉は――」
迷うようにセラは口を閉じた。力づけるようにサーフは丸めた背筋をそっとさすってやった。薄い肩が寒そうに震えていた。
「サーフ」やがて、思いきったようにセラは言った。
「わたしたち、〈神〉を助けるの――それとも、殺すの?」
殺す、という言葉は、見えないナイフのように空中につき立って、いつまでもそこにとどまるように思えた。弱い明かりの下で、セラの目が異様にぎらついている。
サーフは黙って見返した。これもまた、答えられるような問題ではなかった。助けるのであろうと殺すのであろうと、〈神〉の落下を止めなければ、全次元を巻きこんで人類は滅びるのだ――〈神〉もろともに。
いずれ死ぬとわかっているものを(〈神〉に、死という言葉が適当であるとして)、少しば

かり早く殺すのに是非はあるまい、と言うものもあるかもしれない。だが人類が自らの生き残りをかけて、〈神〉と呼ばれる別種の生物的存在に、危険であるかもしれない、ある意味での攻撃を加えることは動かせない事実だ。

〈神〉が排除され、人類が生き残ったとしても、その生にはあいかわらず死がつきまとう。〈神〉の死。それは人類が積みあげてきた死という原罪の山に、新たな一体が投げ上げられるだけかもしれない。だが、それで山が少し高くなることに変わりはなく、人類の存続とともに、その屍体の堆積はますます高くなっていく。それがいつか崩れ落ちる日がこないと、だれが言えるだろう。

舌が疼いた。ヒートの炎がまだ体内で燃えている。言葉を探して、サーフは口を開きかけた——

その瞬間、異様にひび割れた大音響が、スピーカーから鳴りわたった。

聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）

悲鳴を上げてセラが耳を押さえ、床に転がった。

「セラ！」

身もだえするセラをサーフは抱きかかえ、苦痛に引きゆがんだ顔にぎくりとした。きつくつぶった瞼から、じわりと紅い滴がにじんでいる——

血だ。

「いけない……そんなことしちゃいけない……エンジェル！」絞りだすようにセラは言った。

「〈神〉のもとへ昇ろうとしてはいけない……そんな方法では彼をいよいよ堕とすことになるだけ！　やめて！　やめて！」

「セラ！」

暴れ回るセラにのしかかるようにして、サーフは少女を床に押さえつけた。舌を噛まないようにする布がないか周囲を見回して、あたりに積みあげられたデータチップがすべて、生き物のようにガタガタと動き始めているのに気づいて息を呑んだ。

聖ナル哉(サンクトウス)・聖ナル哉(サンクトウス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)！

スピーカーがひび割れた声でわめき、火花を散らして砕け散った。それとほぼ同時に、周囲のデータチップの一枚一枚が、再生機にかけられたわけでもないのに、ひとりでに同じ言葉をわめき、こなごなに砕け散りはじめた。

聖ナル哉(サンクトウス)・聖ナル哉(サンクトウス)・聖ナル哉(サンクトウス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)！

聖ナル哉(サンクトウス)・聖ナル哉(サンクトウス)・聖ナル哉(サンクトウス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)！

「サーフ！　サーフ、そこにいるのか？」
もがくセラを抱きすくめるようにして落ちつかせ、クッションの端を破いて口にかませていると、外からあわただしい足音と、グレッグの叫び声が近づいてきた。ぐったりしたセラを抱え上げ、「ここだ」とサーフはコンテナから頭をのぞかせた。
「なにが起こってる？　データチップが急に妙なことを叫び始めた」
「こっちでも同じだ。聞け──」
親指でグレッグは後ろを指した。耳を澄ませるまでもなかった。地下の狭い空間に、いくつもの同じ詠唱が、壊れた鐘を打ち鳴らすように幾重にも重なって響きわたっていた。

聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)！
聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)！

「データなんぞ入っていないはずのまっさらなチップまで同じことをわめいてる。ニューヨークの都市ネットワークも、見ろ」
手にぶら下げてきた端末を持ち上げてみせた。もとは〈協会〉員のだれかの持ち物であったらしいそれは、端に血がこびりつき、ケースにひびが入っていたが、画面を表示することはできた。映し出された映像を一目見て、サーフは喉を鳴らした。
「これは……」

聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)！
聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)！

ただそれだけが、延々と画面いっぱいにスクロールされている。
「すべてのソースコードが強制的に書き換えられているとゲイルは言っている。彼と、彼の分身たちの修正も追いつかないほどのスピードでだ」グレッグは端末を下ろし、息をついた。
「分身までこのコードに呑みこまれて、ゲイル自身まで浸食されそうになったために、接続を遮断しなければならなかった。ああ、二人とも、こっちだ」
ゲイルとロアルドが急ぎ足にこちらにやってくるところだった。グレッグは手を上げて二人を招いた。駆け足でやってきたゲイルは、前置きなしにサーフに向かい、
「何か巨大なデータ群体が接近している、リーダー」
「データ群体？」サーフは混乱した。「アートマ、ではないのか」
「不明だ。アートマであるとしても、少なくとも、これまで存在したどのアートマとも違っている。このデータ体は異常だ。接近したあらゆる電子的情報を、たった一連のコードの繰り返しに書き換えて、同化している」
「……ない……いけない、エンジェル……」口に布を噛まされたままのセラが身じろぎし、不明瞭に言った。「そんなことをしても〈神〉のもとには行けない……あなたは昇れない…

……〈神〉が、堕ちる……やめて！　やめて！」
「彼女はどうした。大丈夫なのか」
ロアルドが片手を差しだし、セラの額に触れた。顔を後ろに振り向けて、大声で救護班を呼ぶ。
「この奇妙な声が始まった瞬間に倒れた。脈拍と呼吸が異常に昂進しているし、脳波も乱れている。この声が聞こえないようなどこかに隔離すれば……」
「無理だ。隅々までこの声が響きわたってる。端末という端末、壊れて動かなかったはずの旧型コンピュータからさえ、勝手にスイッチが入ってこの声とソースコードを垂れ流しているんだ」
「とにかく、できるかぎり声から離して、端末やその他、情報機器のない部屋へ入れてやってくれ。それと、無駄かもしれないが、精神安定剤を。これはおそらく――」
みなまで言うことはできなかった。
「ロアルド！　グレッグ、来てくれ、うわっ！」
だれかの声がし、短い銃の連射がそれに続いた。サーフたちはすばやく目を見交わし、やってきた救護班の若者にセラを託すと、急いで銃声のした方に駆けた。
「どうした、何があった？」
「こ、こいつ……」硝煙の上がる軽機関銃を構えながら、〈ローカパーラ〉兵がカタカタと鳴るほど手を震わせていた。「こいつが……急に、どこかから現れて……」

地面に落ちてバタバタと暴れているそれは、一見、鳥のように見えた。翼があり、羽毛に覆われていて、なかば潰れた胴体から赤い血がこぼれている。

だがどこかが奇妙だった。丸くふくれた胴体には首も脚もなく、首の先にあるはずの頭部もない。ふわふわとした体毛はわずかに金色を帯び、まるで人間の髪の毛のようだ。

頭、と思ったとたん、それが翼を叩いてぐるりと上を向いた。かっと紅い口が開いた。

聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）！

銃口が火を噴いた。若い兵士はかん高い悲鳴を上げながらトリガーを絞り、それが真っ赤な肉片になって飛び散るまで撃ち続けた。それのたてる鑽仰の歌は銃声に消され、とぎれ、それそのものとともに粉々になって飛び散った。

静かになった。兵士の歯がカタカタと鳴っていた。彼は恐怖に見開かれた目をグレッグに、そしてサーフに向けた。

「なんなんです――なんなんです、あいつは！」

白い羽毛が半分紅く染まってふわふわと舞い落ちてきて、地面に落ちる前に、虹色にきらめいて飛び散った。サーフとグレッグは、地面にできた羽毛の浮いた血だまりと、四散した肉片を茫然として見つめた。セラを救護班に預けたロアルドが、不自由な足の許すかぎりの速度で、急いでこちらにやってくる。

「銃声がしたようだが。敵襲か——おい、その血は」

ロアルドはかがみこんで血に触れようとしたが、指が届く前にびくっとしてひっこめた。血も肉片もきらきらと虹色に泡立ち、粉のようにぱっと散った。あとにはなにも残らず、硝煙と転がる薬莢があるだけだった。

「……子供の頭だった」押し殺した声でグレッグが言った。

「子供?」耳を疑うような表情でロアルドが聞き返した。「子供がどうしたというんだ。子供の頭がどうしたって?」

「翼を生やした子供の頭だ。赤ん坊かもしれない。せいぜい一歳かそこらの、幼児の顔……そいつに、翼がついていた。そいつが鳥のように飛んで、こう唱えていた。『聖ナル哉(サンクトゥス)・聖ナル哉(サンクトゥス)・萬軍ノ(ドミヌス)・主ナル(デウス)・神(サベオス)!』」

サーフも今見たものを理解しきれずにいた。確かにそれは、人間の、子供の頭部だった。青い目とちんまりした鼻、ふっくらした唇を持ち、巻き毛の淡い金髪の中から、一対の翼が鳥のように左右に拡がっていた。そいつが羽ばたいて空中を飛び、あの異様な叫び声を発したのだ——サンクトゥス・サンクトゥス・サンクトゥス!

激しく通路を踏み鳴らす音がした。叫び声と銃声が交錯した。若い兵士が飛び上がり、銃を構え直すと同時に、通路から、排気口から、ありとあらゆる開口部から、青い瞳、やわらかい金髪、朱い唇に笑みを浮かべた幼児の頭が、翼をはばたかせ、口々に聖ナル哉(サンクトゥス)と唱えながら、イナゴのようにどっとなだれこんできた。

2

「リーダー!」
地上に出ようとするエレベーターの前で、駆けてきたアルジラとシエロが合流した。
「二人とも、見たか? あの翼の生えたものを」
「うん。あれ何なのさ? 気持ち悪い。ナイフで切りつけたらすぐ落ちたけど。〈ディアウス〉を使う必要もなかった」シエロはまだ気味が悪そうに手をこすっている。
「新しいアートマの攻撃かしら。でも、それにしては弱すぎない?」
「わからない。とにかく、こいつらは地上から送りこまれているようだ。本体がいるとしたら、上に出てそいつを攻撃するほうが効果的だろう。こいつらをいくら潰しても、らちがあかないようだしな」
あちこちの通路や広場で、人間たちがわめき散らしながら、飛び回るこの怪物退治にやっきになっていた。一体一体はほとんど攻撃力もなく、嚙みつかれるか翼で叩かれるくらいで、銃で撃つか棒で力任せに叩き落とすだけでも簡単に落ちる。落ちた頭は、なおも聖ナル哉(サンクトゥス)と叫びながら踏みにじられ、虹色の粉末になって解け失せる。怯える女子供や負傷者を扉の奥に押しこみ、男たちは、手近にあったものをなんでも手にして、羽ばたく怪物相手の果ての

ない防戦にやっきになっていた。

聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）！
聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）！

エレベーターで上がる間も、かん高い子供の叫び声が幾重にもかさなって、どの層からもあふれ出ていた。

地上についた。扉が開くのを待ちかねて駆けだす。外で作業していた人間たちは、夜明けの近いこともあって、地下へもどって怪物退治に加わっていた。ひとり残っていた長身の影が、振り返ってこちらを見た。

「ゲイル！」ようやく何らかの答えがもらえそうな相手の顔を見つけて、サーフはほっとした。足早に近づいて腕に手をかける。

「よかった、無事か。グレッグの話によるともう活動に支障はないそうだが——あの、羽の生えた人間の子供の頭は、いったい何者だ」

ゲイルは鋭さを取りもどした碧の目でサーフを一瞥すると、黙って空を指さした。アルジラがひっと声を立てて口を押さえた。シエロがぽかんと口を開ける。

聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）！

天空から、驟雨のように羽ばたきと唄う声が舞い降りてきた。夜は明けかけていた。薄明の色に染まりはじめた空に、砂粒をまいたようにおびただしい数の黒点が舞い、それらがすべて、口を揃えて同じ唄を唱えている。

聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）！
聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）！

翼を生やした子供の頭部の群れ。

その背後に、動く山のように巨大なものが、ゆったりと浮かびつつ接近していた。いびつな卵型で、長径はおそらく三十メートル近いだろう。膨らんだ胴体は、鱗片状の何かに隙間なく覆われている。こちらに向かって突き進んでくるその様子は、巨大な飛行船が飛ぶのに似ていた。こちらにむいた突端部に、船舶の船首像（フィギュアヘッド）のように、人間の上半身に見えるものが突きだしている。

しだいに周囲が明るくなるにつれて、そのものの形もはっきりしてきた。鱗片状と見えたのは、何重にも重なり合った、数え切れないほどの巨大な翼の集まりだった。剣のような形の羽毛一枚一枚が、数メートルを越えていた。

その羽毛がふわりと本体から離れると、こまかく分裂して、小さな翼を羽ばたかせる子供

の頭に変わる。そして唄う――聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）！
日が昇る。黒い太陽が、地平線に顔を出した。曙光が薄闇をよぎったとたん、澄んだ紺色を保っていた空が、一瞬にして視覚を突き刺す黄色いぎらつきに塗り替えられる。
舞い飛ぶ幼児の頭に囲まれて、その翼を持つ異形のものは、向きを変え、卵形の胴体を下にして、ゆっくりと降下を開始した。黒い太陽が急速に昇ってくる。死の陽光が山のような羽毛の卵と、その頂点に突きだした人間の上半身を真珠色に輝かせる。
「そんな……でも、あれは、まさか」
彫像のようなその上半身の顔が確認できるようになって、アルジラが声をあげた。
「あれは、まさか――エンジェル……？」
「エンジェルって、あの、〈協会〉の？」一人だけエンジェルに会っていないシエロが、じれったそうに聞き返した。「そいつなら、アニキが観たって言ってたじゃん。〈協会〉のマダム・キュヴィエとかいうのを殺して、自分も殺されるところ」
「殺されるところを観たわけじゃない。だが……」
サーフは背筋を冷たい汗が伝うのを感じた。あの時、エンジェルは何をしていた？　そう、死んだマダムのデスクから何かを取り出し、自らの首に突き刺した。あれはいったいなんだった？　隠し棚から取り出された小さなケース、中に入っていた一片の、虹色にきらめくチップ。あれをつまんだエンジェルは、銃口に囲まれながらどこか恍惚として、それを自らのうなじに突き立て――。

——それじゃ、本当にあれはエンジェルなの？　でも、それならあの姿は、いったい」
「俺が最後に観たとき、エンジェルは、首に何かのチップを入れていた。死んだマダムのデスクに隠されていた、機密扱いと思われるチップを」
「じゃ、あれもアートマなの？　でも、あんな大きな——」
『みんな、聞こえる？』
「セラ！」サーフは驚いて耳に手を当てた。セラの声は耳を通してではなく、〈ＡＳＵＲＡ〉同士のリンク同様、頭の中に直接響いた。「大丈夫なのか？　無理をするな、ロアルドが救護班に引き継いでくれたと思ったが」
『わたしは大丈夫。電磁波や電波を遮断する部屋に運んでもらったわ。〈神〉との接続も、一時的に切断した。かなり楽になったわ。それより、気をつけて』セラの声はしっかりしていた。『今はゲイルに、わたしの思考をみんなに中継してもらってる。サーフ、あれはアートマよ。アートマ名は、〈ルシファー〉』
「〈ルシファー〉……？」
『天界を逐われた堕天使にして、悪魔たちの王』その名を告げる言葉は苦かった。『それが〈ルシファー〉、いちばん最初に作られたアートマ。みんなが持っているアートマは、それを改良して、扱いやすくしたものなの』
「じゃ、オレたちの〈ディアウス〉やアニキの〈ヴァルナ〉も、もとはあれから作り出されたってのかい？」

薄気味悪そうにしていたシエロがげっとなった。ゲイルはひと言も発さず、ゆるやかに降下してくる羽毛に包まれた卵（エッグ）、〈ルシファー〉を、腕を組んだまま身じろぎもせずに見上げている。

『あのアートマは原初のアートマ、身につけたものの欲望と本能を増大させて、それに見合った姿に肉体を作り替える。あの姿は、エンジェルが望んだものの具現化なの』

〈ルシファー〉の巨体が、すぐそこまで降りてきていた。ゆっくりと回転し、それまで見えていなかったもう半分の面があらわになった。真珠色に輝く純白の半面とはうらはらに、その半分は、漆黒だった。どんなに強い光すらとどかない、地獄の深淵の黒。

頂点に立つエンジェルの上半身もまた、額と胸の中心を結ぶ線で、くっきりと黒白にわかれていた。一方が清らかな雪花石膏だとすれば、もう一方は、終わりのない夜の底から発掘された絶望の黒曜石だった。長い髪は波打ちながらむき出しの肩に流れ、黒と白に分かれて、翼のような形に硬化して羽毛の卵の中にのまれていた。

硬い顔に表情はなく、ただ、瞳だけは、瞳孔の区別のない、血の池のような真紅に燃えていた。見開いた目尻から、赤く光る筋が頰を伝い、黒と白の半身をそれぞれたどって、卵に達して木の根のように枝分かれして癒着している。あたかも、涙のようだった。血の涙。尽きることのない血涙が、〈ルシファー〉の持つ、唯一の彩りだった。

『エンジェルは、〈天使〉に戻りたがっていた。人間になって〈神〉のもとを逐（お）われたことを恨んでいた。〈女神〉だったころのわたしのように、人間の身から解き放たれて、もう一

度、〈神〉の膝もとの天空で遊ぶことを夢見ていた……』
まるでセラの声を聞きつけたかのように、エンジェルの上半身がぴくりと震えた。ぎこちない動きで両腕が上がった。それは黒と白、二色の腕を天空へさしのべた。モノクロームの仮面めいた顔で、口が丸く大きく開いた。ひと筋の、剣のように輝く白い光線が、天空に向かって放たれた。
セラの悲鳴が脳の中で響いた。サーフは頭を鈍器で殴られたように感じて、思わずその場に膝をついた。アルジラはみぞおちに一撃をくったように身を折り、シエロは後ろにひっくり返ってじたばたしている。動じなかったのはゲイルだけで、わずかに身体をふらつかせたにすぎなかった。その目はやはり、離れることなくエンジェルの変わり果てた姿を凝視している。
「セラ、無事か。今のはなんだ。エンジェルはいったい何をしている」
『わたしのことは気にしないで』打てば響くように思念が返ってきたが、先ほどより力が弱くなっていることは否めなかった。『エンジェルの望みは、もう一度〈天使〉として、〈神〉の情報の天国へ戻ること。だから〈ルシファー〉は、地上にあるすべての情報を一身に集めて、わたしのような一個の情報集合体になろうとしている。あの卵形の形態(フォルム)は、〈神〉の地上の似姿だった〈EGG〉を真似たものだわ。エンジェルは、かき集めた地上の情報を天に送り、〈神〉に呼びかけ、引きずり堕とそうとしている——手の届かない天空から、自分のもとへと』

シエロが慌てたように跳ね起きた。
「ちょっと待ってよ、それじゃ、セラが前に言ってたみたいなことを、あれはもっと早く引き起こそうとしてるってこと？　えっと、なんだっけ、宇宙的――」
「宇宙的メルトダウン」ゲイルが初めて口を開いた。「自然にであれ、何者かの手によってであれ、〈神〉がこの次元に降下すればその巨大な情報圧に物質世界は耐えられない。あれは破滅を呼び下ろそうとしている、それとは自覚せずに。あれが求めているのはただ〈神〉とふたたび繋がること、それのみだ。だが、その行為そのものが、〈神〉をますます狂わせ、手の届かぬものに変えていく」
「止めなきゃ。早く」アルジラが口早に言い、アートマシンボルを燃え立たせた。蒼白い光輪が揺れ、〈プリティヴィー〉が姿を現す。『こっちを直接攻撃する気はないみたいだし、あの鳥みたいなのも弱いけど、これ以上続けさせたら世界の終わりだわ』
『そういうことだよねっ……て、うひゃっ』
〈ディアウス〉に変身したシエロに、どっと白い羽毛の塊が押し寄せた。口々に聖ナル哉(サンクトゥス)とわめきながら、白い翼と巻き毛の金髪が甘いものに群がる蜂のように押し合いへし合いする。
『あーっ、うっとうしい！』
内側で〈ディアウス〉が叫び、稲妻が走った。異様な鳥どもははじき飛ばされて四散し、黒焦げになってちぎれ飛んだ翼をもがかせながら、ひび割れた声でサンクトゥスを唄いつづける。〈ディアウス〉はぶるるっと頭を振った。

『アニキ、こいつら噛みついてくる。弱いけど。それに――うわっ、また来たっ』
〈プリティヴィー〉も長い腕を伸ばして回転し、へばりつこうとする鳥どもを切り裂いて遠くに吹き飛ばしていた。鋭い爪でえぐられ、引き裂かれても、虹色にきらめいて解け失せるまでサンクトゥスの声はやまず、むしろ、数を増やした。地上に新たな獲物を見つけて、新たな鳥どもの大集団がつっこんでくる。
『リーダー、あの〈ルシファー〉の小端末は、接触した電子情報を、特定の、コードにすべて置き換える』ゲイルの姿がゆらめき、〈ヴァーユ〉の巨大な頭が光の中からぬっと突き出てきた。『ニューヨークの都市ネットワークがやられたように。衛星回線や、他の都市の情報インフラがすべて沈黙しているのも、おそらくこのせいだ。〈ルシファー〉は、情報を喰らう。そしてわれわれ〈ASURA-AI〉もデータ的存在だ。しかもきわめて巨大で、精緻な構造を持っている。〈ルシファー〉にとっては絶好の獲物に見えることだろう。十分に注意することだ』
「わかった、ゲイル。おまえも気をつけろ」
サーフは頬のアートマシンボルに手をのばした。そこにヒートの指が触れた瞬間のことが、いやおうなしに頭をよぎった。温かい血に濡れた、硬い指の感触。雑念を払い落として、サーフは〈ヴァルナ〉を呼び起こすべく変身コードを脳裏に浮かべた。視界に、連の文字が浮かび上がる。

〈Om Mani Padome Hm〉
つづけてその文字は形を崩し、思いもよらない別の形をとった。
〈Visunu〉
〈ヴィシュヌ〉。
愕然とする暇もなく、サーフは身体の奥から新たな、だが、奇妙になじみ深い感触の力が、潮のようにこみ上げてくるのを感じた。
新たなその力にあわせて身体が組み替えられ、まったく新しい形を作り出していく。そこには〈ヴァルナ〉の氷と、〈アグニ〉の炎の両方があった。目の前から変身光が吹き払われ、新しい視界で周囲を見たとき、こちらを見た〈ディアウス〉と〈プリティヴィー〉が、口々に驚きの声をあげた。
『アニキ、そのかっこ……！』
『〈ヴァルナ〉じゃない、でも……サーフ、いったいどうして』
サーフはあらためて自分の全身を見下ろしてみた。〈ヴァルナ〉の時は青みのかった銀白色だった肌はあわい真鍮色に変わり、蒼白い甲殻はいまや金色の輝きを帯びて、肩から前腕、手の甲までを隙間なく覆っている。しなやかな脚先の爪は太さと凶暴さを増してしっかりと

大地を踏まえ、たくましい筋肉が太腿に盛り上がっていた。
手を上げて、動かしてみる。〈ヴァルナ〉の骨刃の代わりに、そこには、〈アグニ〉が持っていたのと同じ、自在にうごめく三本の鉤爪があった。両手は〈ヴァルナ〉の蒼白から、〈アグニ〉の金と真紅が溶けあった赤銅色に染まり、手のひらは白く、〈ヴァルナ〉の色を残してなめらかに動く。
つかの間、サーフは立ちつくした。ヒート。彼の存在を感じる。身体の奥に、はっきりと。笑っている。戦え、と叫んでいる。戦え、そして勝て、と。生き抜け、と。
『力をやる』とは、このことだったのか。
炎と氷の力が同時に体内に脈打っている。〈ヴィシュヌ〉は腹の底から轟くような最初の叫びを放つと、それとともに、両腕を一度に目前の巨大な敵へと振り出した。
真紅と蒼白が絡み合うように空を走った。右腕からは氷結、左腕からは火焔。二条の力の流れは螺旋を描いて突き進み、羽毛に包まれた〈ルシファー〉の卵形の巨体を、一打ちで断ち割った。
『やった！』
〈ディアウス〉が翼の先の指を握りしめて歓声をあげる。
だがそれはすぐに、驚愕と失望の声に変わった。上下数メートルにわたって空隙を開けられた羽毛の卵は、断面から泡立つように白と黒の物質を盛り上がらせ、たちまちのうちに消失した部分を補った。

〈ヴィシュヌ〉は唸り、ひと跳びで卵の中心に飛びこんだ。四肢を丸め、咆吼とともに解き放つ。白く輝くエネルギー光球が爆発的に膨らむ。超高熱と超低温が干渉しあって、触れたものをたちまち原子レベルにまで分解していく。なだらかな羽毛につつまれた卵の中央に、洞窟のような巨大な穴がうがたれ、拡大する。

しかし、それも長径の半分ほどまで拡がったところで停止した。押し返されるのを感じ、〈ヴィシュヌ〉は腕を振り上げて、熱線と氷刃を同時に解き放った。視界が真っ白くなるほどの羽毛が舞い散り、縦に斜めにと卵は切断されたが、じきに盛り上がる新たな原形質の山が傷を埋めた。分解された穴を埋める物質は〈ヴィシュヌ〉の四方から押し寄せ、高エネルギー球に分解されながらもそのスピードを超えてのしかかった。目前に迫った白と黒の泡立つ無形の塊に、〈ヴィシュヌ〉は闇雲に両手の爪をふるった。

泥土を刺したような感覚だった。埋まった爪が動かなくなり、力を込めても進めることも、引き抜くこともできない。頑強な脚を踏んばって引き、蹴りつける。やはりびくともしない。割れ鐘のような唄声が脳髄を鉄塊の一撃のように叩いた。

聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・上ナル（デウス）・神（サベオス）！

〈ヴィシュヌ〉は驚愕と動揺の唸りをあげた。蠢く原形質に捕らえられた爪がじわりと輪郭をにじませ、sunctussunctussunctus と無限に続く文字列が、明滅しながら爪から手

へ、手首へ、腕へとぞろぞろと這い上がってくる。
文字列の浸食が肩まで達する前に、〈ヴィシュヌ〉は呑まれた腕を肘の上で切り捨て、拘束から逃れた。一瞬噴き出した血はすぐに収まり、盛り上がった肉から湿った音とともに新たな腕が再生する。新しい腕を無意識に動かしながら、〈ヴィシュヌ〉は牙を嚙みならして〈ルシファー〉を睨みつけた。
『このっ！』
まばたき一つのうちに、完全な形を取りもどした〈ルシファー〉に、今度は〈プリティヴィー〉が、巨大な重力球を投げつける。あたりの風景を歪んで見せるほどのそれはまっしぐらに飛んでいき、再び、先ほど〈ヴィシュヌ〉によって断ち割られた箇所の中心に食いこんだ。〈ヴァーユ〉の放った特大の風の槍が、回転するドリルのようにそのあとを追った。
通常ならそのまま本体全部を巻きこみ、一塊の肉に変えるはずの重力球は、しかし、こもった音を立てて命中はしたものの、それ以上は何も起こらなかった。卵はゆがみ、揺れ、羽毛をまき散らしたが、重力球は綿の上に落とされた鉄球のようにその中に沈んでいき、消えた。〈ヴァーユ〉の風の槍も同様に、一瞬文字通りの風穴を開けはしたが、その穴はすぐに盛り上がってきた肉に塞がれた。
羽毛が舞い飛び、サンクトゥスの声がいっそう高くなった。〈ルシファー〉はぶるぶると震え、揺らめき、回転した。頭頂部のエンジェルの半身がふたたび喉をそらせて叫ぶ。喚び声は光の筋を引いて、天空に吸いこまれた。

大地が震え、天がおののいた。東の空でようやく地平線を離れたばかりだった黒い太陽が、呼応するかのように振動した。不吉なその輪郭が、とつぜん、収縮する瞳孔のように小さくなり、以前に倍して膨らんだ。セラの悲鳴が頭の中で響いた。

『セラ！』〈ヴィシュヌ〉となったサーフは反射的にあたりを見回し、少女の姿を探そうとした。『辛いのか？　無理をするな！　ただでさえ、おまえのダメージは深いんだぞ』

『平気よ……でも……早く、〈ルシファー〉を止めて』返ってきた声はかなり弱々しかった。

『感じるの……〈神〉がこの次元に近づいてる。〈ルシファー〉に引きよせられて。エンジェルの喚ぶ声が、ますます〈神〉の墜落を早めてる。このままじゃ、あと一時間もしないうちに、〈神〉が壁を突き破ってこの次元に落ちてくるわ……見て！』

〈プリティヴィー〉があっと声を上げて空を指さす。〈ヴィシュヌ〉は見た。まだ昇ったばかりだった太陽が、糸に引かれるように中天に昇っていくさまを。本来ならば地平線を離れるほどに小さく見えるはずなのに、今にも弾けそうなその不吉な巨大さを保ったまま、太陽が、じりじりと天空に吊り上げられていく。

〈ルシファー〉がみたび、叫びをあげた。

『こんのっ！』

〈ディアウス〉が高く飛び上がり、卵の頂点めがけて、特大の雷霆を放った。紫色の雷電が、黒白の彫像と化したエンジェルに迫る。軋む音が聞こえるようなぎこちない動きで、エンジェルが首を回す。真紅の目が紫の雷光を反射する。

〈ディアウス〉が両翼を畳んで吹き飛んだ。苦痛の声が地上にまで届いた。放ったはずの雷光が、その上の身体にまつわりついていた。数十メートル落下し、地面に激突する寸前で体勢を立て直す。ぶるっと身震いして翼を開いた〈ディアウス〉の胴体には、自らの雷に灼かれたあとが大きく残っていた。
『怪我をしたのか、シエロ』
『ん、平気。すぐ治る』
自らを元気づけるように頭を振り、〈ディアウス〉は〈ヴィシュヌ〉のそばで滞空した。
『あのてっぺんの人間のところに攻撃当てればって思ったんだけど、当たる直前に、なんか別のものが割って入ってきて――あ、あれ！』翼の先の小さな爪で、〈ディアウス〉は空を指さした。『あれだよ、あれが、電撃当てる寸前に入ってきたんだ！』
〈ルシファー〉の、羽毛の卵の各所が泡立つように蠢いていた。粘土をちぎり取るように一部が丸く膨らみ、分離して、黒白のつるりとした球体になって宙に浮かぶ。
一メートルほどのそれが、しだいに数を増やしながら〈ルシファー〉の周囲を守るように回転していた。〈ヴィシュヌ〉は歯ぎしりし、気合いとともに、先ほどにも勝る氷と炎の奔流を投げつけた。攻撃は回転する球体部の壁でぴたりと停止し、そして、投げつけられたと同じ勢いで、こちらに跳ね返ってきた。
『うわっちゃ！』
〈ディアウス〉があわてて空中に逃げ、〈ヴィシュヌ〉は地面に転がって直撃を避けた。炎

と氷は干渉しあい、あたりの石や瓦礫を煮えたぎらせると同時に凍りつかせた。急激な温度変化にさらされた岩石が砂になって崩れる。〈ヴィシュヌ〉は一方の腕を盾のようにかかげ、余波から身を守った。

『駄目だわ、何をやっても跳ね返される！』悲鳴のように〈プリティヴィー〉が叫んだ。彼女は続けざまに重力球を放ち、その鞭のように伸縮する腕で敵を打ち据えようとしていたが、どの攻撃も、〈ルシファー〉本体に届く前に跳ね返され、放ったのと同じ勢いで、こちらに向かって打ち返されるのだった。

〈ヴァーユ〉も、風に乗ってあちこちと位置を変えながら、四方から同時に風の刃を降らせていたが、一つとして本体に届かない。ことごとくが回転する球に吸われてはじき返され、かえって自らの翅の一部を切り裂かれるありさまだった。

『ちょっと、どうすんだよ、これ！』懲りずに何度も雷電を放っては返されて逃げ回りながら、〈ディアウス〉が裏返った声を出す。『こんなんじゃ、いつまでたってもあの黒白のでかいの止めらんないじゃん！』

サンクトゥスの声が耳を聾せんばかりに高まる。エンジェルの上半身はかかげた両手をゆっくりと広げ、ひときわ高い叫びを放った。たたまれていたおびただしい数の翼が、いっせいに開いた。はげしい羽毛の嵐が起こり、翼を持った子供の頭部の群れが、朱色の唇に笑みと唄とをたたえて出現する。

聖ナル哉・聖ナル哉・聖ナル哉・萬軍ノ・主ナル・神！

『いけない――あいつら、また地下に！』新たに生まれた小怪物どもが渦を巻いて地上に向かうのを見て、〈プリティヴィー〉が身をひるがえした。

跳ね返された攻撃のために、地面にはいくつもの穴があき、そのうち数個は地下コロニーにまで届いている。怪物の群れは声を揃えて唄いながら、まるで一個の生き物のように真っ白に蝟集して、狭い入り口からもぐりこもうとしていた。

『アルジラ、さがれ！　シエロも！』

叫びざま、〈ヴィシュヌ〉は、満身の力を込めて炎と氷の力をふるった。長大な炎熱と氷雪の剣があたりをひとなぎにし、あわてて身をかがめた〈プリティヴィー〉と、上空へかわした〈ディアウス〉をかすめて、地下にもぐりこもうとしていた小怪物どもの大群を、一瞬にして消滅させた。拡散した余波は大気をはげしく震動させ、あたりを飛び回っていたその同類を次々と破裂させた。

『すごい……』頭からぱらぱらと土砂を落としながら起き上がった〈プリティヴィー〉が、放心したように呟いた。『あんなにいた奴らを、たった、一発で』

『あいつらをいくら潰しても意味はない。どうせすぐに湧いてくる。見ろ』小怪物の残骸が溶けて消える虹色のきらめきを視界の隅にとらえながら、〈ヴィシュヌ〉は顎で〈ルシファー〉をさした。一掃された小怪物の代わりが、また舞い散る羽毛の中から次々と生み出され

るところだった。いったん止んでいたサンクトゥスの声が、また始まる。
『本体をどうにかしなければ、こちらの力を無駄遣いさせられるだけだ。といって、地下に侵入されるのを放ってもおけない。奴らの一体一体は弱いが、数が多い。もぐりこまれて数で攻められては、人間たちだけでは太刀打ちできなくなる』
『じゃあ、どうするってのさ！』そばへ降りてきていた〈ディアウス〉が、空中で悔しげにぐるぐる回る。『こっちがいくら攻撃してもあの変な玉にははじき返されちゃうし、いったいどうやって、あのでっかいのを叩くっての？』
〈ヴィシュヌ〉のうしろで、サーフは歯がみしていた。シエロの言うとおりだ。いくら攻撃しても、あの回転する球があるかぎり、〈ルシファー〉本体に当てることはできない。本体や球そのものに攻撃能力はないようだが、こちらの攻撃がそのまま跳ね返されてくるのでは、こちらのパワーが高ければ高いほど、結局は不利になる。
〈ヴァルナ〉をはるかに越える〈ヴィシュヌ〉のパワーを実感すればするほど、もどかしさがつのった。ヒートがくれた力だ。ヒートが、その命とともに託してくれた力だというのに、このような場合に、かえってそれが仇になるとは。
頭の中でセラに呼びかけてみたが、返事はなかった。気絶しているのだろうか。消耗しきっている彼女にとっては、そのほうがいいかもしれない。
だが、セラの助言があればとこれほど思ったこともなかった。テクノシャーマンとしての彼女の膨大な知識と能力は、直接的な攻撃が効かないときでもかならず打開策を導きだす。

もう一度セラに呼びかけてみるか、それともあくまで自分たちで踏みとどまる道をとるか。板挟みに立ちつくす〈ヴィシュヌ〉の頭の中に、べつの声が響いた。
『私に考えがある。リーダー』
『ゲイル！』
翠緑の翅をなびかせながら〈ヴァーユ〉がこちらへ舞い降りてくる。避けた翅がかすかにパリパリと音を立てていた。
『どうするつもりだ？　間接攻撃も直接攻撃も跳ね返されるし、あの球自体を破壊しないかぎり、本体には到達できないぞ』
『私は以前、あの人物のデータ代理体と接触した経験がある』〈ヴァーユ〉は言った。『その時の情報体のパターンは、まだわたしのメモリに記憶されている。それを偽装シェルとして展開し、さらに、あの球を押しのける程度の気流をまとって隙間に飛びこめば、あの防御壁を抜けられるかもしれない。私の見るところ、物質的な実体を持っているのはあの、頂点の人間形態を保っている部分だけだ。ほかはすべて、蓄積されたデータがとっている仮の形象にすぎない。あの人型像を破壊しないかぎり、〈ルシファー〉を停止させることはできない』
『話はわかった』〈ヴィシュヌ〉は言った。『だが、防御壁を仮に乗り越え得たとしても、本体がそれを察知すれば、すぐに排除しにかかるだろう。それに、われわれ〈ASURA-AI〉が情報的構築物であると警告したのはおまえだぞ。〈ルシファー〉に接触したとたん、都市のネットワーク同様、俺たちの人格データも上書きされるかもしれない』

『攻撃に必要な一瞬の間だけ、本体の動きをとめればいい。私にはできる』〈ヴァーユ〉は巨大な頭を振って〈ルシファー〉を示した。『私はあの人物の情報体データを持っていると言ったはずだ。それを防御用にも使用する。必要なのはコンマ何秒かだ。長いともいえるし、少ないともいえるが、少なくとも、触れたとたんにデータを書き換えられることは避けられると予想している』

『その予想はどれほど確実なんだ』

『——約七十パーセント』〈ヴァーユ〉はためらった。『状況によっては、もう少し確率は上がるかもしれない。しかし、いって八十一か二、そこまでがせいぜいだ。百パーセントの保証はできない。どんな場合でもそうだが』

『だが、贅沢も言っていられない。そういうわけか。わかったよ、ゲイル』

炎の揺らめく左腕を、〈ヴィシュヌ〉は〈ヴァーユ〉の肩にかけた。熱気に炙られた〈ヴァーユ〉がびくっとするのを感じて、あわててひっこめる。

『すまない、炎を引っこめていないのに気づかなかった……まだこの〈ヴィシュヌ〉の扱いに慣れていないんだ。悪かった。ではゲイル、作戦を聞かせてくれ。アルジラ、シエロ、おまえたちも聞け』

荒野に熱風が吹きすさんだ。風の音に、天空へと舞い上がる童子たちの合唱がちぎれて流

れた。童子の頭に天使の翼を広げた〈ルシファー〉の小端末たちは、青い目と朱色の唇に無垢な微笑みを浮かべながら、神を讃え請い求めた。黒い太陽は天の真ん中へ引き上げられ、今にもしたたり落ちようとするインクの滴のように、ぶるぶると震えていた。もはやそれは天に開いた穴ではなく、天の半ばを擁する闇の口だった——天空全体が巨大な瞳孔を持った黄色い目のように感じられ、突き出た眼球の中央が、繰り返しつきたてられる〈ルシファー〉の祈りの叫びのたびにざわめき、波打った。

『小端末どもの排除はアルジラに任せる。それと、ゲイルの補助も』〈ヴィシュヌ〉は言った。『ゲイルがエンジェルのもとに到達できるように、重力操作を頼む。ゲイルの滑空能力だけでは、軌道を外れる危険がある。シエロは俺を乗せて、〈ルシファー〉の上空で待機。ゲイルが〈ルシファー〉を沈黙させると同時に、俺が飛び降りて、直接アタックをかける。以上だ。確認したか』

『了解、リーダー』

〈ディアウス〉と〈プリティヴィー〉が揃って答えた。〈ヴァーユ〉はこれからの作戦のために神経を集中しているのか、〈ルシファー〉に視線を向けて答えない。黙する後ろ姿に視線をやり、言葉をかけるかどうか迷ってから、邪魔はしないほうがいいと決めた。

『アルジラ。準備はいいか』

『いつでもいいわよ、リーダー』〈プリティヴィー〉の身体の周囲に指先ほどの小重力球が出現し、高速で回転しはじめる。『ゲイル、こっちへ来て。あんたの風とタイミングを合わ

せなきゃならないわ。どこへ飛ばせばいいのか、指示はあんたが出して。あの顔のお化けたちのことは任せなさい。一匹たりとも近づけないわ』
〈ヴァーユ〉は返事をしないまま、〈プリティヴィー〉のほうへ滑っていった。
どこか奇妙なゲイルの様子に心を残しながらも、〈ヴィシュヌ〉は〈ディアウス〉の背に飛び上がった。興奮しきった〈ディアウス〉はぐるぐると飛び回り、『うひゃ、重い！』と大げさな声をあげた。
『〈ヴァルナ〉ん時より重いんじゃないの、アニキ？　やっぱり身体がでっかくなったからかな』
『……二人分、だからな』短く、〈ヴィシュヌ〉は応じた。
『あ』と小さく息を吸い、〈ディアウス〉は沈黙して、『……そっか。そうだな』と静かに呟いた。
『アニキとヒートと、二人分、なんだもんな。重くたって当たり前か。いよっし！』
もう一度大きく円を描くと、〈ディアウス〉はぐんと高度を上げ、飛びかう小端末どもの体当たりをすばやくかわしながら、〈ルシファー〉のはるか上空まで昇っていった。
『オッケー、アルジラ、こっちはいいぜえ！　いつでも来いよ、ゲイル！』
〈ヴィシュヌ〉は身を低くして高空の強い風を避けた。強烈な日光が、じりじりと肌を灼く。異常に拡大された黒い太陽が戦いを見下ろしている。あまりに巨大な何者かに凝視されている感覚に、サーフの背筋が震えた。〈神〉がいる。狂える〈神〉がそこにいる——そこにい

て、悪魔と人間たちのちっぽけな戦いを、意味もわからず見つめている。
〈ルシファー〉のおびただしい翼が、いっせいに羽ばたいた。どれだけ羽ばたいても空に昇ることのない翼は、舞い散る羽毛の雨を降らし、あらためて大量の小端末を送り出した。金髪の巻き毛をなびかせ、ほほえみを浮かべた童子たちの翼ある首が、真珠色に輝きながら羽虫の大群のようにどっと襲いかかってくる。

聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・主ナル（デウス）・神（サベオス）！
聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・聖ナル哉（サンクトゥス）・萬軍ノ（ドミヌス）・上ナル（デウス）・神（サベオス）！

まっすぐに立つ〈プリティヴィー〉から、回転する小重力球が一度に解き放たれた。蛇の首のように伸びて地下にもぐりこもうとしていた小端末の一団にいくつかが命中し、サンクトゥスの声が歪んだ。めりめりと音を立てながら童子の首が潰れ、翼が折れ、いくつかの血の滴る肉塊に分割されて虹色の塵になる。
さらに別方向に飛ばされた重力球に向かって、〈ヴァーユ〉が地を蹴った。身体を上へ運ぶ上昇気流を喚ぶと同時に、全身を包みこむ強い空気の流れを作り出す。近寄ってきた小端末が、油を塗った表面に触れたかのように滑って流されていく。包みこもうとして抜け出され、ひとかたまりになった童子天使の真ん中に新たな重力球が飛びこみ、中心に向かって押し潰していく。

〈プリティヴィー〉が的確に飛ばす重力球が、気流に乗って飛ぶ〈ヴァーユ〉の速度をあげ、進路を安定させていた。現れては消える小重力に引かれて『落下』しながら、気流を操って確実にエンジェルのもとへ接近していく。回転する黒白の球もぶつかってはきたが、身体を被った気流にそらされて、わずかに軌道をずらされただけで通り過ぎていく。それ自体に攻撃能力のない球は、自らが攻撃されなければ反撃してくることもない。押された分の反作用が返ってくるだけだ。

その反作用の分すら、計算のうちだった。本体を守るべく集まってきた球の間を水銀の滴のようにすり抜け、複雑な軌道を描いていったん上空に昇ると、上昇気流を収めた。身体がぐるりと回転し、重い頭が下になる。翠緑の翅が大きくはためいた。身体を被う気流の殻だけをまとって、〈ヴァーユ〉はまっしぐらに、〈ルシファー〉、エンジェルの頭上につっこんでいった。

エンジェルが顔を上げた。真紅の目は溢れる血の泉のごとく、流れる血涙は尽きることなく頬を伝って落ち続けていた。開いた口はうつろに、洞窟のように昏く、その奥には虚無と暗黒とがのぞいていた。

その両目と視線を合わせて、〈ヴァーユ〉は右手をかまえた。手のひらが淡く輝き、呼び出されたエンジェルの代理体データが展開される。

背中を黒白の球が直撃したが、風にそらされて別方向へ流れていった。一瞬ふらつきはしたが、狙いはそれなかった。サンプリングしたエンジェルの代理体データという薄い防壁ー

枚をへだてて、〈ヴァーユ〉の手は、血の涙を流す〈ルシファー〉、エンジェルの顔面を、がっちりと鷲掴みにした。

上がりかけていたエンジェルの腕がとまった。回転する球の動きが、ほんのまたたきの間、停止した。羽ばたく小端末どものの声が、いきなり、断ち切られたように途絶えた。

『リーダー！』渾身の力で〈ヴァーユ〉は〈ルシファー〉の活動を抑えていた。『リーダー——今だ！』

〈ディアウス〉の背から、〈ヴィシュヌ〉が飛び降りる。真鍮と黄金の輝き、右に氷、左に炎をかかげた偉大なる神格が、全身に力をみなぎらせて降りてくる。

『あなたは以前、ＡＩの私に、生きる意味を与えると言った』〈ヴィシュヌ〉の降りてくるまでの短い一瞬間、〈ヴァーユ〉は囁いた。〈ルシファー〉の、血を流す目を覆った手はわなわなと震え、はげしく明滅していた。輪郭がぼやけ、ふたたび復帰した。防壁を浸食し、食いこんでこようとする〈ルシファー〉のただひとつのコードに、唯一の祈りと光を希うところに、〈ヴァーユ〉は触れた。

『では人間として、生きる意味とはなにかあなたは知っているのかと、私は問うた。あなたは答えることができなかった』

〈ヴァーユ〉の指が浮き上がり、輪郭を失い、代わりに sunctus の文字列が、蟻の行列のようにうごめきながら手首を這い上がっていく。

『その答えが、この姿か。人間を捨て、意志も捨て、心も捨てて、永遠に手の届かぬものに

向かってただ叫びつづけるこれが、あなたの生の意味なのか。エンジェル』
〈ヴァーユ〉の肩に力がこもった。腕が張りつめ、肘のあたりまで上っていたsunctusの文字が、押し戻されるように手のひらのほうへ落ちていく。
『エンジェル！』
影が落ちた。凍りつく右手と燃えさかる左手を同時に掲げた〈ヴィシュヌ〉が、全地を揺るがす咆吼とともに、死を携えて落下してきた。
落ちるそのままの勢いで、〈ヴィシュヌ〉は両腕を振り抜いた。ほとばしった冷気と炎熱が、長大な剣となってエンジェルもろとも〈ルシファー〉の巨体を縦に割った。
〈ヴァーユ〉は吹き飛ばされ、宙に舞った。その右手に、目を見開き、口を半開きにしたエンジェルの首が掴まれていた。真紅の双眸から滴る血涙が、羽毛となって散った。
〈ヴィシュヌ〉は着地すると、振り向きざまに、もう一度腕をふるった。両断された〈ルシファー〉の身体は、さらに下から、炎と氷の二条の輝きによって、左右から斜めに二度、切断された。
聖ナル哉（サンクトゥス）の唄声が悲鳴に変わった。泡の弾けるように、童子の首がつぎつぎ破裂し、羽毛の塊に変わって塵になる。球は停止していたかと思うと石のように落ち、その途中で、小端末の童子と同じく羽毛と塵になって散った。
首を失い、六つに切り離された本体はしばらくぶるぶると震えていたが、突然、爆発するようにわっとおびただしい羽毛の塊となって飛び散った。舞い散る羽毛の雨に、地上に降り

た〈プリティヴィー〉と〈ヴィシュヌ〉は、思わず頭をおおった。大量の羽毛は地に降り、だがそこに触れる前に虹色の塵になり、影も残さず空中に溶け失せていく。
最後の一枚が、はじけて消えた。巨大な姿に占められていた視界が開けた。〈プリティヴィー〉と〈ヴィシュヌ〉は頭を振り、そろそろと起き上がった。
〈ルシファー〉の巨体のあった位置に、ゲイルが立っていた。すでに変身は解いている。フードを深く下ろした彼は、手にしたものを黙してじっと見つめていた。
エンジェルの首。
〈ルシファー〉が消えたあとでもまだ、異形の姿と化したその首は声のない喚び声を放つかのように口を開け、血の涙を流しつづけていた。数枚の羽毛が風に舞い、地を転がって虹色に砕けた。
「ゲイル……」
その情景にこもる何物かが、〈ヴィシュヌ〉の燃えさかる闘争心を流し落とした。〈ヴィシュヌ〉の姿を脱したサーフは、声をかけて参謀型(ビショップ)に近づこうとした。
参謀型(ビショップ)はこちらを見ず、動こうともしなかった。その手のひらの上で、エンジェルの首が微塵に砕けた。あとに、一枚の小さなチップが残った。虹色の透明なチップには、十字架を思わせるひび割れが走っていた。
ゲイルは沈黙のうちにそれを見ていた。エンジェルだったものは清らかな真珠色の羽毛となって舞い散り、風にのり、遠く、どこまでも吹き散らされていった。

第八章

「そのとき僕は、その長い年月の間――しかも全精神をあげてまさにペストそのものと闘っていると信じていた間にも、少なくとも自分は、ついにペスト患者でなくなったことはなかったのだ、ということを悟った。僕は、自分が何千という人間の死に間接に同意していたということ、不可避的にそういう死を引起こすものであった行為や原理を善と認めることによって、その死を挑発さえもしていたということを知った。……」「おそらく」と、手帳は考察している。「人間は聖者の徳の近似的なものにしか行き着けないのであろう。そうだとすれば、謙譲にして慈悲深い堕天使精神(サタニズム)をもって満足するほかはあるまい」

カミュ『ペスト』

1

「兄ちゃん！」
　地下へ降りたエレベーターの扉が開いたとたん、小さな身体が腹に体当たりしてきた。汚れた顔を上げたのはフレッドだった。目が必死の色にぎらついている。背中には銃と鉄パイプをななめに背負い、パイプの先は何度も地面に叩きつけたかのように折れ曲がって潰れていた。
「どうした、フレッド。〈ルシファー〉なら大丈夫だ。俺たちが殲滅した」
「そのことはわかってる。あのバタバタするお化けどもがパッと消えちゃったから。けど、大変なんだ。早く来て。ロアルドとグレッグも待ってる」
「お、おい」体重をかけてぐいと手を引かれ、サーフは困惑した。「何をそんなに慌てているんだ？　〈ルシファー〉の欠片がまだなにか残ってでもいるのか」
「バカ、違うよ。姉ちゃんだよ。大変なんだ」振り返ったフレッドはその場で泣き出しそうになるのを懸命にこらえているかのようだった。突きだした唇が震えている。
「セラになにかあったの？」アルジラがぎょっとしてフレッドの肩をとらえる。シエロがぞっとしたように、

「まさか、あのバタバタお化けに襲われて怪我とか——」
「そんなんじゃねえんだよ！　いいから早く来いってば！」
走るフレッドに先導されて、サーフたちはまだ混乱を極めている地下コロニーの迷路を駆け下った。〈ルシファー〉の端末である童子たちはみな姿を消していたが、彼らの残した爪痕は生々しかった。
食糧生産プラントの制御コードが書き換えられたせいで、オキアミ養殖タンクが活動を停止している。改良クロレラも同様だ。風力発電と配電システムもやられたらしく、残っているのはシステムから独立したバクテリア発光板と、もっとも原始的な光源である火だけで、数少ないオイルランプや木ぎれをオイルに浸した松明が、空気の汚染などこの際構っていられないのか、暗黒の中をうっすらと照らし出している。
そうしたシステム上の障害の上に、床に倒れたまま四肢を痙攣させている人体がいくつもあった。外傷は見受けられない。だが、ぽかんと口を開け、よだれを流しているその顔に、知性はなかった。うつろな目を見開いたまま、その口からただ一つの言葉を垂れ流しているだけだ。「サンクトゥス・サンクトゥス・サンクトゥス・サンクトゥス……」
「おわっと」サーフは前を走るフレッドを摑んで、肩に担ぎ上げた。荷物のように抱えられたフレッドはじたばたし、「何すんだよ！」と大声で抗議した。
「おまえが先導するより、このほうが早い。俺たちは闇の中でも目が利く」スピードを上げて走り続けながら、サーフは反論を許さずに言葉をつづけた。「あの人間たちはどうした。

〈ルシファー〉に浸食を受けたのか――

「なんか知んねえけど、あの化け物を追っ払いきれずに、取り囲まれてへばりつかれた奴はみんなああなってる」喧嘩をしている場合ではないと悟ったらしく、フレッドは抵抗をやめて答えた。「一匹一匹は一発撃つかパイプとかで叩きまくれば潰せたんだけど、いっぱい一気に押し寄せてきたところへまともに突っこんじゃったのもいたから。へばりついた奴らを叩き潰して引っ張り出してみたら、もうああなってた。呼んでも叩いても駄目なんだ。あのなんかわかんない言葉ばっかり繰り返すだけで――」

シエロが、こん畜生、と低く唸った。サーフは瞳を翳らせた。〈ASURA-AI〉をも浸食する〈ルシファー〉のコードは、人間の精神というウェットウェア上のデータさえ書き換えることができたようだ。犠牲者の数がどれだけいるかまだわからないが、コロニーに集められた人類の生き残りが、またこれで大きく減らされたことは想像に難くない。

「そっち。そこの階段降りた、奥」フレッドがサーフの耳に囁く。サーフは階段を下りるようなまだるっこしい真似はせず、一息に長い階段を飛び降り、下の層に着地した。いきなり空中を飛ばされたフレッドがうひゃっ!? と頓狂な声をあげる。ほとんど止まらずに、なめらかに先へ走るサーフに続いて、アルジラ、シエロ、ゲイルが間を置かず、次々と飛び降りてくる。

細い通路の先の奥まった一室から、明かりがもれていた。蜂の唸るような低い音が狭い空間に反響している。フレッドに言われるまでもなく、サーフはそこを目指した。ロアルドと

グレッグ、そして数名の、聞いたことのない人間の話し声が聞こえる。
「サーフ!」すべりこむように戸口に姿を見せたサーフを見つけて、グレッグが立ち上がった。額に乱れた髪が散りかかり、疲れ切った顔をしている。浮かんでいるのは敵を撃退した安堵ではなく、心配と焦燥だった。「戻ったか。無事でよかった、だが、早く彼女を診てやってくれ。俺たちじゃ手に負えん。避難民の中から医者を見つけて連れてきてはみたんだが――」
「セラ!」サーフの後ろから飛びこむように入ってきたシエロが声をあげ、部屋の奥のベッドに飛びついた。「セラ、どうしたんだよ! 生きてんの? なあ!」
サーフは一瞬腑抜けたように立ちつくし、気づいてそっとフレッドを床に下ろすと、シエロに続いて、ベッドのそばに膝をついた。
そこにはセラが、毛布と枕に埋もれるようにして眠っていた。口には酸素吸入マスクがかぶせられ、低く唸る小型発電機が、壁に立てかけられたボンベから酸素を送り出している。ただでさえもとのやわらかな張りをなくしていたセラの顔は、骨に皮一枚が貼りついただけのような、ぞっとする様相を呈していた。サーフは唖然として、そばの椅子に腰を下ろしたロアルドを仰ぎ見た。
「これは……どういうことなんだ? セラは医療班に預けたはずだろう。彼女は戦闘中に俺たちにコンタクトしてきた――助言をくれた。それに、『電磁波や電波を遮断する部屋に入れてもらったから大丈夫』と――」

「こんな場所に、そんな気の利いたとこがあるわけないじゃん」歯ぎしりせんばかりにフレッドが言った。「姉ちゃん、嘘ついたんだよ。あんたらを心配させないように。あんたらが自分のこと、気にしないで戦えるように、わかってて、嘘言ったんだ」
「内臓がどれもこれもぼろぼろになっている。八十歳の老婆でも、これよりはまだましなくらいだ」
都市からの避難民であるらしい、ロひげをたくわえた目つきの厳しい男が、セラの顔に目を据えたまま吐き出すように言った。汚れた白衣の袖をまくり上げ、血管の浮き出た手を神経質そうにひくつかせている。
「おそらく、たび重なる〈神〉との生身での接続と、先ほどの――〈ルシファー〉といったか、その怪物が〈神〉に送った過重データの流入が、ただでさえ弱っていた身体に大打撃を与えたと思われる。心臓がひどく肥大しているし、肺水腫も重い。脳内出血もあちこちに見受けられる。いまだに生きているのが不思議なくらいだ。その上、これも」
毛布のすそをめくって、医師はセラの裸足のつま先をみなに示した。アルジラが悲鳴を上げ、シエロが「そんな！」と悲痛な声をあげた。ゲイルは青ざめた頬をひきつらせ、薄い唇を強く嚙んだ。
セラの小さなつま先が、透明化していた。
まだ足の指数本の第一関節までだけではあったが、それは見まがいようのない、死病の徴――キュヴィエ症候群の発症だった。

「そんな、セラは〈神〉と接触しても、陽光を浴びても、結晶化しなかったって──」

「それは以前の彼女だろう。〈EGG〉崩壊前の彼女、世界がこんな風になる前のテクノシャーマン」ひげの下の口が歪んだ。この医師もまた、〈EGG〉か、あるいは〈協会〉の関係者なのかもしれなかった。「当時の彼女は人間ではなかった。少なくとも、半分は。だが、今の彼女は完全な人間だ、そして、〈神〉は以前の〈神〉ではない。人間になってしまった〈女神〉が、狂える〈神〉と語り、本来人間の生体が受け入れられるレベルをはるかに超えた情報処理を余儀なくされたんだ。いつかはこうならないほうがおかしい──」

「なんで言ってくれなかったんだよ、セラ」シエロは泣きじゃくりながらセラの薄くなってしまった肩をゆすっていた。「苦しいなら、辛いなら、なんでオレたちにそう言わなかったんだよ。なんだよ、畜生、ヒートもセラも、なんにも言わないでなんでもひとりで抱えこんで、こっちがそれ知ったときどう思うか考えろってんだよ。オレたち仲間だろ、なあ、セラ。セラってば、なあ、セラ」

サーフは動けなかった。セラの『わたしなら大丈夫』という声を信じた、あれが間違いだったのか。冷静になって考えてみれば、フレッドの言うことが正しかったのだ。必要な場所にさえ事欠いている地下コロニーに、そんな都合よくデータ遮断できる設備があるはずもない。だが、眼前の戦いに気をとられた自分はそれを信じてしまった。

自分が消失していた間、セラがどんなに必死になって人々をまとめ、導き、〈エンブリオン〉の一員として〈シヴァ〉との戦いに参加していたかも知っている。カウチの上でのたう

ち回っていたセラ。あの時どれほどの苦痛が、ダメージが、この細い身体に打ちこまれたのだろう。自分が無の岸辺から帰還し、〈シヴァ〉を捨てたヒートが〈アグニ〉に戻るまで、セラはバックアップすらなく、たったひとりで狂気の〈神〉と、暴走する〈シヴァ〉の能力の両方を抑えこんでいたのだ。

真っ黒な後悔が胸中を染めた。だがいくら悔やんでも、もはやセラの生命と健康を取り戻すことはできない。枕と毛布に埋まったセラの顔は、そのまま溶けて、空中に消えてしまいそうにはかなかった。

「なんてこと……セラ」アルジラが崩れ落ちるように跪いて、セラの薄いガラスのように脆そうな肌に頭をすり寄せた。涙が、くぼんだ頬やとがった頬骨を濡らした。「あんたまで、こんな馬鹿なことをして——あたしたちのために……」

「〈ルシファー〉といったのか。あの怪物は」ロアルドが重い口を開いた。「あの……ちびの化け物どもは、ほかの何より彼女を探しているようだった。この部屋へ隠すのも一苦労だったんだ。ようやく運びこんで密閉すると、入りこんだ奴ら全部じゃないかと思うほどの数が、いっせいにここへたかってきた。侵入させないようにするので精いっぱいだったよ。彼女が中で何をしているかなんて、気にする暇もなかった」

「彼女はテクノシャーマンだ」ゲイルが静かに言った。「このコロニーにあるあらゆる情報的機器、いや、〈EGG〉と〈神〉を除いた情報体のうちで彼女以上のデータを内部に蓄積している存在はいない。電子情報を同化する〈ルシファー〉が、効率のいい同化対象として

彼女に焦点をあてるのは予期すべきだった」
「ちがう……ちがう、の」
かぼそい声がした。
「セラ！」アルジラが飛び上がり、ベッドにすがりついた。「気がついたの？　でも、しゃべっちゃだめよ、あなたの身体は――」
「ちがう、の……わたしを、〈ルシファー〉が、エンジェルが、狙った、理由」
セラは身じろぎし、瞼をあげてサーフを見つめた。その瞳だけは以前と変わらず、黒々と大きく澄んで、肉体の弱った分、精神の光がより強く表に輝き出たかのように、熱っぽくきらきらと輝いていた。
「〈ルシファー〉――エンジェルは、わたしの、おかあ、さん、だから」
「お母さん？　エンジェルが？」アルジラとシエロが声をそろえる。
セラは笑みに近い形に唇を曲げ、「それとも、おとうさん、かな」と続けた。
「わたしは、ナンバーSf-m09、〈セラフィータ09〉……エンジェルの、精子と卵子から生まれた、九番目の、女性型実験体。エンジェルは、わたしの、おとうさんで、おかあさん。わたしは、あのひとにとって、〈神〉のひざを奪った、憎い、娘」
またたかない大きな瞳に涙が盛り上がり、紙のように薄くなった皮膚をすべり落ちた。
「あのひとはいつも、〈神〉のもとに還りたいと、思ってた。願ってた。〈神〉と自由に交感するわたしを、いつも、見てた。いまは、わかる、あれが、どういう目だったか。どんな

ことを意味していたか、いまの、わたしは—こぼれた涙が古毛布にしみを作る。
「あのひとは、憎んでた、わたしを。自分のように、女になって天から堕ちることもなく、自在に〈神〉と戯れることのできる、娘を。だから、ここにきた。〈ルシファー〉、心の中の欲望や想いをすべて解き放つアートマに支配されて、憎い娘を、殺しにきた。わたしを吸収して、もう一度、天界の、〈神〉の〈天使〉に戻るために」
声をたてずに、セラは泣いていた。見開いたままの瞳から途切れることなく涙は流れ、毛布を濡らしていた。
「そんなこと、言っちゃダメだ、セラ」懸命にシエロが手を握る。「オレらに『親』とか『子』がなにかって、教えてくれたのセラじゃん。『親』は『子』を大事にして、育てるんだろ。いつでもいっしょで、みんな楽しく暮らすんだろ。それが『親子』で、『家族』ってもんなんだろ、なあセラ。なあって—」
シエロの言葉には応えず、セラはサーフに視線をやって、謝るように唇を曲げた。
サーフはかつてルーパから、サーフとルーパのような関係を『親子』というのだと聞いた。いまはもうない世界の、だが確かに存在した記憶で、くすんだ赤い髪の男がS T（シェイドタイム）の薄明かりを半面に受けて笑っている。『まあ、そう言うな。『親子』だろうが』という声がふいにはっきりと蘇った。頭を撫でる手のひらの大きささえ感じられそうなほどだった。
自分とルーパが『親子』だというのなら、セラとエンジェルを『親子』と呼ぶべきなのだろうか。〈教会〉のニュービーとして産出されたサーフとルーパとの間に、人間でいうよう

な血のつながりはない。それでも、セラは二人を『親子』と、『父親』と『息子』だと言った。しかしエンジェルと、セラは。
たとえ血縁上、遺伝子上の繋がりが二人にあったとしても、その間の絆が憎悪と嫉妬でしかなかったのなら、彼女たちを『親子』と呼ぶべきか、呼んでいいのか、サーフにはわからなかった。
〈ASURA〉は人から産まれるものではなく、血縁を知らない。あるのが憎しみだけの相手なら、そんなものは『親』ではない、敵ではないか、そう口にしかけたとき、
「でもさ」とフレッドが口をはさんだ。
「姉ちゃんさ。エンジェル、ってか、つまりあのでっかいのが、自分を殺しにここへ来たんだ、っていいたいわけ？」
セラはわずかに頭を動かした。頷いたように見えた。また新しく涙がこぼれ、毛布のしみを広げた。呼吸マスクが白く曇った。
「わたしの、せいで……また……たくさんの、ひとが……」
「そこがさ。ちーっと違う、って思うんだ、俺」フレッドは立ったままオウムのように首をかしげ、一方の足でもう一方の脛を掻いている。「自分の子供を好きじゃない親なんて、世の中にゃいっぱいいるよ。自分の親が好きじゃない子供だって、山ほどいる。でも、やっぱり親は親だし、子供は子供なんだ。あの〈ルシファー〉ってのか、でっかいのは、心の中で思ってることを全部おもてに出しちまうんだろ？」

「そう」か細くセラは呟いた。「だから、エンジェルは、わたしを……」
「人間の気持ちなんて、そうすっぱりきれいに割り切れるもんでもねえよ。特に、親とか、子とかに関してはさ」フレッドは足をおろすと、すり足で前に進み、セラの枕もとにそっと手をついて、かがみこんで頭を載せた。「どんなに嫌いでも、こいつ死んじまえって思っても、そう思ってるあいだはやっぱり、相手のことを気にしてるんだよ。親子だったら、なおさらだ。ほかの関係なら切れる。でも、どんなことをしたって、親子だって事実だけはぜったいに消えないいんだ」
「わたし……」
「俺は、母ちゃん二年前に死んじまって、父ちゃんはいまどこにいんだかわかんねえし、顔も名前も知んないけど」とフレッドは言葉を継いだ。「それでも時々、ああ俺の父ちゃんっていまどこで何してんのかな、とか、どんな顔してんのかな、とか思うわけよ。好きとか嫌いとか、そんなんじゃねえんだ。そりゃ、もし会うことがあったら、俺と母ちゃん放っぽって消えちまったのには、文句の一つも言ってやりたいよ。でもそういうの抜きにしてもさ、やっぱさ、思うんだよ。父ちゃん、どこにいんのかな、って」
セラの唇がもの言いたげに開き、震えて、閉じた。
「俺には、姉ちゃんの親の気持ちとかはわかんねえ。たぶん、ほんとにだれかの気持ちがわかることなんて、世の中にはまずないと思う。親でも子でも、ほんとの気持ちがはっきりわかることとなんて、ない。わかるのは、おたがいがおたがいに言ったことやったことの中身

だけだ。そこから気持ちを読み取るのは、読み取るほうの勝手だ」
「だから、エンジェルはわたしを……殺しに――」
「だからさ、『殺しに来た』って、なんでわかるわけ？」腹立たしそうにフレッドは頭を振った。「確かなのは、あのでっかい〈ルシファー〉になっちまって、ほかのこと全部わかんなくなっても、エンジェルは姉ちゃんのところへ来た、それだけだろ。なんのために来たのかなんて、俺らにも、姉ちゃんにも、わかるわけねえんだよ。エンジェル自身にも、わかんねえんじゃねえかな。理由なんてどうでもいいんだよ。ただ、姉ちゃんの親が、人間じゃなくなっちゃっても、娘のあんたのとこへ来たってだけで」
グレッグは目を伏せ、銃を杖にして黙って耳を傾けていた。ロアルドはずり下がった眼鏡の奥で考え深げに瞼を閉じている。避難民の医師さえ無愛想な顔をゆるめて、汚れた顔の少年が懸命に語る言葉に聞き入っているようだった。
「殺すためだったかもしれないし、ただ顔を見たかっただけかもしれない。自分でもよくわからないまま、ただこっちの方へ来ちまったのかもしれない。テクノシャーマンってものに引きよせられただけって可能性も、もちろんある。でもそういうのぜんぶひっくるめて、理由だったかもしれないんだ。それなら何も、悪いようにとる必要なんてない。姉ちゃんの親は、人間じゃなくなっても、娘の姉ちゃんのことは忘れなかった。覚えてなきゃいけないのは、たぶん、それだけなんじゃないかな」
一息にそれだけしゃべって、フレッドはしんと静まりかえった大人たちの中に、自分がひ

とりで立っているのにいきなり気づいたようだった。ばね仕掛けのように跳び上がり、耳まで真っ赤になりながら、膝の埃を音をたててはたく。
「と、とにかく、そういうことだから。俺、片付けの手伝いに呼ばれてるから、もう行くぜ。あんたら、姉ちゃんのこと、ちゃんと見てやってくれよな！」
首筋まで赤くなった後ろ姿を見せて、フレッドは飛び出していった。
しばらくは発電機と、酸素吸入器のゆっくりした作動音が響くだけだった。セラは天井を見つめたまま、大きく見開いた目から、涸れることがないかのように涙を流していた。
「セラ」枕上に近づいて、サーフはセラの瞼にそっと手を乗せた。「今日はもう休め。疲れただろう。それから、もう俺たちに嘘はつくな。〈エンブリオン〉の一員ならなおさらだ。どんなことでもすぐに、正直に報告するんだ。わかったな」
「……わかったわ、サーフ——リーダー」マスクの内側を白く曇らせながら、吐息のようにセラは言った。「ごめんなさい、サーフ。みんなも。もう嘘はつかない。約束する」
「それでいい。眠れ。目を閉じて、さあ」
手の下で綿毛にくすぐられるような感触があり、セラが目を閉じたのがわかった。サーフはそのまま手を動かさずにいた。やがてセラの呼吸がゆっくり、深くなり、眠ったのがわかった。サーフは手を離し、医師に向かって短く、「彼女の容態は」と問いかけた。
「長くて二週間、というところだろう。最大限に見積もっても」医師は眉間に皺を寄せてかぶりを振った。「いまこの瞬間、生きて呼吸をしているのすら信じられないくらいなんだ。

心拍は弱いが今のところ安定している。自発呼吸もまだできている。だが、内臓がほとんど機能していないから、経口で食事をとることはもう無理だろう。点滴と注射で栄養と水分を補給するしかないが、この状況では、それでもいつまで保つか」
「そんな」アルジラが色を失う。
「それじゃ、打つ手はないってのかよ！　このまま死んじまうって……」
「よせ、シエロ」
シエロが医師の喉を摑まんばかりに詰め寄ろうとするのを、サーフは押しとどめた。
「では、確実に保たせられると言えるのはどのくらいだ」
「だからいま生きているのさえ奇跡だと言っているだろうに」言い返しながらも、眠る少女の小さな青白い顔を見下ろして、医師は吐息をついた。「まず、三日から五日。保証はしない。五分後には容態が急変しているかもしれないからな。打てるだけの手を打って、それがすべてうまく働けば、という意味だと受け取ってくれ」
「わかった」シエロがまた抗議しようと手を振り上げるのを抑えて、サーフは頷いた。「彼女を頼む。セラはテクノシャーマンである以前に、俺たちの大切な仲間だ。苦しませたくないし、できれば、死なせたくもない。できるかぎりの手をつくしてくれ」
「人を生かすのが私の仕事だ。やってのけるよ。どういう状況であろうとな」
そっけなく応じて、医師は塵を払うような仕草をした。この上患者を騒がせるな、出て行け、ということらしい。サーフはおとなしく従い、まだ不服そうにぶつぶつ言っているシエ

ロを引きずるようにして、外へ出た。アルジラとゲイル、ロアルドとグレッグが続くと、戸は黙って脇に控えていた中年の看護師の手でしっかりと閉ざされた。
「サーフ。自分を責めるな」グレッグが耳もとで囁いた。「おまえはリーダーだ。彼女はおまえたちを救うためにあそこまで頑張った。彼女の働きを無駄にするんじゃない」
反射的に荒い言葉を返しそうになり、サーフは深く息を吸って自分を抑えた。グレッグの言うとおりであることはわかっている。だが、やはりもっと早く気づいていれば、せめて、自分の帰還がもっと早ければ、セラにあそこまで負担を強いることはなかった。
「〈神〉に新しい言語を入力できるのは、テクノシャーマンだけだ」こんなことは口にしたくない、という調子で、ロアルドが重苦しく言った。「彼女が——その、まだ生きている間に、作戦を遂行しなければ、すべて水の泡だ」
「わかっている」語気が荒くなるのを、今度は抑えられなかった。無理に感情を抑えつけ、サーフは拳を握りしめた。「〈EGG〉の所在はわかったのか」
「〈ザ・シティ〉から伸びていた隠し通路と、〈ルシファー〉が侵行してきた経路から辿って、だいたいの見当はついている。衛星回線上のメインメモリのバックアップを取り出せれば、その中に正確な位置があるかもしれない」
「所在が判明したらすぐに知らせてくれ。一刻を争う」
「もちろんだ」ロアルドは杖を鳴らして頷いた。「おそらく〈神〉の落下も、〈ルシファー〉のためにぐっと早まったはずだ。もしかしたらセラの死よりも、〈神〉が堕ちてくるほ

うが早いかもしれん。そうなったらもう、どうしようもない」
「いずれにせよ、われわれは手を尽くすだけだ。あの少女のように一角を曲がって見えなくなった病室を、グレッグは肩越しに振り返った。「しかし、フレッドがあんな大人顔負けの口をきくとは思ってもみなかったな。ちょっと圧倒されたよ」
渋い笑みを浮かべてサーフの背をぽんと叩き、グレッグとロアルドは連れだって話し合いながら、上層への階段をあがっていった。取り残されたサーフたちは妙に宙ぶらりんな気持ちで、通路に立ちつくした。親と子、という、〈ASURA〉にとってはなじみのない概念と、フレッドの幼い、懸命な声がもどってきた。
(姉ちゃんの親は、人間じゃなくなっても、娘の姉ちゃんのことは忘れなかった。覚えてなきゃいけないのは、たぶん、それだけなんじゃないかな)
「……親、か」同じことを考えていたらしいアルジラが、ぽつりと呟いた。「どうなのかしら。エンジェルはほんとに、セラのためにここに来たのかしら」
「それはもう誰にもわからないし、わかったところで意味もない。フレッドの言うとおりだ。セラが心を痛めずにすむ答えがあるなら、それでいいんだ」
「オレ、なんかちょっと、人間ってうらやましいなと思った。ホントにちょっと。ちょっとだけ、だけど」サーフにきつく背をもたせかけて、シエロが言った。「そういう風に、切っても切れない繋がりが誰かとの間にあるって、どういう感じなんだろうな……」
ゲイルはひとり、皆から少し離れて立っていた。スーツのポケットを探り、一枚の、ひび

の入ったチップを取り出す。十字の形に割れたチップ。それは何も言わず、語らず、内側からの光も消えて、手のひらの上にただ、沈黙していた。

2

さまざまな生産システムやエネルギー施設が徐々に復旧するにつれて、〈ルシファー〉の襲来が残していった傷の深さがどれだけ大きいかが明らかになってきた。地下コロニーの食糧のほぼ九十パーセント以上を供給していた、オキアミと改良クロレラの養殖タンクはその筆頭だった。

三十時間以上にわたって電力の供給が止まり、水の浄化・循環機能や酸素供給が停止していたために、オキアミの半分は死滅し、残りの半分も、タンクの底で沈殿して腐った仲間の死骸のために、汚染された水中で死にかけていた。クロレラはまだそれよりはましだったが、光合成のもとになる光を長時間受けられなかったために、こちらもかなり衰弱が拡がっていた。

生き残ったオキアミを掬って新しい施設に移すような余裕はコロニーの人々にはなく、もしできたところで、以前のように人々の栄養を補うことができるまでに回復させるには、長い時間を要すると考えられた。とうてい、〈神〉の墜落による世界の破滅までには間に合わ

ない時間が。
話し合いを重ねたすえ、ロアルドとグレッグとサーフ、〈ローカパーラ〉と〈エンブリオン〉は、地下コロニーを捨てて地上のニューヨークを選び、破壊の度合いの少ないドームを一つ改修して、そこへ全員が移動することを決めた。
〈神〉に新しい言語（プロトコル）を入力する作戦が行われたとき、成功するにせよ失敗するにせよ、〈神〉に加えられる大きな変更（アップデート）は、物質世界にも甚大な影響を及ぼすと予測されていた。暴風、地震、雷、そのほか、次元をつらぬく電磁場の乱れによるさまざまな混乱が、地上に残されたわずかな人類を襲うことになる。
その時、地下にこもっていては、逆に自らを墓に埋めることになりかねない。たとえ危険を冒しても、地上の避難所にこもってできるだけ堅固に外壁を固め、結末がどうなるにせよ、終わりがやってくるまでそこで息をひそめているしかないのが、いまの打ちのめされた人類の姿だった。
総数、八九二七名。
〈協会〉消滅による混乱と、〈ルシファー〉襲撃という二重の災厄をくぐり抜けて残った、それが地上の人類のすべてだった。
セラはベッドの中で昏睡と短い覚醒のあいだを行き来していた。衰弱は日ごとにはげしくなり、専属の医師団が結成された。あるだけの医療機器と薬品がニューヨークから持ち出されてきたが、効果があるのはほんのわずかだった。栄養剤と生理食塩水、数種のビタミン、

それだけ。彼女が死にかけているのは明らかだった。どんな手を打とうと、ただ、それは彼女の死を、ほんの数分か数時間、先へ押しやっているにすぎない。
爪先から始まったキュヴィエ症候群は刻々と進行し、足の甲のあたりまで硬化が進んでいた。折れそうに細い臑も、ほんのりとガラス光沢を帯びはじめている。陽光を避ければ進行を遅らせられるはずの症状も、セラがテクノシャーマンとして産まれ、〈神〉の影響を直接受け取る分、たとえ地下深くに寝かされていても、陽光を直接浴びているのと同じことになるようだった。むしろ、全身が一気に硬化しないことこそ、テクノシャーマンの特異性をあらわしているとさえ言えた。
それは残酷な光景だった。ニューヨークで〈協会〉の庇護のもとに暮らしていた人々は、テクノシャーマンという存在は知っていても、それがどんな人物であるのかはだれも知らなかった。それは〈協会〉の秘密であり、最大の神秘だった。〈ザ・シティ〉消滅の報に混乱する自分たちをなだめたテクノシャーマンの映像は、見たものを一目で従わせる、慈愛と威厳の双方を兼ね備えた、少女の顔をした女神だった。
だがいま、セラのベッドの周囲に集まった数名の医師たちは、自分たちを救った『テクノシャーマン』の真実の姿を目の当たりにしていた。やせ細り、大きな目を落ちくぼませて、酸素マスクの下で浅い呼吸を繰り返している少女。十代半ばのはずの彼女は、すっかり肉が落ちて、ほんの十歳か、それより幼い子供に見えた。
「知らなかった。テクノシャーマンがこんな……小さな、女の子だなんて」

点滴が薄い肌の下の血管に流れこんでいくのを見ながら、彼は呻いた。
「まだ、ほんの子供じゃないか。小さな、病気の子供。われわれはこんな幼い子に、自分たちの生活すべてを背負わせようとしていたのか？」
バイタルサインが規則正しい音を立て、少女の命がまだほそぼそと燃え続けていることを知らせていた。この小さい命が燃え尽きるとともに、人類の命脈も尽きる。
まるでそれを知っているかのように、少女は生にしがみついていた。ときおりの覚醒時には唇を動かして必死に言葉を伝え、選定したドームの補強、物資や設備の移動に奔走しているロアルドやサーフへの伝言を託した。それらは迅速に宛先に届けられ、有力な情報として活用された。
それらの情報の中から、ついに〈EGG〉本体の位置が特定された。〈EGG〉はアリゾナ州北西部、以前は「大峡谷（グランドキャニオン）」と呼ばれて大勢の観光客を集めていた峨々たる岩山の奥底に、ひっそりと収められていた。
無人探査機（プローブ）を出してみると、〈ザ・シティ〉から伸びていた二千マイルの隠し通路の先に、完全に破壊されたなんらかの施設の残骸が見いだされた。内側から押し破られるように砕かれたその外壁は、おそらく、〈ルシファー〉に変身したエンジェルが、周囲の情報的媒体のすべてを同化し終えて出て行った痕跡だと思われた。
奇妙にもそれは、雛が出たあとにうち捨てられた卵の殻のように見えた。飛ぶことのできなかった堕ちた天使が、それでも空を求めて孵化した夢の残骸。

当然ながら、生存者の姿はなかった。死体すらほとんど見つからず、むやみに成長した水晶の林と乱反射する光の雨が、探査機の各種機能を混乱させ、操作を難しくした。

その周辺では有機物のみならず、無機物さえもきらめく水晶の塊に変換されていくようだった。おそらく死体も、この変化の中に呑みこまれてしまったのだろう。かつて赤茶色の岩山だった一帯は、まるで巨大な水晶の群晶（クラスター）のように、透明な岩塊のつらなりに変わって、巨大な葡萄の粒のように膨れあがった太陽の光を受け、まばゆいばかりの光の饗宴を作り出していた。

完全に機能を停止する直前に探査機が送ってきた映像に、〈EGG〉の姿が捉えられていた。ねじ曲がった施設の窓枠の向こう、交錯する虹色のきらめきの奥深くに、ひときわ輝く、卵形のフォルムがうっすらと透けて見えている。

本物の卵ほどの大きさにしか映っていないそれは、おそらく撮影された場所からはまだ数キロは離れているのだろう。だが、所在を特定するには十分な情報だ。同じころに、わずかな覚醒を得たセラからの伝言が、この情報を裏づけた。

ただし、この伝言には同時に、もっと恐ろしい別な情報も含まれていた。セラは〈神〉の存在が、いよいよ次元の壁を突き破ろうとしていることを警告した。

毎日昇ってくる異様に膨張した黒い太陽は、日に日にその大きさを増している。電磁波の乱れもひどく、地下コロニーでも地上に近い浅い階層は、これを放棄せざるを得ない事態に陥っていた。それらすべてが、次元間の薄い膜を突き破ろうとしている狂える〈神〉の接近

によるものであると、セラは言った。おそらく、あと三、四日の間にもそれが起こるであろうことを、はっきりと彼女は告げた。
だからその前に、自分をここから連れ出し、〈EGG〉のところへ連れていってほしい、と懇願した。〈神〉が堕ちてくる前に、すべてが手遅れになる前に、一刻も早く、テクノシャーマンとしての最後の責務を果たさせてほしい、と。
この伝言を受け取ったサーフは自らセラの病室に赴き、そばについていた医師に、しばらく二人きりにしてほしいと頼みこんだ。何かあったらすぐに呼ぶように、自分はドアのすぐ外で待機しているから、と言い置いた医師は、渋々ながら患者をおいて出て行き、暗い通路の壁に額を押しつけて、自らの無力さにひっそりと泣いた。
サーフはセラの、すっかり小さくなってしまった手を黙って握りしめていた。
肉体は昏睡していても、意識は醒めていた。むしろ、肉体が活動を停止していることで、その精神はさらに拡大し、活発に動いていた。
だがそれも、ロウソクが消える前の一瞬の炎でしかないことは、セラにもサーフにもわかっていた。人間であり、生身の肉体を持つ以上、肉体が死ねば意識も消える。それを知ってなお、セラの精神はサーフの知覚に、本当の太陽のようにまぶしく照り輝いていた。
——訊きたいことがある、セラ。
声に出さずに、サーフはセラの精神に直接語りかけた。応えはすぐにあった。
——なに？

——〈神〉の落下を阻止、あるいは阻止できなかった場合、人類を襲う災厄はどれほどの規模になる？

——できなかった場合、という質問は意味がないわ。その場合は人類も、この次元ごと破滅するだけ。でも、もし阻止できても——

——できても？

セラは言葉にはせず、ただ詳細な予測データを直接サーフの中に送りこんできた。コンマ数秒の間にそれを検証し終えたサーフは目を伏せ、わかった、と唇を動かした。

——これを凌ぎきれると思うか？　人間たちが。

——確率は数パーセントね。

返ってきた思念は冷静だった。冷徹とさえ言えた。

——全員生き残るということはまずあり得ない。ほんの数名、数十名のレベルでならあり得るかもしれない、でも、そのあとも生きのびられるかどうかということになると、確率はもっとずっと下がる。たぶんほとんどの人工的な施設は破壊をまぬがれないでしょうし、食糧や水の問題もある。絶望と孤独という最大の敵も。ニューヨークや、あちこちの都市で起こったようなパニックが、生き残った人々のあいだでまた起こるわ。しかもその時、止めてあげられるわたしは、もう生きてはいない——。

しばらくの間、交感はとぎれた。ふたたびサーフがセラの心に語りかけたときには、五分以上の間があいていた。

――今、俺が考えていることがわかるか、セラ。
――ええ。
――可能だと思うか。
――わからない。あなたたち〈ASURA〉に関しては、わたしでさえ予測のつかないことが多すぎるの。変数がたくさん入った数式みたいなもの。しかもその変数すら、別のものにくるくる入れ替わる。可能、不可能なんて、簡単には言えないわ。でも……
力の抜けたセラの指が、かすかに動いたような気がした。サーフは口を結んだまま、軽く手を取った指に力をこめた。
――でも、やる気でいるのね。あなたは。
――俺はもともとそのつもりだ。だが、皆が……
――皆はやってくれるわ。だって、わたしたちは〈エンブリオン〉だもの。
セラは健康な自分の姿が、小首をかしげて立っているイメージを送りこんできた。〈エンブリオン〉のオレンジのマーキング入りのジャケットを身につけ、スリットの入ったスカートとスパッツを穿いて、かわいらしく笑っている。周囲にはアルジラとシエロ、ゲイル、そしてヒートとサーフが立ち、完成されたひとつのチームとして、お互いを支え、支えられながら、しっかりと立っている。
サーフはふたたび沈黙した。今度は十分以上の間が開いた。
――わかった。

サーフはセラの手を包むように両手で握りしめた。
——では、頼む、セラ。やってくれ。形にするのは、たぶん、ゲイルがやってくれる。
——了解、リーダー……
鈴のような笑い声がりんりんと響いた。サーフはメインメモリを開き、そこに格納された自らのデータに、セラの精神の探索肢がすべりこんでくるのを受け入れた。

最終的に人類の最後の避難場所として選ばれたのは、ニューヨークでは二番目に小さいドームだった。居住用の施設ではなく、数種の戦闘機やヘリコプター、それに関係する燃料や装備がおさめられている格納庫だった。九千名近い避難民を全員収容するにはぎりぎりの大きさだったが、外殻の頑丈さと、損傷の少なさが決め手になった。それ以上大きなドームはほとんどが破壊され、安全面で問題があるものばかりだった。
もともと格納されていた品は無用の長物として運び出され、かわりに、大量の食糧と水、空気清浄装置、発電機、衣類や毛布、燃料、その他、人類がしばらくの間生きのびるのに必要な、さまざまなものが詰めこまれた。
破壊された都市の外殻からはまだ使用できる太陽発電プレートがはがされ、近くに付随する、もう一つのいちばん小さいドームに積みあげられた。もし、人類が生きて避難ドームの外で朝を迎えることができれば、のちのち必要になるはずのものだった。あるだけの植物の

種子や、クローン動物の卵子と精子も集められた。これらは貴重な発電機の数台をついやして冷凍状態を保たれ、太陽電池やオキアミ・タンク同様、来るべき朝に必要とされるために、大切にドーム内に収められた。
「ちょっとしたノアの箱船だな」作業を眺めながらロアルドが呟いた。「『地に生きる動物すべてのうちよりひとつがいずつが選ばれて船に乗せられ……』」
「だが、この船に神の祝福はない」そばからグレッグが無愛想に答えた。「あるのは――そう、悪魔(ASURA)たちの守護だけだ」
ロアルドは黙して頷いた。作業は太陽を避け、夜を徹して行われていたので、地上を蠢く人々や走り回る車輛は、サーチライトに照らされて逃げ回る虫けらそっくりだった。ロアルドの目はぼんやりとその上を通り過ぎ、振り返って、〈ローカパーラ〉の中枢部のある方角を眺めた。
「セラにはサーフがついて行くそうだな。ゲイルかと思っていたが」
「サーフはそういうタイプじゃない」グレッグは言った。「危地には部下をやる前に、自ら飛びこむ……そういう男だ、あれは。リーダーとしては正直向いていないかもしれない、だが、ああいうリーダーを持った部隊は、しあわせだろうな」
「情けないリーダーで悪かったな」
「別に、そういう意味で言ったんじゃないが」グレッグの無精髭はおかしさを抑えるようにひくひく動いていた。

「ゲイルを行かせると、ここのシステム関係を調整できる存在がいなくなる、そう思ったんだろう。いまでも風力発電による送電の一部は、ゲイルの力を借りているありさまだ。かといって、アルジラやシエロをセラにつける意味も、あまりない。結局は戦闘力や各種能力に秀でたリーダーである、自分が行くのがいちばんだと、そう結論したんだろうさ」

ロアルドは口をつぐんで爪の端を噛んでいた。やがて言った。

「……どうする気なんだろう。彼らは」

「さあ」グレッグは銃把に顎をあずけて、なかば目を閉じていた。「彼らに対してわれわれが口を出すべきことはない。彼らは人間ではない……だが、われわれを守ってくれる。彼らはたがいを愛し、人を愛する。たとえ〈神〉に見捨てられた失敗作でも」

ロアルドの唇が動いた。反射的にアーメン、と口に出しかけたが、それが神に対する祈りの言葉なのを思い出し、途中で呑みこんだという風だった。二人の人間はその後もしばらく座りつづけ、作業の進みを監督しながら、地下のとある一室で仲間たちだけの会合をもっている悪魔たちの身の上に、思いを馳せた。

ほとんど人のいなくなった〈ローカパーラ〉の中枢で、テーブルを囲んで、四人の〈ASURA〉たちが集まっていた。卓上には三本のアンプル——薄緑色に発光する液の詰まった、注射器一体型のアンプルが、箱に立てられて置いてあった。

とし て。これをとって、さっき言ったことを実行するのは、ある意味では、現在の段階より、仲間
はるかに高い状態に移行することなのかもしれない。だが、見方を変えれば、これはまぎれ
もない自殺になる。

「これは命令ではない」サーフは言った。「ただ、頼むだけだ……リーダーではなく、仲間として。これをとって、さっき言ったことを実行するのは、ある意味では、現在の段階より、はるかに高い状態に移行することなのかもしれない。だが、見方を変えれば、これはまぎれもない自殺になる。

俺は、皆に死んでくれと言うことはできない。だから、ただ頼むんだ。意気地がないと我ながら思う。リーダー面をしながら、おまえたちの死を背負う勇気すらない。死を意味するものを差しだしておいて、それで、おまえたちの決断にゆだねようとする」

「つまり……その、これを注射したら、身体がバラバラになるってこと？　なんかよくわかんないんだけど」シエロが手を出して、アンプルの一本をはじいた。中で薄緑色の光がたぷたぷと揺れる。「前に、アニキの身体が霧みたいになってった、あれ？」

「このアンプル内の液体は、一種のアートマウイルスだ。働きを限定されているが」ゲイルが静かに補足した。「私は、セラがリーダーのメモリから抽出した〈アルダー〉の記録をもとに、その能力を一部再現した。〈ASURA〉ボディを構成する半生体素子を分離し、粒子レベルの最小単位にまで分割する力を。

だが、このアンプル内のウイルスは、別の働きもする。分離された〈ASURA〉ボディの素子をただ拡散させるのではなく、それぞれを極小の量子コンピュータの一単位とし、その能力を最大に発揮させて、各単位相互にリンクを繋ぎ、地球規模の、大量子ネットワークを作り上げる」

「それはわかったわ」アルジラが眉をひそめていた。「でも、するとどうなるの？　サーフがいたっていう、その『虚無の岸辺』とかいうところに、あたしたちも行くの？」

「〈ASURA〉ボディは、所有者の人格という観測者によって形態を保っている」ゲイルは言った。「以前、リーダーは〈アルダー〉によって主幹プログラムである人格データを消去され、そのために、実体を保っておくことが不可能になり、分解して完全な量子的状態に後退した。現在のリーダーの復帰は、リーダー自身の意識がまず復活し、再度自らを認識し直したことによって、ボディが再構築された状態にあたる」

ちらりとサーフに視線をやり、うながすように目顔で頷かれて、ゲイルは先を続けた。

「このウイルスは、ボディの構成素子を結びつけている引力を切り、最小単位である粒子レベルに分割する。〈アルダー〉の能力は主幹プログラムの消去にも及んでいたが、このウイルスにその能力は付与されていない……とはいえ」

ゲイルは言葉を切って、すぐに続けた。

「とはいえ、肉体と意識は密接に関係している。『己』と認識できる肉体が消失した場合、自意識がなおそこに残るかどうかの保証はない。ボディが分解されると同時に、それを『自分』と認識している自意識も分解されてしまう可能性は、無視できない。

われわれ〈ASURA〉の本質は、〈ASURA-AI〉という、自意識を持つプログラムだ。ボディはその付属物でしかない。うまくいけば、拡散した量子ネットワーク上を走るプログラムとして、人格が残る可能性も多少ながらある。しかし、『己』と規定するボディが消滅

したとき、それに引きずられて自意識そのものも消滅したならば、それは、われわれ自身にとっては『死』を意味する――

「で、その『大量子ネットワーク』とかいうのって、できるとどうなんの？　なんの役に立つのさ？」

シエロはまだ要領を得ない顔をしていた。

「かつての〈EGG〉をはるかに超越した、この時空を構成する次元間を通じて、最大の物理　情報的構成体が出現することになる――」

ゲイルが応じた。

「〈神〉が新しいプロトコルによってクラッシュを回避し、この次元を離れてもとの高次元へと回帰するとき、一種の次元震とでもいうべきものが起こる。これまで、〈神〉の情報圧によって引き延ばされていた次元の壁が跳ねもどり、もとの状態に戻るにあたって、さまざまな影響が各次元に拡がっていく。物質的次元である三次元においては、それは、各種の天災という形で顕在化するだろう。地震、津波、雷、暴風、火山の噴火など、あらゆる事態が考えられる。地球が破壊される可能性すらある。〈ASURA〉数体の力などではとうてい抑えきれない、大きな災厄だ。

だが、量子ネットワークならばそれらから人類を護り、次元震の影響を排除し、あるいはやわらげて、人類の存続を支えることができる。たとえ天災から無事生きのびたとしても、彼らの前に待っているのは、文明の滅びた荒地のみだ。すぐに次元震の影響が消えるとも思

えない。彼らには、生きのびるための時間と手助けが必要だ」
「なーんだ、つまり、人助けってことね」ぽんと手を叩いて、シエロはようやく納得したとばかりに何度も頭を振った。「難しいこといろいろ言うからわかんなくなっちゃったじゃん、アニキってばもう。じゃ、オレ、いーちばんっと」
さっと手をのばして、アンプルの一本をさらいとる。
「ま、待て、シエロ」あまりの気軽さに、サーフは反射的に手をのばしてアンプルを取り返そうとした。「本当にちゃんとわかっているのか？　おまえは、おまえでなくなってしまうかもしれない、いや、おまえ自身が、消えてなくなってしまうかもしれないんだぞ。そんなにあっさり――」
「えー、だって、オレらがやんなきゃ今いる人間、全滅しちゃうんでしょ？　だったらやるでしょ、普通」取り上げられないようにひょいひょいとアンプルを動かしながら、シエロは口をとがらせた。「だいたいさ、セラとアニキの二人だけで〈神〉んとこへ殴りこみに行くってのズルいし。オレらだって、なんかしたいじゃん。で、これがその、『なんかできる』道具だってんなら、文句なしってね」
「そういうことね」アルジラが残った二本のうち一本をつまみ上げ、指先でもてあそんで微笑んだ。「あの子が、あんなにボロボロになってまで守った人間を、見殺しにするわけにはいかないわ。当然じゃない、リーダー、それくらいわかってると思ってたけど」
「しかし、アルジラ」

「往生際が悪いわよ、リーダー・サーフ」ピンクの爪で、アルジラはつんとサーフの額をはじいた。「あたしたちに決断させるっていうのは、あなたが言ったのよ。これがその答え。命令じゃないんだから、撤回もできないわよ。観念なさい、リーダー」

「アルジラ——シエロ……」

「で、あんたはどうすんの、ゲイル」発光するアンプルを化粧品の瓶でもあるかのように頬に当てながら、アルジラはゲイルに流し目を送った。「これを作ったのがあんたってことは、むろん、これがどういうもので、使うとどうなるか、わかってたのよね。それであんたは、どういう選択をするつもり？」

「私の意志は常にリーダーとともにある。だが——」

「だが？」

「だがこれは、ほかならぬ、私自身の意志だ」

言うが早いか、最後の一本をゲイルの手がかすめ取った。サーフの手が一瞬遅く、テーブルの上で空を摑んだ。

「ゲイル！」

「あなたの行動はいつも不合理だ。理解に苦しむ」

ゲイルはすでにアンプルをどこかにしまいこんで平然としていた。テーブルの上に妙な格好で手をついたまま、サーフはゲイルを唖然と見つめた。

「だが今回は、不合理ではあるが、理解できる。そして、そのことを嬉しく思う

「ゲイル……？」
「あなたが私のリーダーであることに、感謝する、リーダー・サーフ」
アルジラがまあ、と口を押さえ、シエロが目をむいた。
ゲイルは微笑していた。
唇の端をかすかに持ち上げる程度のものだったが、それは確かに、晴れやかな笑みの一つのかたちだった。
「私の仕える主は、過去も未来も、永遠に、あなたひとりだ。サーフ」
目を見開いたまま言葉もないサーフを、アンプルをしまったその手で立たせてやる。驚きと困惑のない交ぜになった顔を見つめ、頬をたどろうとするようにのばした手が、途中で止まった。一瞬にして微笑が消える。
「どうした、ゲイル」
厳しい顔つきで上を見つめるゲイルに、同じく顔を引き締めたサーフが問いかけた。
「セラが警告している」
天井を睨みつけるゲイルの炯々と光る眼光は、厚い土の層を貫いて、天空の裏側に接近しつつある〈神〉をも突き刺すようだった。
「〈神〉の墜落が近い……おそらく明日、夜明けには。それまでに、〈EGG〉にたどりつき、〈神〉へ新しいプロトコルを送信しなければならない。準備を、リーダー」
碧の瞳の前で、サーフはまっすぐに立ち、顎を引いてしっかりと頷いた。

「二時間後には出発できるよう、ロアルドと医師団に連絡を。輸送機の準備をさせる。医師団にはセラのために、生命維持装置を積みこむように、指示を」

3

動きが急激にあわただしくなった。医師団はセラの衰弱した身体から注意深く各種の機器を取り外し、都市から運び出されて整備されたカプセル型の生命維持装置に、そっと横たえた。

使用する乗り物は前もって選定されていた。もともとは重要人物を送り迎えするために使用されていた小型ジェット機で、中は広く、快適なしつらえがされていた。生命維持装置を運びこむために座席の大半が取り外され、少女ごと搬入されたカプセルは、急な乱流による揺れや、上昇・下降による振動にも中にいる人間がダメージを受けないよう、しっかりと床に固定された。

医師団のメンバーは口々に、気をつけて、早く帰っていらっしゃい、と少女に声をかけ、接吻したが、彼女が生きて帰ってくると信じているものは誰もなかった。少女もそれを知っていた。彼女は乾いてひび割れた唇が許すかぎりの微笑みを浮かべ、手を振るかわりに指先をふるわせて、世話になった人々に礼と別れの印を送った。

操縦者の必要はなかった。自律型オートパイロットは針路上の気流や気圧変化を監視し、それにあわせて最善の航路を選択する。サーフの役割は、電磁波の影響により航空機が機能しなくなる距離まで〈EGG〉に接近したあと、ほとんど自力では動けないセラを連れて、〈EGG〉本体にまで到達することにあった。

カプセルの中のセラは、患者服ではなく〈エンブリオン〉のジャケットとスパッツを身につけていた。いまにも服に押しつぶされそうに見え、袖や裾はたるみ、肉の落ちた足はブーツの中で泳いでいる状態だったが、彼女は頑として要求を曲げなかった。

──わたしはテクノシャーマンであると同時に、〈エンブリオン〉のセラよ。

ゲイルを通して、セラはサーフにそう言った。

──これは作戦行動。だから、この服を身につけるのは当然だわ。いけない?

サーフは人間たちに、彼女の好きなようにさせてやってくれ、と頼んだ。はじめは反対していた医師団も、患者の断固たる意志と、どんな服を着ていたところで、彼女に残された生命の長さは大して変わらないという事実の前に折れた。

早朝、サーフとセラを乗せたジェット機は、突貫工事で均されたニューヨークのかつての大通りから、離陸した。セラの体調を考慮に入れた巡航速度でも、明日の夜明け、とセラが言明したリミット以前には、グランドキャニオンの奥に位置する〈EGG〉本体へと到達できるはずだった。

直接見送ることができたのは、陽光を浴びても問題のない〈ASURA〉たちだけだった。

人間たちは夜のうちにあわただしく別れをすませ、ロアルドとグレッグは、一人だけを行かせるようなことになってすまない、と頭を垂れた。
「結局、われわれはあんたたちに世話になるばかりだったな。最初のころの俺の態度を許してほしい、もしできればだが。俺は怖がってばかりいた、生きることにも、死ぬことにも。だが今は、そうだな、妙な話だが、腹が据わった」
「腹？」
「なに、最悪でも死ぬだけだ、と腹をくくったのさ」あっさりとロアルドは言った。
「あんたたちは死よりも悪い運命をたくさんくぐり抜けてきた。それはみんな、俺たち人間があんたたちに押しつけたことだ。だから死ぬだけで済ませてもらえるのならとんでもなく寛大な処置だ、と思ったら、すぼらしく気が軽くなった」
「そうとも限らん。生きていくことのほうがもっと酷いかもしれん。少なくとも、現在の見通しからするとそうなる」グレッグが身も蓋もないことを言う。
「わかってるさ」とロアルドはにやりとした。「つまりわれわれを生かしておいて、思いきり酷い目にあわせるために、あんたたちは行くんだ。この先、どんなことがあっても生にしがみついていくことが、たぶん俺たち人間に課せられた、代償なんだろうよ」
「せめて、もっと護衛でもつけてやれればな」
二人だけで送り出さねばならないことが、グレッグは残念でならないようだった。〈EG〉に接近することが前提となるこの任務には、陽光を浴びただけで瞬時に結晶化してしま

う人間の兵上は単なるお荷物でしかない。
サーフは笑って首を振り、この寡黙な男と、しっかりと握手を交わした。はじめ、〈ザ・シティ〉で会ったときと比べて手のひらは硬く引き締まり、胼胝のできた指はがさがさに荒れていた。どこか懐かしい感触だった。
「あんた、前に俺が知ってた人に似てるよ。ジャンクヤードでの話だが」
「どこでだろうと、あんたが懐かしく思える相手なら、似ていると言われて光栄だ」
目尻に皺を寄せてグレッグは微笑み、サーフの銀髪を子供にするように乱暴にかき回した。こら、よせ、やめろ、と笑いながら、サーフは内心にこみ上げるものを感じていた。ここに、ルーパに通じる魂を持つものがいる。あるいはジャンクヤードでともに戦った仲間たちも、魂の双子をこの地上のどこかに持っているのかもしれない。ただその可能性だけでも、自分たちが往く価値はある、そう思えた。
夜明けが近づき、太陽が昇る時刻が迫ると、人間たちは名残を惜しみながら地下に退いていった。かわりに、それまでは遠巻きにしていたアルジラやシエロ、ゲイルが集まってきた。サーフは皆を見回し、全員の顔に、かわらぬ決意を見た。
「決行は明日、午前零時」常とかわらぬきびきびとした口調で、サーフは告げた。
「俺たちの乗った機は、今日の午後十時に〈EGG〉前の研究施設跡に着陸する予定だ。だが、無人探査機(プローブ)のデータによると、電磁波の乱れの激しい区域は秒ごとに拡がっている。予定の場所よりずっと手前に降りなければならないかもしれない。その分の余裕を二時間見て

おく。もし、次元震の予兆を感じた場合は、ゲイルがGOサインを出すこと。シエロとアルジラは、警戒を怠るな」
「了解した、リーダー」
「イエス、リーダー。セラのこと、よろしくね」
「アニキ……けどさ」シエロはなおも心残りな様子で、生命維持装置の中のセラをのぞきこんだ。「ホントに、一人だけで行くの？　オレ、心配だよ、セラがこんな風だしさ——」
——二人じゃないわ。三人よ。
セラのしっかりした声が一同の脳内に響いた。
サーフは驚いてカプセルを見下ろした。セラは大きく目を見開いていた。ほとんど目ばかりに見えるやせ細った顔の中で、瞳が黒い炎のように燃えていた。それに呼応するように、熱く揺らめく炎の存在を、サーフは感じた。豪放な笑い声が耳の奥に響いた。
「ああ。そうだな」体内の〈ヴィシュヌ〉の存在を、その炎と氷を併せ持つ力を確認しながら、サーフは呟いた。「そうだな、セラ。……そうだな」

サーフたちが飛び立ったあと、コロニー内はさらにあわただしさを増した。リミットは近い。夕方、日没とともに、避難用ドームへの物資の移送と難民の収容を始められるよう、荷物をまとめ、人員を整理しなくてはならない。

大きな機械や食糧、水といったものは早い段階で運びこまれていたが、個人が持ちこもうとする荷物の量を制限し、不必要なものを置いていかせるのは手間のかかる仕事だった。〈神〉の墜落が間近に迫っていることは公式には明らかにされていない。しかし、人々はなにかを感じていた。何が起ころうとしているのか、正確に知っているのはほんの一握りにすぎなかったが、死と破滅の足音がすぐ後ろにまで迫っているこの時に、人々は手もとの、もっとも信じられると思うものにすがりつこうとした。

それは金であったり、思い出の品であったり、友人や恋人、家族であったりした。ふたたびパニックに陥って暴れ出すものも数名出て、〈ローカパーラ〉によって取り押さえられた。おかげでパニックは拡がる前に収束し、はらはらしていたグレッグとロアルドは、鎮まった避難民たちを見て胸をなで下ろした。

〈ASURA〉たちは全員姿を消していた。都市からの避難民の目に触れて混乱を広げることを恐れたのかもしれない。グレッグも、ロアルドも、〈ローカパーラ〉や医師団の人々で彼らを知っていたものは、もはやその名前を口に出そうとはしなかった。彼らの心配をするより今はなすべきことがあり、それこそが、彼らが自分たちに望んでいることだとわかっていたからだった。それでも彼らの、ひとならぬ悪魔たちの面影は、ふとしたときに脳裏をよぎって、ひとりひとりの胸にナイフのような傷痕を残した。この傷は治らない、と誰もが思っていた。おそらく彼らの全員が、一生、この傷を背負って生きることになるのだ。

コロニーを出たシエロは、人間たちからは見えない高台の平らな岩の上に寝転がり、足を組んで頭を腕に乗せていた。サーフから指示された時間が来るか、ゲイルからのGOサインが伝達されるまで、特にやることはなかった。さまざまな記憶、ジャンクヤードでのことも含めたいろいろな場面での思い出が、束ねた紙をめくるように次々と脳裏を通り過ぎていった。

いまごろ、セラとサーフはどうしているだろう。無事に、〈EGG〉に到着しただろうか。セラはまだ元気で、——生きているだろうか。

そう考えながらしびれてきた腕を伸ばし、うんと背筋を伸ばすと、股の小物入れの中に、なじみのない感触があった。首をかしげて、さわってみる。例のアンプルは、反対側の物入れに収めてあるはずだった。

手を入れて、取り出してみた。赤と黄色と青の、派手な原色のセロファンで包まれた、妙な物体が現れた。球形の頭の下に、指でつまめるように五センチほどの棒が突きだしている。

シエロは寝転んだままそれを目の前にかざして、じっと見つめた。それを手渡されたときの情景が、はっきりと蘇ってきた……

「なあ。あんた」

その時、シエロは人間たちの右往左往をすり抜けて、どこか隠れる場所を探している途中だった。後ろから急につんと髪をつかんで引っぱられ、思わずいてっと声が出た。どんな失

礼な奴がやったのかと、自慢の編み髪を押さえながら涙目で振り向く。
「何すんだ、こら、チビ……って、おまえ、どっかで見たことある顔だな」
「チビにチビって言われたかねえな」と胸をそらしてそっくりかえったのは、やせっぽちの、泥だらけの臑をむき出しにした少年だった。
そうだ、確か、フレッドとかいったっけ。セラに親とか、子の話したちっちゃい、生意気なやつ。シエロにそんなことを思われているとも知らず、フレッドは、「あんた、あの銀色の兄ちゃんの仲間なんだろ」と先を続けた。
「アニキのこと？　あ、うん。そうだけど」
「兄ちゃん、いねえの？」そわそわしながら、フレッドはあたりを見回している。「さっきロアルドに訊いたら、兄ちゃんはあの姉ちゃんといっしょに、朝早く、大事な任務で行っちまったって。それ、ほんとかい」
「ああ、そうだよ」
「じゃ、あんたら、置いてかれたんだ」
「置いてかれてねえよ」本気でむっとして、シエロは少年を睨みつけた。生意気だ生意気だと思っていたら、こいつ、本当に生意気だ。「オレらはここで別の任務があんの。アニキにそう言われてんの。オレは置いてかれたんじゃなくて、いま作戦開始の待機時間中なの、わかったかよ、このチビっこ」
「チビって言うなっつってんだろ」フレッドは眉を逆立てたが、急にしゅんとして肩を落と

した。「そっか……。じゃ、ほんとに行っちまったんだな、兄ちゃん」
「アニキがどうかしたのかよ。なんか用事か」
「俺、死んだら、あの兄ちゃんに喰ってもらう約束してたのに」フレッドは本気で気落ちしているようだった。「なのに、なんだよ。俺になんにも言わないでどっか行くなんて、そんなのありかよ。なんかみんな、兄ちゃんも姉ちゃんももう戻ってこないみたいなこと言ってるし、そんなのねえよ。これってありかよ。なあ」
いきなりフレッドに飛びつかれ、両腕をつかんでがくがく振り回されて、シエロは目を白黒させた。
「なあチ、ええと、青い兄ちゃん、今からでも、銀色の兄ちゃんに追いつくのとかできねえのかよ。兄ちゃんと姉ちゃん、どこへ、何しに行ったんだよ。ほんとにもう、帰ってこないのかよ。どうなんだよ」がくがくシエロを振り回しながら、フレッドは泣き出すまいと顔をゆがめて、下唇を強く噛んでいる。「どうなんだってば、よう。なあ」
『すぐに帰ってくる』などと、その場しのぎの答えを返すのは簡単だったろう。だが、少年の中に見えるなにかが、シエロにそのようないい加減な答えを許さなかった。
フレッドが息を切らせて揺さぶるのをやめるまで、シエロは黙っていた。疲れはてた少年はその場にぺたりと腰を落としてしまう。小さい肩でぜいぜいと息をつくのをしばらく見守っていてから、ぽつりと、
「……戻ってこない。たぶん」

そう答えた。フレッドがはっとしたように顔を上げた。胸を撃ち抜かれたようなその顔が、たちまち紙を丸めたようにくしゃくしゃになった。
「なんだよ。ひでえよ。ひでえよ。そんなのないよ」
ひび割れた声でわめいて、少年はわっと泣き出した。青い髪の〈ASURA〉の少年の前で、地面にべったり座りこんで泣きわめいている子供を、通りすがりの大人は驚いたように横目で見たが、構っている暇はないと判断してそばを通り過ぎていった。
わんわん泣きじゃくるフレッドを、シエロは不思議な気分で見ていた。仲間のうちでは年少で、いつもチビ扱いされている自分が、これまで感じたことのない感覚だった。セラのベッドのそばで、なんとなく人間がうらやましい気持ちになったことを思い出した。少年といっしょに座りこんで、同じようにわあわあ泣きたい誘惑さえ覚えた。
「……ああ、もう。ちっくしょ。みっともねえ」気が済むまで泣くと、フレッドは自分で洟をすすって顔をあげた。ポケットをごそごそ探り、引っ張り出したものをシエロに突きつける。「じゃ、これ、あんたに渡しとくことにする」
「なんだよ、これ」
押しつけられたものを、眉をひそめてシエロは見た。
「知らねえの？　ロリポップだよ。キャンディ。菓子」
派手な色のセロファンに包まれ、球形の頭からプラスチックの細い棒が突きだしたそれは、親指と人差し指で輪を作ったほどの大きさがあった。ポケットに長い間入れられていたせい

で少々べとつき、埃がくっついていたが、フレッドはそれを、世界一の宝物だと了解しているようだった。
「レアものなんだぜ。チョコレートシロップ入り。俺のとっときのやつ。それ、あんたにやる。だから、銀色の兄ちゃんに喰ってもらうかわりに、それ、あんたが喰って」
「なんだよ、オレ、アニキの身代わりかよ。それに、菓子って」
「なあ、頼むよ」
涙と洟水だらけの顔を、ぐいとフレッドは近づけてきた。シエロは顔をそらそうとしたが、人間の子供の視線にこもった奇妙な熱に、とらえられたように動けなくなった。
「あんたしかいないんだってば。頼むよ、青い兄ちゃん、なあ」
「……わかったよ」
ぼそぼそ言うと、視線をそらしてシエロは菓子を股のポケットにつっこんだ。フレッドはほっとしたように肩の力を抜き、ふいに真面目な顔になって、立ったままシエロをまじまじと見た。シエロはうんざりして身を引いた。
「なんだよ。まだなんか用事かよ」
「——俺、あんたがうらやましいな、〈ASURA〉の兄ちゃん」ほとんど聞こえないほど小さな声で、フレッドは呟いた。「あの銀色の兄ちゃんといっしょに戦えるとか、いいよな。俺なんかほんとにチビで、いつでも危ないから下がってろとか言われて、でもあんたはちゃんと、みんなといっしょに戦いに出ていけるんだ。いいな。あんた」

「いいなって……」
最後まで言う暇を与えずに、フレッドはもぎ離すように身をひるがえし、行き来する人々の中へあっという間に駆けこんでいってしまった。
「約束だぜ！」通路のどこかから、声がわずかに反響しつつ聞こえてきた。「ちゃんと喰ってくれよな、それ！　約束だぜ！　約束、したんだからな！」
シエロはしばらくぽかんと座りこんでいた。竜巻に吹きすぎられた気分だった。手にはロリポップなる妙な菓子が残され、フレッドの姿は、人波の向こうに完全に見えなくなってしまった……
いま、またその菓子を指先につまんでいた。コロニーの喧噪は、もう遠く聞こえない。球形に棒がくっついたなじみのない形に、意味もわからず、胸が痛んだ。
「……なんだっての。もう」シエロは呟いた。なぜだか、泣きそうになっていた。「うらやましいのはこっちだっての。セラに親とか、子供の話して――セラのこと、慰めてあげられて――あんたらの方が――どんだけ」
セロファンを剝いて、口に入れる。ミルクとなにかのフレーバーが合わさった、ねっとりした舌触りと濃い甘さが広がった。
「……あまー」口から棒を突きだしたまま、もごもごとシエロは呟いた。

コロニーの喧噪から出て、アルジラは、すこし離れた廃墟の縁に腰掛け、ちょろちょろと動き回る人間たちを見下ろしていた。
感覚を開けば、この距離からでもひとりひとりの顔を簡単にみわけられることは承知していた。しかし、アルジラはそれをせず、人間たちを無名の蠢く影の中にひとまとめにしておいた。もし見分けようとしたら、あるひとりの男の顔を、無意識に探し出そうとしている自分に気づくことになるとわかっていたからだった……
「本当に、そんなことをやるつもりなのか」
サーフから〈ASURA〉たちの自己分解と、それによって形成されるであろう地球規模の量子ネットワークについて聞かされたとき、ロアルドは奇妙な反応をした。アルジラは彼がもっとストレートに喜びを表すと思っていた。だが、彼は顔をしかめ、沈んだまなざしで集まった四人の〈ASURA〉たちを見回した。
「駄目だ。そんなことはさせられんよ、サーフ」
「なぜ駄目なんだ。こうしないと、たぶん、あんたたちは次元震のあとの天災を生きのびられない。それに、俺たち〈ASURA〉が、しょせん人喰いの悪魔だということは、あんたがいちばんよく知っているはずだ。〈協会〉がなくなり、アートマ兵もいなくなった今、最後の問題である〈神〉が片付けば、兵器である俺たちは用済みになる。無用の兵器に、人間を喰わせてまで飼っておく必要はあるまい。俺は、あんたたちにも、人喰い悪魔(ASURA)から解放される道を差しだしているだけなんだが」

「それは、そうなんだが……ああ——ええい、もう」

ロアルドはやたらと頭をかき回し、眼鏡を外して拭き、ポケットに入れかけて、はっとしてまたかけ直した。テーブルを囲んだ四人の〈ASURA〉を順繰りに見渡す。

「……矛盾した話だし、人間の勝手なたわごとだと思ってくれていいが」また手を髪へもっていきかけてやめ、ロアルドは薄い水色の目をまたたいた。「俺は、あんたたちにいなくなってほしくないんだ。確かに、生存のためにヒトタンパクを必要とするあんたたちに、いられると困る部分があるのは認める。だが、あんたたちが人間のために自己消失の危険をおかしてまで、そんなものに変身しちまうというのは——なんというか」

しばらく視線を上にやって、天井に必要な言葉が書いてあるとでもいうようにあちこちさまよわせていたが、思いきったように前を向いて身を乗り出した。

「間違っている気がするんだ。そうだ、間違っている。あんたたちは悪魔だ。そして、俺たちは人間だ。これはすべて人間の引き起こした問題であって、悪魔であるあんたたちが命をかけてまで関わり合ってくる問題じゃない。〈協会〉の消えた今、あんたたちを狙おうとする相手もいない。なのになぜ、そうまでして、俺たちを守ろうとする」

「セラのためだよ。もちろん」シエロが即答した。「セラはあんたたちを守ろうとしてる。でもって、セラは俺たちの仲間だ。だから俺たちも、セラが守ろうとしているものを守る。おわかり？」

「セラの存在があるのは当然だが」ゲイルが引き取って、続けた。「われわれのリーダーが、

おまえたち人間をこのまま放置できない、と考えていることにもよる。おまえたちは弱い、人間。われわれ〈ASURA〉と比較して、あまりにもろい生き物だ。そのような弱い生き物が逆境によって死滅するのは、ある意味自然の理ではある。だが――ロアルドの対面に座っているサーフにちらりと目をやり、――「われわれ〈エンブリオン〉のリーダーは、そのような理を是認しない。どんな弱い生き物であっても、生きる意志を持っている以上、全力でもって生かし続ける必要がある、そう考えている。われわれは一度〈協会〉に対して同盟を結び、戦列を組んで戦った。一度結ばれた協定は、いずれかによって放棄、あるいは破棄されないかぎり、無期限に有効であると私は認識している。その意味において〈ローカパーラ〉は、いまだに〈エンブリオン〉の同盟者である。同盟した集団を保護しようとするのは、理屈にかなった行為だ」

「理屈の上ではそうかもしれないが……ああ、なんと言えばいいのかな」

いまだにロアルドは納得できないように首を振った。

「その……シエロやアルジラはどうなんだ。まだ子供だし、女じゃないか。人間の女や子供を守るべきなら、あんたたちだって守られるべきだろう。女子供を犠牲にしてのうのうとしていられるほど、まだこっちは腐っちゃいないんだ」

「あら」アルジラは険悪な声を出した。「初めにあたしが目を覚ましたときからさんざん悪魔扱いしてくれたのは、誰だったかしらね」

ロアルドは言葉に詰まった。それから、疲れたように椅子に寄りかかった。痩せた身体が

シャツの内側に向かって縮んでいくように見えた。

「すまん」と彼は一言呟いた。「あのころのことに関してはどんな弁解もない。俺たちはみんな、あんたたちを兵器としか見ていなかった。ひとりひとりの顔じゃなく、全員を、『悪魔（ASURA）』というたったひとつの顔でしか見ていなかったんだ。しかし、今は」

　テーブルを見回したロアルドの目がまぶしそうに細まった。

「今は、あんたたちひとりひとりの顔が俺にも見える。あんたたちは悪魔だ、だが同時に人間でもある。わかるか？　俺たちはあんたたちを、もう道具だなんて思えないんだよ。サーフはその必要もないのに、〈アルダー〉から俺たちを救ってくれた。サーフが消滅したとき、あんたたちが悲しむのを俺は見た。セラのために奔走するあんたたちも、見た。サーフが復活し、ヒートが死んだとき、彼が苦悩の淵に沈むのも見てきた」

　サーフは頭をわずかに傾けたまま、動かなかった。

「そんな風にふるまう相手を、いつまでも兵器や道具扱いできると思うか？　少なくとも俺にとって、もうあんたたちは人間なんだ。悪魔だが、同時に人間なんだ。俺たちが守られるべきなら、あんたたちだって守られていいはずなんだ」

「うちのリーダーの非論理性が、どうやらおまえにも伝染したようだな」冷ややかにゲイルは言った。「いずれにせよ、われわれはもう決定した。おまえに話したのは、同盟者として、情報を共有しておく必要があると考えたからだ。とにかくおまえたち人間は、自らの身を守ることに集中しろ。それ以外にできることは、おまえたちにはない」

「ああ、どうせ、そうだろうよ」むくれたようにロアルドは胸の上で腕を組んだ。「俺たちは無力でちっぽけな人間にすぎない。だが、これくらいは言わせてくれ。あんたたちと知り合えてよかった。ただの兵器じゃないことを、思い知らせてくれてよかつた。できればもっと別なとき、平和な時代に、あんたたちと知り合ってみたかった」

アルジラの方を向いて、片方の眉をつり上げて見せた。

「あんたは美人だな、アルジラ。俺の知ってたアナベラも美人だったが、あんたはその上を行くよ。いい女だ。もし、違う場所で、違う出会い方をしていれば、勇気を出してディナーにでも誘ってみたかったと思う。いい芝居か、映画の一つも観たあとで、洒落たレストランに入って、シェフのおすすめコースでもな」

「な、何よ、いきなり」思いもしなかったことを言われて、アルジラはわけもわからず頬に血が上るのを感じた。「おすすめコース？　わけのわからないこと言わないで。からかうなら、シエロの方にしてよ。あたしに持ってくるのはやめて」

「あっ、ひでえ。そうやってなんでもオレに押しつけるのやめろよ、アルジラ」

憤然とシエロが拳を振る。サーフが苦笑して会談の終わりを告げ、席を立つと、〈ASURA〉たちも続いて席を離れた。

部屋を出ようとするとき、耐えきれなくなって、アルジラはそっと振り向いてみた。ロアルドはまだテーブルに着いたまま肘をつき、両腕に顔を埋めていた。ぴくりとも動かず、呼吸もしていないように見えた——押し殺した唸り声のようなものが耳に届いた。アルジラは

彼が泣いているのだと悟った……
　高い廃墟の上で、風に吹かれながら、アルジラはその時のことを思い出していた。妙な気持ちだった。反射的に相手に駆け寄り、無神経なことを言ったと謝りたい、せっかく喜ばせようとしてくれたのに、ひどい言葉で応じてすまない——そういう気がしたのだ。
　あのテーブルから遠く離れたここでも、その気持ちはまだ続いていた。
「あんたは美人だな、だって」小さく呟くと、心臓の鼓動が少し早まった気がした。「ディナーだなんて。馬鹿みたい。あたしがあのニューヨークの、何も考えてない人間の女のひとりだとでも思ってるの？　とんでもないわ、ねえ、ジナーナ」
　空を仰ぐ。今では夜間でさえ、昼間の照り返しがいまだに残るかのように、地平線の縁がわずかに明るい。空全体がなんとなくあの黄色い空のぎらつきを後ろに隠しているかに見え、薄い紺色の覆いをはぎ取れば、たちまちあの巨大なむき出された眼球めいた、黒い太陽とぎらつく黄色い天が現れるように感じる。
「ねえジナーナ、あの人間の男、あたしのこと『いい女』だなんて言ったのよ。——ほんとに、馬鹿みたい……」
　頭の中に、かつて見たニューヨークの賑わいを思い描く。軽やかなドレスを着て、白いクロスの敷かれたテーブルで食事を楽しんでいた男女。もしかしたら少し運命が違えば、あのように、皆で連れ立って街を歩くこともできただろうか？
「あいつ、あなたのことはなんて言うかしらね、ジナーナ。きっと、とっても美人だって言

うわ。セラに教えてもらった『お化粧』をして、みんないっしょに街に繰り出すの。そうね、あの男も、仲間に入れてあげてもいいわ。荷物持ちにね」くすりと笑う。「あんな男にはそれくらいがぴったり……ねえジナーナ、これを使ったら、またあなたに会えるのかしら。リーダーが言ってた虚無の岸辺ってところで、もう一度、あなたに会える？」

胸のポケットをそっと確かめ、中に入ったアンプルの堅い感触をさぐり当てる。アルジラは空を見つめ続けた。乾いた目が痛み、瞼を閉じずにはいられなくなるまで。

ゲイルもまたコロニーのざわめきを逃れて、低地を望む崖の突端に立ち、目を閉じて、風の音に耳を澄ましていた。

ここからでも、自分の構築した最小限のシステムが、滞りなく活動していることは確認できた。少なくとも空気清浄システムと、水のリサイクルシステムは問題ない。食糧の計画的な消費は人間の手にまかせるしかないが、ロアルドたちがうまくやるだろう。

〈神〉のクラッシュ回避後、人間たちが新たな生活を始めるのに必要な、クローン再生システムと食糧生産計画、太陽電池の再構築と配電に関するデータは、チップに収めて機械類とともに注意深くしまわれている。使用するときがくればきちんと起動し、人類の存続に必要なだけの物資とエネルギーを生産してくれるだろう。

思い残すことは何もなかった。ゲイルはサーフの参謀型（ビシコップ）であり、彼の命令を、最後の一つ

を残してすべて果たし終えた今、信じられないほど心は安らかだった。
ふと目を開ける。遠い風の響きに、かすかなすすり泣きのようなものが聞こえたかと思ったのだ。どこか、聞き覚えのある声が。
「エンジェル？」
これもまた不合理だ。理屈に合わない。そう感じながらも、ゲイルは闇に向かって呼びかけた。
「エンジェル、あなたか？　そこにいるのか？」
応えはない。風の音は強まり、すすり泣きめいた音はかき消されてしまった。なおもしばらく耳を澄ましていたゲイルは、ジャケットの懐から、一枚のチップを取り出した。風にフードを吹かれながら、じっと見つめる。十字型に割れ、光を失った〈ルシファー〉のチップは、やはり沈黙したままだった。
「エンジェル」
チップに向かって、ゲイルは呼びかけた。チップを通して、どこか遠い世界、どこでも、彼／彼女（ヒー・シー）が存在しているかもしれない場所に向かって、話しかけた。
「もし、そこにいるのなら、私といっしょに来る気はないか。私はこれから旅に出る……長く、遠い旅に。道連れがあるというのも、いいものかもしれない。長いあいだあなたは孤独だった、エンジェル、それは、あなたが周囲を見ようとせず、心を開こうとしなかったからだ。私もかつてはそうだった、しかし、今は違う」

割れたチップを夜空にさしあげる。わずかな光を受けて、チップはほのかに輝いた。
「私はあなたに世界を見せたい。あなたの娘が守った世界を。彼女が愛した、人間を——」
風がまた強く吹き、ゲイルの独言を、はるか彼方へと運んでいった。

4

ジェット機は順調に航路を進んだ。生命維持装置には耐衝撃処理も施されていたが、中にいる人物の貴重さと衰弱の度合いを考えると危険をおかすわけにはいかない。自律型オートパイロットは前方に気流の変化や急激な気圧の落ちこみなどを感知すると、乗客であるサーフに承認を求めてから、別の航路を設定し、予定時刻に間に合うべく速度を上げた——あくまで生命維持装置に影響をもたらさない範囲で、慎重に。
サーフにはほとんどやることがなかった。ジェット機には遮光処理が施され、窓はすべて液晶パネルに換装されている。さまざまな映像プログラムや、地上の様子を中継するカメラも装備されているはずだったが、〈ルシファー〉によってデータをいったん破壊されたあと、必要最小限の巡航プログラムを再入力されたのみのフライトシステムは、飛行に関すること以外の機能をいっさいそぎ落とされていた。
セラは装置の中で眠っている。目的地に着いたあとのことを考えると、彼女に話しかけた

りして無駄に体力を消耗させるべきではなかった。
そこでサーフはただ座り、目を閉じて、直接的な視覚以外の感覚をのばして、ジェット機の外殻を通し、矢のように通り過ぎていく地上の様子を飽かず眺め入った。
どこを見ても荒廃と破滅、死、そして無があった。たまに目に入るドーム都市の残骸は、もとは形を保っていたのかもしれないが、今ではなにか巨大なハンマーで一撃されたように完全に潰れていた。広大な岩と砂の荒地を、堕ちゆく〈神〉の光と風だけがむなしく渡っている。おそらく、〈ルシファー〉の通過が、ただでさえ死にかけていた都市にとどめをさしたのだろう。あの翼を持つ童子型の端末は、ハードウェア上のみならず人間の脳というウェットウェア上の情報さえ同化する。まだ人間の生き残りがいたとしても、〈ルシファー〉に襲われ、情報と精神のすべてを吸い取られて、残った脱け殻は昇る朝日がたちまち水晶の塊に変える。それでなにもかもがおしまいだ。喪われた生命の数を想像しようとして、サーフは暗い気持ちになった。
ニューヨークは〈ザ・シティ〉につぐ大都市だったが、それでも二万人たらずの市民を収容していただけだった。それが今、地下コロニー住民を加えても、生き残っているのは一万人にも満たない。もし〈神〉から解放され、そのあとに続く災厄を乗り越え得たとしても、たったそれだけの種子が、ふたたびこの地上全体にひろがるほど殖えることなどあるのだろうか？
以前はまだ残っていた〈EGG〉自閉前の廃墟すら、いまは喪われていた。ただ平坦に広

がるあばただらけの荒地の上を、ジェット機は悠々と飛びこえていく。それがなにか、ひどく罪深いことのように思えた。
　自分たちはいずれにせよ、他人の屍体を踏みつけて生きている悪魔(ASURA)なのだと、サーフは自分に言い聞かせた。この上ひとり増えようが百万人増えようが、同じことではないか？　命は命に変わりはない。それでもサーフは、自分たちがもし、〈協会〉に従い、その支配を受け入れることを選んでいたら、このような荒廃は起こらなかったのではないかという恐れにとらわれずにいられなかった。〈ザ・シティ〉の消滅は起こらず、〈ルシファー〉も――。
　腹の底が怒ったように熱くなった。サーフは苦笑して、「そうだな」と呟いた。
　そのようなことは、ヒートが許さなかったに違いない。〈協会〉に属そうが属すまいが、ヒートは必ずかつての仲間たちを殺しにかかり、その罪業(カルマ)すべてをわが身ひとつに担おうとしただろう。悪魔になるのは俺ひとりでいい、と彼は言った。あくまで人間であろうとした仲間たちの心を思いやり、これ以上、人を喰らうという苦痛を味わわなくてもすむように、自分の手で眠らせようとした彼だ。
　以前ジャンクヤードでも彼は、他トライブの構成員に堕ちるサーフを目にするくらいならこの手で殺す、と宣言していた。その通りのことを、ここでもやるだけだろう。彼は誰にも膝を屈せず、サーフにもそれを許さない。あくまで自分の足で立ち、自らの意志でのみ行動することを、彼は求める。
　サーフが復活したとき、あれだけ強力だった〈シヴァ〉を捨てて、〈アグニ〉で彼は立ち

向かってきた。〈協会〉に与えられた借り物の力でサーフと相対することを、彼はついによしとしなかったのだ。
　おぼろげに思い出す記憶の中で、吠え猛る〈アグニ〉の声は、それまで耳にしたこともない歓喜に満ちていた。はじめて全力をもって立ち合える相手を得て、待望した戦いに臨む戦士の雄叫び。もしサーフが正気の時に戦いを挑んだところで、本気を出すわけはないと、彼は知っていたのだろう。復活直後の〈餓え〉に駆りたてられ、サーフの意志——理性や弱気に邪魔されない、純粋な本能と闘志の塊となった〈ヴァルナ〉こそ、彼が求めてやまない唯一の敵手だったのだ。
　そして、〈ヴァルナ〉は勝ち、〈アグニ〉は負けた。もとから傷ついていた、という点もありはしたろうが、それを弱点と数えることを、ヒートはけっして許さなかったろう。負傷しているからといって手加減すれば、その矜恃を傷つけるだけだ。どれほど不利であろうが、全力で戦い、負けた、それがすべてだと、ヒートなら言うはずだ。傷ついていてなお勝つのが真の強者だ、と。
　そしてヒートが託した力は新しいアートマとなった——〈ヴィシュヌ〉。左右の手にそれぞれアートマを呼び出してみる。右の手に氷結、左の手には火焔。いつも〈アグニ〉の手に見ていた炎と鉤爪が、自分の手のひらで蠢くのは妙な感触だった。
　爪を軽く触れあわせると、氷と火焔が反応して火花を散らし、ジェット機がびりびりと振動した。あわててアートマを収める。オートパイロットを確認して、異常がないのを確かめ

た。息をつき、〈ヴィシュヌ〉を消したあとの指を見つめた。

はじめて〈ASURA〉ボディに入ったとき、ジャンクヤード内に比べて飛躍的に増大したアートマのパワーに一驚したものだったが、〈ヴィシュヌ〉の力は、その〈ヴァルナ〉を超え、〈アグニ〉を、そしておそらく〈シヴァ〉をも、超越している。おまえに力をやる、とヒートは言った。これがその力なら、それは、なんのために使えというのだろう。もはや〈協会〉はなく、〈ルシファー〉も斃れた。戦うべき相手はこの地上にはもういない。〈神〉なきあと、自分たちがまだ存在しているかどうかもわからない。いったいなんのために、この巨大な力が自分に託されたのだ？……

さまざまなことを思い巡らしているうちに、どうやら眠ってしまったらしかった。気圧の変化を感じて、サーフは目を開いた。

まだ到着する時間ではないはずだ。パイロットシートに手をつき、高度計の表示を確認する。確実に下がっていた。フライトナビを表示させてみると、目的地とポイントされたコロラド州北西部のある一点が、赤くまたたいている。現在地を示す緑の輝点は、目測でそこよりまだ数十キロは手前だ。

「フライトシステム」音声入力のタッチパネルに触れて、サーフは音声ナビゲーションを呼び出した。「高度が下がっている。理由は？　機体の不調か、それとも気流の変化か」

『前方に強力な磁気嵐が発生している地域があります』音楽的な女声が答えた。『これ以上進行しますと、磁気嵐の影響圏内に突入します。圏内ではフライトシステムの不調、および

安全な飛行に不可欠な電子機器が機能不全を起こす可能性があります。当機はお客さまの安全確保のため、その圏内に突入する前に、緊急着陸いたします。座席に座って、シートベルトをお締めくださいませ。ありがとうございました』
あきらめて、サーフは指を離した。やはり、出発前のデータより、〈EGG〉による異常は拡大しているらしい。時刻を確認する。午後七時。予定より三時間早い。
遅くなるよりはましだ、と気を取り直した。これは時間との勝負なのだ。〈神〉の墜落は刻々と迫っている。そして、セラの命のリミットも。どちらかが起きるよりも先に〈EGG〉にたどり着き、作戦を遂行しなければ、すべてが水の泡になる。
『当機は安全のため、緊急着陸いたします。乗客のみなさまは座席について、シートベルトをお締めください。ご協力に感謝いたします。ありがとうございました』
ひとりでしゃべり続ける音声ナビを放っておいて、サーフはセラのいる生命維持装置に歩み寄った。カプセルがしっかり固定されているかどうかを確かめ、緩衝機構が緊急着陸の衝撃に耐えられるかどうか考える。着陸場所がどのような荒れ方をしているかわからないので、かなり周到な処置をしてあるはずだ。
しだいに近づいてくる地面は、岩だらけの、どう見ても平坦とは呼べないものだった。しかしフライトシステムがあえてこの場所を選んだということは、近隣にはこれ以上ましな着陸場所が存在しないのだろう。
サーフは生命維持装置のわきに腰を落とし、両腕でしっかりとカプセルを支えた。セラの

身体はストラップで固定されている。装置自体の固定が外れて転がったりしないかぎり、どんなひどい着陸でも、耐えられるはずだ。

『シートベルトをお締めください。ご協力に感謝いたします。ありがとうござ』

いきなり音声ナビの声が雑音に変わり、プツンと途絶えた。電磁嵐の影響が届き始めたらしい。急にがくっと高度が下がり、はらわたが持ち上がるような感じがした。機体が左右にふらつき、なんとか持ち直す。

足を踏んばり、いつ、どんな衝撃が襲ってきてもいいように身構える。地面が急速に近づいてくるのがわかった。目を閉じ、接近する大地に全神経を集中する。あと百メートル、五十メートル、十メートル……

着地。

膝が跳ね上がり、顎にしたたかぶつかった。歯ががたがた鳴るような上下動を繰り返しながら岩だらけの大地をジェット機は走り、がくっと傾いた。片方の翼からきしるような音が上がり、そちら側の着陸脚(ランディング・ギア)が損傷したことをサーフは悟った。脚を失った翼を中心にして機体は大きく円を描き、ガタガタと腹をこすりながらさらに前進した。

サーフは歯を食いしばり、生命維持装置にしがみついた。機械に表示されているはずのバイタルサインを確かめる。スクリーンが真暗なのに気づいてぎょっとし、フライトシステムと同じく、生命維持装置も磁気嵐の影響で停止しただけだと判断する。カプセル越しのセラはまだ、少なくとも呼吸し、苦しげにまぶたを動かしている。

缶の中に入れられて乱暴に振り回されているような状態がさらに数十秒続いた。最後に、前方で何かにぶつかる激しい衝撃があり、とたんに、静かになった。サーフはカプセルからずり落ちるように手を離した。飛行機は停止していた。どこかからかすかに、シュウシュウという空気の漏れるような音がしている。

「フライトシステム？」

応答はなかった。サーフはそろそろと立ち上がり、傾いた機内を壁に手をつきながら移動した。搭乗口を手動で操作して、細く扉を開ける。

砂混じりの突風が吹きこんできて、前髪を乱した。口に飛びこんできた小石を吐き出し、睫に当たった砂粒を払い落とす。機体は大きく右に傾いた姿勢で岩盤に衝突しており、地面までは数メートルの距離がある。サーフならひと跳びで降りられるが、セラをカプセルに入れたまま下ろすのは、とうてい無理だ。

いったん機内に戻り、こういう事態のために積みこまれた、セラの防護服をハッチから引っぱり出す。都市民がどうしてもドーム外に出る必要があるときに身につける、陽光を遮断する分厚いスーツだ。〈ローカパーラ〉の技術者の手によって、小型の酸素ボンベと吸入器が組みこまれている。ひどく重いので、健康なときのセラでもこんなものを着ていては歩くこともできないだろうが、今のセラはどちらにしろ、自力で立つことすらできないのだから関係ない。

「……サーフ……？」カプセルの蓋をあけると、セラがうっすらと目を開いた。「到着、し

た、の……？」
「いや、まだだ。磁気嵐のおかげで、飛行機が目標地点の手前で緊急着陸した。ここからは歩きになる。俺が連れて行ってやるから、心配するな」
ストラップを手早く外し、酸素マスクをとる。急に冷たい空気を吸ったためにセラは激しく咳きこみ、薄い胸が破れてしまうのではないかと思わせた。
「ちょっと待て」と短く言い、再度酸素マスクを引きよせてかぶせる。セラが喘ぐように呼吸を繰り返しているあいだに、上下一体型になっている防護服を、足先からすばやく着せていく。ブーツの縁から出ている細い足が、すでに半分透明化しているのに気づいて、ぎくりとした。見ている間にもそれがどんどん進行していくような気がして恐ろしくなり、急いでズボンをかぶせ、上着を寄せて、前をジッパーとベルクロテープで二重に止める。フードをかぶせ、内蔵した酸素吸入器のスイッチを入れてから、酸素マスクを外させ、すぐに防護服のマスクに付け替えてやる。
「どうだ、具合は。寒くはないか」
——大丈夫。
声ではなく、思念で返事が返ってきた。
——むしろ暑いくらいだわ。ねえ、この服、なんだかへんな臭いがするんだけど。
「臭いに文句が言えるくらいなら大丈夫だな」強いてサーフは笑みを浮かべた。「だが、辛くなったらすぐに言うんだぞ、いいな。嘘はつかないと約束したのを忘れるな」

——忘れてないわよ。
少しすねたようにセラは言った。同時に口をとがらせたシエロの顔を送りつけてくる。サーフは声を立てて笑った。
「それならいい。さあ、飛行機を降りるぞ。多少衝撃がある。しっかりつかまれ」
分厚いフードが頷くように動き、サーフの肩にもたれかかった。遮光性を第一にした防護服は、ほとんど中身が見えない。真っ黒な重い砂袋めいたスーツをサーフは横抱きにし、搭乗口へ運んで、扉をいっぱいに開けた。どっと風が吹きこみ、細かい砂や石粒がぱらぱらと顔に当たる。
「揺れるぞ。少し我慢しろ」
囁いて、しっかりセラを抱え直すと、地面までの距離を一気に跳躍した。できるだけ静かに着地したつもりだったが、地面についた衝撃で、セラの呼吸が乱れるのがわかった。また咳が出そうになっているのを、むりに抑えている。
「我慢するな。出そうになったらすればいい」スーツ越しにわずかに見える口もとにむかって、サーフは叱るように言った。「今から無理をしていると、〈EGG〉に到着したとき、保たないぞ」
——わかったわ、リーダー。言うとおりにする。
セラは力を抜き、サーフに抱き上げられるままになった。腕にかかる重量は重かったが、それはセラの重さではなく、ほとんどは防護服と、組みこまれた酸素吸入器の重さだ。吹け

ば飛ぶようなセラの体重は、今では十歳の子供にも劣る。ジャンクヤードで初めて抱き上げたときのセラの軽さや小ささを思い出し、サーフは暗澹たる気持ちになった。あの時より、今のほうがよっぽど重いとは、なんという皮肉だろう。

——行きましょう、サーフ。

胸によせた頭から、思念の声が伝わってきた。

——もう落ちついたわ。本当よ。だから、急ぎましょう。時間がない。

「ああ、そうだな。行こう」

役にも立たない追憶を払いのけ、サーフは防護服にくるまれたセラを抱いて、入り組んだ岩と砂の小径に入りこんでいった。

峡谷は深く、迷路のようだった。いたるところに深い谷やとがった岩山があり、袋小路になった割れ目があった。踏みこめばたちまち呑みこまれてしまう、流砂もところどころで口を開けていた。

セラの体力が許すかぎりの速さで、サーフは進んだ。行く手を崖に塞がれれば飛びこえ、立ちふさがる岩壁は〈ヴィシュヌ〉の力で吹き飛ばした。流砂は氷でふさいで渡り、人を迷わせる岩道は炎で溶かして一気に途を開いた。

しかし、そうした行程のひとつひとつが、確実にセラの残り少ない生命を削り取っている

のも確かだった。気丈に耐えているが、彼女が感じている苦痛は、もう隠すこともできずにサーフの精神内にも漏れ出している。息をするたびに胸が焼けつき、背骨が痛む。一足サーフが進むわずかな振動が、全身の骨をゆさぶるように感じられる。防護服の熱さと重さが、もろくなった皮膚をこすってひりつくような痛みを呼ぶ。

——ごめんなさい。サーフにまでこんな思いをさせて。

思念の声ばかりがしっかりしているのが悲しかった。

「気にするな」とサーフはあえて気軽に答えた。「おかげでおまえの状態が手に取るようにわかる。いちいち訊くより早い。それよりも、俺たちの目的のことを考えていろ」

——ええ……。

地図はなく、周囲は闇の中にもさらに深い影に充たされている。通常の人間なら、目的地に向かうどころか、どちらへ向いて進むべきかもわからないだろうが、サーフは〈ASURA〉だった。電磁波、それも、これだけ離れたところからでも飛行機のシステムを狂わせるほどの強烈な電磁嵐の所在は、闇夜に焚かれる篝火のように目立った。

あの電磁波の渦の中心に、〈EGG〉がある。確信ではなく、サーフにとって、それは単なる事実だった。セラにとっても、おそらく。

——呼んでいるわ。

サーフの腕に揺られながら、ぽつりとセラが呟いた。

——〈EGG〉が、呼んでる……。

一時間ほど進んだところで、あたりの情景に変化が現れ始めた。赤色砂岩と褐色の砂でおおわれていた大地が、しだいに透き通り、虹色にきらめくガラス板を積みあげたような、幻想的な光景に覆われはじめた。地面から突き出た岩はきらきらと輝く虹色の結晶になり、砂はガラスを砕いたような透明な粒になって自ら光を発している。探索機（プローブ）が送ってきたとおりの光景だ——だが、それより範囲が広がっている。

そろそろ、人間の姿を保っているのが難しくなってきた。アートマ態をとれば、電磁波に対する耐性は格段に向上する。前方から押し寄せてくる狂乱するデータと溢れ出す電子の嵐は、ほとんど物質的な圧力と感じられるほどに高まっていた。

サーフはいったんセラを下ろし、〈ヴィシュヌ〉を展開した。蒼白い変身光にあたりの結晶が燃え、ゆらめく。出現した真鍮と黄金の〈ヴィシュヌ〉は、氷と炎の鉤爪を注意深くそれぞれの手に収めると、ふたたび、かなり小さく感じられるようになったセラをかかえて、大股に道を急ぎはじめた。

——サーフ、あそこ！

目もくらむような水晶の城壁のむこうに、セラが指し示したものがあった。〈協会〉の、かつての隠し施設。

探査機が送ってきた映像と比べると、かなり形が変わっていた。周囲の結晶状のものが成長し、もとの建築物を呑みこみつつある。人工的なコンクリートや鉄筋の直線は透明な結晶の規則正しい線と面とにとって代わられ、あちこちに、びっしりと小さな結晶に覆われて花

のようになった、もと人間だったかもしれないものが落ちていた。
それを踏んで歩き抜けると、足の下で結晶が砕け、虹色の塵が立ちのぼった。セラがかぼそい悲鳴を上げるのが聞こえた。
『気にするな、セラ』〈ヴィシュヌ〉の声でサーフは言った。『あれはもう生きてはいない。何も感じない、死体でさえない、ただの変性した物質だ。踏まれたところでどうということはない』
——わかってるわ、わかってる——けど、
セラは必死に自分を抑えようとしているが、思念からは隠しようもない恐怖と罪悪感がこぼれだしていた。
——これをやってしまったのが、わたしなの？　こんな事態を引き起こしたのが？　わたしさえもっとしっかりしていれば、この人たちも、死なずにすんだの……？
『そういう考え方をするものじゃない』サーフは叱りつけた。『さあ、それよりも、急ぐぞ。ここを抜ければ、すぐに〈ＥＧＧ〉が見えてくる』
〈ヴィシュヌ〉の巨大な脚の下で、かつて生物だったものと無生物だったものが砂となって混じりあい、軋み、呻き声を上げた。爪をかけるともろくなった結晶が崩れ、ざらざらと宝石の川のように流れ落ちた。
セラの防護服に付着した結晶のかけらがいつのまにか成長し、小さな群体(クラスター)の花を咲かせている。手で払うとあっさり砕け、ぱらぱらとこぼれ落ちる。だがしばらくするとふたたび別

の場所に、もっとたくさんの、小さな水晶の花が開いている。気がつけば〈ヴィシュヌ〉の金の装甲にも、真鍮色の肌にも、結晶がとりついて、動くたびにパキパキと音を立てている。

とりつく結晶を払いのけ、払いのけしながら進む彼らの姿は、虹色の花びらを撒きながら歩く、奇妙な精霊の二人連れのように見えた。かつて、原住民によって聖地と見なされていたこの大峡谷（グランドキャニオン）に棲む、魁偉な姿の神霊。

だがこの地にもはや人はなく、精霊は去り、生命は絶えた。いるのはただ狂える〈神（ASURA）〉と、その指先であり目である〈神卵〉、そして、それを目指して歩き続ける、人工の悪魔と、かつて〈女神〉だった少女だけだ。

足もとで輝く砂が崩れる。最後の斜面をすべり降り、〈ヴィシュヌ〉はようやく施設跡をすべて踏み越えたことに気がついた。

目の前には、自ら光を発して照り輝く、結晶に覆われた道がある。そのむこうに、ひときわ明るく、まばゆく、光を発する物体が鎮座している。〈ＥＧＧ〉。神の卵。人の手によって作られた、狂気の〈神〉と語るための道具。

『もうすぐ着くぞ、セラ。あと少しだ』

自分自身を励ますように告げて、サーフはあと数百メートルほどの距離を踏破すべく、一歩足を踏み出そうとした。

その瞬間、信じられない感覚が身体を貫いた。呻き声をあげてのけぞった〈ヴィシュヌ〉の腕から、セラを包んだ防護服がこぼれ落ち、地面に落ちて虹色の埃をたてる。

——サーフ……？
自分が投げだされた苦痛よりも、セラは苦しむサーフのほうに意識を向けた。
——サーフ、どうしたの、サーフ。サーフ！
返事をすることができなかった。〈ヴィシュヌ〉が溶けるように体内に引っこんでいく。人間の姿にもどったサーフは、輝く地面に頬を押しつけ、獣のような声をもらした。混乱する思考の中、たった一つの恐ろしい言葉が、燃える指で書きつけられたように浮かんだ。
〈餓え〉。
まさか。そんなはずはない。万が一にもこんなことにならないように、出発前に、死んだ市民やコロニーの人々の肉体をもらい受け、十分に喰らってきたはずだった。
ロアルドやグレッグは、ニューヨークにも備蓄されていた加工済みのヒトタンパク使用レーションを食べるように勧めてくれたが、サーフは拒否した。自分が人喰いであることから、目をそむけたくなかった。
あのビスケット状のレーションを受け入れることで、〈協会〉や、彼らの欺瞞すべてでも受け入れるように感じられて、手を触れるのも嫌だった。念のためにジェット機にいくらかレーションを積みこむように忠告されたときにも、拒否した。その代わりに、焼いて埋められる前の市民やコロニーの人々の死体を、これ以上は必要ないというほどたっぷり喰らってきたというのに、どうして。
〈EGG〉への接近は、〈ASURA〉にとっても予想以上に強い負担を強いるものだった

のかもしれない。理論上、エネルギー補給を必要としないパーフェクト・アスラが、唯一必要とするのが、定期的なヒトタンパクの摂取だ。
しかしそれも、人工のアートマ兵に比べれば、はるかに低い頻度、少しの量で済むはずだった。あれだけ〈喰った〉あとで、こんな短時間の間に、また〈餓え〉に襲われるなど、あり得ない――。
だが、そのあり得ないことが現に起こっている。サーフは起き上がろうとして失敗し、手足に、この世界での最初の〈餓え〉に襲われたあの日と同じ、ひび割れのような緑色の光が、脈打ちながら広がっていくのを見た。
スーツや皮膚が黒ずみ、燃える紙くずのように縮んでいく。溶岩を流しこまれたような頭の中で、たった一つの欲望が割れんばかりの声でせき立てる。喰らえ。喰らえ。おのれの身を保つために、ヒトを喰らえ。
だが、ここにそんなものはない。周囲はきらめく結晶体の森。あたり数百キロにわたって、生死を問わず、人間など一人もいない。かつていたものはすべて、この水晶の森の中に呑みこまれている。
あと少しなのに、と炎で炙られるような脳髄の中で、わずかに残った理性が叫んでいた。あと少しなのに、あとたった数百メートルのことでしかないのに、たったそれだけの距離を渡る力がないために、何もかもが無駄になるのか。すべては終わってしまうのか。
〈神〉が堕ち、人も、世界も堕ちる。何もかもを巻きこんで、狂える〈神〉が、どこにある

ともわからぬ、奈落の深淵へ堕ちていく。止める力があるのはただ自分たちだけ、自分と、あの少女だけだというのに……

——サーフ。

焦げつく頭に、冷たい清流のような声が流れこんできた。

のたうちまわる身体が、一瞬動きを止めた。糸で引かれるように、サーフは頭をあげてそちらを見た。黒い防護服に包まれた少女が、重いフードの分厚い布地の下から、澄んだ瞳でこちらを見ていた。

——わたしを、喰らいなさい、サーフ。

馬鹿な、と理性が叫んだ。

そんなことはできない、セラ。おまえを喰らうなどと——

——わたしはもう、〈EGG〉にたどりつくまで保たない。わかるの。ほら。

正確に計測され、整理されたデータが視界のきらめきの中にまぼろしのように浮かび上がった。いっさいの感情を排して並んだ数字はどれも、目の前の少女の命がいま、この瞬間に燃え尽きようとしていること、頭の中に響く思念が、おそらく、彼女の伝える最後の言葉となるだろうことをはっきりと示していた。

しびれる手足が持ち上がった。どうにもならない本能が身体を持ち上げ、獣のように唸り

ながら少女に這い寄る自分を、できるならサーフは今すぐ殺したかった。
唸り、涎を垂らし、金色の業炎を瞳に宿しながら這い上がってくるサーフを、少女はやさしく受け止めた。防護服のフードが落ち、汗まみれのセラの顔が現れる。酸素マスクの内側に、吐血のあとが点々としたたっていた。襟の下の細い喉首にかぶりつこうとあがく自分を、残るすべての意志をかき集めて抑えつけ、サーフはセラを抱いた。
『死ぬな、セラ、おまえが死んだら、誰が〈神〉に――』
いや、もうそんなことはどうでもいい。〈神〉も、世界も、どうにでもなってしまえ。彼女はこんな場所で死んではならない。こんな場所で、こんな死に方をすべきではない。ジャンクヤードで、生まれたての彼女の身体を抱き上げた日を思い出す。記憶を持たない心細さに泣いていた彼女の隣に座った日もある。共食いを始めようとしていた自分たちに、血を流す腕を微笑みながら差しだしてきた、白い服の少女。
『だめだ、セラ。だめだ』
しゃべるたびに尖った牙が口の中を傷つけ、刺すような血の味を感じた。猛り狂う〈餓え〉に抗いながら、黒ずみ、光の筋に覆われていく頬を、サーフは少女の髪にすりつけた。
『死ぬな、セラ。死ぬな』
――ヒートはあなたに力をあげたわ。だからわたしは、言葉をあげる。
伝わってくる声は少しずつ弱まり始めていた。だが、意志の明晰さはまったく失われず、カットされた宝石のように固く鋭い思念の光が、〈餓え〉にかき回されるサーフの意識を照

らし出す。

——もし、生きて〈EGG〉にたどりつけても、〈神〉と接続する力は残っていない。だから、あなたが行って、サーフ。〈神〉の言葉は人間には口にすることのできない巨大な情報、人の器にはあまりにも大きすぎる。でも、あなたなら、わたしから受け取った言葉（プロトコル）を、運ぶことができる。〈ASURA〉のあなたなら。

『いやだ』

引きつる指でセラの手を握りしめたとたん、内側で何か棒のようなものが折れた。びくっとしたのが伝わったのか、セラが血に汚れた唇をあげて、笑った。

——そう。キュヴィエ症候群。もう胸の下まで来てるの。あと少しで心臓が止まる。

——防護服、あまり、役に立たなかったみたい。

——ごめんね。せっかく用意してもらったのに。

『セラ……！』

——〈ヴィシュヌ〉っていうのはね、サーフ。『維持する神』。ブラフマン、シヴァ、そしてヴィシュヌ——創造と破壊と維持によってこの世を回す三人の神のうちの一人。

重い防護服の腕がゆるゆるとあがって、頬をさする。

——ヒートが破壊の〈シヴァ〉であることをやめて、あなたに与えた力が、維持する力、〈ヴィシュヌ〉になった。世界を支え、守り、未来へとつなげていくための神（ASURA）、それが、あなた。

――だから、あなたは先へ行かなければならない。ヒートのためにも、わたしのためにも。まちがって創りだしてしまったこの世界、狂える〈神〉が囚われたこの檻を打ち破って、もっと先へ進むために。

――わたしの言葉を受けとって、サーフ。わたしを……喰らって――……

しだいに細っていった思念が、遠い楽の音のように消えていった。

わずかに微笑んだままの白い顔は、目を閉じたままだった。もう応えはなかった。サーフの肩でたよりなく揺れて、胸の上に静かに垂れかかった。呼吸はすでに止まっていた。

『セラ！』狂気のようにサーフは少女を揺さぶった。『セラ！　セラ！』

生命をなくした身体を抱いて、サーフはしばらく震えていた。いったん、激情によってわきに押しやられていた〈餓え〉が、強さを増して戻ってきた。その巨大な津波が自分を呑みこみ、押し流し、泥濘の中に転がすままに、サーフは身を任せた。

(セラ……！)

水晶の森の光に満ちた静寂に、分厚い布を引き裂く音が響いた。地面に生えた結晶の木々が、薄朱色の光をほんのりと映した。

砂のきしむ音がゆっくりと近づいた。澄明な砂の上に、わずかな窪みと赤い足跡を残しながら、彼は目指すものの前に立った。

〈EGG〉。〈神〉の代理体にして、地上における〈神〉そのものの顕現。
「……俺は、友を喰った」
低く、サーフは言った。その目は乾き、もはや地上の何物をも映していなかった。見つめているのはただ、真正面で圧倒的な輝きを放つ〈神卵〉、もうすぐ地上に落下しようとする〈神〉の肉体の一部――
「俺は、友を喰った。敵を喰い、味方を喰った。人を、悪魔を喰い、慕ってくれる少女を喰った。生きるために。すべて、生きるために」
両手をあげる。そこにはまだ、セラの流した血がこびりついていた。ふいに蒼白い光が燃え上がり、両手が〈ヴィシュヌ〉の強大な力を宿す。だがすぐにそれは消え、無力な人間の両手が、ふたたびその場を占めた。
力と言葉は体内にあった。その気になれば〈EGG〉を、〈神〉をも破壊できる巨大な力が、体内に蠢くのを感じることができた。しかし、それをするのがサーフの使命ではなかった。彼は維持神〈ヴィシュヌ〉、この世を支えて守り繋げる者だった。少女から受け継いだ〈神〉の言葉が、大いなる光輝となって胸中に燃え立っていた。
「さあ、〈喰らえ〉、〈神〉よ」
サーフは囁いた。
「これが――『生(カルマ)』だ」
そしてまっすぐ歩み入っていった。血まみれの両手を剣のようにかかげ、〈神〉の顕現、

〈ＥＧＧ〉の中心部へ。

5

ゲイルは顔を上げた。
風が吹き始めていた。空は足の速い雲に隠れ、不機嫌な野獣のような唸りを立て始めていた。分厚い雲の層のあいだを、ときおり青白い電光が走っては消えた。どこかで地鳴りの音が、不穏な大地をゆすっていた。
「時間だ」彼は呟いた。「翔ぶ刻が、きた」
数秒後、そこには誰の姿もなかった。十字型にひびの入った小さなチップが落ち、地面に触れる前に分解して、風といっしょにこまかな粒子となって飛び去っていった。
別の場所にも、また誰もいなくなっていた。空になったアンプルが転がり、岩にぶつかって砕けた。わずかな薄桃色の塵がくるくると舞ったように見えたが、それもわずかな間のことで、じきに風に乗ってどこかへ飛び去っていった。
また別の場所にいた者も、姿を消していた。セロファンを剝がしたロリポップが、食べかけのまままきちんと地面の上に置いてあった。派手な包み紙がカサカサと音を立てて転がって

いき、吹き寄せられた砂が、置かれたキャンディを急速に埋もれさせていった。

「走れ！　早くしろ！」

人間たちの避難はようやく最終段階に入っていた。大きく開かれたドームの入り口から、それぞれにしっかりと荷物を抱えた避難民たちが続々と流れこんでくる。物資をすべて運びこみ、必要な機器のスイッチを入れ、集まった人の数が数えられた。慎重に配分されたエネルギーが、正しい場所に行き渡っているかどうかが確認された。

収容人数ぎりぎりのドーム内は暑く、息苦しいほどだったが、人々はひっそりと静まりかえっていた。外殻を雨が叩く音が聞こえ、やがてそれは、はげしい雷雨となって横殴りに避難所を叩いた。耳を聾する雷鳴に、避難民から口々に悲鳴が上がった。

「早くしろ！　早く！」

走る人々を、銃を振ってせき立てる〈ローカパーラ〉兵たちも、これまで体験したことのない叩きつけるような雨と雷に身震いしながら、声をからして怒鳴り続けた。

「もうあと五分で入り口を閉じるぞ！　物など取りに戻るな、死にものぐるいで走れ！　死んじまったら元も子もないんだぞ、走れ！　早く！」

すでに池のようになりはじめた周囲から水しぶきをまき散らして、最後の一隊がなだれこんでくる。頭からずぶ濡れになった彼らは湯気を立て、あえぎ、泥まみれの身体を仲間の手

でいたわられながら、区画された場所へ運ばれていった。
「全員、収容完了したか？」
「扉を閉じるぞ！　浸水が早い、急げ！」
入り口を閉鎖するスイッチが入れられる。補強された分厚い自動扉が、重い音を立てながらじりじりと左右から閉まりはじめる。上がり続ける水位はすでにドームの近くまで達し、扉の隙間から中へ流れこんできていた。避難民の女たちが震え上がって、手やヘルメットを使って水を外へ掻い出そうとする。兵士が押しのける。
「よせ、危ない！　手を挟まれたら一発で切断だぞ……どうした？」
「子供が！」
女たちのひとりが口を押さえ、恐怖のあまりに目をむきだして外を指さしている。一瞥して、兵士は真っ青になった。幼い子供がひとり、泣きわめきながら、おぼつかない足取りで豪雨の中をこちらへ向かってくる。母親を見失ったか、見失われたのか、それとも、最初からいなかったのか——。
「開けて、扉を止めて！　このままじゃあの子、取り残されちゃうわ！」
「だめだ、もう遅い！　今開けたら、次に開放するときの電力が足りなくなる、あきらめろ！」
「だって……！」
「アネット！」別の声が、あわてたように人垣の後ろから呼びかけた。「アネット！　待ち

なさい、待って！」
　アネットと呼ばれた女は止めようとする手を振り払い、扉の前に集まった人々を押しのけて、豪雨の中に飛び出していった。しぶきが白く彼女の輪郭を浮かび上がらせる。
「アネット！」
「アネット、もどれ！　あんたまで取り残されるぞ！」
「子供はどうするの、アネット、あんた、自分の子供は……！」
空（シエロ）の名をもらった子供が火のついたように泣いている。
　走る子供が転んで、力尽きたようにその場に動かなくなった。駆けつけたアネットは泥水の中から子供を抱えあげ、抱きしめて、必死の形相でドームに駆け戻りはじめた。その間にも、刻々と扉は閉じていく。
「子供を……！」
あえぎながらアネットは子供を差しだした。隙間から伸びた腕また腕が、死んだようにぐったりとした子供を内側へ引き入れる。
「あんたもよ、アネット、早く！」
「無理だ、この隙間じゃ、子供は通れても、大人は――」
「そんな――アネット！」
　無情に閉じていく扉の間に、誰かが無理にもぐりこんだ。ぎりぎりと歯ぎしりのような音をたてて、扉の閉まるスピードが遅くなる。

食いしばった歯のあいだから、絞りだすように彼は言った。
「ロアルド、あんた……!」
「早く……中へ入れ」
「ロアルド、離れろ! あんたまで潰されるぞ!」
硬化した脚と杖を一方に、丸めた背中をもう一方に当て、われとわが身で扉の進行を遅らせたロアルドは、入れた力で全身をわなわな震わせながらもにやりと笑った。
喉の奥から唸り声をあげながら、早くアネットを引き入れろと顎をわずかに動かす。ばらばらと伸びた手がアネットをつかまえ、引っぱり、くしゃくしゃの洗濯物のように、狭い隙間から引きずりこんだ。
肩がつかえ、腕がもつれて、なかなか全身が入らない。アネットは苦しさに身をもがいた。ロアルドはぎしぎしと脚をきしませながら、閉まろうとする扉の力を押し返す。
ようやく床にどっと転がり落ちたアネットは、したたる水の中に倒れてはげしくあえぎ、身を丸め、咳をして、子供の名前を呼んだ。
アネットが入ったのを確認すると、ロアルドは自分の身を扉から引き離した。背が離れ、内側へどっと倒れたとたん、急に邪魔物の取り払われた扉が、勢いを増して閉じた。湿ったものの潰れる音がした。
ロアルドは叫び声を上げ、腿を押さえてその場に転がった。押さえた手の間から、噴水のように鮮血が吹きあげてあたりに拡がっていく。

「ロープを持ってこい！」奥から駆けつけてきたグレッグが怒鳴っている。「紐でも、コードでも何でもいい、縛るものだ！　脚を切断された、止血が先だ！　それから包帯と熱湯、縫合糸と針を……ロアルド」

言われたものを集めに部下たちが駆けだしていったあと、友人の頭を膝にかかえ上げて嘆くようにグレッグは言った。

「どうしてこんな無茶をした？　どうしてだ？」

「……情けないリーダーのままで、終わりたくなかったんでね」

うっすら笑みをたたえてロアルドは答え、激しく咽せた。

「馬鹿野郎が──」

呟いて、グレッグは友人の左腿を強く押さえた。

キュヴィエ症候群に冒され、結晶化した脚は、折れた杖とともに外に取り残され、雨に打たれていた。救急箱とロープの束を引きずった〈ローカパーラ〉の一団が、人混みをかき分けて、こちらへ向かってくるところだった。

光の海の中を、石のようにサーフは沈んでいった。自分の沈んできたあとが尾を引くのがはっきりと見え、あたかも木のように、そこからいくつもの枝が拡がってどこまでも伸びていくのがわかった。

〈神〉は情報（ことば）であり、情報（ことば）が〈神〉だった。周囲を囲む光の海はすべて超情報集積体である〈神〉の存在そのものであり、その中に投げこまれた自分が、異物として調べられ、解析され、分解されていくのを感じた。

　苦痛は耐えがたかったが、サーフの喉から漏れたのは笑いだった。全身を引き裂かれる苦悶にのたうちながら、サーフは哄笑した。周囲で〈神〉が揺れ、恐れ、悶えるのを見てさらに笑った。もたらされた未知の情報（ことば）に、〈神〉の世界が震撼するのに、笑った。笑いは黄金の花弁のように輝かしく、勝利のラッパのように誇らしげに鳴り響き、広大な〈神〉の空間にどこまでも響きわたった。

　仰向けになって横たわった。胸から何本もの金色に輝く茎が伸び、はるか上の見えない水面へと向かって伸びていくのを、サーフは見た。背中の下には何百億何千億の死体、これまで自分が喰ってきた相手も含めて、この〈ＥＧＧ〉を作るのに使われた大量の死、その中で行われていた虐殺、謀殺、それ以前に、人類という種が重ねてきたありとあらゆる死が、自らの背後にあるのを感じた。

　水の上に咲く蓮花は美しい、だが、泥水の中に伸びたその茎と根は、水底で腐れた生き物の死骸に根を張り、なお美しく咲き誇る。その通りだ。ここにおびただしい屍肉の山がある、その頂上で自分もまた腐っていく、しかしその自分の胸から、また新しい花が咲く。なかば透き通った茎がぐんぐんと養分を吸い取り、水上へと運んでいく。それに従ってサーフという身体はしなび、細くなり、やがて塵となって消える。しかし花は咲く。この先も、くり返

し、くり返し、花は咲きつづける。
消失する最後の瞬間まで、勝利の哄笑は明るく、高々とあたりを充たした。花は伸び、咲き、水上に白く清浄な影を浮かばせた。
〈EGG〉が揺れ、鱗片状の外皮に、次々と光が走りはじめた。あたりの結晶の森が音もなく飛び散り、虹色の塵の嵐となって、もうもうと舞い上がった。
揺れは回転に代わり、回転はしだいに速くなった。重なりあった外殻が一枚、また一枚と開いていく。猛烈に回転しながら、何千枚もの外殻はすべて外側へと開いた。燃え立つ花の中心が、踊る炎のように高々とそびえ立った。
回転はますます速まり、光はさらに強まった。大峡谷全体が、まばゆい光につつまれて揺れ動いた。それは、花だった。巨大な、この世のものならぬ花、〈神〉のために用意された卵であり蕾、世界の終わりと始まり。
一個の巨大な光が地上を離れ、峡谷を、一瞬真っ白な色に染め変えた。

「地震だ！」
「崩れるぞ！　荷物を押さえろ、座って、頭を守るんだ！」
近くにいた人々があわてて引き下がり、〈ローカパーラ〉兵が、物資の梱を固定したストラップを引き締める。ますます激しい雨風が、ドームを吹き倒さんばかりに荒れ狂っていた。

雷は間断なく鳴り響き、落雷がすぐ近くを何度も貫く。のぼってきた洪水がドームの裾を舐めつつ、ひたひたと地上を洗っている。落雷を防ぐために、ドームの電源はすべて落とされた。暗闇の中で、人々は頭を抱え、それぞれに、祈りや罵りや、その他、自らの心を支えるための言葉を呟いていた。

「まただ――今度は大きい！」

「危ない！」

誰かが悲鳴をあげた。ドームの中心部が生き物の背中のようにぐっと盛り上がり、四方に岩を弾けさせて割れた。

大地を裂いた深い割れ目はみるみるうちに広がり、そばにいた数人が中にすべり落ちかけて仲間につかまえられる。隆起した大地はドームの外殻にも迫り、衝突し、よじれた。補強したはずの外殻がいやな音を立てて歪んだ。

「助けてくれ――落ちる！」岩の縁にようやくぶら下がった男が身をよじって叫ぶ。

「ドームが保たないぞ！」外殻部に貼りついていた〈ローカパーラ〉兵が怒鳴った。歪んだ外殻は音を立てて地面からむしり取られつつあり、ひびの入ったドームから、猛烈な雨と風が吹きこんできた。流れこんでくる洪水を閉め出すために必死に土嚢が積まれるが、とうてい追いつかない。水位はますます上がってくる。

「駄目か」瞑目して、低くグレッグは呟いた。「サーフ――セラ……」

すまん、とその唇が呟きかけたとき、とつぜん、ふっと外の轟音が遠ざかった。

ぎくりとしてグレッグは目を開き、耳を疑った。雷はまだ鳴っている。風も吹いているし、雨も降っている、だが、このドームには吹きつけてこない。
目の前で、隆起した大地がもとに戻っていく。命からがら這い上がった人々が驚きの目で見つめるその前で、地割れはフィルムを逆回しにしたようにちぢみ、元の場所にぴたりと収まった。
「洪水はどうした⁉」
気を取り直してグレッグは問いかけた。
「は、離れていきます！」兵士の混乱したような返事が返ってきた。
「退いているわけじゃないんだな？」
「退いちゃいません、ただ、水がこのドームだけを避けるみたいに、別方向へ流れていくんです。それに、雨や風も……」
ドームに入った亀裂から、わずかに外の様子がのぞけた。目をあてたグレッグは、自分の目を疑った。ドームの半径二十メートルほどにわたって、まるで見えないドームがもう一つその上にかぶせられでもしたように、何もない空間ができている。
そこには雨も降らず、風も吹かない。洪水はその二十メートルより向こう側を、あいかわらず水かさを増しながら流れていく。
大音響がして、わずかに見える都市の残骸が、地震のために内側へ吸いこまれるように崩れていくのが見えた。空にひらめいた稲光が、まともにドームの上に落ちかかろうとして、

途中で急角度に折れ曲がってそれた。まるで何者かが意図的に、稲妻の方向をつまんで変えでもしたようだった。

「奇跡だ……」

「違う」

足もとから、かすれた声がした。ロアルドが、切断された脚の付け根をしっかりくくられ、血のにじんだ包帯で傷口を包んで、外殻にぐったりと寄りかかっていた。

「彼らが守ってくれているんだ……われわれの、仲間が」疲れたように目を閉じた。「われわれの、友人……悪魔（ASURA）たちが」

グレッグはしばし茫然として友人を見つめ、それから黙って頷いた。また一つ雷がドームを襲おうとし、払いのけられるように別の場所へ飛ばされた。

さっきよりずっと静かになったドームの隅で、フレッドが、汚れた顔に大きな目を光らせて、膝を抱えていた。彼は誰にも祈っておらず、罵りもしなかった。ただ信じていた。時には大きな地震の余波がドームにもおよび、ぎゅっと膝を抱えることもあったが、それでも瞳の光は曇りはしなかった。

長い夜が過ぎた。人類の歴史の中でも、おそらく、もっとも長い夜が。

——額にほのかな熱を感じて、グレッグはふと目を開けた。
反射的に激しい恐怖を感じて飛び起き、影に飛びこんで、自分の身体がいまだにどこも結晶化していないことに気がついた。ひび割れたドームの天井から、糸のように細い光が差しこんでいる。
陽光。
グレッグは額に触れ、手に触れ、脚に触れた。ない。どこにもない。結晶化した部分はない。ほんの少しでも陽光を浴びた者は数十秒のうちに透明な石像となって死ぬ、あの恐ろしい疫病の兆候は、みじんもない。
「皆、起きろ!」
グレッグの大声に反応して、数人の者がとびあがった。みな、恐怖に震えながら気絶するように眠ってしまったか、眠ることもできず、身体を丸めて襲いかかる死を待ちつつ震えていたのだった。
「起きろ!　そして扉を開けろ——朝が来た!　朝が来たんだ!」
「朝……?」
これまでそれは、また結晶化の恐怖と戦わねばならない時間の始まりを知らせる、忌まわしい単語だった。だがほかにも何人か、ドームの裂け目から差しこむ細い光の糸を見つけた者がいた。だが、思いきって扉を開けようとする者は誰もいない。グレッグが苛立って、自

分で扉を開けようとスイッチに近づきかけたとき、弾丸のように飛び出してきた小さな影が、高い位置にあるスイッチに飛び上がって、思いきり『OPEN』を叩きつけた。
扉が身じろぎし、重い音を立てて、ゆるゆると開きはじめた。光の筋がさし、やがて帯に、面になった。
外は洪水に洗われ、何もかもが運び去られていた。都市の残骸も、避難民のドームだけを残して、どこかへ流れ去っていた。何もない、むきだしの、真っ平らな大地の上に、ただ、ひろびろと空が広がっていた。
青い空。そして、太陽。
明るく、温かい、生命を与えるゆたかな光。
「フレッド！」
「見ろよ、グレッグ！　見ろよ、みんな！」
光の中へ飛び出したフレッドは、おどけた身振りでダンスを踊っていた。足踏みをし、泥水を跳ね散らかし、汚れた顔を涙と洟水でよけいぐちゃぐちゃにしながら、青い空と太陽に向かって両腕を突きあげた。
「結晶化なんかしない……太陽はもとに戻った……青い空！　青い空だ！　キュヴィエ症候群はもうない！　俺たち、助かったんだ！」
人々がどよめき、少しずつ動き始めた。用心深く陽光の中へ踏み出し、あわてて引っこみ、またそろそろと足を出してみる。

しばらく出していても結晶化が起こらないとみると、決心したようにそろそろと全身を光にさらして立った。数秒のうちに、信じられないという表情と大きな歓喜が、光の中へ出た者に現れた。
「本当だ……結晶化しない！　キュヴィエ症候群は起こらない……俺たちは助かった！　助かったんだ！」
どよめきは高まり、人々はしだいに足を速め、押し合いへし合いしながら暗いドームを飛び出した。温かい陽光と青く澄みきった空が人々を迎えた。長年の間、恐怖の対象だった太陽と空が、祝福するようにぬくもりといたわりを降りそそいだ。人々はその場で抱き合い、キスを交わし、喉がかれるまで歓声を上げ、フレッドと一緒になって踊りまわった。信心深い一団は身を投げだして大地に口づけし、神に感謝の祈りを唱えた。
グレッグはロアルドに肩を貸して、最後にドームを出た。喜び騒ぐ人々を眺めながら、彼の目はどこか哀しげだった。
「セラはどうしたんだろうな。それからサーフは」彼は呟いた。「それにアルジラ、ゲイル、シエロ。あの〈ASURA〉たちは、どこに」
「わからないさ。われわれにはな」大量の血を失って蒼白の顔で、ロアルドは呟き返した。
「彼らはわれわれを生かしてくれた、それだけだ。われわれはこの贈り物を受け取り、そして、生きる。懸命に」
「ああ。そうだな」少しの間を置いてグレッグは答えた。「そうだ」

そしてロアルドに本格的な治療をするために、治療班と医師を大声で呼びながら、友人とともに、仲間の輪へと入っていった。

第九章

寄せてはかえし
寄せてはかえし
かえしては寄せ
夜をむかえ、昼をむかえ、また夜をむかえ。

光瀬龍『百億の昼と千億の夜』

それは花に似ており、鳥に似ており、蝶に、また炎に、水に、光に、雷に似ていた。およそこの世にあるすべてのものに、それは肖（に）ていた。
にもかかわらず、ひとつとして同じ姿のものはなかった。それは燃え、流れ、舞い、飛び、そして哭いた。音ではないその音は一種の時空の振動として広がっていった。

囚われていた檻から解き放たれたそれは、新たに得たものにいまだ戸惑い、混乱しており、身裡に食いこむ棘のように感じられる何ものかに悶えた。苦痛とともに強烈な何かを、今までまったく知りもしなかった新しい何かを身にまとって、それはふたたび、もとの棲まいとしていた高位次元の広大な空間へとはばたいた。

悟りしひとのかんばせは気高く輝き、神々しい姿は何よりも尊い
その光明は何ものも及ぶことなく
太陽も月も宝玉の輝きも
その前にすべて失われ、あたかも墨塊の如くである

ようこそ、弥勒(ミトラ)……

——……光(ミトラ)？

彼らの睡りはゆっくりと醒めていった。あたかも幼子が心地よいまどろみから覚めるように、彼らははじめて自分たちの身体の窮屈さを意識し、伸びをし、胸を広げてさわやかな大気を吸いこんだ。そうして思うさま手足を広げて、その場にたゆたった。
そこは天もなく、地もなく、生もなく死もない場所、あらゆる因果から解放された、自由

の岸辺だった。

『一歩にしてあらゆる世界を闊歩するもの、一目にして千の時代(ユガ)の始まりと終わりを知るもの、一指の上に万の星々を弄ぶもの、万歳、鑽仰せられてあれ、汝、創造と維持と破壊の聖三身一体(トリムールティ)よ』

彼らはおたがいの存在を意識し、同時に、それを自分自身と同一の者として受けとっていた。そうすることに、なんの苦労も要らなかった。すでに肉体を持っているときに、たがいを共有することを得ていたからだった。彼らは三体にして一身、三身にして一体をなす自分たちを、軽い驚きと喜びとともに受け入れた。

——泣いているのかしら。

かつて、セラと呼ばれていた少女がそう言った。

『人間が産まれるときにも泣くのだ。〈神〉が泣いて悪いこともあるまい』

黒い猫は空中に座り、悠然と尻尾を左右に振っていた。鈴が涼しい音を立てた。

『あれは一度破壊され、そして新しい存在として蘇った。いまのあれは、以前と連続してはいるが、もはや同一存在ではない。一族のもとへ戻ったとき、あれはまったく新しいものを種族に持ち帰るだろう。それがどのような影響をもたらすかは、まだわからない。いずれにせよ、先のことだ。君たちにとっては、まばたきの間かもしれないが』

——明るいな。星が見える。

サーフと言われていた銀髪の青年があたりを見回した。

——ここは真っ暗で、ただ何もない場所だと思っていた。なのに今は、明るい。光がある。星もある。岸辺に打ち寄せるさざ波も。それから、音楽も……

『それは君たちの見る目が変わったからだ。すべてのものはさまざまな面を持ち、見る方向や見方によってさまざまな姿を見せる』銀色の目の黒猫は言った。『君たち自身が変化したために、見えるものも変わったのだ。今や君たちは、ここにある光と瞬き、それらが奏でる音楽を感じとることができる。星に見えるあのきらめき、あれらは、ひとつひとつが一個の世界なのだ。ほら、君たちのいた世界も、あそこに』

それはすぐ足の下に、波に洗われた石のように美しく息づいていた。つまみあげて、手の上で転がすことさえできそうだった。

そうした世界が見渡すかぎり、幾千幾万も、さらに幾億の上にも無数に散らばり、輝いていた。星々にも似た無限の世界の輝きは、あたりをあたかも星の海であるかのように、ほのかな明るさで充たしていた。

——あの音はなんだ？　どこかから聞こえてくる……

ヒートと名乗っていた赤毛の男が匂いをかぐように首をのばした。

『あれは存在が奏でる音だ』猫は言った。『すべての粒子は固有の振動数を持っている。それらが正しく振動するとき、物質は生まれ、消滅する。しかし、振動する粒子本体は消えず、別の振動数に移り、また別の物質が生まれる。こうして空間は、存在という永遠の音楽に充たされ、それは変化しつつも、けっして絶えることがない』

――わたしたちもその音楽の一部なの？　少女が尋ねた。
『そう、君たちもかつて音楽の一部だった。だが、存在という段階から抜け出した君たちは、あのコーラスの一部であることからも解き放たれた。今の君たちはもはや音楽のうちの一つの音ではなく、その音楽を奏でるべく楽器を構える演奏者、と言うべきだろう。あるいは奏楽が正しく響くよう、その音程を整える調律者、と言ってもいい。どちらでも同じことだ。よき演奏者はつねによき調律者であり、この場合は逆もまたしかりとなる。君たちはいまひとつの世界、このシンフォニーの一つの音を構成する楽器を調弦し終えた。気分はどうだね？』
三体にして一である彼らの心の中でとまどいが飛びかった。自分たちが何をし、どう生きたかは記憶にあったが、それが目の前で語られていることとどう関わりがあるのか、納得がいかなかったのである。猫は笑うように喉を鳴らした。
『あの上位次元の存在が下位次元に転落したことで、弦に歪みが起こった、とでも言おうか。あれは君たちの世界を構成する音にとって、楽器に飛びこんだ小石であり、弦に絡んだ一本の小枝だった。それは初めは小さな歪みであっても、ついにはその音楽を破壊してしまっただろう。しかしその歪みが君たちを生み、歪みの所産である君たちが、その歪みを正した。いま、世界は正しい振動を取りもどし、新しい調べを響かせている』
猫はしばらく黙って、打ち寄せる音楽に耳を傾けるかのように首をかしげた。彼らもまた黙して、四方から押し寄せてくる限りなく壮大な交響楽に聴き入った。

――あなたは誰？　どうして、わたしたちの前に現れたの？

少女だったものが言った。猫はまた喉を鳴らして笑った。

『存在を脱した者はもはや因果にとらわれることなく、時と空間を超越し、あらゆる時間、あらゆる場所に、無限にあらわれ遍在する……』

猫の姿が膨らみ、薄れ、しだいに形を崩していくように見えた。それはあいかわらず猫だったが、同時に、何か別のものだった。彼らが二人であって同時に一体であるように、猫もまた猫でありながら何か別のものだった。しかもそれは、極めて近しいものであるようにも思えた。次々と移り変わっていく姿の中で、銀色の瞳だけは常に不変だった。

『……だから、調律者（チューナー）はどんな場所にも、どんな時にも姿を現すことができる。どんな形でも、姿でも、人でも、猫でも、悪魔でも……』

今や彼らは鏡を見ているように、自分たちと相似形のものと相対していることに気づいた。それは歓迎するように微笑みを浮かべ、白く輝く両手をさしのべた。

『ようこそ、時の上に遍在するもの、涅槃に達したるもの、世界の調律者、光の王』

やわらかく響く声でそれは言った。一千億の世界が奏でる奏楽がその上にかぶさった。

『待っていたよ、とても長い間。だがここでは一瞬が永遠と同じになる。だから現在は次の一瞬に重なり、過去はさらに遠い未来となる。私がだれだか、わかったかい？』

わかった。彼らはすべてを了解した。進み出て、自分たち自身の手を取った。手は重なったと思うとたちまち一つになり、一度も分かれたことなどないかのようになった。

彼らは岸辺に立って、遠い未来から現在の自分たち、過去の自分たち、そしてさらに遠い、未来の自分たちを見渡した。すべては同時にここにあり、糸に通したビーズ玉のように一様だった。ビーズ玉を貫く糸が、どの玉であろうと玉の中心を通っているように、どの時間、どの場所にも、さまざまな姿で常に彼らは存在した。必要なのは、ただ、選択のみだった。『すべてはここに始まり、ここに終わる。しかし終わりは、次の始まりでもある』彼らのうちの猫である部分が楽しげに言った。『さあ、どうする――これから？』
彼らは光と音楽に充ちる世界を見下ろした。懐かしい世界が正しい響きを取りもどし、明るく輝いて歌っている。そこへ立ち戻る時もいずれ来ることはわかっていた、だが、今は、そして常に――

――無限(ニルヴァーナ)へ！

三にして一なる声がそろって告げた。
彼らは岸辺を離れ、世界を離れて舞い上がった。光と音の響きかわす空間を駆け抜ける。笑い声は鈴のようにりんりんと響いた。讃えよ、勝利を得しもの、大自在の境地を知るもの、歪みより生まれ落ちしもの、調律者、光の王。彼らは飛翔する――銀の鈴の音を響かせながら、笑い、抱き合い、前に永遠を、後ろには永劫を従えて。

Part- ∞

都市

-Newyork, 1954-

われわれは一個の超意識に相当する調和のとれた意識群の集団に直面する。地球は無数の思考する粒子におおわれるだけでなく、単一の思考する外被に取りまかれ、機能という点からみて、ついには恒星の規模をもった一個の思考する巨大な粒子になってしまう。ここの思考力はすべてを一体化する単一の思考行為のなかに結集され、そのなかで強化される。

テイヤール・ド・シャルダン『現象としての人間』

このような洞察そのものは決して新しいものではありません。私の知る限り最も古い記録は約二千五百年あるいはもっと以前にさかのぼります。古代インドのつくられた時代の初期から、「人と

天とは一致する―（アートマン＝ブラフマン。人間の自我は普遍的な全宇宙を包括する永遠性それ自体に等しい）という認識がインドの哲学思想において、神を冒瀆するものどころか、森羅万象のもっとも深い洞察の神髄であると考えられていました。

E・シュレディンガー『生命とは何か』

一九五四年、ニューヨーク、十二月二十四日、夜――。

雪はやんでいた。大都会を行き交う自動車のかしましさも一時やみ、街角を見渡せるカフェのガラス張りのウインドウに、水滴が筋を引いて流れおちていた。

明るい街の賑わいはカフェの落ちついた雰囲気の中まで入ってきていたが、過剰にというほどではなかった。救い主の降誕に敬意を表して、店主もドアにひいらぎのリースを飾り、抑えめの音量でクリスマスの合唱（コラール）を流していたが、そこまでだった。ここでの主人はあくまでも客の安らぎであり、お祭り騒ぎが好きな人間は、ここでは丁重に外へ連れ出された。コーヒーの香りと焼きたてのパンの匂いが温かい空気に漂い、分厚い樫のテーブルと身体を包みこむ肘掛け椅子が、客のために用意されていた。

「あ、申しわけありません」

「いやいや、構わないよ」

テーブルの間をすり抜けようとして、載っていた新聞を落としてしまった青年に、老人はにこやかに首を振った。
「もう読んでしまったあとだからね。お気になさらず」
しかし青年はかがんで新聞を拾いあげ、丁寧に畳みなおして老人に手渡そうとし、ふと動きを止めた。しばらく窺うように老人の顔を見つめ、ためらいがちに、
「失礼ですが、テイヤール・ド・シャルダン教授ではいらっしゃいませんか？」
「これは、これは」
老人は温顔を驚きの表情に変え、まじまじと青年に見入った。小首をかしげ、熱心な風で自分を見ている青年の銀色の髪と、珍しい銀色の瞳に感嘆する。
銀色——灰色か？　いや、本当に銀だ。髪と同じく、内側から光を発しているような、魂の底まで貫き通すようなまなざしをしている。
「これは嬉しい」自分もフランス語になって、ピエール・テイヤール・ド・シャルダンは言った。「故国を離れているとはいえ、私は根っからのフランス人なのでね。こんなところで、こんな夜に、故郷の言葉を聞くことになるとは思わなかった……ああ君、もしよかったら、ここに座ってしばらく話し相手になってはくれないか。私のような老人にとって、若者の快い声が、懐かしいふるさとの言葉を語ることほど、嬉しいクリスマスプレゼントはないのだよ」
「そうですか。では、お言葉に甘えて」

銀髪の青年はすべるようにティヤールの向かいの椅子に腰を下ろした。水銀の一滴が流れるような優雅な仕草だったが、どことなく、動きにまだ慣れないものがあるように思えた。そのことを控えめに指摘すると、青年は困ったように、足を使って歩くのは随分久しぶりなので、と謝った。

謝ることはない、となだめながらも、ではこの青年はおそらく長い間入院でもしていたのだろう、とひそかにティヤールは思った。二度にわたる世界大戦で、ほとんどの国家が大きな打撃を受けた。ティヤール自身も、人間が人間に加えられる残虐行為には果てがないのかと消沈したほどだった。そして終戦から十年経つ現在でも、その爪痕はいまだに深い。

「急いではいないのかね。こんな老人に時間を無駄にさせては君がかわいそうだ」

「いえ、実を言うと、連れを待っているところなんです」屈託なく彼は言った。「ほかの二人がまだ準備に手間取っているので、私だけ先に降りてきてしまいました。さっき不作法に躓いたのも、きっとあの二人が意地悪をしたせいでしょう」

「たいそう仲がよいと見えるね」

「ええ、とても」

青年はまばゆいばかりの笑みを見せた。鏡に反射した太陽を直接目に投げこまれたような気がして、ティヤールは思わずまばたいた。コーヒーが運ばれてきて、青年のわきに置かれた。ティヤールはカフェ・オ・レをもう一杯注文した。

「先年、六月にボストン大学でなさった教授の講義はたいへん興味深いものでした……」

おや、とテイヤールは驚いた。確かあの講義は関係者のみの講演会で行われたもので、招待された客しか入れなかったはずだが。この青年もあの講堂にいたというのだろうか？「現在の世界の苦痛と混乱、至るところに見られる惨苦の数々は、いまだ人類が幼年期にあり、辛い成長の半ばにあるからである」青年はコーヒーには手をつけず、なめらかなフランス語でよどみなくテイヤールの思想を語っていく。「系統樹の枝は発散と収斂をくり返しつつ、何度も枝打ちされながらも伸びてゆき、ついにその先端に、人類という花を咲かせた。であるから人間はけっして、冷笑主義者（ペシミスト）たちが言うような、ついには自滅すべき失敗作ではなく、地球という母にとりついた異形のガン細胞でもありえない。ナチスの称する選民主義もまたこれにあたらず、すべての人、すべての人類が、いずれは精神圏（ヌースフィア）と呼ばれる一個の活動的な精神体を築き上げ、進化の頂点にして超人類への道である、オメガ点へと上昇していく……」

テイヤールはあわてて手を振って止めた。

「ああ君、ああ君、君はこよい地上にお生まれになる方のことを忘れているよ」

青年はふたたび笑みを浮かべて老人を見た。

「キリストですか」

「そう、主イエス、神にして人であられる御方が、オメガ点に向かって人類を導いておられることを忘れてはならない。オメガ点こそキリストとの合一の瞬間であり、人類が、神の望まれたとおりの生き物として進化を遂げる場所なのだよ」

「では、あなたは人と神とが、元来同一のもの——同一たるべく作られたものだとおっしゃるのですね。キリストの司祭であられる方が——」

「そのとおりだよ」

まさにその通りの思想を語ったがために、カトリックの司祭として、またイエズス会神父としての活動をローマによって禁止され、フランスの宗教界からは完全に追放者としての扱いを受けている。故国に長期間居住することもできず、いまもほんの数ヶ月の滞在をくり返しては、後援者のいるアメリカへ行き来して暮らしている身だ。

長い間、中国奥地の砂漠地帯への探検隊のオブザーバーとして参加していたのも、故郷からの追放が大きく影を落としている。公的な研究発表も、いっさい禁止されている。テイヤールの著作は、粗末なタイプ印刷をまとめた地下出版としてのみ友人や知己のあいだで回覧され、一般への出版を許されたことはいまだにない。

であるのに、この青年はテイヤールの思想を、深いところまですっかり知りつくしているかのような口調で語るのだった。こんなに若いのに、彼はどうして自分の思想をこれほど知っているのだろうと、テイヤールは不思議に思った。

「ここにはバチカンの聴罪司祭はいない。ですから、ざっくばらんにお話ししましょう。もし、オメガ点を超えた人類が神と対等であり、むしろ同一体とも呼べる存在となるのなら、その時点の人類は全知であり、全能であり、過去に自分たちが通ってきた汚濁に充ちた歴史もすべて知っているはずですね。それでいて、彼らはそれを変えようとはしないのでしょう

か。自分たちの精神的血につらなる先祖たちが、肉体の桎梏にあがき、憎み合い、傷つけ合い、殺し合うのを、どうして黙ってほうっておくのでしょうか」

「それは、そうした段階が必要なものであるからだ」ティヤールは即答した。「子供が立って歩くことをおぼえるとき、まずつかまり立ちからはじめ、やがて伝い歩きし、よろめきながらも自分で立ち、転んで怪我をしながらも、少しずつ、歩くこと、やがては走ることを覚えていく。後から考えればほほえましいような失敗も、その時には懸命の努力であり、血と痛みを代償にして新しい進歩を得ることが、必要なのだ。でなければ人類はいつまでもゆりかごに寝た赤ん坊の状態でいるだろう。

今ようやく人類は、よろめき、ふらつきながら、教訓を得て再び未来への道を進み始めたところなのだ。未来の進化した人類、神なるキリストと合一した一個の精神はそれを知るかもしれないが、手を出しはしないだろう。自らがそこにたどり着くまでの道程にとって、その痛みや血が、欠くことのできない一部分であることをも、彼は知っているからだ」

「けれども、まさにその惨苦の渦中にある人間にとって、そのような神＝人間の態度はあまりに冷酷に見えはしないでしょうか」青年は反問した。「先ほどおっしゃったように、歩くことを覚えようとする幼児にとって、そうした段階は確かに必要でしょう。よろめく足を一歩一歩踏みしめて進み、時にはつまずき転んで、膝小僧から血を流して泣きじゃくることは。しかし、その泣いている幼児を抱き上げる手、涙を拭き、怪我をした膝をやさしく洗ってくれる手は、存在しないのでしょうか。そうした属性を、神＝人間は持たないのでしょうか」

「いや、そうした属性は、すでにわれわれの裡に宿っている——この人間の中にね」テイヤールはスーツの胸に指を当てて、熱心な学生相手にするように、テーブル越しに身を乗り出した。「だから、神＝人間が手を出す必要はない。泣いている子供に手を貸し、傷を手当てし、泣きやませて、もっとうまく歩けるように手を添えてやるのも、また同時代の人間の仕事だからだ。そうやって悟性を増した精神圏はさらに成長し、人間という単位はより緊密にからまり合いながら、次の段階へとのぼってゆく。神＝人間が手を出すことは、この場合、かえって子の発達を遅らせることにしかならないのだよ」

「しかしそれを座して眺めることは、神＝人間の胸を痛ませないのですか？　親が子供の転ぶ姿に胸を痛めるように、彼らは苦痛を感じはしないでしょうか」

「むろん、感じるだろう。私は携挙（ラプチャー）を信じる者ではないのでね、天国に迎えられた人間が、地獄に堕ちた人間の様子を見て笑いたのしむなどというのは、ばかげた誤謬だと思っている」他人を非難したことの許しを請うように、テイヤールは胸の前で十字を切った。「神であられるキリストはまた愛であるから、どのような人類の苦しみにも、わが身に打ちこまれた釘と同じく苦しまれる。けれどもこの痛みは必要なものであると知っておられるので、われわれと同じ苦痛にキリスト御自らも耐えつつ、人類がその足もとに到達する日を、ひたすら待っておられる」

「そしてオメガ点に達した人類は神たるキリストと出会い、その光と力、愛と苦しみ、苦痛とよろこびを、共有する」

「そう――そう。そういうことになるね」

……遠い未来、いつか都市であった場所で、祭りが行われる。

人々は三々五々集まってくる。人工的な定住地はもはや人々の望むところではなく、彼らはそれぞれ、家族や仲のよい者と手を携えて、自分たちの気に入る小さな居住地を見つけにいく。気候は温暖であり、四季の移り変わりはおだやかで、美しい。暑さや寒さ、雨や雪、空を引き裂く雷や突風も、すべてその変わった味わいで彼らを喜ばせる。降りしきる雨の中で子供たちは踊る。身体をたたく雨粒、口に流れこむ水滴、足の間を出入りする水っぽい泥の感触、それらすべてがまたとない喜びのもとになる。

人々は集まってきて、祭りの間だけの、急拵えの集落を作る。共同の竈が作られ、料理の煙が上がる。木を伐って地面に立て、布を張っただけの天幕が並び、ほかではあまり開かれない市場に似た賑わいが、都市であった場所に出現する。

人々はこの日のために織った上着を着、友人のために作った装身具を贈り、連れだって天幕の市場通りをぶらぶらと散策する。仮小屋の店にはまた、この日のために作られた手のこんだ細工物や織物、彫刻、地底から掘り出された古代の遺物などが、並べられる。

欲しければ手にとって買うこともできる。貨幣はもはや存在していないので、売り主が妥当と決めただけの代価を、なんらかの形で支払うことになる。いくらかの手仕事やつくりた

ての料理、冷えた果物、森から集めてこられた花束などが、店主のもとに集まってくる。花束や果物、織物は店の天幕をさらに美しく飾りたて、通るものの目を引く。
人々は集まってきて、かつて都市だったもののなごりを、花と植物で飾る。それは半壊した金属の巨大な丸屋根であり、歳月の浸食によってもはや赤錆と土埃のなかに消え果てようとしているが、人々はここを新しい人類の最初の一歩が記された土地として敬意を払い、地上最後の人工物であるドームの残骸を、花弁と色美しい織物で荘厳する。
人々は集まってきて、やがて音楽が始まる。花と葉におおわれ、森とすっかり見分けがつかなくなったドームの前で、少年たちが集まり、熱狂的なダンスを披露する。さまざまな色に髪を染め、こった形に結い上げた彼らは、色美しい熱帯の鳥のようである。彼らは飛びはね、宙返りし、高々とジャンプして、どれだけすばらしい技術を持っているかを、皆に見せる。しなやかな筋肉が汗にぬれて動き、太陽を照り返す。音楽を担当する者たちはこれもまた複雑なリズムと指使いに神経を集中しながら、少年たちの群舞にあわせて、ますますテンポを早くしていく……。
少年たちの中にひときわ目立つ、青い髪をした小柄なひとりがいるのが、人々の目を引く。彼は誰よりも高く、誰よりも早く飛び、目の回るほどの宙返りをやすやすとこなし、背中を支点にして独楽のように回転したかと思うと、宙を蹴ってパッと飛びあがる。
まるで翼を持っているかのようなその動きに、ダンスに自信を持っている少年の何人かがくやしがって追いつこうとするが、とても歯が立たない。青く澄み渡った空と同じ色の少年

の編み髪が広がる。少年は同じ色の瞳で、まわりで意地になってくるくる回っているほかの少年たちをいたずらっぽく見回し、とんと地を蹴って、ただひと跳びで人垣の外へ飛び、走り出す。
「逃げたぞ！　追いかけろ！」
まだ勝負はついていないとばかりに、むきになった少年たちが集団で追いかける。少年は軽々と、息一つきらさず先を走っており、あと少しでつかまえられる、と思った瞬間、ウナギのようにするりと手を抜けてしまう。
「こら！　降りてこい！」
最後に少年は高い木の梢にするすると登っていってしまう。下で拳を振りまわす少年たちをぐるりと見回し、からかうように舌を突きだすと、がさりと音を立てて葉の間に姿を消す。すっかり腹を立ててしまった少年のひとりが、つかまえて引きずり下ろしてやる、とばかりに、木の枝をつたって登っていく。
しかしそこには誰もいない。登ってきた少年は首をかしげてあたりを見回す。周囲には飛び移れるような木はどこにもなく、反対側からすべり降りたような様子もない。木のまわりはほかの少年たちに取り囲まれているので、降りればすぐにつかまるはずだ。理解できずに首をかしげる少年の頭上で、木のてっぺんの細い枝が、まるでたった今だれかが蹴って空へ飛び立っていったように、小さく上下に揺れている……

人々は集まってきて、離れていた知り合いに声をかけ、手を取り合い、別離の間にあったさまざまなことを、飽かずにたがいに語り聞かせる。それはしばしばとても長くなり、連れられていた子供などはすっかり飽きてしまって、親の手をこっそり放し、自分ひとりの遊びに出かけてしまう。

しかし、かつて都市であった祭りの場所はふだん住むもののないところなので、子供にとってはなじみがない。子供は道に迷い、人のいない森の奥まで入りこんでしまう。

右を向いても左を向いても、大きな木々が、頭から覆いかぶさるように濃い緑の葉をひろげているばかり。道はどこにもなく、母親の姿は見つからない。歩き回って疲れはてた子供はとうとう草の上に座りこみ、両手を目に当てて泣き出してしまう。

すると、やわらかな足が、青草を踏んでくる音が聞こえる。母親か、と勢いこんで振り向いた顔を、薄桃色に輝く長い髪がふわりと撫でる。

美しいそのひとは、咲きそめたばらの花のようなあわいピンクの髪と瞳をして、やさしく子供にほほえみかける。涙を拭き、傷ついた足をさすって、痛みを取ってくれる。やわらかな胸に抱き寄せて歌を聞かせ、手にした菴羅（マンゴー）の皮を剥いて口に入れてくれる。熟れた果物の果肉は舌にとろけるほど甘くやわらかい。かぐわしい香りのするその衣の裾をつかんで、そのひとの膝を枕に、子供はいつしか寝入ってしまう。

やがて心配した母親が、ようやく探していた子供を見つける。草地の上で眠っていた子供は、目をこすりながら起き上がり、あのお姉さんはどこ、と訊く。あのばら色の髪と目をし

た、とてもきれいなひとはどこへ行ったの？
母親と連れは顔を見合わせる。そんなひととは会わなかった、と返事をする。あなたはここにひとりで寝ていたし、ここに通じる道は一本だけしかない。でも、その菴羅（マンゴー）の実は、どこから持ってきたの？
子供はなおもあたりを見回し、首をかしげ、美しいひとを呼ぶ。返事はない。森の草むらが笑うように揺れるばかり。蜜でべとべとの指をくわえて、子供は泣きべそをかく。
もういいわ、さあ戻りましょう、と手を引かれて帰りかけ、子供はふと気づく。服の内側にそっと手を入れ、取り出したものを母親に差しだす。母親は驚きに目を見開く。咲いたばかりでまだ露をこぼしている大きなピンク色の百合が、子供の小さな拳の上で、華麗なうてなをそよがせている……

人々は集まってきて、市場をそぞろ歩く。陽気な声、威勢のいい声、あざやかな色彩や貴金属のきらめき、できたての料理の匂いや音が、人々の五感を楽しませる。繁盛している店はすなわち売り手の腕の良さを示しており、それこそが貨幣の代わり、売り手が求める誉れの印である。品物と交換された花束や飾り物、色とりどりの手織りの薄いヴェールが旗のようになびいて、遠目からでは何を並べているかわからない店すらある。それを見たほかの店主たちは奮起し、よりいっそう買い手の気を引こうと声を張りあげる。
「それは、太陽の神を示した細工だよ。光の王さ」

一つの店台に、全身を包む旅装束のままの長身の男が立ち寄る。そばには同じく、長いマントで頭から足の先まで包んだ連れがついている。
杖を手にし、フードで顔を隠した旅装束の男は、長い繊細な指で太陽神の紋章だという細工に触れる。それは円形に整えた白い貝に黒い石を塡めこんで磨き、三つの環が絡み合いつつひとつになって回っているように見える意匠である。
それを指一本分ほどの幅の銀の腕輪に取りつけ、周囲をこまかな銀線細工で飾っている。細かく編まれた飾り鎖が何本も交差し、少し動かしただけでさらさらと鳴る。
彼は太陽神に捧げられた腕輪をとり、高く掲げ、軽く唇に当てる。それから連れの手をとって、その左腕にはめる。
男よりいくらか背の低い連れは、はっとしたように手を眺め、男を見上げる。そして恥じらうようにうつむき、手を上げて、腕輪をそっとさする。白い腕に、銀の鎖が垂れかかってきらきらと輝く。
「おや、あんたきれいな色の目をしているね。碧色だ」これは買ってくれそうだと、上機嫌で男のフードをのぞきこんだ店主が、嘆声をあげる。「ちょっと待ってな、今ここに、あんたの目の色にぴったりな、翡翠の耳飾りが――」
いきなり吹きつけた強い突風に、通りすがりの人々があわてて顔をおおう。店の軒を飾るヴェールや花々がいっせいに動揺する。
銀細工師の男は頭をあげてみて、客の姿がないのに動転する。店を飛び出して、通りを見

渡してみるが、長いマントをかぶった二人連れの姿はどこにもない。
代償も置いていかずに品物を持ち去られた腹立たしさに、荒い足音を立てて店に戻ってみると、男の立っていたあたりの店台の上に、小さなコインが一枚載っているのを見つける。白っぽい金属でできたそのコインを裏返してみて、それが、大災害前の時代に使用されていたという、貴重な硬貨であることを知って、腰を抜かす……

……人類が新たな歩みをはじめた日からともに在った地球規模の大量子ネットワークは、あらゆる場所、あらゆる時、あらゆる場合に存在し、人々とともに進む。彼らの精神をつなぎ合わせ、知らぬあいだに、躍動するいくつもの単子(モナド)を包含する、ひとつの巨大で活発な精神として、成長させる。
口にする食物、喉を下る水、呼吸する空気の分子ひとつひとつにさえ彼らは宿り、子供たちは生まれる前から、親を通し、またどのような場所にも遍在する量子存在の属性によって、ネットワークの一端とつながれて育つ。
数世代経ったいまでは、そうしようと思えば子供たちは星々のかなたを居ながらにしてのぞき見、次元の後ろに手をのばして、過去にいる友達の頬をつねることができる。流星をおはじきにして点取りゲームをし、恒星の周りで手をつないで踊る。遠く離れた仲間とピンポン球をはじき合うように、複雑な概念の矢を投げ合い、検証と反証をくり返し、みごとな思念の伽藍をいくつも築きあげる。

最後の石のひとつを積むのが、まだゆりかごにいる目も開かない赤ん坊であることはしょっちゅうだ。世代を重ね、時を重ねるほど、彼らの精神は、みずからがその中で生きる量子ネットワークによって結び合わされ、緊密に結合しつつ、互いに刺激し合って自己を高める単子の集合体として、星の世界へと伸びていく……

そして待つ。五十六億七千万の永劫のかなたに降臨する王を、彼らは待っている。

彼らを取りまくやさしい神々と心を一つにして、人々は待っている――彼らの手を取り、安らぎのゆりかごであるこの物質の殻を脱ぎ捨てて、次の世界へと移るよう導いてくれる、勝利者、救世者、闇を打ち破るもの、調律者、光の王――その者を。

「……しかし、キリスト者であられる教授にこのようなことを申し上げるのは失礼かもしれませんが、オメガ点で待ち受けるものを神であるキリストと仮定するのは、いささか、宗教的な偏りをもってはいませんでしょうか」

銀髪の青年は問うた。

「世界にはさまざまな宗教があり、神があり、神学も哲学も、海の砂ほどの数があります。それらの中で、なぜキリストのみが特別視され、神であり、愛であると称されなければならないのでしょうか。神＝人間であり、しかもその移行は人種や国家、宗教、信条など、人類が内包するさまざまな差違とはまったく関係なく行われるのだとしたら、たとえば、仏陀を

あがめる東洋人は文句をいいはしないでしょうか。または、ブラフマンをあがめるインドの人々は。あるいは、アッラー神を掲げる人々は」
「君は汎神論者(パンシスト)なのかな」
気を悪くすることもなく、上機嫌でテイヤールはテーブルの上で手を組んだ。こうした議論はこれまでにもよく持ちかけられてきたものだった。その時に応じて、相手はマルキシストであったり、無神論者であったり、実証主義者であったりした。ナチスの思想に殉じる軍人が相手のことさえあった。
「わたしがキリストを神とし、愛であると呼び、唯一のオメガ点とするのは、まさに、わたしが見た世界が、すべてキリストの愛の顕現にほかならないと、信じるからだよ……それをもまた宗教的偏奇だと言われればしかたがないが、私にとっての神はキリストであり、その至上権はけっして揺るがない。
私は古生物学者、また生物学者として中国の奥地を渡り、化石を研究し、進化の道筋をこの目でたどってきたが、そのうちひとつとして、これは神の心にかなわぬものだ、などと思ったことはないよ。むしろ、世界を知れば知るほど、キリストこそ愛であり、人間をオメガ点に導くべき神である、という確信は強まっていく。
いまこの瞬間でさえ、目を開けば、キリストの愛がその砂糖の一粒、コーヒーの一滴にすら存在しているのを、君は見ることができるだろう。キリストは時と場所を越えて遍在する愛だ、それらがいずれ、人類を緊密に結びつけ、一個の思考の光で輝く恒星大の精神生命へ

と導くものだと、私は確信する」

「それでは神をいかに称するかは、ここではひとまず置きましょう」青年は言った。「そもそも、人間が神に選ばれた生命だという確信を、教授はどこから得ておられるのでしょうか。ご自身が人間である以上、人間こそが最上のものである、そうあるべきだ、という思考は理解しているつもりです。しかし、あるいは犬、猫、もしくは牛や豚に、人間と同等の知性や意志が宿ることがあったとして、彼らは人間こそ進化すべき唯一の種であるという考えには、あまりに独善的であるとして抗議するのではないでしょうか。

生あるものがすべて神の愛であり、世界が神の肉体の一部であるのなら、人間だけでなく、この世界を構成するすべて、動物や植物、あるいは山や川、石、土、砂粒の一つにいたるまでも、それは神の一部であるはずです。なぜその中で、人間だけが特別扱いされなければならないのでしょうか」

「神を知るための悟性が人間だけに与えられた、それだけで十分ではないのかな」ティヤールは反問した。「むろん、君の言うとおり、犬や猫に人間並みの知能があれば、彼らもなにか言うべきことを持つかもしれない。山や川も含めてね。しかし、それはあくまで仮定の話だ。現に、神を知り、その偉大さと愛を感じ、祈りを捧げることのできる悟性と、信仰を選ぶ意志と敬虔さを備えることのできる知性が人間のみに与えられている、これこそが、証拠ではないのかな。神がいずれ御自らと同じ位置に人類を引き上げるため、われわれをご自身の姿になぞらえて作られた、これは疑い得ない事実だよ」

「神がわれわれと同じ姿をしているとどうしてわかるのです？　また、彼が人間を愛していることも」さらに青年は問いを重ねた。「キリストが人間であることは、おそらく本当でしょう。彼が人間を愛し、救おうとしたことも。けれども、彼がほんとうに神の息子であり、肉を得た神であったかどうかは、誰にもわからないのですよ。人たるキリストが神であり、愛であるから、すなわち神は愛であり、神は人を愛している。それはあまりにも楽天的な――言わせていただければ、傲慢な考えではないのですか？」

「そう言われると困ってしまうな」苦笑いしながらティヤールは組んだ手に顎を載せた。「この青年はなかなかの論客だ。「不可知論者はよくそう言うね。キリストが神であるか、神とは存在するのか、神は人を愛しているのか、確かにそれは、人間にはわからない。少なくとも目に見える何かで表したり、何かの数値で示したり、科学的な機械で計測することはできない。ただ、私たちに与えられたこの魂が、それを感じるのだ、魂とはまさにそのためにあるのだ、と、答えることとしか私にはできないね。そして実際、それ以上の証明は必要ではないと思うよ。君は私の著作を読んでいるようだが……」

「ええ、知っています。すべて」

「では君も、私が『現象としての人間』で書いたことを知っているだろう。進化の系統樹は挫折をくり返し、断ち切られ、もつれて途切れることをくり返しながら、われわれ人間をその頂に花開かせた。われわれ人類とはまさに、神がその栄光を地上にあらわし、新たなる壮大な精神圏（ヌースフィア）という果実を結ぶための花なのだよ。人間が真にキリスト者となり、その愛を身

近に感じるには、地球全体と密接に一体化することが何より肝要なのだ。くり返される進化と絶滅の跡を、私は古生物学者としてずっと追跡してきた。その中で、私は確信した。人間こそが神の愛を全地に広げるための器であり、この物質世界から、純粋な精神のみを飛び立たせるための神の道具であるとね」

青年はしばし口をつぐんだ。すっかり青年と話すのが楽しくなっていたテイヤールは辛抱強く待っていた。伏せられた瞼の下で、銀色の瞳がほのかに光っている。

「では、悪はどうなります？　先ほどお訊きしたように、この世に間違いなく悪が存在することは、あなたも否定なさらないでしょう。たとえば、あの二度の大戦——あの悲惨の大渦巻きの中で、すり潰されていった大量の人間の苦しみとあらゆる場所で犯された蛮行、あれらは人間に宿る悪ではないのですか」

「もちろん、それらを否定する気はない」

テイヤールは視線を落とした。大戦中に目にした戦闘の惨禍、ナチス・ドイツの非人道的な虐殺、極東の国に落とされた新型爆弾による、これまでにない世界の疵、こういったことはキリスト者としての彼の心に深い痛みを刻まずにはおかなかった。悪について考察することは善について考察すること以上にますます重要となっており、その存在に盲目であること、悪の力を過小評価することは、神の意志である地球上の進化を失敗に陥れる危険性があると彼は考えていた。

「この十数年のあいだに進行した事態から、目をそらすことはもちろんできない。あれらは

間違いなく悪であり、神の心にかなわぬ行為だ。だが、そこから教訓を学び、さらに先へと進んでいくことが、その悪に立ち向かうことになる。罪とは悪そのものではなく、悪に盲目となること、自分の利益に夢中になって神を忘れること、それを軽く見過ぎることにある。悪とは結局、人類の大統一を妨げる行為であり、存在であり、われわれが人類の進化を待たれるキリストの愛のもとに、それら悪から身を守る義務がある」

「バラをほかの名前で呼んでも、そのかぐわしさは変わらない」と青年は呟いた。「先ほどのお話では、人種的な差違や宗教戦争、主義主張による論争、国家間の争い、そういったものは、いわば通過せねばならない苦難であり、いずれ、キリストという一点に収斂され、消えていくものだとおっしゃられましたが」

「そう、その通りだよ、君」

「では、いまだその進化の過程にあるものとして、収斂されない分かれ道の一本に立つものが、キリストを別の名で呼んでもお怒りにはなりませんか？　……ブラフマン、ブッダ、アッラー、マイトレーヤ、弥勒……」

テイヤールは肩をすくめた。

「私が怒ってどうなるね？　真実なるキリストはいつもひとつであり、その顔はすべての顔を持つのだから。呼ぶ者は好きに呼べばよい、神はお怒りにはならないよ。確かなのはひとつ、遍在する神の愛のみであり、その光はわれわれをオメガ点に押し上げ、さらに、その先を目指すよううながすというだけだ」

青年はその奇妙な銀色の瞳でテイヤールを見つめた。
抑えられたカフェの照明の下でも、その瞳が星のように明るく燃えて見えるのに気がついて、テイヤールはふいに、寒けを感じた。何か巨大な、非常に巨大なものの、端と、自分が向かいあっている気がした……この感じには覚えがある……中国の奥地、はるかな古代に築かれた、石窟寺院の大伽藍の中で……あれはなんだったろう……壁に描かれた彩色画だったか、それとも……ああ、あの、壁龕のなかから見下ろしてきた、彩色された仏像の、うすく開いた目とかすかなアルカイック・スマイル――
ふいにわけもわからずテイヤールは息が詰まるのを感じた。青年の銀色の瞳が大きくなり、光を増し、あたりを包みこむかに思えた。居心地のいいカフェの風景はその中に溶け去り、恐ろしい虚空の中に宙づりになっている自分にテイヤールは気づいた。そこには何もなかった、何も、何も……ただはるか底のほうから、幾重にもなった呻き声、苦痛の声、怨嗟の声が、絡みつくように這い上ってきた。
それらは進化の途中、歴史の途中で踏みにじられた大量の生命であり、死であり、積み重ねられた無惨と人間的営為の残骸だった。それらはわれがちに手をのばしてテイヤールの脚を捉えようとし、暗黒の底から呪詛の言葉を吐きつけた。テイヤールは無我夢中でもがき、そこから脱出しようとした。できなかった。テイヤールも同じく人間であり、人間であることから逃れることはできなかった。助けを求めてテイヤールは天を振り仰いだ。全能なる神、イエス・キリストがいます天上を。だがそこにも救いはなく、ただ、あの青年の銀色の瞳が、

どこか哀しげに、あるいは広大な慈悲をたたえ、また巨大な忿怒を秘めて、つめたい太陽のように輝いているばかりだった。
「悪魔！」自分の喉で悲鳴が凍りつくのを、ティヤールは聞いた。「悪魔！　悪魔……」
そのとき、視線がそらされた。ティヤールははっと息をつき、自分が呼吸を止めていたことに気づいて驚いた。冷や汗が流れて額をつたっていた。
青年は手をのばして窓をふき、外の店の向かい側に立って、こちらに手を振っている少女に手を振りかえした。黒い髪の小柄な少女と、燃え立つような赤い髪をした、長身の男。少女は楽しげに飛び跳ねる、少女の唇が動いている――
『サーフ！』
「すみません。どうやら、連れが降りてきたようです」
青年の声で我に返った。彼はすでに立ち上がりかけていた。手のつけられないままのコーヒーは冷めて湯気もたたなくなり、ティヤール自身のカフェ・オ・レも、いつの間にか冷めて表面に白い膜が張っていた。コーヒーの受け皿に、数枚のコインがきちんと置かれている。
「いろいろと生意気なことを申し上げて失礼しました、教授。お話しできて光栄でした。どうぞ、よいクリスマスを」
「ああ、君もな。よいクリスマスを（ジョワイユ・ノエル）」
動揺を抑えてティヤールは応えた。
ちらりと笑みを見せて、青年はドアを鳴らして出ていった。雪のつもった歩道を踏み、通

り過ぎる車を危なっかしく避けながら友人のもとへ急ぐ姿を、ティヤールは見るともなしに見送った。
　ようやく二人のもとにたどり着いたかと思ったとたん、足が滑った。少女があわてて青年を支えようとしてバランスを崩し、赤毛の男が二人をいっしょに支えようとしてふらつき、結局三人全員が、足をもつらせて雪だまりに倒れこんだ。黄色いタクシーが罵声を飛ばして通り過ぎる。
　起き上がった少女はきょとんとした顔をして雪にぺったりと尻もちをついていたが、やがて、おかしくてならないというように、明るい声でわっと笑い出した。頭を振りながら起き上がった銀髪の青年にもそれは伝染し、くすくす笑いが、すぐに声をあげての笑いに変わる。赤毛の男は渋い顔をして髪についた雪を払っていたが、やがて、苦笑の形に唇をゆがめ、まだ笑っている二人を引っぱり上げ、立たせて、雪と埃を払い落とした。
「ああ、ティヤール……遅くなって、どうも」
　カフェのドアが鳴って、待ち合わせしていた友人が入ってきた。ボストンでの講演にも招待された親しい友人で、イェール大学で哲学を教えている男だった。このあとはいっしょにクリスマスの礼拝に参加する予定だった。彼は几帳面らしくフェルト帽を脱いでていねいに雪を払い、膝の上に置こうとして、ふと外の様子を見た。
　三人の若者たちが、まだくすくす笑いながら押し合いへし合いし、ようやくしっかり立ったところだった。黒髪の少女を真ん中に、銀髪の青年が右、赤毛の男が左になって、三人で

しっかり腕を組みながら、雪の歩道を弾むように歩いていく。

「いいものだな。ああいう年頃は」

窓をぬぐって彼らの楽しげな後ろ姿を追いながら、彼は少しばかりうらやましげな調子を声にこめた。

「まるで、地上に降りてきたばかりの若い神々といった様子じゃないか……やあ、これは」とあわてたふりをして両手で口をふさいでみせる。「聖職者でもある君の前で、異教的言辞を披露してしまったかな?」

だが、予想したような反応が返ってこないのに拍子抜けし、ぽかんとして手を下ろす。

「テイヤール? どうしたんだ」

「……私も」

テイヤール・ド・シャルダンは、遠ざかっていく三つで一つのもののように見える後ろ姿を眺めて、呟いた。

「私も、ちょうど、そのように思っていたところだよ」

テイヤール・ド・シャルダンはこの翌年、一九五五年四月、復活祭の日に、この世を去った。死の前日となる聖土曜日には告解をすませ、復活祭の朝には聖パトリック大聖堂の荘厳ミサに出席し、その後、友人とともに音楽会に行き、その帰途に立ち寄った友人の家で倒れたのだった。

彼の死後、それまで地下出版として秘密裏に出回っていた著作が、いっせいに世に出された。独特な彼の思想は大きなセンセーションを呼び、『ティヤール現象』なるものを巻き起こした。高らかな賞賛から過激な反論まで、さまざまなものが彼の作り上げた進化と神の思想にふりかかり、論争を呼んだ。カトリック教会は過激にすぎるという理由でティヤールの著書を準禁書扱いにし、「青年の精神をティヤールの著書から保護せよ」との警告までのちに発された。

しかしこれもまた、彼の思想がどれだけ当時の人々の心を動かしたかという証左となる。国連教育科学文化機関（UNESCO）はティヤール・ド・シャルダンを、「アインシュタインとならぶ偉人」とまで賞賛した。

彼は流謫の地、アメリカのハドソン川河畔セント・アンドルーズに眠っている。その墓石に刻まれているのは『司祭ピエール・ティヤール』という、簡素な一言のみである。

霊感の言葉を解するミトラ・ヴァルナよ、規範に従い、汝らは掟を守護す、
アスラの幻力によりて。
天則により汝らは万有を支配す。
汝らは、光まばゆき車として太陽を天界に安置す。

リグ・ヴェーダ『ミトラとヴァルナの歌 一-七』

クォンタムデビルサーガ・アバタールチューナー　終

あとがき

　これまで五巻、おつきあいどうもありがとうございました。
　五代ゆうでございます。
　原案版アバタールチューナー『クォンタムデビルサーガ　アバタールチューナー』、これにて完結でございます。
　前巻のあとがきで、「キャラクターたちが納得する形でのハッピーエンドを」と書きましたが、読み終わった読者の方々はいかが感じられましたでしょうか。
　語るべきことはほぼ本篇で書き尽くしてしまったと感じるので、ここではあまりもう書くことはありません。また何かのときに、ご感想など、聞かせていただけるととても嬉しく思います。本当に、ありがとうございました。
　考えてみれば最初に企画書を書いたのが一九九九年末、小説の一行目を書いたのが二〇〇〇年春だったので、ちょうどほぼ十年この作品につきあってきたわけです。

デビューが一九九二年なので、もうすぐ作家生活二十周年を迎えますが、ほぼその半分を併走してきた物語が完結したのだなあ、と思うと、感慨深いものがあります。うらむ、歳取るわけだ。

とはいえ、いろいろ考えてみるに、いまの形にたどりつくまで物語を練り上げるのには、結局それだけの時間が必要だったのでは、という気が今はしています。

この十年間で、「アバチュのための資料」にと、それまで手を出さなかったさまざまなジャンルの本や映画などを手に取るようになりました。ことに、各種の古典文学や科学書、哲学書、神学書に親しむ愉しみを覚えたのは、間違いなくこの作品のおかげだと断言できます。それらは確実にこれから先、ものかきとしての私の栄養になると断言できますし、広く新しいフィールドを発見できたことにわくわくしています。

また、各章冒頭にかかげた引用文の中でただ一人の日本人作家、光瀬龍先生に、感謝とともにこの作品を捧げます。

私が生まれて初めて読んだ「SF」は、「世間にはマンガというものがあるらしいので、何か買ってきてくれ」と頼んだ娘に親が買ってきた、光瀬龍原作・萩尾望都作画の、マンガ版『百億の昼と千億の夜』でした。(もうちょっと普通に子供向けのマンガを選べなかったのか、と思いますが、まあそれも業(カルマ)というものなんでしょう)

当時小学二年生だった私には、あの壮大かつ難解な物語はもちろん理解できなかったので

すが、五十六億七千万という気の遠くなるような数字を鼻で笑い、まばたき一つで宇宙の果てを越える物語に、「なんだかすごいものを自分は読んでしまった」という、フッと足下が消えてなくなってしまうような、茫然とした気持ちを今でも覚えています。
また、萩尾望都先生描かれるところの「阿修羅王」の美しさとカッコ良さは、子供心にうっとりするほどでした。少年のような少女であり、少女のような少年の姿をした戦いの鬼。「あしゅらおう」と言えば、興福寺の有名な阿修羅像より、一番に浮かぶのがあの萩尾先生版「あしゅらおう」なくらいなのです。
この「アバタールチューナー」のゲーム企画会議にはじめて参加したとき、ゲーム会社側の方から「『百億の昼と千億の夜』のような、多重世界を……」との提案があった、これもまた因縁だったかもしれません。私は十年をかけて、八歳のときに受けた衝撃をなんとか自分の中で消化し、イメージレスポンスを返そうと苦闘していたのだと思います。
少年と少女を併せもつ「あしゅらおう」は〈ASURA〉となり、『百億の昼と千億の夜』の深い寂寥感とまだまだ遠い道への予感は、人と神がともに歩む楽園(ニルヴァーナ)へ、そして星へ飛び立つ人類へと私の中で組み替えられました。
それが成功しているかどうかは、読者の方の判断に委ねるしかありません。いまは天上の岸辺にいらっしゃる光瀬先生に恥ずかしくない作品であることを祈ります。
また、補足として、エンディングに登場した、フランス人聖職者にして古生物学者である

ピエール・テイヤール・ド・シャルダンは、実在の人物です。私がこの人物の存在を知ったのは、野阿梓先生の『兇天使』作中でした。（そういえば『兇天使』の主人公は熾天使セラフィというのでした）

容赦のない天使セラフィに徹底的に論破されつつも、彼の語る「進化のオメガ点に達し神となる人類」というヴィジョンは美しく、妙に私の頭に残りました。その後、彼の主な著作を読み、そのキリスト教至上主義なところには少々閉口しつつも、その祈りを込めた神学的散文詩としての美しさは、やはり忘れられないものでした。

実証科学の点から言えば、もちろん、謬説であると言わざるを得ないのですが、それなら、物語の中でなら、これをどうにかできるかもしれない……そういう想いから、彼を最終章に登場させ、キリスト教徒ではない日本人の私の、神々とともに「オメガ点」に達しようとする人類を描いてみようと試みました。これもまた、うまくいっているかどうかは、私にはわかりません。ぜひ満足していただけることを祈っております。

今回、最終巻ということで、鏡明先生に解説を書いていただけることになっております。

実は、二十年前、初めての本が出版されたとき、それについて生まれて初めて書評を書いてくださったのが、鏡先生でした。

それまでも、《S　Fマガジン》や《季刊幻想文学》誌上でご活躍をよく拝見していましたが、まさか自分の本について書評を書いていただけるとは思ってもいませんでした。

そして今、ちょうど二十年後、ある意味で大きな節目になるであろう作品に、また解説を書いていただけることに、またも大きな因果の糸を感じざるを得ません。
聞くところによると、その後もずっと私の本を読んでいてくださったよし。光栄であるとともに、さらに身の引き締まる思いがします。
今この時点に立ち止まることなく、さらに前進することが、ご恩返しにもなるかと思います。どうぞ、今後ともよろしくお願いいたします。

そして五巻にわたってずっと併走していただきました、担当・高塚様、塩澤部長、そしてイラストの前田浩孝様に、あらためて感謝を捧げます。
四巻・五巻はことにものすごいスケジュールの中を突き抜けていった感があり、たいへんご迷惑をおかけしまして申しわけありません……。
次作があるかどうかわかりませんが、その時には、またぜひよろしくお願いいたします。
ありがとうございました。

そしてここまでおつきあいいただいた読者の方々に、改めて、最大級の感謝を。
今年は日本を一変させるような大災厄が起こり、いまだにその余波は続いています。生きることは苦界を歩くことにほかならないと、実感させることが多々ありました。
それでもまだ、人間は生きていけるのだと、私は信じております。

いまだにつらい境遇にある方々が一日も早くもとの平穏を取り戻されますよう、被災した街や暮らしが再び返ってきますよう、心からお祈りいたします。

それでは、ご縁がありましたら、またどこかでお会いいたしましょう。

本当に、どうもありがとうございました。

二〇一一年十月一日

五代　ゆう

解説

SF評論家
鏡明

すさまじい物語を紡ぎだしたものだと思う。
これは、血と死に満ちた物語である。
破壊と絶望に満ちた物語である。
怒りと欲望、憎悪と悲しみ、理想と悪夢、愛情と無知の物語である。
そして何よりもハッピーエンドであろうとする物語である。
すさまじいというのは、それを可能にしたからでもある。
クリーシェに聞こえるだろうが、五代ゆうはこういうものを書く作家だったのか。驚きを覚える。ファンタシーであると思っていた私の予想は、完全に間違っていた。
読者であるあなたもまず、そのことを覚悟しておいてもらいたい。
五代ゆうという作家を知っていようと、知っていまいと、あなたはこれまでに読んだことのない物語を読むことになる。

話を始める前に、まず、二つのことを言っておきたい。
これは、SFであるが、同時に反SFである。
いや、ファンタシーと言うことではない。その意味では、反ファンタシーでもある。
そして、この物語は、極めて日本的な物語だ。
日本的という言い方は誤解を招くだろう。そちらから話し始めよう。
伝統的な日本ということではもちろんないが、マンガやアニメを基礎にしたクール・ジャパンという意味の日本的な作品ということ、その要素を含んではいるが、それだけでもない。
言ってみれば、現在の日本でしか書かれることがない作品、という意味で日本的と言いたいのだ。二〇一一年三月十一日という長く歴史に刻まれる一日をはさんで、この長い物語は書かれていったわけだが、直接的な影響は見てとれないにしろ、それが伏流のように、この物語の背後に流れていることは確かだ。
が、日本的というのは、そのことを指しているのでもない。
日本におけるSFの歴史を考えると、この作品はその歴史の流れの上に存在している。作者自身が語っているように、たとえば、J・G・バラードの『結晶世界』のように明らかな形で影響が示されている歴史的な作品もあるが、それ以外にも、たとえば、クラークであったり、シルバーバーグであったり、もしかしたら、E・F・ラッセルも、というような様々な欧米の作家や作品の影が見え隠れする。そして、また同じく、たとえば、光瀬龍、小松左京であるような、日本のSF作家の影も見て取れるだろう。

それは、SFである以上、当然のことであるし、そのような影響を経ていないとしたら、それは、作家の怠慢として非難されるべきことだと言っていい。

SFはアイディアの小説であるという概念からすれば、奇妙に聞こえるだろう。これまで、オリジナリティが極めて強調されてきたからだ。だが、考えてほしい。SFは、発明ではなく改変の歴史の上に存在している。言いすぎたかもしれない。要は、誰かが、アイディアを生み出し、それを次の作家が受け継ぎ、改変していくことで、高みに近づいていく。それがSFの特徴であり、歴史なのだ。発明と改変の歴史と言い直しておこう。

このことは、SFである限りは、日本だけではなく、恐らく世界で共通するものだ。重要なことは、その歴史がそれぞれ異なっているということであるし、その結果としての日本のSFは、世界で類例のないものになってきたということだ。五代ゆうのこの作品が日本的であるというのは、そういうことだ。この作品の背後には、英米の作品の翻訳を含めて、半世紀にわたる日本のSFの歴史がある。

また、この物語が、ゲームのシナリオから始まったというのも、日本的であると言ってもいい。いや、ゲームを小説化するというのは、欧米でも一つのビジネス・モデルとして確立しているから、日本特有のものではない。それでも、ゲームを作り上げたのは、日本であると思うのだが、アイディアや完成度ということでは、欧米のゲームのほうが優れているという意見もあるだろう。それでも、なお、たとえばキャラクター・デザインという意味では、日本のほうが上だと思っているし、それは、この五代ゆうの作品でも、生かされていると思

う。
もっと言えば、キャラクター小説は、ライト・ノベルという形で、日本で誕生し、発展していったものだと思っている。そういう日本のSFの周辺領域を含めた多様のものがこの作品の中に取り込まれている。
言いかえれば、この「アバタールチューナー」は、そのような過去と現在を踏まえた日本のSF環境の産物と言ってかまうまい。日本的というのは、そういう意味だ。

次は、この物語が、SFであると同時に反SFでもあるということなのだが、もしかしたら、このことも、日本的であることに近いのかもしれない。
かつて、七〇年代のことだったと思うが、日本のSFがアメリカで紹介されたときに、正確な言葉は覚えていないが、雰囲気を中心にした物語、ファンタシー的な物語というような評価だったように記憶している。その意味することは明らかだ。
科学、あるいは、ロジックに欠けているところがあると思われたということだ。
この傾向は、現在の日本のSFの多くにも、共通することだと思う。それが、良い悪いということではない。それが日本のSFの特徴であるということだ。
では、科学はSFにとってどのような意味があるのか。
科学やそれの基づく技術が無ければ、SFがSFとして存在しないのは当然のことだ。科学はSFの規範である。科学が無ければ、SFは想像力という名の妄想の産物になってしま

う可能性がある。言ってみれば科学は、ＳＦにとって恩寵である。

この「アバタールチューナー」の第一巻を読んだ時の印象は、一言でいえば、驚いた、ということになる。一つには、最初に触れたように、五代ゆうの作品は当然、ファンタシー的なものになると考えていたからだ。そして、そこに展開されていたのは、おそらくは未来であるだろう血まみれの戦場の物語だったからだ。そこにおける科学は明らかにガジェットとしてしか存在しないように思えた。どちらにしろ、それが仮想空間での戦いであるのは、すぐに明らかになっていく。仮想空間というアイディアは、ＳＦに多くのものを与えた。つまり、通常の物理的な制約を捨てることができるわけだ。

が、それは同時に罠でもある。どのようなこともできるというのは、読者にとっては、何が起きても、驚くべきことではなくなることにつながるからだ。それは、もう半世紀以上も前に、アーサー・ケストラーが「ファンタジーの退屈」で、指摘した通り、何もかもが可能であるという設定の物語は、幼児的なものになっていくだろうし、それは、極めて退屈なものになっていく可能性がある。

五代ゆうが、仮想空間から物語を始めた時に、感じた驚きの別の側面というか、危惧は、まさにそこにあった。

私が、ＳＦは科学であり、論理の物語であるということを強調するのは、それが制約を持つからだし、規範をもつということだからだ。また、ファンタシーに論理という制約があるべきだというのも、過去のファンタシー作品から得た知見であるし、倫理はファンタシーに

とって、ＳＦにおける科学と同様の意味を持つのではないかと考えたからだ。
　言ってみれば、科学を捨てたＳＦ、倫理を捨てたファンタシーというような物語がそこに始まったように思えたのだ。下手をすると、収拾のつかない物語になっていくのではないか。大きなお世話だが、五代ゆうの長い間の読者の一人として、心配になったわけだ。
　五代ゆうという作家に、私が注目したのは『〈骨牌使い〉の鏡』が始まりだったけれども、それは、日本の作家には珍しいプロット型の作家に思えたからだ。要は、全体の構造を見据えながら書く作家ということなのだが、もちろんそれは、読者としての私の感覚で、作者本人の思いとは関わりが無い。ただ、五代ゆうに期待する部分というのは、どこかにそれがあるわけで、どうするんだろう。と思ったわけだ。
　たとえば、主人公たちは、ヒーローでありながら同時に反ヒーロー的な側面を備えているし、それは、物語の重要なアイディアの一つに関わることだから、これ以上は触れないが、つまりは、倫理と衝動との相克という矛盾した要素がさまざまな形で見てとれる。しかも、重要人物たちは、やたらに死んでいってしまうしね、どうするわけ？　ということです。
　科学は、ＳＦにとっての恩寵であるといったけれども、同時にそれは呪いでもある。
　科学には限界がある。それは、簡単にいえば科学は世界を記述するものであり、説明するものなのだ。なにが、いかにして存在するかを語るためのもので、何故、存在するかを語るものではないということだ。物語としてのＳＦは、しばしば、その何故という領域に入っていく。その瞬間から、科学は機能しなくなるわけで、論理や科学的であることは、足かせに

なっていくことになる。

もちろん、科学自身が、たとえば、何故この宇宙がこの宇宙であるのか、ということを説明するために「人間原理」のようなものを作り上げたり、「観測者問題」にこだわってみたりするというのは、科学の限界を超えるための試みであると思えるし、当然のことながら、説得力に欠けるものになっているのも、科学的ではない試みにならざるを得ないからだ。

この「アバタールチューナー」の中で、登場人物の一人が、別の登場人物に「あなたは、何のために存在しているのか？」こんな質問を問いかける。言いかえれば、何故存在しているのか、という問いかけである。問う方も、問われる方も、極めて論理的な存在と設定されているのだが、それは、ここまで話したように、論理や科学では回答できない種類の質問である。この物語の中では、その問いかけは、ある種の呪いとして機能していく。その答えの一つは論理であるが、それはSF的であるよりもファンタシー的であるように思う。

SFであり反SFであるというのは、そういうことなのだ。

冒頭に多くの言葉を並べたが、この物語は、そのすべてを含んでいる。それとともに、大事なことなのだが、作者が意識していようがいまいが、結果としてSFの枠組みを超える物語になっているように思う。

SFの可能性を示し続けたことという意味も含めて、また、古き良きSFのような読後感を与えてくれることも含めて、拍手を送りたい。

本書は書き下ろし作品です。

次世代型作家のリアル・フィクション

マルドゥック・スクランブル
The 1st Compression——圧縮〔完全版〕
冲方 丁
自らの存在証明を賭けて、少女バロットとネズミ型万能兵器ウフコックの闘いが始まる。

マルドゥック・スクランブル
The 2nd Combustion——燃焼〔完全版〕
冲方 丁
ボイルドの圧倒的暴力に敗北し、ウフコックと乖離したバロットは〝楽園〟に向かう……

マルドゥック・スクランブル
The 3rd Exhaust——排気〔完全版〕
冲方 丁
バロットはカードに、ウフコックは銃に全てを賭けた。喪失と安息、そして超克の完結篇

マルドゥック・ヴェロシティ 1
冲方 丁
過去の罪に悩むボイルドとネズミ型兵器ウフコック。その魂の訣別までを描く続篇開幕！

マルドゥック・ヴェロシティ 2
冲方 丁
都市政財界、法曹界までを巻きこむ巨大な陰謀のなか、ボイルドを待ち受ける凄絶な運命

小川一水作品

第六大陸 1

二〇二五年、御鳥羽総建が受注したのは、工期十年、予算千五百億での月基地建設だった

第六大陸 2

国際条約の障壁、衛星軌道上の大事故により危機に瀕した計画の命運は……。二部作完結

復活の地 I

惑星帝国レンカを襲った巨大災害。絶望の中帝都復興を目指す青年官僚と王女だったが…

復活の地 II

復興院総裁セイオと摂政スミルの前に、植民地の叛乱と列強諸国の干渉がたちふさがる。

復活の地 III

迫りくる二次災害と国家転覆の大難に、セイオとスミルが下した決断とは？　全三巻完結

小川一水作品

老ヴォールの惑星
SFマガジン読者賞受賞の表題作、星雲賞受賞の「漂った男」など、全四篇収録の作品集

時砂の王
時間線を遡行し人類の殲滅を狙う謎の存在。撤退戦の末、男は三世紀の倭国に辿りつく。

フリーランチの時代
あっけなさすぎるファーストコンタクトから宇宙開発時代ニートの日常まで、全五篇収録

天涯の砦
大事故により真空を漂流するステーション。気密区画の生存者を待つ苛酷な運命とは？

青い星まで飛んでいけ
閉塞感を抱く少年少女の冒険から、人類の希望を受け継ぐ宇宙船の旅路まで、全六篇収録

著者略歴　1970年生まれ，作家　著書『はじまりの骨の物語』『ゴールドベルク変奏曲』『〈骨牌使い〉の鏡』『パラケルススの娘』など。

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
FT=Fantasy

クォンタムデビルサーガ

アバタールチューナーⅤ

〈JA1048〉

二〇一一年十月二十日　印刷
二〇一一年十月二十五日　発行
（定価はカバーに表示してあります）

著者　五代ゆう
発行者　早川浩
印刷者　矢部一憲
発行所　株式会社　早川書房

郵便番号　一〇一 - 〇〇四六
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話　〇三-三二五二-三一一一（大代表）
振替　〇〇一六〇-三-四七七九九
http://www.hayakawa-online.co.jp

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

印刷・三松堂株式会社　製本・株式会社川島製本所

ISBN978-4-15-031048-6 C0193

本書は活字が大きく読みやすい〈トールサイズ〉です。

ハヤカワ文庫JA
五代ゆうの作品

クォンタムデビルサーガ
アバタールチューナー（全5巻）

ISBN978-4-15-031048-6
C0193 ¥740E

神に成る——キュヴィエ症候群の研究施設〈ＥＧＧ〉の閉鎖から五年後、太陽光を浴びることが死に直結する世界で、サーフらは地下に逃れたローカパーラの人々に出会う。彼らの協力を得て、セラを奪還すべく〈協会〉の本拠地を目指したエンブリオンのメンバーだったが、その眼前に思いもよらない人物が立ちはだかった。人間と悪魔が楽園を追い求めた闘いの行方とは——世界の崩壊と再生を描いた本格ＳＦ大作、悠久の完結篇

定価（本体740円+税）